

目次

第一章 白い誘惑	
第一章 白い誘惑	2
一 事故	2
二 消える死体	9
三 依頼人	17
四 新たな犠牲者	23
五 二つの死	37
六 奇妙な売人	45
七 富山へ	51
第二章 雪国	
第二章 雪国	58
一 吹雪の街	58
二 罨	72
三 吹雪	82
四 白い牢獄	84
五 リンク	88
六 誘拐	93
七 孤立	97
第三章 復讐	
第三章 復讐	104
一 兄弟	104
二 襲撃	109
三 白い恐怖	122
四 冷凍庫	126
五 スノーホワイト	131
六 合流	134
七 セントエルモの火	142
エピローグ	
エピローグ	154
エピローグ	154

あとがき	
あとがき	160
奥付	
奥付	162

第一章 白い誘惑

第一章 白い誘惑

一 事故

首都高速環状線を草加幸恵はゆっくりと流していた。時間は午後九時を既に回っており、体中に疲れがまとわりついている感じだった。流れよりもゆっくり走っている幸恵の黄色いムスタングを、帰路を急ぐ車が次々に追い越していった。幸恵はそんな車も、後方へ流れ去ってゆく都市のきらめく明かりも、目に入っていなかった。ただ、黙々と運転していた。疲れ切っていた。どこか遠くでサイレンの音が響いていた。七リッターのエンジンから発生する振動がそれをかき消す。振動が妙に心地よかった。

幸恵はため息をもらすとタバコをくわえ、ダッシュボードに備え付けの、シガーライターを押し込んだ。ところがシガーライターのボタンはいつものように、中で引っかかってくれず、いくら押ししても戻ってきってしまう。

「このポンコツ」

幸恵は悪態をつき、ダッシュボードを何度もはたいた。

長いストレートの髪をかき上げ、ようやくの思いでタバコに火を点けたが、にがにがしい思いがタバコの味をひどく不味く感じさせた。幸恵はタバコを灰皿でもみ消すと、窓を少しだけ開けた。車内を漂っていた煙が冷たい風にながされて音もなく消えていった。冷たい風が心地よかった。幸恵は大きくため息をついた。なぜなら明日には探偵事務所を畳まなければならないかもしれない。

幸恵は探偵になってもう十年以上が経っていた。今ではすっかり探偵稼業にもなれ、依頼の内容を聞いただけで、だいたいの背景を想像できるくらいの、人を詮索することが仕事の人間がもつある種の勘を身につけていた。

個人探偵事務所に飛んでくる依頼というのは、おおかた大手の事務所で相手にされないものだ。そもそも探偵稼業というのが情報収集を根本にしているからである。普通の仕事をするならば、大手の方が確実に早かった。その分料金も高いのであるが、相場というものはあまり世間には知らされていない。

従って個人事務所には今回の仕事のような、怪奇現象まがいの調査依頼が廻ってくる。事実幸恵はその類の事件をいくつか担当し、解決していた。中には一般常識では計り知れないような結末を向かえたものもあった。いつしか「ローズ探偵社」は怪奇現象専門の探偵事務所になっていた。だが、今回の事件だけはいただけなかった。犯人を目の前にして幸恵は怖じ気づいてしまったのだ。結果犯人は逃げ、幸恵は成功報酬を貰い損ねた。さらに言えば、唯一の専門分野での評判にも傷がついた形だ。

思えばあのスケベ住職が依頼に来た時点からツキに見放されていたのかもしれない。

住職の依頼はこうだった。

最近寺の泉に怪しい影のようなものが現れることがある。何度か警察にも巡回してもらったのだが、警察がいる間は現れないし、実害があったわけでもない。ましてや暗い墓所の一番奥にある泉だ。警察も何かと理由をつけて巡回をうち切ってしまった。檀家に噂が広まる前に何とかしたいので、正体を突き止めて欲しい。

おおよそのような内容であったが、幸恵は不覚にもこの住職の前に事務所の経営状況が一目で分るような書類。つまり事務所家賃の催促状を落としてしまった。住職は幸恵が仕事を断れない立場にあると知ると、途端に本性を現した。汚らしい触手のような手が常に幸恵の身体に触れ、隙あらば幸恵の夜の生活を暴こうとした。

「あなたのような若くて綺麗なご婦人が一人でこのような商売をなさると、いろいろと危険な目にもお会いでしょう。なんなら私が力になりますよ」

そう言いながら、住職の目は幸恵の豊満な身体の上を何度も往復し、手入れの行き届いた長い髪をいやらしくなでた。その目は如実に私の愛人になれと言っていた。確かに美しく、若く見える幸恵に言い寄ってくる男は多かった。いつもタイトなミニのスーツを着用しているせいもあり、見ようによっては二十代で十分通用した。大抵の男は本当の歳を言うと驚き、そんな馬鹿などという顔で退散していった。しかしこのスケベ住職に関しては、本当の歳を言ったところで気にもとめないだろう。完全に煩惱に浸りきった目をしていた。

今までならば、そんな男は鼻に拳を叩きつけてやったものだ。幸恵は特に格闘技をやっているわけではないが、スケベ男の扱いには慣れていた。鼻を潰した後に、股間に蹴りを一発お見舞いしてやれば、大抵のスケベは撃退できる。そして止めの一言。

「そんな貧相なモノじゃあ、話になんないよ。とっとと出て行きなよ、ぼけなす」

今回も拳を握りしめるところまでは行ったのだが、家賃の支払い期限は目前で、幸恵には僅かな貯金すらない。背に腹は代えられない。ボギーみたいに格好ばかりつけていたら、干からびてしまう。幸恵は我慢して本郷寺に乗り込むことにした。

本郷寺は上野という立地にも拘わらず、自然が豊かな場所にあった。寛永寺からさほど離れてはいない。境内には樹木が生い茂り、本堂の裏手には墓地があり、そしてその奥に鬱そうとした林があった。林に足を踏み入れると、すぐに深い窪地になり、その一番奥に小さな鳥居と社があった。社の扉には訳のわからないお札が沢山張られ、いく束もの千羽鶴が折り重なるようにつけられていた。一体何をまつた社なのか、扉の周囲にはガラスの瓶やら、コップやらがおびただしい数置かれていた。社自体は相当古いらしく、朱の塗装がすっかり剥げ落ち、朽ちた感じがした。

幸恵の気持を読んだように、住職が説明を始めた。この社は水の神様をまつたもので、水で商いをする者がこうして瓶やグラスを持ってやって来るのだという。都内でも水神様をまつる寺は少ないのだそうだ。本来水を扱う商売の為の神様なので、料亭や豆腐屋などの食品製造を営む人間がやって来ることが多いのだが、最近は水にあやかって水商売の人間もよく来るそうだ。住職はそう説明しながら、皺だらけの手で扉の錆びた鍵を開けた。説明の時の顔つきをみれば、その水商売の連中と住職が何らかの関係を持っているのは明らかだった。恐らく飲み屋の女を愛人にでもしているのだろう。

社の扉を開くと、地下に向かって狭い洞窟が続いていた。人が一人ようやく通れる程度の広さだ。この洞窟を少し降りた所に、東京では珍しい程に澄んだ水の湧く泉がある、と住職は言った。幸恵はよほど、あなたの煩惱もその泉で洗ってもらえ、と言いたかったが黙っていた。

何者かがこの付近を徘徊するのは決まって夜中ということで、幸恵は夜中まで薄暗い本堂で待つことにした。絶え間なく焚かれる香の煙と、揺らめく蠟燭の明かりが幸恵の気持を高ぶらせていった。暗がりの中、蠟燭の僅かな明かりに照らされた本尊が、語りかけてくるように不気味な光彩を放っていた。

過去にもいくつかの本当に不可解な事件に遭遇した。そしてそういった事件には共通して、ある種の臭いがあった。体中が何かに共振してしまったような、内から揺さぶられるエネルギーというものを感じた。それが何かからくるものなのか、その何者かがもつエネルギーなのか、その場の空気に含まれる何かなのか、幸恵にはわからなかったが、幸恵は確かにこの場所でも何かを感じた。幸恵の研ぎ澄まされていく感覚に呼応するように、蠟燭の炎が風もないのに何度も揺らめいた。

幸恵はいつのころからか、不思議な感覚を身につけていた。それは考えれば子供のころからのような気もしたし、最近身に付いたような気もする。何時の頃からのことなのか、判然としなかった。真剣にそういった事柄を考えようとするだけで、頭の奥がうずくようになかったり気持になった。だからあまり細かいことにはこだわらないようにしていた。幸恵は些細なことがらを忘れてしまう度に、探偵が細かいことにこだわっていたら、事件は解決しない。探偵の仕事は事件の流れを見ることなのだ。と自分に言い聞かせていた。もちろんそれがいいわけなのは、十分に承知していた。

不思議な感覚が一体どの方向からくるのか、幸恵は神経を集中させた。もし本当にあの泉に何かがあるのであれば、当然そちらから何かしらのエネルギーを感じるはずである。心を平静にたもち、ほんの僅かな風の揺らぎすらここで受け止めようと務めた。

すると頭の奥と、指先が微かに痺れ始め、何かが見えてきた。実際イメージとして見えるわけではない。何者かがささやきかけてくるみたいなものだ。幸恵はその方向に神経を集中した。やがてその感覚はざらついた神経をさかなでされるような、不快感へと結びついていった。

幸恵はそっと目を開けた。そしてゆっくりと不快感を発する方を伺った。引き戸の隙間の暗い影から、住職がいやらしい視線を注いでいた。

住職は幸恵の視線に気が付くと、一瞬きつい目をしてから引き戸を閉めた。

真夜中に再び社を訪れた。住職が薄暗い懐中電灯で前を照らしていた。黒い影になった墓石や卒塔婆の間を抜けて、黒く迫り来るような林へと歩を進めた。背中がちりちりとして気持が落ち着かなくなった。いつものように強烈な寒気に襲われた。近くに何かがいる。

窪地に降り立つと、腐った沼の底に降り立ったような、なんともいえない不快感に襲われた。むろんこの不快感はただの、恐怖心からくるものである。それでも何度味わっても慣れるものではない気がした。

古ぼけた社の扉を開くと、住職はさっと道を空けた。後は一人で行けという意味だ。幸恵は一瞬だけ躊躇したが、すぐに社に踏み込んだ。外よりも冷たい空気が洞窟から流れ

出てきた。洞窟は身を屈めなければならぬほど狭かった。斜度はあまりなく、壁面はコケに覆われていた。入り口から十メートルほど下ったところで、懐中電灯の光が黒々とした穴のような水面を映し出した。一瞬何かの影が見えたようでどきりとしたが、すぐに岩の影だと分った。穴の底には小さな泉と、両手で抱えられる程度の神棚があるだけで、あとは岩ばかりだった。人間が身を隠せそうな場所はどこにもなかった。

泉は小さく、一人用の浴槽程度だ。深さも大して無い。せいぜい膝下くらいだ。その泉の中心あたりからこんこんと水が噴き出していた。懐中電灯の光でもこの水が澄んでいるというのは窺えた。幸恵は水をそっと手にとり、口に含んでみた。東京では到底味わうことのできない、甘く心地よい味が口に広がった。

寒気が一層増した。何かが起こりそうな予感がした。幸恵は懐中電灯でひととおりを照らした。岩肌と小さな神棚。壁際に置かれた硝子コップの数々。懐中電灯の光が乱反射し、不思議な文様を描き出す。

ふと、電灯の光に何か浮かび上がった。

「螢」

幸恵は思わずそう呟いた。しかし螢ではなかった。

小さな白い何か、ふわふわと宙を漂っていた。注意して見ていたのだが、やがて白いなにかは数を増やし、いくつも宙に舞い始めた。この時幸恵の寒気は最高潮に達していた。凍えそうな寒さだ。

やがて白い何かはゆっくりと、次々に泉に舞い落ち、そして水面に着水すると同時に溶けるように消えてしまった。

次の瞬間、幸恵を何かが襲った。急のことで何だか分らなかった。幸恵は悲鳴を上げ、闇雲に手に持っていた電灯を振り回した。だが電灯はすごい力ではじき飛ばされ、泉の底へと沈んだ。電灯は暫く瞬いていたが、やがて光を失った。暗闇がやってきた。

何者かは幸恵をうつ伏せにすると、手をねじ上げる形で幸恵の抵抗を封じた。次に起ったことが幸恵を狼狽させた。何者かは幸恵のスカートをめくり上げると、下着に手をかけたのだ。幸恵を押さえつけているのは、他でもない住職だった。幸恵の美しさに我慢がなくなり、暗がりでも押し倒したのだ。

「くそ坊主」

「うるさい。黙れ。金を払って欲しければ黙れ」

幸恵の目に悔し涙がにじんだ。お金がいる。確かにお金がいるのだ。生活していくために。だからといってこんな目に遭うほどおちぶれてしまったのか。冗談じゃない。

幸恵が最後の抵抗を試みて満身に力を込めようとしたとき、ふっと押さえつけていた力が抜けた。続いて住職の悲鳴。

幸恵は慌てて壁際まで後退った。目の前に何者かが仁王立ちしていた。そして足の下には踏みしめられた住職が藻掻いていた。

「誰？」

そう声に出そうとした瞬間、幸恵の中を冷たい何かを通り抜けていった。身も心も凍ってしまいそうな、ぞっとする冷気だった。そして壁際に別の何者かの気配を感じながら幸恵は気を失った。

後のことはよく覚えていなかった。気がつくとも本堂に寝かされていた。慌てて身体の様

子を調べたが、特に妙なことをされた気配はなかった。どうやら住職が小僧を使って運び上げたらしかった。目を覚ましたと知ると住職が辺りを憚りながらやって来た。手に封筒を持っていた。

「必要経費と日当だ」

「ちょっと、これだけ？」

「成功報酬はなしだからそれだけだ」

「冗談でしょう？ あんなことしておいて、これだけで済ますつもり？」

住職の顔がみるみる怒りに黒くなった。

住職は幸恵が口を開くよりはやく背中を見せた。袈裟の背に大きな足跡が付いていた。

住職が踏みしだかれたときのものだった。

「これがあんたの仕事の成果だ。何が妖怪退治専門だ。聞いてあきれる」

幸恵は

「あんたがスケベ根性を出さなければこんなことにはならなかった」

とよっぽど言ってやりたかった。だがそれを言ったところで、住職は平然と例の何者かがやったと言うことだろう。証拠は何もない。そして幸恵は気を失ってしまった。夢でも見たと言われては返す言葉はない。反論したところで勝ち目はなく、さらに報酬は一切なくなってしまう。幸恵は怒り爆発させそうになったが、諸処の事柄を考えていくうちに、段々と面倒になってきた。最後にはどうしてもよくなり、向こうの条件を全て飲むことにした。いつもの悪い癖だ。困難に晒されると、全てが面倒になってしまう。幸恵は自分自身に対してため息をついた。

幸恵は再びタバコを取り出すと、口に銜えた。まずかろうとなんだらうと、吸わずにはいられなかった。シガーライターは相変わらずうまく引かからなかった。

幸恵はシガーライターとの悪戦苦闘に気をとられて、さっきまでは遠くの喧噪に混じていたサイレンの音が、近づいてきていることに全く気がつかなかった。車内にはけだるい調子のジャズボーカルの声がゆったりと流れていた。低い排気音がボーカルのバックミュージックと混じり合い、幸恵を現実世界から引き離していった。

ふいにジャズボーカルの声が轟音でかき消された。幸恵はビクンと身体を振るわせ、音の方向を探った。右手の窓ガラスのすぐ脇、手を伸ばせば届きそうなくらい近くに、巨大なトラックのタイヤが迫ってきていた。

幸恵は慌ててハンドルを左に切りそうになった。左手は分厚いコンクリートの壁だ。逃げ場がない。そう思った瞬間に幸恵は理性を失った。頭の中が真っ白になった。

ブレーキを踏むことは全く考えなかった。体中から信じられない程の汗が噴き出すのを感じた。ふいに時間の感覚が麻痺し、全てはスローモーションで動いているように思えた。不思議なことに、もうトラックの轟音は耳に入ってこないのに、ジャズボーカルのけだるい声が車内をゆったりと、散歩でもするかのごとく流れているが聞こえた。ジャズは僅かに調子を上げて一番盛り上がりの箇所には達していた。

車体が揺れた。急激な動きではなかった。車内のあらゆる小物が、宇宙空間に放り出されたかのように、緩慢な動きで四散していった。フロントガラスに蜘蛛の巣のようなひびが走るのが見えた。サイドウィンドウは粉々に砕け散り、車内車外と言わず、あらゆる方向へと飛び散っていった。そして幸恵の感覚ではかなりの時間において、耳を聳す

る程の破壊音が響き渡り全てが一つの時間の延長戦に戻ってきた。

トラックのタイヤは幸恵のムスタングのドアをこすりながら、車を壁際まで押していった。すぐに左手の防護壁に車は叩きつけられ、耳障りな金属音がした。右のサイドウィンドウも砕け散り、車体が削り取ったコンクリートの破片が車内に降り注いだ。

「助けて」

幸恵は悲鳴を上げながらも、ようやくブレーキを踏んだ。だがもう全てが遅すぎた。

トラックはムスタングを軋ませながら前に出、ボンネットを踏み越えて完全に前に躍り出た。その際にコンテナの後の角がムスタングのボンネットにがっしりと食い込み、ムスタングをトラックが引きずる形になった。トラックそのままムスタングを引きずりながら、高速で左の安全障壁に斜めに激突した。勢いトラックは跳ね上がりながら約九十度方向を変え、横倒し状態で反対方向へと飛び出した。ボンネットにがっしり食い込んでいたコンテナの一部はずれたが、宙を舞うトラックは幸恵の上に被さるように落下してきた。

全てがスローモーションのようであった。手を伸ばせば届きそうな程近くの空中をトラックが飛んでいて、正に幸恵の上に落下しようとしていた。最早幸恵には一切の思考能力は残っていなかった。幸恵は呆然と落下してくるトラックを見つめていた。

潰されかけていた幸恵の運命を変えたのは、後方からトラックを追ってきたパトカーだった。

パトカーは幸恵の横を猛スピードで走り抜けると、咄嗟に左に方向を転じた。結果ムスタングの右前フェンダーに激突した。恐らく警察官は幸恵を助けるつもりではなく、宙を舞うトラックをなんとか避けようとしたのだろう。だが運の悪いことに警官は自らトラックの落下地点の真下に移動してしまった。

パトカーに激突された幸恵は再び壁と車に挟まれる形になった。結果壁の抵抗でブレーキが掛かり、僅かに後方に下がった。そこへトラックのコンテナが落下してきた。幸恵が後方に下がらなければ、トラックは幸恵の頭の上に落ちたはずだ。だがパトカーのおかげでコンテナの角がボンネットに落下するだけで済んだ。幸恵は一瞬自分が事故に巻き込まれたという事実さえ忘れ、目の前でムスタングの心臓に鉄の杭が打ち込まれるのを、家族を看取るような気持で眺めた。耳を聳するばかりの破壊音が響き渡り、うるさく鳴り響いていたサイレンの音が消えた。同時に低いムスタングの鼓動も停止した。

ものすごい衝撃が幸恵を襲い、何度もハンドルに頭を打ち付けられた。シートベルトが身体に食い込んで息ができなかった。それでもパトカーが横倒しになったトラックの真下で押しつぶされていく様が、スローモーションのように見えていた。警官が両手でトラックを防ごうともがいていた。口を大きく広げた警官が、潰されつつあるルーフに押さえつけられ、徐々に下方に身を沈めていった。やがてパトカーは半分以下の大きさにまで潰されてしまった。

三台の車はそのまま五十メートルも高速を、嫌な金属音と鼻につく刺激臭をまき散らしながら滑り、ようやく停止した。漏れだしたガソリンが路上に大きな染みを作った。幸恵は車を脱出しようと思った。だがどうしても身体が動かなかった。それにどこか遠い場所、それも決して二つの目だけでは見ることのできない場所から、何かが幸恵の意識を引っ張っていた。このままではすぐにでも意識を失ってしまいそうだった。

目の端にトラックのガソリタンクから漏れ出たガソリンが、路上を自分の方へ流れてくるのが見えた。ここから抜け出さなければ。このままではガソリンに焼かれて死ぬことになる。幸恵は必死の思いで手を動かした。だが事故のショックで腕には全く力が入らず、どうしてもドアレバーを引くことができなかった。幸恵は気を失いそうになるのに必死で抵抗しながら、何度もレバーに指をかけた。もうガソリンは幸恵のところまで来ていた。あとはもし何かの拍子に、壊れたバッテリーが火花を散らしたすれば、一巻の終わりということだ。幸恵は信じてもない神様をお願いをしながら、レバーを引いた。指がうまい具合に引っかかり、軽い金属音と共にドアが開いた。

やった。

だがボディーがゆがんでいるせいか、ドアは僅かに開いただけで、それ以上開かなかった。幸恵は満身の力でドアを押した。押せば十センチくらいの隙間はできるのだが、力を抜くとすぐに閉じてしまう。何度か押している内に、十センチくらいの隙間が十五センチくらいにまで開いた。幸恵はさらにドアを揺るようにして少しずつドアを押し広げていった。

だが、その行為が思わぬ結果を生むとは想像もできなかった。幸恵がドアを押し広げる度に、その振動がトラックに伝わった。横転のせいでコンテナの鍵が外れてしまい、扉が今にも開きそうになっていた。そこへ幸恵の作った振動が伝わり、観音開きの扉の下側になった方がすこしずつ開き始めた。そして幸恵が最後の一センチを開けるために食らわした体当たりで、扉は完全に均衡を失い、開いた扉が勢い幸恵の車のフロントガラスを直撃した。扉はガラスを砕き、助手席のシートを切り裂いた。もし幸恵が左ハンドル車に乗っていなかったら、今頃は完全に扉の下敷きだった。

続いて扉の開いた口から積まれていた荷物があふれ出てきた。冷凍車だったのか、荷物は大きな氷の固まりのようだった。すごく大きい。人と同じくらいの大きさだ。あのような大きな氷の固まりにぶつけられたらひとたまりもない。だが、固まりの一つはまるで幸恵の思考を読んだかのように、幸恵めがけて滑り落ちてきた。幸恵は咄嗟に身体を倒して避けた。氷の固まりは今まで幸恵が座っていたシートに体当たりを食らわせて止った。だがなだれ込んできた氷は一つだけではなかった。その固まりに続いて隙間という隙間に巨大な氷の固まりが滑り込んできた。そして幸恵の顔の上わずか五センチのところの一つが止ったところで、雪崩は停止した。

幸恵はその時初めて氷の固まりをまじまじと見た。そしてその固まりがただの氷ではないことにやっと気が付いた。幸恵の目の前五センチのところに苦悶に歪んだ人の顔があった。

幸恵は最初荷台に人がいたのかと思った。だが顔はいつまでもそのままだった。その固まりはまさに人間だったのだ。凍り潰けにされた人間の死体だった。このトラックがパトカーに追われていた原因は、積み荷だったのだ。

死体はどれもみな苦悶の表情を浮かべたまま凍っていた。口は声なく絶叫し、目は固く瞑られていた。その口の開き方があまりに大きいので、口に何かを詰め込まれていたかのように見えた。その顔が幸恵の目の前にある

幸恵の心を何か冷たいものが通り抜けていった。それが何かは分らない。だが、洞窟の中で感じた、あの感情さえも凍り付かせてしまいそうな感覚と同じだった。幸恵の意識は

冷たい風に晒され、少しずつほころびていった。そしてついに、今までかろうじて保っていた意識の均衡がくずれ幸恵は気を失った。

幸恵が気を失ったと同時に、トラックの運転席から一人の男が滑り出てきた。

男は事故のせいで全身血にまみれていた。背は高く肩幅も広く、一見レスラーか相撲取りのように見えた。血が獅子のような顔を一層恐ろしげに見せた。だが今は力無くトラックに寄りかかるのが精一杯のようだ。

男はしばらく寄りかかっていたが遠くに別のサイレンの音を聞くと、痛む身体に鞭打ってコンテナの入り口に廻った。そこら中に散乱している凍り漬けの死体には目もくれなかった。男は必死の呈で何かを探していた。だがその何かは見つからず、男の顔に恐怖の色が浮んだ。男は血眼になってそれを探し回り、ようやくそれが幸恵の足下に転がっているのを発見した。サイレンはもうすぐそこまで来ていた。ただ、事故渋滞でなかなか前に出てこれないのだ。急がなければならない。

男は割れたガラスの隙間から手を伸ばした。手の先には銀色の手提げ金庫が転がっていた。だが死体どもが邪魔をしてどうしても手が届かない。サイレンの音がさらに大きくなった。どこかでバッテリーがショートする音が聞こえた。時間がない。男は運転席の扉を力任せに開くと、死体を押し分け、幸恵の足を押しつけて金庫を取ろうとした。ほんの一瞬幸恵の足に触れたとき、まるで電気でも走ったかのように手を引き、驚愕の目で幸恵を見た。もし状況がこのような状態でなければ、男はいつまでもそうしていたかもしれない。だが今は驚いている場合ではない。サイレンが更に大きくなった。男は金庫を掴むと車から離れようとした。その時またバッテリーのショートする音が聞こえた。男はきびすを返すと、幸恵を車内から引っ張りだした。そして自分の肩に担ぐと、事故現場から遠のいた。丁度パトカーが到着したとき、ショートしたバッテリーの火花がガソリンに引火し、三台の車は轟音と共に燃える火の玉と化した。散乱した凍り漬けの死体もやがて炎に焼かれていった。

二 消える死体

渋谷のクラブ「デビル」は今日も盛況だった。天井では色とりどりのスポットライトが高速回転をし、店内に光の銃弾をばらまいていた。腹に響くビートで会話はあまり成り立たない。ここでの会話は視線とダンスだ。もし目があってから、相手のダンスも気になれば、後はボックス席で酒を飲むのもトイレにしけ込むのも自由だ。

アキラはフロアでしばらく汗をかいたあと、適当に廻りを見回した。ろくな女がいない。どいつもこいつもガキばかりだ。アキラには連れがいたが、この扉を潜った瞬間から二人とも一緒にここを出るつもりなどなかった。二人の目的はそれぞれいい相手を見つけて今日という一日を楽しむことだ。浮気をするのは自由だ。浮気をされるのはされる方が悪い。相手をつないでおけないのだから。それが二人のスタイルだった。

アキラは一旦諦めて連れのいるボックス席に戻った。ソファにどすんと腰を下ろし、相手に聞こえていないのを承知で、とりとめのないことを喋った。そしてタバコを銜えると、思いもかけず隣からライターの花が差し出された。アキラは相手を見た。ショートカットの女が座っていた。連れはいない。アキラは差し出された火をありがたく頂戴すると

「俺アキラ」

と怒鳴った。女も

「キヨミ」

と怒鳴った。

喉が痛くなるので会話は成立しない。互いにしばらく相手の顔を見て笑ったり澄ましたりした。だいたいそれで一日話が続くかわかるのだ。

アキラはおもむろにキヨミの唇を吸った。キヨミも吸い返した。いい感じだ。ライトがくるくる廻ってキヨミの顔に色とりどりの影を作る。赤、青、黄色。これがあたしの本性。色とりどりの影がそう訴えている。赤、青、黄色。キヨミの本性はめまぐるしく変わる。アキラはサイケデリックな感情の高ぶりを覚えた。色に合わせてキヨミに鞭を打ちたくなる。アキラはキヨミのせり上がった胸を乱暴にもんだ。

二人はトイレの個室で手早く用を済ますと、フロアの一番端にある植え込みに腰を下ろした。夜はこれから。何も体力が尽きるまでトイレに籠もっている必要はない。キヨミがズボンのポケットから何か包みを取り出した。一目で危ないドラッグだと分る。持ち上げると光に照らされて、包みの中のドラッグの粉はきらきらと輝いた。

「いいのか？ これ」

「初めて。でも最高だって」

「どうすりゃいいんだ」

「わかんない」

アキラは袋からひとつつまみ取り出すと、鼻孔に指を近づけ思い切り吸い込んだ。つつんとした刺激が粘膜に広がった。すこし多すぎるかなとも思ったが、ちょっとくらい多い方がノリがよくなるってものだ。

「キツッ」

「どう？」

「アップ系かな。うまく説明できない」

キヨミも同じように鼻から吸い込んだ。暫くすると身体が小刻みに震え始めた。キヨミは両腕で自分の身体を強く抱くと、声を出し始めた。さっきのトイレの中での声と一緒に、いやもっと感じているらしい声だ。すぐに最後まで達してしまったのか、小刻みに身体を振るわせながらも、アキラに寄りかかってきた。アキラはその時驚いて飛び退きかけた。キヨミの身体は氷のように冷たかったのだ。だが、身体にうまく力が入らなかった。アキラの方はキヨミみたいな性的な感覚はなかった。もっと冴え冴えとした感覚だ。雪原に立った時のように、頭が冴えわたっていく。そして目の前を飛び交う光の弾丸が本当に身体を打ち抜いているような感じだ。僅かな痛みさえ感じる。やがて光の銃弾は全て色を失い、白い閃光へと転じていった。白い閃光が流れ、渦巻き、幾何学的な文様を紡ぎ出していく。周りにはもう誰もいない。キヨミもいない。光だけ。

最高だ。

だが、期待とは裏腹に光りはまるで吹雪のようにただの冷たい流れになってしまった。気が付けばアキラは本当に吹雪の雪原に一人佇んでいた。誰もいないし何もない。アキラは寂しくて泣きたい気持になった。涙が頬を既に伝っていることは気が付かなかった。

「キヨミ」

アキラは声に出して読んでみた。返事はない。

「キヨミ。誰か返事をしろ」

だが返事の代わりに聞こえるのは風の音だけだ。大粒の雪が身体を打つ。ものすごく寒い。雪煙が辺りを覆い尽くす。粉雪が喉に入ってむせそうだった。もしこれが幻覚だったのだとしたらたいしたものだ。LSDだってこうはいかない。それにしたって寒すぎる。

「くそ。どうなっているんだ。キヨミ。キヨミったら。どうやったら戻れるんだ」

アキラはちょっと余分に薬を吸い込んだことを後悔していた。

アキラを取り巻く風は徐々に強さを増していった。視界は白い雪に閉ざされ、数メートル先さえも見えない。雪面から舞い上がった粉雪が、つぶてのように身体を打つ。痛い。何だか無性に心細くなり、早く現実に戻りたいと思う。ひどいバッドトリップだ。だが感覚はどんどんと現実離れた現実に向かって研ぎ澄まされていった。寒い。凍えそうだ。もう立っていることすらできそうにない。アキラはその場にしゃがみ込み、出来る限り体温を奪われないように試みるが、どうにもならない。寒さで頭痛がひどい。

やがて全身の感覚が奪われ、寒さを感じなくなった。やってきたのは急激な眠気だ。よく雪山で遭難した人は眠気と戦うと聞く。こんな感じなのだろうか。ひどく眠く、だるい。しゃがんでいるのも億劫だ。アキラはその場に崩れ落ちた。顔の前で粉雪が舞い上がる。一瞬その美しさに心を奪われた。

どこか遠くでざわめきが起ったがアキラの耳には届いていなかった。アキラに見えるのは雪だけ。そして吹雪の中を、自分に向かって歩いてくる誰かのぼんやりとした姿だけだった。

佐久間にこの情報が入ったのは、完全に冷たくなった二人が病院に搬送されてから八時間はゆうに経ったところだった。

佐久間賢治は苛立ちを隠せず、後輩に当たり散らした。そんな時後輩は、さも別の用があるかのように、そっと周りから離れていった。

まただ。今年に入ってからスノーで十人の若者が変死をとげている。なのに依然販売ルートが浮かび上がらなかった。誰が、どういったルートで仕入れて捌いているのか。スノーと呼ばれるドラッグは全く謎に包まれたままの代物だった。佐久間は十年以上刑事をやっているが、こんな不可解な事件は初めてだった。佐久間はポケットからよれたタ

バコを一本取り出すと、火を点けて一口すった。そしてぼんやりと煙を眺めた。

佐久間がスノーという名前を耳にするようになったのは今年の春だった。正式名称はスノーホワイト。アルカロイド系らしいが、高分子なのか分解が早いらしくて体内からの検出はまだ成功していない。今年の春に覚醒剤一斉取り締まりの手入れをした時、売人の一人が口にしていたのが佐久間が聞いた最初の噂だった。

その噂というのは覚醒剤の十倍心地よく、十倍依存率の高い薬が国内のどこかで精製されたというものだった。その薬は結晶が雪のように白く美しいため、スノーと呼ばれているらしかった。だがその売人も現物をみたこともなければ、扱っている人間に会ったこともなかったのだ。

ところがその噂を耳にしてすぐ、渋谷のクラブで怪死事件が発生した。少年がドラッグのやりすぎで死亡したのだが、その死体は氷のように冷たくなっていた。実際に死亡後の体温はきっかり零度だった。まるで氷だ。通常死体というのは常温になる。当然の話だ。生あるものが命を失えば、自然と同じ温度になるものだ。その後体内で分解が進めば、熱が発生する。温度が上がることはあっても、下がりすぎることはない。ところがその死体の温度はきっかり零度。ついさっきまで冷凍庫に入っていたとしか言えない温度だ。あり得ないことだ。しかも熱気あふれるクラブで。

あまりあてにならない目撃証言ではその少年はソファーからいきなり転げ落ちた。ここまではよくあることだ。だが転げ落ちた少年は口から真っ白い粉をはき出し始めた。その粉はディスコ内が一時騒然となる程多量だった。しかし救急隊が駆けつけたとき、その謎の粉はどこからも見つからなかった。どこへともなく溶けて消えてしまったのだそうだ。特異な場所なので集団幻覚の可能性もあるが、府に落ちない話だ。そして少年は冷凍庫から出したばかりみたいに冷たかった。少年の死体は救急病院に収容されて八時間たってもまだ氷のように冷たかった。

今年に入ってから立て続けに五件、八人の若者が死んだ。どれも状況は似たり寄ったりだ。そして今日二人。しめて十人の命が奪われた。

この問題の難所は薬のルートが全く分らないことだ。そしてもう一つ難問があった。今までの八体の死体が全て、いづこかへ消え失せてしまったのだ。病院関係者が話を漏らしたらしく、マスコミが動き始めているのも厄介だ。

死体はすべて鍵の掛かる安置所に置かれていた。鍵は看護師詰め所にある。もし看護師が盗み出したのだとすれば説明はつくが、何のために死体を盗み出すのかわからない。考えられるのは薬の作用がばれないようにするためだが、検死解剖を済ませた死体を持っていても仕方がない。何か別の使用方法があるのだ。いずれにしても死体がまた盗まれる可能性は高かった。

佐久間は病院で担当医師に会うと、先ず死体の確認を行った。佐久間の大きな、何も見逃さない目に、担当医師はいささか気後れしているふうだった。人の多い一階受付から金属製の扉を抜けて地下へ降りた。病院の地下というのはいつ行っても気分のいい場所ではない。病院の死が全て集まる場所だ。今まで幾度となく死というものの対面したが、病院の地下の雰囲気というのは、死というよりも、邪悪という感じを受けるのだった。

蹬音を響かせながら、リノリウムの廊下を一番奥まで進んだ。佐久間は時々後ろを振り返らずにはいられなかった。非常出口の明かりで、後ろに長い影が出来ていた。その影

は薄ぼんやりとしていて、事件の行く末を現しているように思えた。

死体安置所の鍵の音が暗い廊下に響き渡った。その音を聞いたとき、佐久間は何故か踏み込んではない領域に足を踏み入れてしまった気がした。

「馬鹿な」

「はっ？ 何でしょうか」

「いや、独り言ですよ」

佐久間はたった今感じた不安を無理矢理うち消した。

佐久間は迷信の類は一切信じない。虫の知らせも予感も信じない。佐久間が信じるものは、自分の足で稼いだ情報だけだ。その大きな目で見ただけだ。それこそが事件を解決に結びつけると固く信じていた。

だだっぴろい安置所にステンレスのテーブルが二台並んで置かれていた。そしてそれぞれにシーツを掛けられた死体が置かれていた。一人はアキラと呼ばれていた少年で、もう一人はキヨミと名乗っていた少女だ。佐久間はそっとアキラの肩の辺りにふれてみた。背筋に冷たいものが走り、思わず手を引っ込めた。分っていたはずなのに。死体は冷たすぎた。まるで氷のようだ。

佐久間は必要な質問をいくつかした後、最後に聞いた。

「出入口は？」

「一つだけです」

医師は怪訝な顔をし佐久間の次の言葉を待ったが、佐久間が何も言わないので

「椅子はそこにありますよ」

とだけ言い残して出ていった。なにがそこにあるだ。死体と一緒にいる方の身にもなってみろ。佐久間は一旦折り畳み椅子を広げると、なるべく死体から離れた場所に陣取って腰を下ろした。だがどうしても気持ちが落ち着かなかった。まさか死体が起きあがるはずもないのだが、死体と同じ部屋にいるのはいい気がしない。見張りの警官が来るまでまだ一時間以上あった。佐久間は少しずつ、椅子ごと出口の方へと移動していった。

警官がやってきたとき、佐久間は扉の外でタバコを吸っていた。とても中にいる気がしなかったせいである。そしてこの死体の見張りなどをいいつけられた警官を哀れに思いながら病院を後にした。

「デビル」の床にはいまだ鑑識が貼り付いていた。店の店長がいまにも営業妨害になりそうな鑑識連中を、疎ましそうに見ていた。

今回もまた少年たちは白い粉をはき出したというのだ。だがどうしてもそれらしい物は発見できなかった。鑑識の話によれば、床から収集した成分はせいぜいワックスと靴についていた泥、汗。そしてどういう訳だか多少の精液くらいなものだそうだ。まったく若い奴らときたら。佐久間は首を振った。

「あとは若干湿度が高いくらいですかね。そのガイシャがはき出した粉っていうのは、案外雪かもしれないよ。それなら湿度の説明もつく」

鑑識はそう言って力なく笑った。またしても進展なしであった。

佐久間の脱力感を方向転換させたのは携帯電話の着信音だった。着信音は「お馬の親子」だった。同僚にいつも笑われるのだが「お馬の親子」は、別れた女房に連れられていった娘が好きだった歌だ。電話が鳴る度に佐久間は娘の顔が思い浮かぶ。いまでもこの歌

をうたっているだろうか。佐久間をがさつだと罵って出ていった、女房のことを思い出すことはない。だが、娘のことは毎日のように思い浮かべる。

「佐久間ですが」

電話の相手は病院に残した警官からだった。警官はどこか怯えている風だった。佐久間は用件を聞くより先に、お前警官だろう。警官がびびってどうするんだ。と怒鳴ってやりたくなるが、ぐっと押さえた。

「中から何か物音がするんですよ」

「何の音がするんだ」

「わかりません。ごそごそと」

「馬鹿野郎」

結局我慢しきれずに怒鳴ってしまった。これこそががさつと言われる原因なのに。

「確認しなきゃ何だかわからないだろう」

そうは言ったものの、もし死体盗難の犯人だったとしたら危険だ。佐久間は応援を要請するように伝えた。

「もしかしたら死体が歩き回っているかもしれん。誰か行くまで絶対に扉を開けるなよ。ゾンビが出たなんてばれたら大騒ぎだからな」

電話の向こうで若い警官が息を飲むのが聞こえた。その手は弱いらしい。

病院まではポンコツのカローラで十五分ほどだ。佐久間はサイレンを鳴らすかどうかを迷った。サイレンを鳴らせば十分で行けるが、まだ事件と決まった訳ではない。それに佐久間が使用している公用車のカローラはアクセルをどんなに踏んでも、たかが知れている。もっと刑事ドラマで使うみたいなまともな車をよこせと言いたいが、何しろ税金で買うのだからあまり文句も言えない。もう十二月になるというのに、ろくに暖房も利かない。信号で停止すると、横に真っ赤なセリカ GT-FOUR が停止した。乗っているのはサングラスをかけた髪の長い女だ。どこかで見た顔だ。だが GT-FOUR のエンジン音と、ばかでっかいボリュームの音楽が意識をかき乱す。暴走族め。誰だったかは思い出せず、ただそう思った。

信号が青になると同時に、GT-FOUR はロケットみたいなスピードで走り去ってしまった。こっちだってアクセルは踏んでいるのに、まるで止っているみたいだ。

「くそったれ」

佐久間は去りゆく GT-FOUR に暴言を投げつけた。

病院に応援はまだ来ていなかった。ひどく情けない表情の警官にまた腹が立った。

「馬鹿野郎。びびるな」

しゅんとしている警官に、柄の悪い男。端から見れば、やくざが警官を尋問しているみたいに見えるだろう。

「音は」

とだけ訊くと

「まだ続いています」

と蚊の鳴くような声で警官が答えた。佐久間は怒鳴る前に歩き始めた。

問題のドアノブを回すとまだしっかり鍵が掛かっていた。担当医師が二人のどこか険悪な雰囲気を感じて、鍵を開けるとかなり遠くまで離れた。いつでも逃げ出せるようにし

ているのだろう。耳を澄ませると確かに中でごそごそと音がする。一応銃を取り出す。若い警官がその銃を見て目を丸くした。勤務中に銃を抜いたことはないのかも知れない。そっとドアノブを回した。鉄の扉を五センチほど開くと白い蛍光灯の光と、死体を保存するための冷気が漏れだしてきた。隙間からはまだ死体は見えない。一瞬本当に死体が動き回っていたらどうしようと思い、首を大きく振った。

さらに五センチ開いた。ようやく死体安置台の隅が目に入ってきた。白いシートが身体のおぶだけ盛り上がっていた。佐久間はすぐに異変に気が付いた。死体を包むシートが時々動いていた。背筋を冷たいものが走り抜けた。銃を持つ手に汗がにじむ。そんなことがあるはずがない。そう死体は死んでいるから死体なのだ。やはり中に誰かがいると考えるのが妥当だ。それも死体を盗もうとしている誰かが。

佐久間はドアを一気に開くと、銃を正面に構えて中に踏み込んだ。

「警察だ。動くな」

二つの死体安置台の間に一人の男が立っていた。

男は四十歳くらいで背が高く、肩幅も広かった。髪を後ろになでつけ、顎を黒々としたひげが包んでいた。そして着ている物は上等な紺のスーツに、黒いカシミアのコート。ひどく場違いだ。雰囲気からすればウォール街とかが似合いそうだ。

佐久間は銃を男の胸に向けたまま、素早く左右を確認し、再び男に目を向けた。

「今すぐ両手を高く上げて、正面を向け」

だが男は佐久間の言葉を全く無視して、何かの作業を続けていた。佐久間には男が一体何をしているのか全くわからなかった。

男は死体の上体を立てたまま、左手で頭を掴み、右手を死体の口に突っ込んでいた。男の右手は手首までキヨミの口に入っていた。そしてその手を更に奥へと突っ込んでいった。一体どうなっているのか、男の手は手首から肘へとどンドンキヨミの口に飲み込まれていったが、どうみても胃の方へと腕を差し込んでいるようには見えなかった。男の手はキヨミの頭の後ろ辺りにある何かを掴もうとしているかのように、キヨミの正面から水平に差し込まれていた。普通ならばそんな風に腕が口に入るはずがない。ところが男の腕は肘を通り越して肩口までキヨミの口に押し込まれてしまった。

男はキヨミの頭の遙か後ろにある何かを、キヨミの口を通して探している風に腕を動かした。そして何かを見つけたらしく、豊富な髭を蓄えた口に僅かに笑みをたたえ、一気に腕を引き抜いた。男が引き抜いた黒い手袋に包まれた手には、何か白とも金色ともつかない色をしたものが握られていた。光りの粒の集積のような珠のようなもの。もしかしたらそれこそが命というもののなのかもしれない、と思わせるほどそれは神々しく輝いていた。

「なんだありゃ」

いつの間にか横に並んだ警官が呟いた。

「おい、そいつは何だ。そいつを台に置いて両手を高く差し上げろ」

佐久間は銃をしっかりと構え直し、銃の撃鉄を起こした。冷たい金属音が部屋に響いた。男はようやくにして初めて佐久間を見た。強い意志の光を発する目が佐久間の目を射抜いた。佐久間は瞬時にして男が、自分の持つ僅かな恐怖心を見抜いてしまったと悟った。男は銃のことなど意にも介さず、ゆっくりとした動作で右手の何かを口へ運ぶと、林檎

でもかじるかのように一口かじった。そして目は相変わらず佐久間を見据えたまま、のこった何かを一気に口に放り込んだ。光りの集積のような何かは、滑るようにして男の口に飲み込まれていった。男が手を放すと、ステンレスの安置台に死体が大きな音と共に倒れ込んだ。死体の顔はゆがみ、口が大きく開かれていた。奥のアキラの死体も同様だった。

男はゆっくり、革靴の音を響かせながら台を回り込み、佐久間たちの正面に出てきた。飛びかかろうと思えばそうできない距離ではない。

「野郎。それ以上一步でも動いて見ろ。どうなるか」

佐久間が言い終わらない内に男は信じられない俊敏さで二人に飛びかかった。男の左腕が大きく振り回された。佐久間はさっとかわしたが、その腕は見事に警官の首を捕らえた。

骨の碎ける嫌な音が響いた。佐久間は咄嗟に引き金を引いた。銃弾が男の脇腹を打ち抜く確かな手応えがあった。だが、男はそのまま扉を跳ね開けて廊下に飛び出していった。

「くそう」

佐久間は警官に駆け寄った。首が五センチ以上凹んでいた。見るからに即死だ。とうてい生きているとは思えなかったが、それでも医者呼んだ。

「なんて馬鹿力だ。おい医者」

佐久間は警官を医者に任せて男を追った。病院の玄関まで来ると、小気味のいい咆哮を残して青いオートバイが玄関前を走り抜けた。ドカッティ996だ。

慌てて佐久間のカローラに乗り込んだ。アクセルをめいっぱいまで踏み込むが、ドカッティはすでに正門を走り抜け、大通りに達していた。

「緊急手配を頼む。車種は青いオートバイ。名称不明。登録ナンバー不明」

サイレンがやかましく喚き続けていて、神経に障る。オートバイはどンドンと遠ざかっていった。まるでミサイルだ。そのミサイルのようなドカッティが交差点をさっと右に曲がった。その精確さはレールでも引かれているかのようだ。佐久間も負けずに曲がった。タイヤが全て悲鳴を上げ、見る見るガードレールが近づいてきた。無理だ。曲がれない。あの男はいとも簡単に曲がっていったのに。左に軽い衝撃が加わり、カローラは制御を失ってスピンしそうになった。だがなんとか踏みとどまった。恐怖で心臓が張り裂けそうだ。それでも佐久間は再びアクセルを踏んだ。ガードレールにぶつかることよりも、犯人を逃がすことの方が怖かった。あの男は死体を盗んでいた犯人に違いない。その犯人を逃すということは、また犠牲者が出る可能性があるということだ。

男は更に左にかき消すごとく曲がっていった。

佐久間もめいっぱい左にハンドルを切った。カローラは大きく右手に流れ、対向車線の一歩端まで達した。そして路上に駐車されていた原付スクーターをなぎ倒して、ようやく前に進み始めた。大勢の人がその様を目撃していた。佐久間はサイレンを消したくなってきた。

「くそう。いい加減に諦めやがれ」

佐久間の願いも空しく、ドカッティはまたも右方向に目にも留まらぬ速さで方向を転じた。

南無三。

佐久間はハンドルを一杯まで切ったが、今度こそ曲がれそうになかった。ガードレールが迫る。佐久間のカローラは右カーブを曲がれきれずに左正面からガードレールに突っ込んで停止した。ついでにサイレンも勝手に止った。ボンネットから破損したラジエータの白煙が昇った。佐久間を後目に、ドカッティは軽やかに走り去った。その後すぐに病院に到着した応援隊からの無線が入った。佐久間はその内容を聞いて愕然とした。無線は死体が盗まれたと伝えていた。

三 依頼人

幸恵は乱暴な運転で GT - FOUR を駐車スペースに急停車させた。タイヤがなり、コンクリートブロックまであと数センチの所で停止した。幸恵は苛ついていた。

苛ついている理由は二つあった。

一つは車が亀みたいにのろいことだ。最高スピードで言えば断然 GT - FOUR の方が上だろう。だがムスタングと GT-FOUR とでは加速が違う。いままでロケットみたいな加速にならされてきたのだ。日本車のお上品な加速など自転車とたいして変わらない。幸恵は加速しない車など車でないとさえ思っていた。そのムスタングは事故で完全に廃車になった。加速と頑丈さだけが取り柄のアメ車もトラックには敵わなかった。

そして車のない探偵もまた探偵ではない。アメリカじゃあ探偵といえば、でかくて渋い車を乗り回しているものだ。だがさすがにアメ車を買うお金はなかった。そこで中古のもっとも探偵に似合いそうな車を探した結果が真っ赤な GT - FOUR だった。それにしても今ここの借金は本当に痛い。だが探偵というのは借金も多いというのも然りだ。

幸恵は事務所に戻ると椅子に座って両足を机の上で組んだ。そしてバーボンをグラスに注いで一気に煽った。外はまだ十分に明るかったが気にはしなかった。

幸恵が苛ついているもうひとつの理由は警察だった。

事件のことで警察に呼び出されてばかりいた。呼び出されるたびに事務所は無人になるのだから、仕事が取れるはずがなかった。仕事のない探偵ほど暇な職業もない。

幸恵は渋谷署の佐久間という目玉親父の刑事にことさら腹を立てていた。こっちは被害者だというのに、まるで容疑者であるかのような失礼な質問を投げかけてきた。だいたい事故は渋谷の管轄じゃないはずなのに、渋谷署に呼び出されるというのが納得できない。本来ならば無視したっていいのだが、幸恵が出向いていったのには訳があった。

幸恵は以前佐久間に覚醒剤等薬物取り締まり法違反で捕まったことがあった。

当時幸恵は何事にも熱中できずに、家庭もおろそかにして放蕩の限りを尽くしていた。元の亭主は親から譲ってもらった会社の社長をしていたので、金だけはいくらでもあったのだ。結婚する前は優しかった亭主も、金を手に入れると途端に嫌な奴に変身した。よくある話だ。それを見抜けなかった自分が悪いのだ。結果幸恵は夜の街に安息を求める

ようになり、行き着いたところが薬物だった。そして覚醒剤に手を出して捕まり、家庭も、大事な一人息子も手放すこととなった。裁判所は薬物依存のある親には親権を持たせてはくれなかった。

幸恵はバーボンを煽る手を止めると、机の上の息子の写真に目をやり、その先にある金庫に目をやった。錆びて古い金庫だ。継父が譲ってくれたものだ。古いが大きくて頑丈だ。金庫は大きいほどいいというのが継父の口癖だった。だがその金庫に今、金は入っていない。入っているのは別の物だ。

離婚が正式に決定したとき、仲の良かった継父が保釈金と一緒に、探偵事務所を始める資金を出してくれた。幸恵は継父に多大な恩があるにもかかわらず、いまだ薬物と縁を切れずにいた。継父のくれた金庫の中には、少々の書類に混じって危ない薬が入れられていた。離婚の原因となった薬物を、継父のくれた金庫に入れるなんて、なんて自分は恩知らずなのだろうと思った。だが、どうしても薬から足を洗えなかった。

幸恵はよく自分自身について深く考え込んでしまうときがあった。五十年以上も生きてきて、一向に人生の意義を見いだせなかった。半端な生き方ばかりしてきた。やくぎの情婦まがいのまねをしたことともあった。全ての行動が義務であり、意志に反しているように思われて仕方なかった。そんな自分を食い尽くしてしまいそうな現実を、薬物は一時だけでも忘れさせてくれた。まどろみの中に目的は不要だった。

佐久間がそんな自分を疑っていることは容易に推測できた。だからこそ事務所に佐久間を来させる訳にはいかない。

もちろん令状がなければ金庫を開ける必要もない。だが、もし佐久間が事務所に来たりすると、余計な詮索を受ける可能性があった。幸恵にとって佐久間は元夫の次に嫌いな男であった。そんな嫌な奴には実に嫌な能力があった。嗅覚である。佐久間はほんの些細なこと、例えば鏡の前の歯ブラシの位置とか、窓際に置かれたコップとか、そんなものから薬物の臭いをかぎ取ってしまう。事実、前回佐久間に逮捕された時も、そんな些細な信号を読みとられてしまった結果だった。佐久間に言わせると常習者には独特の生活習慣や、雰囲気があるのだそうだ。また佐久間に常習者特有の臭いをかぎ分けられなくなった。それにはこちらから出向くのが一番安全だったのだ。

しかし佐久間が幸恵を被疑者の一人とするのにはもう一つ訳があった。

幸恵と接触事故を起こしたトラックには、薬物が積まれているはずだった。実際発見されたのは、以外にも焦げた何体もの死体だったのだが、たれ込みでは多量の薬物が積まれているはずだった。トラックはパトカーを見た瞬間に暴走しながら逃走を図った。そして運転手は事故を起こした上、さらにトラックを捨てて逃走した。この時なぜ被害者である幸恵を助けたのか。多数の死体を運んでいた犯人は、警察に捕まる危険を冒してまで、何故幸恵を現場から五十メートルも、血を滴らせながら運んだのか。そこが謎なのだ。幸恵が現場から五十メートル先で発見されたとき、そこまでの路上には通常なら致死量にも近い血の後が延々続いていた。血痕はその先五十メートルほど続いていたが、その量が遠くに行くにしたがい、少なくなっていた。まるで傷を治しながら歩いたみたいだ。やがて血痕の間隔は長くなり、無くなった。その先犯人がどうなったのかは不明だ。

警察では幸恵が犯人の知り合いか、もしくは共犯者なのではないかと疑っていた。そう

でなければ助ける理由はない。

佐久間はその点を何度もしつこく幸恵に尋ねた。だが記憶のない幸恵にしてみれば、それについて何を聞かれようとも答える術を持たなかった。

幸恵から有効な情報を聞き出せないとなると、佐久間は別の方向から揺さぶりをかけてきた。何時の間に調べたのか、佐久間はローズ探偵社の経営状況をまとめた資料を見せた。

「随分と厳しいようじゃないか」

「そんなのあんたに関係ないでしょう」

佐久間はいやらしく笑って

「人間貧乏すると、目先のことに気がいって、つついしてはいけないことをしてしまったりするものだ」

まるで犯罪者扱いだ。腹立たしいったらありやしない。

「私は容疑者なの？」

幸恵がそう尋ねると、佐久間は違うと行って別の紙を渡して見せた。

「いや。ただの参考人ですよ。経営状態を調べたのは、あんたにうってつけの仕事があるからでね。知り合いから誰かいないかって言われてましてね」

佐久間の差し出した依頼状には次のような内容が記されていた。

依頼人：高橋 うめ 六十八歳 女

依頼内容：リサの浮気調査

調査費用：十万円 必要経費別

備考：リサ 三歳 雌 ペルシャ猫

猫の浮気調査だ。最近飼い猫が夜遊びをするようになった。外で種付けなどされては困るので、猫の行動を調査して欲しいのだそうだ。馬鹿にするにも程がある。

「どういづつもり。私をおちよくる為に呼んだの」

「まさか。うってつけだと思ったんですが。気を悪くしたならあやまります」

佐久間は大げさな仕草で謝って見せた。

なにが謝りますだ。

幸恵は気を静める為に深呼吸をした。いくらか気分が落ち着いてきた。何杯目かのバーボンをグラスに注ぐと、今度はゆっくりと味わった。透き通った苦みが気持を落ち着かせた。今もし佐久間が事務所を訪れたら、薬物常習者としての自分よりも、アルコール依存になりかけている自分を発見するだろう。佐久間のそういう心の弱い人たちを見るとき独特の目。哀れみと蔑みを併せ持った目を思い出し、幸恵は自嘲気味に小さく笑った。昔と何も変わっていない。それどころか悪くなっているじゃないか。みじめに年老いていく自分に乾杯。幸恵はグラスを掲げた。

そういえば今年いくつになるんだっけ？ もう歳を取りすぎて忘れてしまった。

グラスを掲げている幸恵の前に、一人の男が飛込んできた。大きな軀をした、ひどく不細工な顔の男だった。男は後ろを気にしながら事務所の扉を閉め、入ってきた時の勢いとは裏腹にゆっくりと幸恵に歩み寄ってきた。

「どなた」

幸恵はグラスを下ろすと、机の下にある警棒にそっと手を伸ばした。飛び込み客というのは、大抵災難を持ってやって来る。

「預かってもらいたいものがある」

「コインロッカーなら駅にあるわよ」

男は幸恵の言葉を無視し、両手を机に付くと身を乗り出して幸恵の顔をのぞき込んだ。男の顔は獅子のようだった。潰れた鼻に分厚い瞼に埋もれた小さな目。そして額や耳の下にある治りかけた傷跡。よく見れば傷跡は顔と言わず、腕や首にも付いていた。まっとうな仕事をしている人間には到底見えない。だが、不思議なことに、やくざ特有のきつい臭い雰囲気はこの男は持っていなかった。雰囲気だけで言えば、牧場で牛の世話をしているのが一番似合いそうだ。

幸恵は一応警戒を解いて、椅子の背にゆったりと凭れた。

「うちは探偵事務所よ。それは分ってる？」

「探偵でもなんでもいい。俺はあんたに預かって欲しいものがあるんだ」

「どういう意味だかさっぱり分らないわ。大体あなた何者よ」

男は暫く逡巡していたが、名前を花田順平だと名乗った。そしてそれきり口を開かなくなってしまう。幸恵はどうしたものかと考えながら、いくつかの質問を試みた。ところが花田は質問に答えるでなく、ただ黙って立っていた。時折花田は何かを我慢している風な仕草をみせた。

花田が何を預けに来たのかは分らなかったが、何を我慢していたのかはすぐに分った。

花田はおもむろに幸恵の机に置かれたバーボンのグラスを鷲掴みにすると、一気に喉に流し込んだ。

「ちょっと、人のお酒を何するのよ」

花田はグラスを放り出すと、暫く鼻をひくひくと動かした。まるでそうすることで、酒瓶の在処がわかるといった仕草だった。そして机を幸恵の方に回り込んで来、幸恵が仕舞ったバーボンの瓶を勝手に引っ張り出した。幸恵はあまりの勝手な行動にしばし啞然としたが、机の下の警棒を掴むとそれを花田の目の前に突き出した。

「ちょっと、あんた。花田だか獅子田だかしらないけど、今すぐそのバーボンを返さない。さもないと痛い目に遭わせるわよ」

花田は幸恵の言葉が聞こえないのか、全く動ぜずにキャップを外すと、水でも飲むかのように瓶から直接、しかも喉を鳴らしながらバーボンを飲み干してしまった。幸恵は頭にきて警棒の一撃を花田の肩の辺りに食らわした。相当痛いはずの音がしたが、全く効いていないようだった。

花田は空になった瓶を床に放り出すと、その場にでんとあぐらをかいて大きなゲップをした。幸恵はもう一度文句を言おうとしたが、顔つきがさっきと違っていた。牛使いの顔がならず者の顔になっていた。目が据わり、頬が引き締まった、いくつもの修羅場を

くぐり抜けてきた男の顔だった。

「なんなのよ、あんた」

花田は黙って作業服のような上着のポケットから小さなビニールの袋を取り出した。

「知っているか？」

「何よそれ」

花田の鼻がまたひくひく動き始めた。またアルコールを探しているらしい。この変貌ぶりといい、どうやら花田という男はアルコール依存症なのだ。アルコールが入っていないときは温厚だが、落ち着きがなく臆病ですらある。アルコールが入ると途端に強者に変身し、怖い物がなくなる。

「お酒ならもうここにはないわよ。それより何なのそれ」

「スノーホワイトだ」

「スノーホワイト？」

通称スノー。悪魔の白い粉と噂されている。ここ一年で十人の死人を出した謎の薬物だ。花田はこれを預かれというのか？ 冗談じゃない。だたでさえ佐久間に目をつけられているのだ。こんなやばい物を預かれば売人として登録するようなものだ。

「ごめんだわ。そんな危険な代物預かるわけにはいかないし、そんないわれもないわ。だいたい何よ。いきなり飛込んできて、人のお酒全部飲み干して、薬を預かれですって？ あんた何様よ」

花田の目がぎろりと動いた。血でも吸いそうな目だ。幸恵は口を閉じてあまり花田を刺激するのは止めようと思った。こういう手合いは暴れると手が付けられない。ところが花田の口から漏れた言葉は意外なものだった。

「あんたしか頼れる人間がない。あんたは信用できる。俺には分る。あんたは俺を裏切らない」

「あたしの何が分るって言うのよ。それに私はあなたを知らないわ」

幸恵は逆上しそうなのを押さえて言った。

「俺はあの事故の時にあんたを車から助け出した。命の恩人だ。だから今度は俺を助けてくれ」

幸恵は呆然とした。警察が必死で探している男がこの花田という男なのだ。そして花田は自分の命の恩人でもある。

もしここで幸恵がいつもの冷静さをたもっていれば、花田は命の恩人には違いないが、災厄をもたらした張本人だということがわかったはずである。だが、ひどく動揺していた。激しく揺れる振り子のように、幸恵の心はいつまでも揺れ続けていた。

命の恩人。自分は現場から少し離れた場所で発見されたのだ。幸恵のムスタングを含む三台の車は黒こげになっていた。パトカーからは顔の判別もできないほど焼けた死体が見つかった。その警官たちの死体は爆発のショックで身体の一部を吹き飛ばされてしまい、いまだにその部位は見つかっていない。もし車内でそのまま気絶していたら、同じように五体が揃わない死体になった可能性だってあるのだ。

「だからって...」

「これと同じものがあと一キロある。それを預かって欲しい」

「一キロ？ 冗談でしょう。私を犯罪者にしたいの？ いくら命の恩人だからってそれは

無理だわ」

花田は幸恵に正座して向き直ると、両手を床について大きな軀を限界まで折り曲げた。

「この通り」

「無理よ」

「どうしてもか」

「常識で考えて」

花田はがっくりと首を落とした。一キロの薬物を一般人に預かれというのは異常である。だが幸恵はほんの少しだけスノーについて知りたかった。

「スノーは謎が多い薬よ。なんであなた一キロも持っているの？ スノーの元締めは誰なの？」

「それは言えない。言ったら殺される」

「言わなくても殺されるんじゃないの？」

的を射たらしく、花田の顔が引きつった。

「聞いたらあんたも殺される」

「今更寝ぼけたことを言わないで。あなたがここにいるだけで十分危険よ」

花田は逡巡した。そしてぼつりぼつりと語り出した。

「俺はある人に雇われて冷凍倉庫で働いていた。そこで見てしまったんだ。スノーを作るところを」

花田はその時のことを思い出し、急に寒くなったかのように自分の両肩を抱いた。

「つまりスノーはある冷凍倉庫で精製されているって訳ね」

「そうだ。だが一グラムのスノーを精製するには、たくさんのある物が必要なんだ。俺は何も知らずにずっとそれを運ぶ手伝いをしていた」

たしか警察はトラックに死体が積まれていたと言っていた。もしかすると精製に必要なものというのは、信じがたい物かも知れない。

「まさかそれって」

幸恵の言葉を見殺しにして、急に花田がそわそわとし始めた。また入ってきたときの落ち着いた表情がなくなり、怯えた表情になり辺りを見回していた。鼻がひくひくと動いたが、アルコールを探するときの動きとは若干ちがうということが幸恵に分るはずもなかった。幸恵は続きを聞くために、一番下の引き出しに隠してあった、封の切っていないバーボンを出して机に置いた。だが花田は幸恵の出したバーボンに見向きもしなかった。

「ねえ、何を見たの」

「恐ろしい」

「えっ？」

花田は急に立ち上がると、部屋の中を狂ったように動き回り始めた。どうやら出口を探しているらしかったが、あいにくこの事務所には入り口が一つしかないのだ。どういう理由でかは分らなかったが、花田はその入り口からなるだけ遠ざかろうとしているようだった。

「ちょっとどうしたの。落ち着いて」

だが、軀の大きな花田を女の幸恵が止められるわけもなかった。花田はあらゆるものをなぎ倒した。そして逃げ場がないと悟ると、窓を開けて外に出ようとし始めた。

「ちょっと、ここは三階なのよ。落ちたら死ぬわ」

「恐ろしい」

花田は幸恵の手を振り払うと窓の外に身を乗り出し、遂にはその巨体を空に踊らせてしまった。

幸恵は慌てて外を見ようとしたが、窓の前でちょっと躊躇した。ひよっとしたら窓の下に潰れた人間の死体があるかもしれない。恐る恐る外を覗くと、窓の下に死体はなかった。代わりにすぐわきに生えている樺の枝が何本も折れて地面に落ちていた。巨漢の花田は豪快にも窓から樺にダイブを決め、見事に逃亡に成功したのだ。だが一体何からそんなに逃れたかったのか。

その答えが出たのは机の上のスノーを金庫に仕舞った直後に掛かってきた、元夫との電話の後だった。幸恵は元夫と家賃のことで大声で喧嘩をし、頭に血が上っていたので、いつ入って来たのかは分らなかった。受話器を叩きつけて、乱れた髪をかき上げた時に気が付いた。入口に一人の身なりのきちんとした紳士が立っていた。

紳士は幸恵に電話のことで何か言い足そうな顔をしていた。だが黙って机の前までくると上着のポケットから名刺を一枚取り出し、机に置いた。

名刺には

美濃部 善三

と印刷されていた。

善三は事務所を一通り眺め回し、納得したように頷いた。そして

「頼みたいことがある」

と口を開いた。

四 新たな犠牲者

服部銀次はコップの水を口に含んでから、顔をしかめて吐き出した。

「これが水かよ。まるでヘドロだ」

銀次は冷蔵庫から缶ジュースを取り出すと、カラオケボックスのカウンターに戻ると、カウンター前に高校生くらいの少女が立っていた。今時の高校生らしく、個性のない横並びの化粧だ。

「ええと？」

少女がボックス番号を、甘ったるいしゃべり方で伝えた。精算しろということであるが、確か連れがいたはずだ。トイレでも行っているのだろう。

銀次が金額を告げると、少女はお金を出しながら、今度飲みに行こうと誘ってきた。そらきた。カウンターをやっていると、よくこうやって声をかけられる。はっきり言って、高校生は面倒臭いので相手にしないのだが、暇だったので、少しやきもきさせてやることにした。

「今度って、いつの話」

「明日とかあ、明後日とかあ」

行く気もないのに腕組をして考えている振りをしていると、少女が急につっけんどんな態度になった。見れば連れの男が睨んでいた。

男は銀次に歩み寄ってくると、少年らしい無理のある睨みを効かせてから、少女の腕を引くように出ていった。

普通の男ならば、今のような場面でも平然としているのだろうが、銀次はそうでは無かった。銀次は見掛けに見合わず、肝っ玉が小さいのだ。少年が出ていったとき、銀次の掌は汗でじっとり濡れていた。ふうと息を吐き出し、長い足を投げ出して椅子に凭れた。そしてカウンターの上に置かれた小型テレビのチャンネルをせわしく変えた。

「びびらせるなよ。まったく」

銀次は背が高く、ルックスも悪くない。愛想も良いので若い女性客にはよくもてたし、時々街角でスカウトの声が掛かったりすることもあった。だが銀次がもっとも嫌いなことは、汗水垂らして働くことだった。まかりまちがって、芸人などになってしまったとすら、毎日睡眠時間を削って仕事をする。なんてことになりかねない。冗談じゃない。大事な青春を仕事になんて捧げられない。青春という歳でもないが。その点、このMIZUは客の入りが悪い。毎日暇を持てあますくらいだ。実に理想的な居候先であった。テレビを見ているとけたたましく電話が鳴った。いい加減買い換えればいいのに、未だに黒電話を使っている。うるさくて仕方がない。

銀次は受話器を取った。

「MIZUです」

「あたしだよ」

銀次は気分が悪くなった。あたしと名乗ってここに電話を掛けてくるのは、神谷の婆以外にいなかった。

神谷の婆は上野の地下街で占い館を営業する双子の婆だ。二人とも既に七十を過ぎていたが、自分たちが未だに綺麗で若い男にもてると信じていた。しかも実は二人はレズビアンでマゾという変態趣味の持ち主だった。二人の仕事は占いだ、それは表向きの話で、本業は薬の売人だった。しかもどういう趣味なのか、かなり危ないものばかりをそろえていた。

二人は占いにやって来る女性客に目を付け、自分の趣味の犠牲者にしていた。運のわるい客は二人にもてあそばれた後、すっかり薬漬けになって水商売専門の連中に売られていた。

そんな連中なので、銀次はどうしても在庫が足りなくなった時に限って、神谷の婆を利用することはあったが、嫌らしい作り笑いを絶やさず、不気味な婆連中をなるべく相手にしないようにしていた。

「在庫は不足していないかい」

「ありがたいが、今は足りてるよ」

「新しい、南米産の出物があるんだけど、試してみる気はないかい」

冗談じゃない。婆の仕入れてくる南米物は地獄の指定切符と言われているほど危険だ。あつという間に廃人になる。

「いや、止めておくよ」

「ごんねんだね。なんなら限定品もあるよ。知りたいだろう」

「知りたくないよ」

銀次がうんざりしながら答えたが、婆は気にも留めずに先を続けた。

「スノーホワイトを五グラムだけ仕入れたんだ。欲しいだろう」

銀次は気が遠くなった。

スノーホワイトの噂は銀次も聞いたことがある。依存性と致死率がものすごく高い謎の薬物で、今年になって出回りはじめたものだ。そんな物まで扱っていたのか。

「いらんってば。うちを棺桶にするつもりか」

棺桶という言葉が気に入ったのか、婆は気味の悪い声で笑った。

「残念だねえ。こんど千春ちゃんに店に遊びにおいでって伝えて置いてくれよ」

千春は美人だ。どうやら二人は千春にも目を付けているらしい。

銀次は伝えるつもりはなかったのだから、適当に相槌を打って電話を切った。

そういえば、銀次はオーナーである永作千春の姿がもう随分見えないのに気が付いた。銀次は慌ててカウンター裏の事務所に駆け込むと、各ボックスのモニタースイッチをオンにした。

カラオケボックス「MIZU」には八つのボックスがあり、それぞれに防犯用と銘打った監視カメラが備え付けられていた。カメラは超小型のものを照明の背後に設置してあるので、ほとんどの客は気が付かない。また各ボックスは閉鎖性が高くなっていて、だから監視カメラが必要なのだ。それは閉鎖性の高いボックスに客が入った時、やりすぎないように監視しているのだ。

何をやりすぎではいけないのか。

MIZUではカラオケ以外にももう一つの裏稼業があった。じつは若者向けにあまり強くないドラッグの販売を行っていた。だが時に余り強くないと言いながらも、適量はかなりオーバーして摂取した客が錯乱してしまうことがあった。そんなことがないようにカメラで監視するのである。

だが実際は錯乱しようがどうしようが、死人さえでなければ放っておいた。薬は各個人が各自の責任で扱えばいいのであって、それによって何か起ってもそれは各自の責任だ。店がいちいちそんなことに手を貸していたのではきりが無い。というわけで監視カメラは主に銀次の趣味に利用されていた。ボックスののぞきだ。

MIZUに来る客は二通りいた。薬が目当ての客。そして高いラブホテル代を払えない若いカップルたちの二通りだ。ボックスの閉鎖性を利用してここをラブホテル代わりに使

おうというのだ。本来ならば使用料を別にとってやってもいいのだが、銀次の目を時々楽しませてくれるので、きちんと後始末さえすれば特に何も言わない。

そして監視カメラにはもう一つの重要な役割があった。千春の監視だ。千春がいなくなったら銀次は先ず監視カメラで居所を確認する。大抵はどこかのボックスにいるからだ。

銀次は各ボックスのカメラを切り替えていった。

一番。薬でかなり飛んでしまっている若者たち。

二番。珍しくまともに歌っている客。

三番。若いカップル。すでにラブホテル状態。

四番。いた。千春だ。

千春はテーブルを拭いたり、フロアに落ちたゴミを掃除したりこまめに働いていた。銀次の緊張感が一気にしぼんだ。千春は本来働き者なのだ。そう本来ならば。

千春はカウンターに戻ってくると、買い物に行くと言って店を出ていった。店の外に出てしまった千春を監視することはできない。

銀次はため息をつくと暫く三番のカップルを覗いてから、カウンターに戻った。

銀次が千春の悪い癖を知るようになったのは、千春のところに転がり込んですぐだった。銀次は冬の間はスキー場で仕事をし、それ以外の季節は東京で適当に稼ぐ、という生活を随分と前から続けていた。冬にスキー場で楽しむためであった。そして甘いマスクを持つ銀次は夏の間も女には不自由しなかった。東京に帰ってくればすぐに女が引っかかる。そして女の部屋に転がり込み、住み着いてしまう。銀次は言ってみればヤドカリみたいな生活を続けていた。

千春とは三年前に知り合った。ここぞとばかりに千春のマンションに転がり込んだ。家賃を払わず、女を自由にでき、さらに冬に向けて貯蓄も出来る。一挙両得というものだ。千春は美人であったし、身体も瑞々しくすばらしかった。銀次を十分に満足させてくれた。珍しく一人の女と三年も続いているのはそのせいだった。当時二十五歳だった銀次も十分千春の欲求にこたえていると思っていた。ところがそうではなかった。

千春は工作中に若い男のボックスに忍び入り、底なしの欲求を満足させていたのだ。もちろん一度そういうことがあれば、それが目的の若者に噂が広がる。だから毎日のように千春目当ての客が来ていた。客はカウンターでそれっぽい合図を千春に送ってからボックスへと消えていき、いつの間にか千春もいなくなる。銀次はそれを偶然に監視カメラで見つけた。

最初銀次は逆上し、千春を詰り汚い言葉で罵った。

「お前は売女だ。色気違いだ。そんなことを平気でするなんて、ジャンキーと変わらない」ことは銀次が千春をみっちり説教し、千春が反省して全てが丸く収まる予定だった。ところがさにあらず。千春が猛然と食ってかかって来たため、銀次は狼狽してしまった。

「銀次だって冬がくれば私を捨てて山に上がってしまうじゃない。何かと言えば雪、雪、雪。あんただってスノージャンキーだわ」

何も返す言葉がなかった。銀次はいつも十二月になると何も言わずにここを出ていくのだ。そして富山県の鶴崎スキー場という場所でロッジの仕事をする。それだけは毎年変わらないし変えるつもりもなかった。そう俺はスノージャンキーなんだと思った。銀次は千春の悪い癖を黙認する代わりに、冬には堂々と千春と仕事を捨てて出てくように

なった。

再びカウンターでつまらないテレビを眺めていると、八番のボックスから見慣れた少年がやってきた。譲と呼ばれるその少年は小柄な美少年だ。あどけない笑顔が、とても薬物とは無関係に見えるが、このりっぱな常連でもあった。

「ねえ、銀次さんて手先が器用だったよね」

「まあな。なんだMDでも壊したのか？」

譲はカウンターの影になって見えなかった手を持ち上げた。その手には小型の金庫のような物がぶら下げられていた。

「なんだそりゃ」

「何だと思う？ やっぱり金庫かな。ひょっとしたら一千万円くらい入ってるかもしれないよね。結構重たいし」

大きさにして二十センチ掛ける二十五センチくらい。高さは十五センチ。少し変わっているのは、全体がステンレス製らしく、銀色に輝いていること。確かに一千万円くらいは入りそうだ。銀次は譲を見た。

「どこでかっぱらったんだ」

「拾ったんだよ」

「嘘つけ」

「本当だよ。この店のすぐ下の、空き瓶置き場のところで」

M I Z Uは八階建ての雑居ビルの五階にあった。その他の階には冴えない居酒屋とか怪しいおもちゃ販売店とかが同居していたが、総じて一日に出る空き瓶の数は多い方で、ビルの裏手に空き瓶置き場が設置されていた。

「なんでそんなところに行ったんだよお前」

譲は澆刺とした笑顔に向けてきた。笑顔と会話がかみ合わない。

「なんだか軀のおっきな親父がさ、一生懸命何かを隠してたんだよ。人が隠す物ってみたいくなるじゃん。監視カメラみたいにさ」

銀次は胃が締め付けられるのを感じた。このガキ知っていやがる。

「何のことでか分らねえけど、やくぎの持ち物とかだとやばいぞ」

「見た感じはとてもやくぎには見えなかったなあ。何て言うのか、そう労働者って言葉がびったり。ねえ、カメラのことは黙ってるから開けてよ」

譲が純真とも取れる目でじっと銀次を見上げていた。

たいしたガキだ。銀次はカウンターの下からピッキングに使う鍵開け工具を引っ張り出す。手提げ金庫の鍵は安っぽい片刃の鍵にダイヤル一つだ。ちよろいもんだ。ダイヤルは型から見て数字三つ合わせる必要があったが、安いものなので、指先の感覚一つで簡単にそろえられた。キーロックを外すには工具を使えばものの五秒もかからない。金庫の鍵は一分も経たずに外された。

「すごいや。どこでそんなこと習ったの？」

「それも取引の内か？」

「どうしようかな」

「ばかやろう」

銀次は笑いながらそう言ったが、内心は笑ってなどいなかった。本来鍵開けは絶対に人前では披露しないのだ。鍵屋でもないのにそんな技術をもっているのが人に知れば、ろくなことにはならないに決まっていた。それに技術を仕込んでくれたのは現役の泥棒だった。その泥棒というのは銀次の実父だった。

銀次の父親は銀次が物心ついた頃から泥棒を生業としていた。その腕は子供心にたいしたものだった。だからといってそれがいいことだとは思っていなかった。銀次は泥棒の子供であることを常に後ろめたく思っていた。そんな銀次の気持などおかまいもせず、父親は銀次にありとあらゆる鍵の開け方を覚え込ませた。そして銀次はあるとき不思議なことに気が付いた。あらゆる鍵には大抵正規以外の開け方が存在した。そしてその開け方というのは知ってしまえば誰でも簡単に覚えられるものが多かった。どしたら鍵というのは一体何のために存在するものなのか？ 誰にでも開けられたら鍵ではないではないか。

そんな銀次に父親はこう答えた。

「いいか、鍵ってのはな財産が一気に流れ出るのを防ぐ弁みたいなもんだ。でもな、そんなもんつけたって、いずれは財産ってのは流れ出ていってしまうし、毎日すこしずつ流出しているもんなんだ。みんなそれに気が付いていない。鍵さえつけておけば、財産はなくなると思ってる。とんでもないことだ。俺たち泥棒はそういった誤った考えを、ほんの一瞬弁を全開にしてやることで気づかせてやっているのさ」

もちろんそんなのは詭弁にすぎないのだが、ならば、正しい答えが何かは銀次には答えられなかった。

そんな父親は銀次が高校生になった歳に、突然姿を消した。どのように消えたのかはわからなかったが、何故消えたのかは理解していた。父親は消えたのではなく、消されたのだった。父親は消される数ヶ月前から地元のある大企業の金庫を狙っていた。そして父親は見事に大金と大量の株券を仕入れた。だが、金庫の中にあった金はまっとうな金ではなかったのだ。企業は警察には届けず、その金が流れるはずだった相手に相談した。その結果父親はある日突然、盗んだ品々と一緒に姿を消した。

銀次はステンレス製の金庫の上蓋を開けてみた。中には札束は入っていなかった。代わりに白い粉がいくつもの小袋に分けられて一杯に詰まっていた。それはあからさまに非合法な代物に見えた。

「すげえ」

讓の顔が輝いた。この薬が何だか知っているのだろうか。

「お前、これが何だか知っているのか？」

銀次の間に讓は得意の笑顔を見せた。どうしても会話の内容とかみ合わない。

「覚醒剤でしょ。売れば何千万円にもなる。俺たち大金持ちだ」

讓は小袋をいくつか掴むと、ライトに照らしてみた。白い粉は小袋の中できらきらと七色に煌めいた。

「おい、そいつを戻せ。命を狙われたって知らねえぞ」

讓は銀次が伸ばした手をさっとかわすと、袋を胸のポケットに入れた。

「ねえ、それ返してよ。俺が見つけたんだからさ」

「返してどうするんだ」

「売ってもうけるに決まってるじゃないか」

銀次はあきれて返す言葉がなかった。譲といわず、ドラッグに溺れている連中みんなに
いえることだ。ドラッグ市場というのがどれだけ生臭い所かを全くしらない。売ってく
れる売人はみんなノリがよくて、若者受けする連中ばかりだ。だがその後ろには強力
な組織が付いている。子供が遊びで手を出せるような世界ではない。かくいう銀次です
ら、いつやぐに命を狙われるか分らないのである。

銀次は何も言わずに金庫を閉め、ダイヤルを適当に回して開けられないようにしてし
まった。

「何すんだよ」

譲が食ってかかった。銀次は無言で金庫を譲の胸に押しつけた。元の場所に戻してこい
ということだ。譲は納得できないだろうが、金庫が空かない以上はそうするしかない。監
視カメラのことなどばらされたって、こっちは痛くも痒くもないのだ。それはあって然
るべき設備なのだから。

譲は暫くへりくつをこねくり回していたが、いい加減諦めてボックスに戻っていった。
恐らくパールかなにかでこじ開けるつもりなのだろう。銀次は

「その、胸ポケットにしまった分でがまんするんだな」

と一人ごちた。まさかその一つかみで大変なことになろうとは思ってもよらなかった。

銀次が譲と金庫をいじっていたころ、元々金庫が隠されていた空き瓶置き場で一人の男
が絶望感に打ちひしがれていた。花田であった。

花田は遂に自分の居場所が割れてしまったのだと思った。隠して置いた金庫がなくな
っていた。ということはつまり、花田の行動を見ていた人間がいるということだ。そいつ
は花田が金庫を手放すのを見て、先ず金庫を回収した。そして隠し場所にこの花田
が戻ってきたところを捕まえる。あまりに単純すぎる展開を、あまり頭の回転が速くな
い花田だって想像ができた。それにしても金庫がなくなったことが一番のショックだっ
た。金庫は花田の生命線になるはずだったのだ。それがなくなった今、花田の存在価値
はなくなり、いつ殺されてしまっても仕方のない人間に成り下がったということだ。

花田は絶望感に打ちひしがれながら、兎に角逃げようと思った。そして路地の入り口か
ら一人の男が近づいてくるのに気が付いた。

見つかった。

遅すぎたのだ。いつまでもこんな場所でめそめそしていたからこんなことになるのだ。
金庫がないと分った瞬間に姿をくらましていれば、生き伸びることはできたかもしれ
ない。

花田は一瞬そう思ったが、そんな甘い連中ではないことを花田が一番よく知っていた。つい先日までその連中の手下だったのだから。

男は一直線に花田に向かってきた。そして花田が逃避の行動を取るより素早く、腰の辺りから短刀を取り出した。男は鞘から短刀を引き抜くと同時に、腰溜めでしっかりと短刀を構え、猛然と花田に向かってきた。逃げる暇は全くなかった。男の握りしめた短刀が花田の脇腹に深々と刺さった。

「俺をコケにしやがるからこういう目にあうんだ」

男の臭い息が花田の顔にかかった。その臭いで花田は男が連中の手下ではないことが分った。そういうばこんな臭いを探偵の事務所に入る前にかいだ覚えがあった。地元のちんぴらだろう。肩がぶつかったとかで因縁をつけられた。余裕がなくなっていた花田は男の顔を驚掴みにすると、そのまま生け垣に投げ飛ばしたのだ。周りには何人かの目撃者がいた。男は恥をかかされたという訳だ。たったそれだけのことで、わざわざ短刀を持って尾行してくるなんて、今時珍しい男もいたものだ。

男が短刀を腹から引き抜くと、花田はがっくりその場に崩れ落ちた。傷口からは多量の血が噴き出していた。痛くはなかった。それよりも安堵感が先に立った。花田は連中に見つかったのではなくて本当に良かったと思った。そしてそのまま気を失った。

ビニール袋を両手に提げた千春は、突然路地から飛び出してきた男にぶつけられて袋の中身をすべて歩道にまき散らしてしまった。

「なにをするのよ」

咄嗟に文句が口をついて出たが、千春にぶつかって転がっている男の胸元に、血が付いているのを見て息が止りそうになった。見れば男は右手に血塗られた短刀を持ち、袖口は多量の血でべっとりと汚れていた。それだけで何が行われたのかは想像に難くなかった。その短刀で人を刺してきたのだろう。男は千春には目もくれずに立ち上がると、短刀を握りしめたままどこかへ逃げていった。

男が走ってきた方向に人が一人倒れていた。

千春は慌てて男に駆け寄った。息こそしていたが、脇腹のあたりがべっとりと血で汚れていた。路上にも相当の血が流れ出していた。このままでは助かりそうにない。すぐに救急車を呼ばなければならない。

「しっかり」

千春が肩を揺ると、男の腹から血が多量に流れ出た。まだ生きてることだけは確かだ。千春は慌てて電話を掛けに店に戻ろうとした。ところが千春の足を男が急に掴んだ。千春は驚いて悲鳴を上げた。てっきり気を失っているものと思っていたのだ。きつと揺すったときに目をさましたのだろう。男が口を動かして何かを訴えようとしているので、千春は顔を近づけた。

男はか細い声でこう言っていた。

「病院はだめだ。絶対にだめだ」

「だめって、このままじゃあ死んでしまうわよ」

「これくらいで死にはしない。頼むどこかで少しやすませてくれ」

そんなことが出来るはずがなかった。千春はさっきこの男を刺した短刀を目にしているのだ。刃渡り二十センチはあった。あんなもので刺されれば、どんな屈強な男だって大

丈夫なはずなどなかった。それに路上に流れ出た血の量を見れば、どれだけ危険な状態であるかは素人だってわかる。今はこの男の言うことを聞いてられる状況ではない。千春は再び立ち上がり、電話に向かおうとした。ところが男の手は力強く、どうして振りほどけなかった。

「死にたいの？」

「病院に入れば、俺は間違いなく殺される。頼む助けてくれ。ほんの少しの間だ匿ってくれるだけでいい」

男はそう言うと、うめき声を上げながら身体を起こした。そしてゆっくりと立ち上がった。千春は男が大した怪我をしていないのかと思ったが、その推測はすぐにうち消された。男の脇腹から多量の血が噴き出したからだ。

男は自分の穴の空いた腹を見ると、手で傷口を押さえた。そして左手の親指を立てて大丈夫だという仕草をしてみせた。どう見たって大丈夫ではない。だが千春はもう電話に向かって駆け出そうとはしなかった。男の顔を見た途端にその気が失せてしまったのだ。男の顔は獅子のようで不細工で恐ろしげだった。そして悲しそうな目をしていて。なにより千春が男の言うことを聞こうと思った理由は、その自分とは似ても似つかない顔のどこかに、他人ではない何かを感じたからだった。そしてその何かは千春に根拠のない確信を抱かせた。もしかしたら男の言うことは本当で大丈夫なのかもしれないと。

千春は男に肩を貸すと、人目を気にしながらビルのエレベーターに乗せた。後でエレベーターを汚した血をぬぐうのは難儀だと思ったのだが、不思議ともう血は吹き出してこなかった。男はエレベーターの壁に血が付くことを気遣いながら、自分は花田という名乗った。

銀次に医薬品を買いに行かせている間に、千春はシャツを脱がせ傷口の様子をみることにした。昔に千春はやくぎの情婦をしていたことがあった。銀次には本当の年を教えていないので、そのことは言っていなかった。きっと本当のことを言ったら失望してしまうだろうから。

そのやくぎは何年たっても鉄砲玉みたいな仕事をさせられていた。仕事に出る度にどこかしら傷を負って帰ってきた。その傷を見るうちに千春は多少の傷の手当てくらいなら自分で出来るようになったのだ。だがこれ程大きな傷を負って帰ってきたことはなかった。恐らく腸も切れているはずだ。やはり病院に連れて行く以外に手はないと千春は思った。

シャツを切り裂き、腹を露わにすると千春は目を見張った。あれだけ大きな刃物で刺されたはずなのに、腹にはそれほど大きな傷がないのだ。僅かに五ミリほどの穴が空いており、その傷すら固まった血で塞がりかけていた。エレベーターで血が出なかった訳は、傷が塞がりかけていたからだったのだ。千春は傷の周りの血をタオルでぬぐった。そしてさらに驚いた事実を発見した。傷の大きさから見て、実はただのかすり傷だったのかもしれないと思い始めていたのだが、小さな傷の上下に幅三ミリ、長さ二センチずつの白い筋が

走っていた。よく見るとそれは新しく蘇生されたばかりの皮膚だった。ここへ運び込むまでにかかった時間は僅かに十分程度だ。その間に傷が治癒することは考えられない。

ところがそんな千春の疑問に答えるように、千春の見ている目の前で残っていた傷痕が少しずつ白い皮に覆われて治癒していった。千春は言葉を発することができなかった。たった今まで瀕死の重傷と言えるほどの傷だったのに、今では完全にくっついてしまっていた。

「どうなっているの？ あなた何者？」

そんな千春の問に花田は答えなかった。傷を治すことに全神経を集中していたため、完治と共に体力を使い果たしてしまったのだ。花田は深い眠りへと落ちていった。千春の前で眠る花田は、無防備で無邪気な子供のようにであった。

千春は花田の完全にくっついていいる傷跡を指でなぞった。千春は大きな満足感に似た感情を抱いていた。この気持は何なのだろう。決して恋とか愛とかいうような、安っぽいものではない。銀次に覚えている感情とも違う。随分と長いこと生きてきたが、こんな気持になるのは初めてだった。強いていうならば安心という言葉が一番近いだろう。千春は不思議なそれでいて心地よい感情に戸惑いながら、花田の寝顔を眺め続けていた。

千春のつかの間の安息をうち破ったのは銀次だった。

銀次は薬品類を抱えて一度帰ってきたのだが、どういう訳だか傷が治ってしまったという千春の説明を受け、小馬鹿にされたと憤慨しながら仕事に戻っていた。その銀次が事務所に駆け込んできた。

「譲のやつら、やっちまいやがった。どうすればいい」

銀次は完全にうろたえていた。

「やったって、何のこと。ちゃんと説明して」

銀次は何から話していいのかわからないらしく、手をぐるぐると回した。そして言った。

「二人死んでる。あと二人はまともだ。いや、まともじゃない。いや、まともだと思う」

「何言っているかわからないわ。死んだって誰が。ちゃんと確かめたの？」

「だって、冷たい」

千春は譲たちのボックスへ駆け込んだ。床に男女一人ずつ倒れていて、男が二人の前に膝をついて訳のわからないことを喚き続けていた。まともだけどまともじゃない人物とは彼のことだろう。ソファでは現実を把握しきれていない少女が自分を失って茫然としていた。何が起ったのか、どうしてこうなったのか。全く理解していないし、しようもしない。すべては自分たちの責任なのに、その責任に気づこうもしない。千春は少女を一瞬きつい目に見たが、すぐに床の二人に集中した。

脈はあるのかしら。

千春はそっと首筋に手を当ててみた。そして驚きで思わず手を引いた。冷たかった。冷たすぎるくらいに冷たかった。まるで氷に触ったみたいだ。銀次をみやると、銀次が頷いた。銀次もまた彼らに触ってみたのだ。それにしたって冷たすぎる。

「ねえ、何をやったの？」

千春の問に少年はうつろな眼差しを向けてくるだけだった。代わりに銀次が答えた。

「多分スノーだ。あれに入っていた」

銀次の指さす先には、カラオケボックスには不釣り合いな銀色の金庫が無造作に置かれていた。千春もスノーについての噂は聞いたことがあった。そしてその致死率の高さも。兎に角救急車を呼ぶしかない。だがその前にやらねばならないことがあった。店を立ち

入り検査されても問題がないよう、やばいものを処分しなければならない。つまりこれから一月分の収入をトイレに流さなければならないのだ。

「あなたたちは帰って。いられると面倒なことになるから。私は彼らが二人で来たって警察に説明するから」

少年たちを帰すと、千春は銀次に店にある薬をすべて処分させた。そして各ボックスで他にもまずいことが行われていないかを確認した。その後ようやく救急に電話をかけた。救急隊が駆けつけた時、銀色の金庫は事務所の机の上に、いかにも店の売上げが入っていますとう感じに置かれていた。もちろん花田のシャツや血の付いたタオルは銀次が処分していた。

救急隊が出ていくのと入れ替わりで警官が二人やってきた。もちろん警官には打ち合わせてあった通りの説明をした。二人は午後やってきて、ずっとボックスに籠もっていた。時間が過ぎても出てこないで様子を見に行ったら、冷たくなっていたと。警官も説明を疑う様子はなかった。完璧なできだと思った。だが、警官はなかなか帰らなかった。どこかに連絡を取っている様子だった。

暫くして一人の刑事がやってきた。刑事は佐久間と名乗った。目が大きく額の広い麻薬課の刑事だ。まずい相手だ。ただの警官と違って、麻薬課の連中は目ざとい。ささいなことからカラオケボックスの裏稼業を嗅ぎ出すかもしれない。

佐久間はボックスに暫く入ってから出て来るなり千春に質問をした。銀次の方が近くにいたのだが、銀次には全く目もくれなかった。

「少年との面識は？」

佐久間は視線を千春から全くそらさずに訊いた。

「時々歌いに来ていたみたいですけど」

「どんな歌を歌っていましたか」

「さあ」

佐久間の目が細くなった。

「でもときどきボックスに入るくらいあるでしょう」

「いちいちお客様の歌を確認したりはしませんから」

佐久間はレーザーディスクを掲げた。

「今時、レーザーディスクですか。随分古いみたいですけど。数も少ないみたいだし、客がどんな歌を歌っているのか、聞けばすぐに分かるんじゃないですか？」

佐久間の目が、店主なのに客の好みも把握していないのかと問いかけていた。間違いなく疑られていた。確かに多少目の利く人間だったら、このカラオケボックスがカラオケで成り立っていないことを、すぐにでも見抜いてしまうだろう。佐久間は相変わらず視線を外さない。千春の腋に汗がにじみ出た。何か答えなければならない。それも一発で疑いを晴らすような画期的な回答を。だが佐久間の射るような視線が千春を不安にさせ、思考の集中を妨げていた。

佐久間がぐっと身を乗り出してきた。

千春はもうだめだと思った。この刑事は感づいている。

佐久間はコートポケットからビニール袋を一つ取り出した。

「ソファの隙間からこんな物が出てきましたね」

ビニール袋の中には、使用した形跡のある避妊具が入れられていた。客の誰かがふざけて隙間に詰めていったのだろう。

「そのうち風俗営業に詳しい誰かを寄こしますよ」

佐久間はそう言うと言官たちの方へと戻っていった。

千春はその場に倒れそうな心持ちだった。あの佐久間という刑事が見つけたのが、避妊具でよかった。もしあれがドラッグの入っていた小袋だったりしたら、一体どうなっていただろう。千春はどこにでもいいから座って気持ちを落ち着かせたかった。刑事たちは何か打ち合わせをしている。この場になくても差し支えは無いだろう。千春は壁に手を付いて身体を支えながら事務所に向かった。扉までのほんの数メートルがひどく遠く感じた。ドアまでたどり着き、冷たいノブの感触に安堵を感じた。兎に角今はソファに身体を深く埋めて、気持ちを落ち着かせよう。確かにボックスがラブホテル化していることはばれてしまったが、ドラッグハウスとなっていることはばれていない。何とかうまくやり通した。その安堵感を楽な姿勢で甘受したい。

ところがそんな千春の些細な希望をうち砕く現実がドアの向こうで待っていた。ドアを開けた千春は啞然としてしまった。事務所には誰もおらず、机の上にあるはずの金庫が二つともなくなっていた。一つは譲が持ち込んだ銀色の金庫で、もう一つは店の売上金をしまうための緑色の金庫だ。花田が寝ていたソファは皺が残っているだけだった。盗まれた。

千春は銀次に相談しようと受付に向かった。だが狭い受付ロビーには鬱陶しい警官たちがたむろしているだけで、銀次の姿はなかった。各ボックスにも姿はない。トラブルに巻き込まれるのがいやで、隙を見て逃げ出したにちがいがなかった。千春はもう立っていることすら出来ず、ボックスの入り口でへたり込んでしまった。銀次もお金も全て消えてトラブルだけが残った。千春は途方に暮れてしまった。

銀次は金庫を持って公園まで走ると、ベンチに座ってようやく一息ついた。誰にも気づかれた雰囲気はなかった。銀次は金庫に目を落とすと、どうしてこんなことをしてしまったのだろうという思いに駆られた。

警察が来たとき、トラブルに巻き込まれるのは嫌だと思い、適当に姿をくらましていよという考えが浮かんだ。実際にそうするつもりであったが、金庫をくすねるつもりはなかった。半日ほど暇を潰したら帰るつもりだったのだから。ところが事務所に入ろうとしたとき、深い眠りについていてと思っていた花田が忍ぶように中から出てきた。そして手には銀色の金庫を下げていた。花田は一瞬銀次を見たが、それきり気にも留めずに裏口へと消えていった。その姿を見た後、机の上に残された売上金を入れる金庫が目にと留まった。考える間もなく、その金庫を掴んでいた。

銀次は辺りに人気の無いことを確認すると、金庫を開けにかかった。僅か数秒で開いた。中から売上金数万円をつかみ取ると、金庫を公園の隅の目に付きにくい所に捨てた。捨てながら、これでもうM I Z Uには戻れないなど思った。

銀次は携帯電話を取り出すと、毎年仕事に入っている鶴崎スキー場のロッジ「スノーフレーク」に電話をかけた。すぐに主人である黒岩が出た。

「なんだ銀次か。どうした」

「今年は早めに行こうかと思っているんだけど、どうかな。悩んでいるんだ」

「今年は雪の付きもいい。いつもより早くオープンできるだろう。もしこれそうなら来てもいいぞ」

銀次はまた「悩んでいる」と言った。気持は決まっていたし、それしか道もないのだが、「来て欲しい」と言って欲しかったのだ。だが黒岩は単に、

「いつでもいいぞ」

とだけ言って電話を切った。

銀次は舌を鳴らした。雪が多いなら早く来てくれと言えばいいのに、黒岩は決してそんなことは言わない。他人にお願いをするようなタイプではないのだ。いつだってそうだ。もしここで銀次が行かないと言っても、そうかと言って一人で冬を乗り切る人間だ。銀次はもう一度舌を鳴らした。

一日どこかで暇を潰して、それから山に向かおう。そんなことを考えながら、銀次は公園を出た。そして歓楽街にでも行こうかと足を向けかけてその足を止めた。そっちの方向に人相の悪い連中が二人たむろしていたからだ。反対を向くとどういう訳か、そっちにもいて銀次をにやつきながら見ていた。銀次はもともと臆病な人間だった。トラブルは好まない。ああいう連中は避けて通るに限る。公園の反対から出ようときびすを返し、その場に凍り付いた。いつの間に歩み寄ったのか、見たことのあるやくざが銀次の目の前に立っていた。藤原というやくざで、この辺りを仕切っている。銀次の腋が汗でにじんだ。

「よう、どこへいくんだ」

銀次が足を動かすより早くやくざが訊いた。無視すれば出来たのかも知れない。でも銀次には無視はできなかった。

「ちょっと、タバコでも買いに」

やくざがポケットからタバコをすっと差し出した。銀次が躊躇していると、取れといわんばかりに動かした。銀次は仕方なく頭を下げた。やくざは自分も一本銜えると銀次を無視して自分だけ火を点けた。

「なあ、先月のM I Z Uの売り上げってどれくらいだったんだ？」

銀次の顔から血の気が引いた。さっき金庫を捨てる場所を見ていたに違いない。銀次が言いよどんでいると、やくざが顔を寄せてきた。タバコの煙が顔にかかった。

「まあ、見た感じ数万って所だろう。賃貸料を払ったら終わりだ。でその売り上げの中で薬で稼いだ分はどれくらい入っている」

「何のことだか」

急に両脇を誰かに掴まれた。さっきの柄の悪い連中だった。このやくざの手下だったのだ。

「もう一度訊くぞ。葉の売り上げはいくらだ」

「知らない」

痛みが脇腹から全身に広がった。脇腹を殴られたらしい。暫く息が継げなかった。

「お前、今の状況を分かってねえだろう。必要なら拳以外のものだって使うぜ」

右にいた男がぱちんとナイフの刃を広げた。ナイフは水銀灯の光りで怪しく光っていた。

「本当に知らない。多分半分くらいだと思う」

銀次の声は震えていた。

やくざは銀次の上着のポケットをまさぐり、さっき盗み出した売上金を取り出した。

「ちえっ。せこいな。これじゃあ俺が絞られちまう」

やくざはタバコの煙を銀次に浴びせかけた。同時に子分が拳の嵐を見舞わせた。

銀次は冷たい地面に崩れ落ちた。

銀次はどうすれば今の状況を抜け出せるのか必死で考えた。しかし考えようとすればするほど、程頭の中が白くなり、何も考えられなくなった。

藤原は子分に銀次を引き立たせさせた。

「来月までに二百万用意しておけ。そうしねえと」

両脇の手下が心得たとばかりにまた銀次の腹に拳の嵐をお見舞いした。銀次は再び土を舐めることになった。恐ろしくてもう何も考えられなかった。

やくざは銀次の前にしゃがむと

「どうなるかはわかってるよな。もしお前が逃げたら、あの女が身体で払うことになる。それもわかるよな」

そうやってタバコの火を銀次の手に押しつけた。じゅっと音がして、肉の焼ける臭いがした。

「来月だぞ」

やくざたちはそう言い残して去っていった。

銀次はいつまでも公園の地べたにへばりついていて、怖くて涙が止らなかった。二百万円なんてお金はどうあがいたって出来る物ではない。あの店の売り上げはいつだって賃貸料を払っておしまいなのだ。それに売り上げを奪って逃げてきた今となっては、もう店に帰ることだってできやしない。

十分も突っ伏したまま泣くと、銀次はおもむろに立ち上がった。逃げるしかない。今すぐ鶴崎に逃げるしか手はない。店や千春がどうなったって知ったことではない。もともと店で葉を売り始めたのは千春なのだから、千春が精算すべき問題だ。その問題でどうして俺が恐ろしい目に遭う必要がある。それこそおかしな話ではないか。恐ろしい目に遭うのは千春でなくてはならないはずだ。

銀次はこの問題は千春に片づけさせようと納得すると、すぐにでも鶴崎に発とうと心を決めた。

五 二つの死

佐久間は検死の間中、どうやって先日の汚名を晴らすかをずっと考えていた。

あのMIZUという店は非常に胡散臭かった。恐らく裏で少年たちに薬を売ったりして
るだろう。だがあの店がスノーの販売ルートにかんでいるようには見えなかった。大抵
の例に漏れず、販売ルートは死んだ本人だけが知っているのだ。あんな無防備な店にス
ノーが流れてくるとは思えなかった。それよりもまたしても死人が出てしまった以上、
なんととしてでも、死体の盗難を防がなければならない。販売ルートを見つけれない上
に、また死体を盗まれたら警察への信用は無くなるも同然だ。

前回の敗因はあまりにも相手を甘く見ていたことにある。犯人は複数だ。あの髯の男はお
とりで、警察の目がそっちに向いた隙に仲間がトラックかなにかで運び出すのであろう。
だが今回は前のようにはいかない。病院には二十人の警官を配置してあるし、佐久間の
車もポンコツではなくて、警視が使うものを借りてある。白バイ隊も待機させてある。間
違ひなくおとりの男も、仲間も一網打尽できるはずだ。佐久間はもういちど初めから作
戦を頭の中に描いていった。

「刑事さんちょっと」

見ると医師が手術室の扉を半分だけ開けて、少し戸惑った顔で立っていた。

「ちょっと来てください」

佐久間が近づくと、医師はまるで困ったという顔をした。

「瞳孔が開いていないんです」

「開いていないって？」

「人間の生体反応の一つとして、瞳孔検査をすることくらい刑事さんも知っていらっしや
いますよね。少女の反応は全くなく、瞳孔は開ききったままなのですが、少年の方はど
ういう訳だか瞳孔が閉じるんです。それもものすごい遅さで」

「つまり君は、少年はまだ生きていっているのかね」

「いいえ。生きているはずがありません。死体の温度はマイナス5度ですよ。その温度
で生きていられる人間はいませんよ」

「じゃあ単に細胞だけが生きていて、僅かに反応するんじゃないのか？ そういうことは
あるって聞いたことがある」

医師は意図が伝わらないもどかしさを、手を振って表現した。

「たしかにそういうことはありますあが、ありえません。言ったでしょう。体温はマイ
ナス5度です。完全に凍っていますよ。細胞が生きていたって、凍っていたら動けない。
つまり動くこと自体がおかしいんですよ」

医師は佐久間を招き入れると讓の身体をハンマーのようなもので叩いて見せた。霜がつ
いた身体から固い音が返ってきた。それから医師は目を見せた。霜で真っ白になった瞳
を指でぬぐうと、ライトを当てた。白く濁ったレンズの奥に開ききった瞳孔が見えた。

「この瞳孔が約五分かけて閉じます。それに僅かですが脳波らしきパルスも拾ってます。この少年はもしかしたら蘇生するかもしれません」

蘇生する。もしそれが本当ならば画期的だ。薬の販売ルート解明に大きな役割を果たしてくれるはずだ。

「でもどうやって」

「さあ。裏にある井戸の水にでも浸けてみましょうか。あの井戸の水を飲んで病気が治ったって、退院してしまった患者さんがいましたから」

医者は自嘲気味に笑った。担当の患者だったのかもしれない。

「まあ、あの井戸の水が旨いのは認めますがね。病気が水で治るはずがない」

「先生。必要なら井戸水でも何でも飲ませて、是非とも生き返らせてください」

佐久間は医師の肩を強く叩くと、何が何でも盗難だけは防がねばならないと心に誓った。

夜になっても譲の蘇生作業は続いていた。様々な手を尽くしてはいたが、どうしても体温が上がらなかった。内側から何かの力によって冷やされているとしか思えない、医師たちはそう口にしていた。

佐久間はいらいらしながら待っていたが、ついに待ちくたびれて外の空気を吸いに病院を出た。冬の夜空に星々が美しかった。佐久間は大気が透き通る冬が好きだったが、寒いのは苦手だった。少しばかり裏庭を散歩した。庭の外れはちょっとした雑木林になっていた。佐久間はふと裏に井戸があるという医師の話の思い出し、井戸を見に行ってみる気になった。病気を治す水が出るなら、事件も解決するかもしれない。もちろんそんなことを本気で考えたりはしなかったが、盗難に絡む要素が無いかどうかを見ておきたかった。

雑木林から一本の小道が井戸まで続いていた。一応関係者以外は立ち入り禁止の策が設けてあった。佐久間は策を乗り越えると、暗がりの小道を歩いた。砂利を踏む音が妙に耳障りだった。

すぐに林の真ん中に掘られた井戸が見つかった。直径は一メートル半程度で、上にコンクリート製の蓋が乗せられていた。誤って人が落ちたりしないための配慮だろう。蓋からは一本のパイプが伸び、蓋の中と井戸の脇にあるポンプとを結んでいた。ポンプは長らく使用されていないのか、すっかりさび付いていた。

佐久間は井戸の周りを一回りしてみた。蓋の厚さはおおよそ五センチ。半月型のものを二つ合わせて穴を塞いである。一つだけでも四、五十キロはありそうだ。仮にここに何かを隠そうと考えたとしても、かなりの手間である。この井戸が事件に絡む可能性は低かった。佐久間は井戸に寄りかかると煙草に火を点けた。そして二口ほど吸うと、急に死体の様子が気になりだし、煙草を蓋でもみ消して井戸から離れた。

策の手前まで来たとき、後から何かの音が聞こえた。砂利の音に隠れていたが、明かに砂利の音ではなかった。佐久間は立ち止まり耳をそば立てた。

するとまた音がした。何か重たい物同士がこすれる音。そしてその音の発生源はすぐに分った。井戸だ。

佐久間は砂利の音を気遣いながら、そっと井戸に近づいた。井戸の蓋が少しずつ横に動いていた。何者かが中から蓋をずらしているとしたか考えられなかった。

佐久間はホルスターから銃の抜くと木々の間に姿を隠し、様子を窺うことにした。

暫くして大きく横にずらされた蓋は、重たい音をたてて地面に落ちた。そして井戸の縁に人の手がかげられた。誰かが井戸から這い出ようとしていた。続いて暗がり何者かが敏捷な動きで飛び出した。同時に佐久間も木の影から飛び出し、何者かに銃を向けた。

「動くな。両手を高く上げてゆっくりこちらを向け」

男は佐久間に気づき振り向いた。その顔を見て佐久間は驚くと同時に、喜びで打ち震えた。なんと振り向いた顔は正しくあの髯面だった。

「よし。手を上げろ。はやく手だ。しかしお前の方からわざわざやって来てくれるとはな」
男が手を挙げた。

「名前は。貴様何者だ」

男は不敵な笑みを浮かべた。

「そうだな。名前くらいは教えてやろう。美濃部善三という」

「美濃部善三？ 大層な名前だな。よし今から手錠をかける。ゆっくりと後ろを向け。一体井戸の中で何をしていた。水でも飲んでいたのか」

「この井戸水は意外に旨いからな」

善三はゆっくりと後ろを向いた。と思いきや急に横に走り出した。

「待て。撃つぞ」

善三は止らなかった。全速力で駆けてゆく。何があっても逃がす訳にはいかない。

善三は通用口から院内に入り込み、リネン室を抜け、廊下を駆け抜け、正面ロビーから駆け出た。佐久間も追った。追いながら無線を入れる。

「警戒しろ。奴が現れた」

玄関を抜けるとすぐに聞き覚えのある排気音が高々とこだました。ドカッティ996だ。だが佐久間だって負けてはいない。今日の車はトヨタのセルシオ四千CC。アクセルひと踏みですぐに追いつくはずだ。

エンジンをかけアクセルを床まで踏み込む。一瞬後輪が空回りして耳障りな音を発したが、すぐに胃が押しつけられるような急激な加速で走り出した。

サイレンを鳴らして路上に出ると、再びアクセルを踏み込んだ。すさまじい加速でみるみるドカッティに追いついた。ドカッティが交差点を曲がる。曲芸師のような素早さだ。佐久間もハンドルを切る。曲がる。この間のように流れない。多少遅れはするものの、この車なら追える。佐久間の指示で白バイ隊も姿を現した。

「さあどうする。髯野郎」

あちらこちらでサイレンの音が響き渡っていた。各所に配置したパトカーが鳴らしているのだ。そうすることで、犯人の逃げ場を限定していく。

ドカッティが左折する。

白バイが曲がる。

佐久間も曲がる。

差はさほど広がらない。

ドカッティが更に曲がる。

白バイと佐久間も負けずに曲がる。

差は広がらない。善三が後ろを振り返った。前回と違って差がつかないので、焦っているようだった。善三は白バイが徐々に間隔を詰め始めたのに気づき、アクセルを全開にした。もうかなりのスピードが出ているにも拘わらず、ドカッティはフロントタイヤを軽々と持ち上げながら、ロケットのような加速で佐久間たちから遠離っていった。

次の瞬間だった。路地から何も知らない乗用車が頭をだした。

善三がほんの一瞬後ろを確認したときだった。一瞬の遅れが生死を分けた。善三は急ブレーキをかけたがもうすでに車は目の前だった。避けられない。ドカッティは頭から乗用車の側面に突っ込んでいった。大きな破壊音が響き渡り、善三は車のルーフに肩を叩きつけられながら、前方に放り出された。僅かに遅れて白バイの一台が車の鼻面をかすめていった。続くもう一台は避けきれずに、転倒した。佐久間もめいっぱいブレーキを踏んだ。タイヤがきしみ、視界が流れた。血流が逆流しているような感覚に襲われた。セルシオのタイヤの摩擦音の中でも善三の身体が路上に叩きつけられる音が聞き取れた。車の鼻先をかすめるようにして、衝突を回避したが、慌ててハンドルを切ったためセルシオは歩道に乗り上げビルの前の公園を突っ切り、エントランスのガラスの直前でようやく停止した。

佐久間は慌てて車から走り出た。善三は十数メートル後方に倒れているはずだ。あれだけひどく叩きつけられていれば、即死かもしれない。ところが驚いたことに、善三は路上にいなかった。佐久間は一瞬何が起ったのか理解できなかった。善三は壊れたドカッティを捨て走って逃走していた。

そんな馬鹿な。あり得ない。

だが善三は全力で走り、別のエントランスから目の前の高層ビルに駆け込んだ。

佐久間は善三を追って中に入った。善三はエレベーターに乗ったようだ。停止の階数を見る。善三を乗せたらしいエレベーターは止らずにどンドンと上へと昇っていった。佐久間は入り口を後からきた警官に見晴らせ、自分もエレベーターに乗った。

「停止したら無線で知らせろ」

善三のエレベーターはもう最上階の二十五階付近に達していた。佐久間は迷わず最上階のボタンを押した。

エレベーターが上昇する数十秒がひどく長く感じた。佐久間は苛ついて何度も善三のエレベーターの位置を無線で聞いた。エレベーターは最上階で止ったままだった。

最上階に着くとすぐに銃を抜き、用心しながら外へ出た。廊下に人影は無かった。どこかでドアの閉まる音がした。佐久間はそちらに向かった。階段の扉から下に降りるつもりなのだろう。途中の階に逃げ込まれると厄介だ。佐久間は扉を開くと耳を澄ました。ところが音は下ではなく、上から聞こえた。善三は屋上に出たらしかった。佐久間も屋上に向かった。

佐久間は善三を一目見た瞬間から、決してこの男は馬鹿ではないと確信していた。衝動で動くタイプではない。そういう男が自ら袋小路に逃げ込むというのは、よほど追いつめられていて動揺している時と、罠を仕掛けてある時だ。でも事故を起こせば大抵の人間は動揺するのではないのか？ それでも用心に越したことはない。今最前線に立っているのはこの自分なのだ。自分を守れるのは用心に次ぐ用心でしかない。

佐久間は一瞬扉を開け、外を確かめるとすぐに閉めた。そして次にゆっくりと、いつでも閉められるように注意しながら屋上に続く扉を開いていった。見える範囲には善三はいなかった。用心しながら外に出た。そして周囲に注意を払っていると、左手の奥に、夜景を背にして善三が立っていた。

「動くな」

佐久間はさっと銃を向けた。

善三は両手をポケットに突っ込んだまま、ぴくりとも動かなかった。ひょっとしたら仲間が隠れているのかもしれない。佐久間は無線で応援を呼びながら、善三に近づいていった。

「もう逃げられないぞ。観念しろ」

「俺はどこまでだって逃げてやるさ」

「どうやって逃げるつもりだ。空でも飛ぶのか」

「それも悪くない」

善三はそう言うと、身軽な動きで手摺りを飛び越えて、屋上の縁に立った。冷たい風が吹き、善三のコートをはためかせた。

「何をやるつもりだ。よせ」

じょうだんじゃない。せっかく追いつめたのだ。自殺なんかされてたまるものか。

善三は身が竦むような高さの縁に、悠然と立っていた。その余裕が佐久間を不安にさせた。

「刑事さん。あんた名前は？」

「佐久間だ。なぜ名前を聞く」

「佐久間さん。もうすぐ吉報が届くよ」

善三はそういうと嫌みな笑みを浮かべた。そして夜空に向かって大きく息を吐き出した。息が白く染まり、口から雪でもはき出しているかのようなようだった。

「吉報だと」

言うなり無線が入った。

「大変です。死体が」

「なんだ」

「死体が消えました」

「なんだと」

善三が高笑いをした。明かにこうなることを予測していた笑いだ。

「美濃部。お前知っていたな。あれだけの警戒の中、どうやって盗んだ」

「簡単だ。本人に歩いて出て行かせたんだ」

「寝ぼけたことを言うな」

佐久間は怒りがふつつつとわき上がるのを感じた。この男は完全に自分たちを舐めている。

「探せ。そうだ井戸だ。井戸を探せ」

「井戸も探しました。何もありません」

「もっとよく探せ」

佐久間は無線に怒鳴りつけると、再び銃を構え直した。

「死体は無くなったかもしれない。でもお前だけは絶対に逃がさない」

善三は両手を軽く広げて見せた。おどけているのだ。ふざけた男だ。佐久間はじりじりと善三ににじり寄り寄っていった。ところが善三は指を一本立てて振ってみせると

「佐久間さん。あんたには俺はつかまえないよ」

と言い、何のためらいも見せずに夜に身を翻した。

「よせ」

佐久間は慌てて手摺りに駆け寄った。真下でどすんという大きな音がした。善三は見事にセルシオの真上に落下していた。

「くそっ。何てことだ。ここまできて」

佐久間は自分の愚かさにどうしようもなく腹が立った。どうして善三を止めることができなかったのか。佐久間は何度も自分を詰った。善三は死に、死体はまたしても盗まれてしまった。これで捜査はまた振り出した。

疲れ切った気持で佐久間は一階ロビーに降りてきた。するとさっきから無線で訳の分からないことを喚き続けていた警官が佐久間に駆け寄り寄ってきた。

「頼む少し放って置いてくれ」

佐久間の言葉を無視して警官が喚いた。声が裏返っていた。

「男が逃げました」

「逃げた。ああ、俺の目の前から永久に逃げちまった。だったらどうした」

佐久間も大声で喚き返した。何て気分を害する警官だろう。

ところが警官が指さしている方向を見て、佐久間は呆然とした。その方向には潰れたセルシオがあったのだが、その屋根には何も乗っていなかった。

「誰が死体を動かした」

「誰も触っていません。男が勝手に起きあがって、逃げていきました」

「そんな馬鹿なことが」

佐久間はそこまで声に出したが、後が続かなかった。車に激突した後だって平然と走っていたじゃないか。さっき屋上で逃げると言ったのは本気だったのだ。でもどうやって。普通の人間なら決してそんなことはあり得ないのだ。

佐久間は警官を押しつけてセルシオに近づいた。セルシオの屋根は強烈な力で押し潰されていた。四方のガラスは全て砕けていた。どんな魔法を使ったってここにあの男が落ちただけは間違いがない。なのに男はまた逃げた。あいつは不死身なのか。それともとてつもないペテン師なのか。

佐久間は足下に何か光る物が落ちているのに気が付いた。それはロレックスの時計だった。買えば数十万円するだろうその時計は、落下の衝撃でバンドが引きちぎれ、全体的に歪んでしまっていた。佐久間はそれをそっとポケットに落とした。

銀次はスキーの道具の全てを車に積み込むと、千春のマンションを後にした。後は関越自動車道に乗るだけだ。鶴崎までは八時間近くかかるだろうが、こんなところでやくぎに小突き回されるよりはましだった。銀次はまっすぐ練馬を目指そうとしたが、どこかやましい気持があり、素直に練馬に車を向けることができなかった。結局M I Z Uのあるビルの前まで来てしまった。銀次は車からビルを見上げた。千春はあの中でなかなか帰ってこない銀次のことで文句をいいながら、適当に客を捌いていることだろう。

「もう出たほうがいい」

わざわざそう口に出して言うてみたものの、なかなか車を発進させる気にならなかった。なんだか急に千春のことが哀れに思えて仕方なかった。このままここを去れば、あのやくぎは間違いなく千春を脅すことだろう。そんな時に俺がいなかったら、千春は一体どうするつもりなのだろう。何の抵抗もできないまま、風俗店に売られてしまうかもしれない。それもこれも全て俺のせいかもしれない。そう思うと、銀次は射ても盾もいらなくなり、今すぐに千春に全てをうち明けに行こうと車を降りかけた。

ところがドアを少し開いたところでビルの入り口から見覚えのあるやくぎが出てくるのが見えた。銀次は慌てて身を隠した。なんてことだ。もう来ていやがった。最早とても千春の許へ出向く勇氣はなかった。少し車内で隠れてから、隙を見てこの場から逃げだそう。そして今度こそ練馬インターに向かおう。千春には途中のパーキングかどこから電話をすればいいのだ。

銀次は歩道から顔を見られないよう下を向いたまま大人しくしていた。すると突然助手席のドアが開いた。銀次は心臓が止りそうなほど驚いた。そして次の瞬間には心臓が凍り付きそうなほど怯えていた。あのやくぎたちは自分がここに隠れていることなど、とっくにお見通しだったのだ。そして遠くからいつになったら顔を出すのか、冗談でもいいながら見ていたに違いなかった。銀次は自分の愚かさを呪った。

空いたドアから人が乗り込んでくる気配を感じた。銀次が怖くてそちらに首を向けられずにいると

「少し走ろうか」

という声が出た。銀次はその声があのかやくぎの声では無いことに気がついた。そっと声の主をみると、豊かな顎髭を蓄えた壮年の紳士が助手席に座っていた。見たことのない顔だった。

「追われているんだろう。早く出した方がいい。あのかやくぎはまだ近くをうろついていたぞ」

銀次はそう言われて、兎にも角にもこの場を離れることにした。

暫く適当に道を走ると、紳士が進路の指示をし始めた。指示に従って暫く走ると、車はいつの間にか倉庫街の一角にたどり着いた。

「よし、その辺でいい」

男は上等な背広のポケットに手を入れると、何かを取り出した。それは何かと尋ねる必要はなかった。男はすぐに取り出した折り畳みナイフの刃を広げた。

「薬はどこだ」

銀次は血の気がひくのを感じた。この紳士に見えた男もまた、やくぎの一味だったのだ。

見慣れない顔に見事に騙された。銀次は車を捨てて逃げようと思ったが、すぐに大きな手で首を鷲づかみにされてしまい、身動きが出来なくなってしまった。冷たいナイフの刃が首筋にあてがわれた。カーステレオが状況に不似合いなポップミュージックを流していた。本来なら女の子と聞くような曲だ。

「何のことだか」

男が首を絞め付けてきた。ものすごい力だった。必死で抵抗したが、鋼鉄で出来たような固く太い腕をどうすることも出来なかった。

「お前の店にあったことは分かっている。あの金庫は私の物だ。返してもらいたい。どこへやった」

金庫と確かに言った。譲が持ち込んだあれに違いない。だからろくなことにならないと言ったのに。あの金庫は花田が持って行ってしまった。今となってはどうなったかも分からない。銀次はどうして自分ばかりこんな目に遭うのか、運命を呪いたい気分だった。さっきはやくぎに殴られ、今度は見知らぬ怪力男にナイフを突きつけられている。

「知らない」

首を絞める力が強まり、銀次は咳き込んだ。

「次に知らないという言葉を使ったら、左の耳を削いでやる。脅しじゃないぞ。俺の薬はどこだ」

銀次はまた知らないと言いかけて慌てて口を噤んだ。そして言葉を慎重に選びながら答えた。

「多分、警察が押収したんだと思う」

「それは違うな。もし押収していたなら、あんなに必死には追ってこないだろう。警察はまだ何も掴んじやいないのさ」

ナイフがぐっと押しつけられた。何かを言わなければならない。

「店に見知らぬ男が一人いた。そいつが持っていったんだと思う」

「どんな男だ」

「身体が大きくて、獅子のような顔をしたやつだ」

「どこへ行った」

「警察が来たどさくさに紛れて逃げた。どこへいったかは知らない」

「そうか」

男はそう言うと暫く黙り込んだ。表情から何を考えているのかはさっぱりわからなかった。男は唐突に言った。

「こんど知らないと言ったら耳を削ぐといっただろう」

男はナイフを耳の上にあてがった。冗談じゃない。削がれてたまるか。銀次は満身の力で男を押しつけた。

男は一瞬バランスを崩して、助手席のドアに倒れ込んだが、すぐに体勢を立て直し、ナイフを銀次に突きつけてきた。銀次は訳のわからないまま、必死で抵抗した。何度かナイフの刃が腕をかすめた。そして腕をつかんで力まかせに押し返した。すると突然動きが何もなくなった。

ナイフが男の首に深々と刺さっていた。

銀次は目の前が真っ白になった。

殺人だ。これは殺人だ。俺は人を殺してしまった。

どうしていいのかわからなかった。

男がかすれたような息を漏らしながら、シートに崩れた。

銀次は無意識に助手席のドアを開けると、男を外に放り出した。そしてドアを閉めると、周りに人影が無いことを確かめてから車を発進させた。今度は練馬までどこにも寄り道はしなかった。

六 奇妙な売人

工藤は目を覚ますと時計を見た。すでに午後の四時だった。陽はすっかり西に傾いていた。このところまともに太陽を見ていない。

隣に寝ていた筈の女はもうとっくの昔に出て行っていた。行きつけの高級スナックの売れっ娘だ。今夜はどこぞの社長と同伴出勤のはずだ。

台所に行くと、女が一応用意していった軽食が置いてあったが、食べる気がしない。どうせその辺のコンビニで買った惣菜に決まっている。そんなもんばかり食べていると、身体によくない。工藤は一口も箸を付けずに軽食をゴミ箱に捨てた。

工藤が目を覚ましたところを見計らって電話が鳴る。舎弟の藤原からだ。藤原はこういう昔気質のところだけはしっかりしてる。

「おう、藤原か。今起きた」

「玄関前に車を回してあります」

「十五分で降りる」

黒づくめの姿で工藤が姿を現した時、藤原はマンションの玄関前で門番のように直立不動で待っていた。そして工藤が、悪趣味な白地に金メッキのパーツをふんだんに使用したメルセデスに乗り込むやいなや、今日の報告をはじめた。藤原は工藤がきっちりした数字を聞かないと納得しないことを、重々承知していた。

後部座席には今日の集金に使うためのビデオが用意されていた。このビデオはもちろん債務者を追い込むための切り札であった。ビデオにはサラ金から金を借りた、町工場の経営者の娘が映っていた。しかし工藤にしてみれば、こんな手は生易しすぎた。本来ならもっと追い込みたいところなのだが、サラ金の社長からあまり追い込まないで欲しいと言われていた。追い込みすぎは損が出る。

事務所に顔を出した後、工藤たちは早速浅草の工場長宅に押し込んだ。いるのは分っていたので、扉のチェーンを切って土足で部屋まで上がり込んだ。

工場長はあくまで、ないものはない、と言い張るので藤原にビデオの用意をさせた。テレビに画像が映し出されると、工場長は一瞬何が映っているのかといぶかしんだ。

テレビには青い複雑な模様が写され、ゆるやかにうごめいていた。その模様をよく見ると、それは般若と、般若を取り巻く様々な模様だと言うことが理解できた。そして般若は人の背中に描かれていた。入れ墨だった。

背中に入れ墨のある男が上下にうごめいていた。そしてその男の下には手足を広げた状態で束縛された全裸の女がいた。女は最早抵抗せず、全てを入れ墨の男に委ねていた。

工場長の顔が紅潮した。

「真穂」

工場長が身を乗り出そうとした瞬間、藤原がその肩に鋭い蹴りを加えた。

工場長は頭から壁に叩きつけられた。

「ど阿呆が」

「娘に何をしやがった」

工場長は床から起きあがったが、すでに抵抗する気力は失せていた。力無く蹲り涙をすすった。涙を啜る音に混じって、真穂という娘の切ない声が虚しく流れ続けた。

工藤は工場長の前に立った。そして出来る限り威圧的な声で言った。

「こうなった理由があんたにあるくらいは理解できるよな。あと一週間だけ待ってやる。もし一週間後に金を用意できなかつたら」

工場長が鬼気迫る顔で這い寄ってきた。

「まさかソープに売るつもりじゃないだろうな」

工藤は鼻を鳴らした。そんな生易しいことするか。

「両方の目玉を送りつけてやる」

工場長の顔が蒼白になった。そして工藤の顔色を窺い、どこにもただの脅しの色を見いだせないと分ると、泣き崩れた。

帰りの車の中、工藤はもう工場長のことを考えていなかった。あの親父はも完全に落ちたも同然だ。あとは藤原がなんとかするだろう。それよりも最近シマを荒らし回る連中の対策をどうするかだ。

このところ組の縄張りで勝手に商売をしている連中がいた。その連中は謎の多い薬物である、スノーホワイトを売りさばっていた。だが、どこで仕入れて、どうやって売っているのかが謎だった。なのに薬物による犠牲者だけは着実に増えている。

この薬が出回り初めてからというもの、たびたび顧客に仕入れて欲しいと要請を受けたが、誰が元締めなのかも分らないのだ。それに警察がかなり介入してきているのも面倒の種だ。

もっとも面倒の種は、シマを荒らされているというメンツの問題だったが、工藤は本音を言えばメンツなどどうでもよかった。工藤はやくざ本来の、任侠精神というのが嫌いだった。

ただ工藤としては自分の身に降りかかる火の粉は払わねばならない。このままスノーホワイトを放置しておけば、必ず工藤自身が面倒に巻き込まれるのは必至だと思った。なんとかしなければならぬ。

「おい、神谷の婆の所へ行け」

食えない婆どもだが、もしかしたら何か情報を知っているかもしれない。

神谷の婆二人は相変わらずの呈で、にやついた顔で工藤を見上げた。

「何か用かね」

どちらが姉なのか妹なのか、未だに区別が付かない。付いたところでなにがどうなるものでもないが。

「調子はどうかと思ってな」

「人の調子を何う人間には見えないけどね」

「何か魂胆がある証拠さ」

もう一人が言う。

本当に食えない連中だ。こいつらに腹芸は通用しない。

「最近怪しい薬が出回っているだろう」

「うちには怪しくない薬なんてないよ。何て薬だい」

工藤は婆のにやにや笑いを見て気分が悪くなってきた。こいつらは絶対に知っているという確信があった。だが、それを表情に出すタマではない。

「スノーホワイト」

婆の顔色は変わらない。

「知らないねえ」

本当に知らないのか？ いやそんな筈はない。脅して吐かせるか。いや、こんな老い先短い婆どもを脅しても疲れるだけだ。

「一人、素人娘が手に入った」

「どんな娘だい？」

「どうせ借金の形に取ったんだろう」

一人が喋ると、もう一人が後を取る。まるで人形芝居だ。

工藤は藤原に入れ墨の男と絡んでいる写真を一枚出させた。

婆は二人して写真を見つめていたが、やがてひそひそと相談をはじめた。婆が相談するときの口から発するびちゃびちゃいう音が、いやに汚い音に聞こえた。娘はこいつらにいいように遊ばれ、薬漬けにされる。哀れだとは思ったが、スノーホワイトの情報の方がだんぜん重要だ。

「クラブデビルの」

「アキラって男に会ってみな」

婆はにやつきを倍にして写真を引き出しに仕舞った。

デビルは若者がひしめいていた。会話は成立しないし、どぎつい光の交錯が鬱陶しかった。

工藤はボーイの一人を捕まえると、アキラについて聞いてみた。

ボーイはすぐに工藤がどの筋の人間かを理解し、顔からにやつきを消した。

「アキラならいつも一時くらいにやって来ます」

工藤はアキラが来たら教えろと言い残して、奥の事務室に引っ込んだ。いつまでもあんな騒音の中にいたら、頭がイカれてしまいそうだった。最近の若い組員にイカれた連中が多いのは、こういう場所で育ったからに違いないと思った。

一時をすこしを廻ったころ、さっきのボーイが入ってきて、アキラが来たと伝えた。

ボーイと一緒にフロアに行くと、フロアの隅のソファに、不自然に白い顔をした男が座っていた。男はサングラスをかけ、音楽に乗るでもなく、何かを見るでもなく、ただ黙っ

てソファに座っていた。

「アキラってのはお前か」

藤原がテーブルのアキラの物らしい煙草を踏みつけながら聞いた。

アキラは相変わらず黙っていた。

工藤はどこか不吉な予感にかられた。この男は何かが妙だ。いままでいろいろな売人に会ってきた。本人が完全に中毒になっているやつもいれば、ビジネスと割り切っている男もいた。しかしこの男に関しては、今まであったどの部類にも入らない。何とというか、売人特有のきな臭さというものがない。更には言えば生命力自体を感じない。まるで氷漬けのマグロに向かって喋っているみたいだ。

「お前がアキラかって聞いてんだよ」

するとアキラはぎこちない動作でポケットに右手を差し込んだ。

藤原の顔色が変わり、工藤をかばうように身を引いた。他の舎弟が懐に手を差し込み、いつでも対応できるように身構えた。

アキラはポケットからひとつ、小さなビニールに包まれたスノーホワイトのパケを取り出した。スノーホワイトは天井の七色の照明を浴び、きらきらと煌めいた。

「一袋、五千だ」

張りのない声が言う。実際はアキラの声は喧噪にかき消されてしまうほど小さかった。だが、不思議とアキラの声はちゃんと聞こえた。まるで頭に直接話しかけられたみたいだった。

「てめえ。なめてんのか。誰が商売するって言った」

藤原が思わずアキラの胸ぐらを掴んだ。そして慌てて手を引いた。

「どうした」

「何て言うか。あの野郎、氷みたいに冷てえんです」

工藤の中で警戒感が増していく。こいつとは関わらない方がいい。だがそういう訳にもいかない。舎弟の手前、意地を見せる。工藤はアキラの目前まで顔を近づけた。

「ちょっと顔を貸せ」

工藤はそう言って入口に向かった。途中付いてこないのではと思い、後を振り返ると、アキラは表情ひとつ変えずに付いてきていた。

事務所の脇から裏口に向かう。裏口の扉を抜けると、ゴミの散乱した階段踊り場に出た。蛍光灯が切れかかっているらしく、踊り場は薄暗い光が、点滅していた。

踊り場にアキラが出た瞬間、藤原と若い舎弟がアキラを壁に押しつけた。しかし、いつもと少しペースが違う。アキラは一向に表情を変えないし、藤原も舎弟も明らかにびびっていた。

だが、こんな優男に一体何ができるというのか。工藤はアキラのポケットに手を突っ込み、薬のパケを掴みだして明の目の前にかざした。

「こいつをどこで仕入れた」

アキラは全く表情を変えずに、さっきと同じことを繰り返した。

「一袋、五千だ」

「てめえ、なめてんのか」

藤原の拳がわき腹を襲った。だが驚きの表情を見せたのは藤原の方だった。アキラのわ

き腹は信じられないほど固かった。藤原はまるで忌まわしいものでも触ってしまったかのように、拳をスーツでぬぐい、アキラから離れた。

藤原の様子を見ていた舎弟は、脅しの為にナイフを抜いていたが、その刃先は細かく震えていた。ちかちかと瞬く蛍光灯の光が、ナイフに反射していた。

工藤は何故か踏み込んでではない領域に踏み込んでしまったような気がした。

下に続く暗い階段から、冷たい空気が吹き付けてきた。足下に散乱していた紙くずが、風に攫われてくるくと舞った。

この男が何者かは知らない。だがこのまま黙って舐められているわけにはいかない。工藤は若い舎弟にちょっと脅してやれと命令した。ちょっと脅すというのは、頬の辺りに軽く刻みを入れることだ。こちらが引かないということを見せて置かねばならない。

舎弟は震える手でナイフをアキラの頬に近づけた。しかし手が震えているせいで、手元が狂い、サングラスを弾いた。サングラスは勢いで、工藤の足下に乾いた音を立てて落ちた。

サングラスの下に隠されていた、白く濁った目が工藤を真っ直ぐに見つめていた。

工藤の背筋を冷たいものが高上がった。こいつ本当に人間なのか？

そしてアキラは舎弟の方へゆっくりと首を回した。首が動くたびに、舎弟のナイフが頬に食い込んでいった。完全に横を向いた時、ナイフの刃は完全に頬の中に隠れていた。

アキラは頬にナイフを深々と突き刺したまま、濁った目で舎弟を見つめ、にやりと笑った。

「ひええ」

舎弟は驚きのあまり頬からナイフを抜くと、そのナイフをアキラの喉の突き立てた。まっ白な喉に、黒いナイフの柄が真っ直ぐ突き立っていた。その柄に蛍光灯がまばらな光を投げかける。血は一滴も出なかった。

アキラの表情は刺された時も笑ったままだった。だが、アキラはゆっくりと膝を折り、その場に崩れ落ちた。

「馬鹿野郎。殺してどうするんだ」

「すっ。済みません」

「畜生。死体を何とかしろ。面倒なことしやがって」

そう言ったものの、工藤は直後に助かったと思った。

助かったって？ 馬鹿げている。脅しているのはこっちなのに。それにしても困ったことになった。殺してしまっただけでは元締めが分らない。それでも工藤はあまり舎弟を責める気にはなれなかった。もし自分だったらどうしただろう。やはり自分でも思わず喉を刺したのではないだろうか。

「一袋。五千だ」

階段の下から声がし、工藤は反射的に振り向いた。暗くてよく分らないが、一階下の踊り場に人が立っていた。まずい。見られたかもしれない。

「誰だ」

男はゆっくりと階段を上ってきた。普通ならばまずいものを目にして、逃げる場面である。しかし男はしっかりとした足取りで、一段一段と階段を上ってきた。その男の姿を蛍光灯の光がようやく捕らえた。男はきっちりとした紺のスーツを身にまとい、髪を後

になでつけていた。口から顎まで繋がった鬚が印象的だった。

一体誰だ。雰囲気から警察ではなさそうだ。

鬚の男は同じ踊り場まで昇ってくると、アキラを見下ろした。そして次に工藤を見下ろした。背は工藤よりも頭一つ高かった。

「刺されて死ぬとは、使い物にならんやつだ」

男はアキラを一度蹴飛ばしてから、すぐ脇に蹲りポケットを漁った。そしてポケットからスノーホワイトのパケを全て取り出すと、自らの上着のポケットに仕舞った。

「お前何者だ。アキラの雇い主か？」

「雇い主ではない。操っているだけだ。それにしてもこいつは粗悪品だ。普通はもう少し長持ちするんだが」

男はため息をついた。

「それと私はお前と呼ばれるのは好まない。私には美濃部善三というれっきとした名がある」

そう言いながら善三はナイフを引き抜くやいなや、舎弟の鳩尾の辺りに突き立てた。

続いて藤原を突き飛ばした。

「おっと、これは私の物だ。返して貰うぞ」

善三は工藤を押さえつけると、手にしていたパケをむしり取り、工藤を壁に叩きつけた。すごい力だった。工藤はしばらく息を継げなかった。

善三は床に転がる二人を見ると満足そうに階段を上っていった。

工藤の目の前にはアキラの死体と、腹から多量の血を吹き出す舎弟がいた。舎弟は細かな痙攣を起こしたと思うと、事切れた。

「追いかける」

怒りが全身を熱くした。このままただで帰すわけには行かない。

工藤たちの靴音を聞きつけた善三が階段を駆け上がる音が聞こえた。逃がすものか。工藤も必至で階段を駆け上った。暗い階段にいくつもの靴音がこだました。

すぐに屋上に達した。屋上の扉が開け放たれていた。途中鍵の開いた扉は一つもなかった。屋上に逃げたのは間違いがなかった。

緊張しながら屋上に出た。

屋上にはエアコンの室外機があるだけで、誰もいなかった。

「探せ」

と言ってみたものの、探すような広さでもない。隠れる場所など全くない。どうなっているのだ。

呆然とする二人に冷たい風が吹き付けた。吹き付ける風には僅かに白い物が混じっていた。白い粉は雪に違いない。雪は吹き抜けると、電飾をまとった街にとけ込んでいった。華々しいはずのネオンも今日は、こころなしか寒々しく見えた。

藤原に事務所に連絡させた。

藤原は事務所からいくつかの指示を受けると、工藤に礼をして階段を下りていった。

工藤はポケットから煙草を取り出そうとして、何時の間にかポケットに入れたらしいスノーホワイトのパケに触れ、取り出した。スノーホワイトは吹き付ける風のなか、ネオンの光を反射して七色に輝いていた。

工藤はもうすぐ冬が来るなど思った。今年の冬は何時になく辛い冬になるかもしれないと思った。

七 富山へ

幸恵はトランクに旅行用の荷物を積み込むと、GT-FOUR に乗り込んだ。エンジンをかけると暖機する間にタバコに火を点けて大きく吸い込んだ。タバコは身体に悪いとは常々思っていたが、どうしても止められない。銘柄はラッキーストライクだ。探偵はラッキーストライクと昔から決まっている。

幸恵は手帖に挟んだ名刺を取り出した。依頼人の名刺だ。依頼人は大金と名刺を置いて、気持の固まらない幸恵を後目に出ていった。幸恵はもういちど大きく煙を吸い込んだ。こんな依頼を受けるなんて自分はどうかしている。だが他に手があったというのか？ 幸恵はギアをローに入れると、アクセルをがっつと踏み込んだ。四つのタイヤが同時に悲鳴を上げ、GT-FOUR は発進した。

依頼人が事務所に来たのは、花田が窓から飛び出してから数分後だった。精確に言えば花田が飛び出してすぐやって来たのだろうが、幸恵は忙しかった。電話で昔の夫と喧嘩をしていたのだ。

昔の夫は電話を掛けてくるなり

「事務所を畳むのはいつだい？ もう予定は決まったんだろう」

と言った。

ローズ探偵社の事務所は元夫の持ちビルにあった。このところ不景気で仕事の方はさっぱりだったため、家賃を随分と滞納していた。元夫にしてみれば、昔のよしみで待つてやっているというところであろうが、催促の電話を掛けてくる度に口にする鼻持ちならない嫌みに幸恵はすっかり閉口していた。その棘のある口調に、昔の優しさは見受けられなかった。幸恵は元夫の嫌みを耳にするたびに、どうしてあのような男と結婚などしたのだろうと思わずにはいられなかった。

「どうして嫌みばかり言うのよ。他の店子にもそんな嫌みを言っているの？」

「他はみな払いがいいんでね。嫌みを言う必要もないだろ。そういえば、先日尋ねた時に留守だったので勝手に帳簿を見せてもらったよ」

幸恵は胃が熱くなるのを感じた。勝手に帳簿を見たって？ なんてそんなにいけすかないことができるのだ。

「どういうこと。ちゃんと説明してよね」

「君の事務所はもう随分まともな収入を得ていないようだね。先日の妖怪騒ぎの調査料が三万円。それじゃあ飯にありつくのだって大変だろう。だからといって僕だっていつまでもその部屋をただ貸ししてやる訳にはいかないんだ。これはビジネスだからね」

元夫はビジネスという言葉をやけに強調した。そうあの男はビジネスという言葉が大好きなのだ。人をやりこめるにはビジネスという言葉を使うに限る。そうすることで、自分が優秀だということを強調したいらしい。ただその態度が時に相手を不愉快にするということなどまるで分かっていない。人を不愉快にさせるのがビジネスというものなら、あなたはりっぱなビジネスマンね。幸恵はよほどそう口にしたかったが、ここでそうするのはあまり得策ではない。

「この契約書にはあなたのお父様の名前も入っているのよ。私を追い出す気ならお父様にも聞いてみるがいい。彼は私の見方よ」

電話の向こうで押し殺した笑いが聞こえた。

「残念だな。親父は先月正式に引退したよ。グループの権限は全て僕に移った。親父は一応顧問なんて職についたがね、実は何の権限もない。親父は時代に付いていけなくなったことを痛感しているようだ。これからは僕の時代だ」

幸恵はいよいよ目の前が暗くなった。唯一の見方だった元夫の父親が手を引いてしまったのでは、勝ち目はどこにもない。いざとなればマンションを事務所にするしかないが、収入がなければいずれマンションも出て行かざるを得ない。こうなれば夜泣きそばみたいに屋台でも営業するか。夜泣き探偵か。幸恵は一人自嘲気味に笑った。

幸恵の笑いを自分に向けられたものと思った元夫は、

「いいか、どんな後ろ盾があるのか知らないが、近いうちに必ず出ていってもらかな」

と強く言った。それから急に語調を変え

「そういえば君の誕生日が近いよな。プレゼントを贈ったが届いたか？」

と聞いた。

プレゼント？ このふざけた代物のことだ。幸恵の机の上には屋台で三百円で売っていきそうな陶器製の子豚の貯金箱が置かれていた。

「何かの冗談。冗談の内容によっちゃあ、だたじゃ済まさないわよ」

「うへえ、怖い怖い。女は怖いや。僕は君のためを思って送ってやったんだ。そうだろう？ 少しでもお金が貯まれば出ていかずに済むかもしれないもんな。しっかり溜めろよ」

「ゲス野郎」

幸恵は貯金箱を床に叩きつけた。陶器製の貯金箱は粉々に砕けて飛び散った。

「感情的になっちゃいけないな。そうそう、六ヶ月分の家賃の期限は来週だ。それまでに百二十万円用意しておくこと。できないならとっとと荷物をまとめることだ。破損したものがあれば修理代をもらおうぞ」

「来週までに百二十万円って、そんな大金...」

元夫は言いたいことを言うと、幸恵の話を見聞かずに電話を切った。

幸恵は切れる前に「死んでしまえ」と怒鳴ったが、聞こえたかどうかは定かではない。頭に血が上って何もまともに考えられなかった。来週までに百二十万円を用意しなければならないが、どう逆立ちしたって用意できる金額ではなかった。あとは高利貸しに行くしか手は残っていない。高利貸しに行ったあとは？ もちろん引き返すことのできない借金地獄の列車に乗るのだ。幸恵は引き出しからバーボンの瓶を取り出すと、グラスに多めに注ぎ、勢いよく飲み干した。喉が焼け咽せて咳をした。咳と一緒に涙があふれたが、

その涙が咳のせいなのか、いまの電話のせいなのかは幸恵にも分からなかった。

「仕事を頼みたいのだが、出直した方がいいかね」

突然の声に幸恵は驚いて持っていたグラスを取り落としてしまった。貯金箱の破片の脇にグラスの破片が飛び散った。

「誰？ びっくりさせないで。いつからそこにいたの？」

扉の前には背が高く、頑健な体つきをした壮年の紳士が立っていた。紳士は髪を後ろになでつけ、豊かな髯を顎全体にまもっていた。そして意志の強そうな目でじっと幸恵を見つめていた。

紳士は上着のポケットから一枚の名刺を取り出すと、机の上に置いた。

「申し遅れました。私は美濃部善三と申します。あなたに仕事を頼みたい」

善三はそこまで言うと勝手に部屋の隅に置かれたソファーに腰掛けた。そして上等な背広の内ポケットから葉巻を一本取り出すと、火を点けて煙をくゆらせた。葉巻を持った左手首で金時計がじゃらりと音を立てた。

「人を捜してもらいたいのだが、やってもらえるかね」

念願の客がやってきたというのに、幸恵の心の中ではまださっきの諍いの残りがくすぶっていた。あまり客の対応をしたい気分ではなかった。どうせ一人や二人の客を捌いたところで、用意しなければならない金額にはほど遠い。ならばいっそ追い返してしまった方が気持が楽だ。

「残念だけど、今はそんな気分じゃないの。駅前に吉野探偵社っていう大手事務所があるから、そこへ行くといいわ」

善三は驚いた表情をわざと作って見せた。

「随分と余裕ですな。たしか来週までに百二十万円用意しなければならないのじゃないのかね」

幸恵は顔が熱くなった。

「聞いていたの？ なんて人」

「聞いていたのではなく、聞こえたんだよ。あんな大声を出せば、それこそ窓の外にいたって聞こえるさ」

幸恵は奥歯をかみしめた。嫌みな言葉に熱くなって、我知らず大声になっていたようだ。

「確かにその通りだけど、だったらどうしたっていうの。あなたには関係のないことだわ。それともあなたが百二十万円の仕事をくれるとでもいうの？」

善三は口元だけで笑った。その笑いが何を意味しているのか幸恵には読みとれなかった。幸恵の疑問は次の瞬間もっと深い疑問へと取って変わった。善三が内ポケットから分厚い茶封筒を取り出し、机に放り投げたからだ。封筒は机の上で重たげな音を立てた。

「五十万円入っている。これは前金と必要経費だ。成功報酬としてあと五十万円用意してある。成果次第では七十万円まで上げてもいい。どうかね？」

幸恵は机の上の封筒から目を離せなかった。とても信じられない。たった今、百二十万円などという大金を、どうやっても用意出来るはずがないと諦めたばかりだったのだから。成功報酬として七十万円。合わせて百二十万円だ。幸恵はようやく視線を封筒から引きはがし、善三に向かい直った。

「でもなんでそんな大金を払うのです。人捜しと仰りましたね。人捜しなら相場は十分

の一以下ですよ」

「何か裏があると考えておいでですか」

「考えない方がおかしいでしょう」

「まあ、無理もないですか」

善三は理由を話す気があるのか、ないのか、いつまでも葉巻をくゆらしていた。

「理由を教えてくれないの？」

「理由は簡単ですよ。仕事は困難を極めるはずだ。金額分だけ難しいということです」

「何故私に？」

「大手では出来ない仕事というのがあります。仕事の掛け持ちで手を抜かれちゃあ困る」

善三がまだ疑問があるのかと聞いた気な視線を向けてきた。そろそろ回答を出さなければならぬようだ。事実仕事は困難を極めるのだろう。だが幸恵に選択肢はなかった。この仕事を断れば、ここを出て行かねばならないのだ。

幸恵は封筒を取ると、中身の金額を確認した。

「で、誰を捜すのですか？」

先ほどまでの絶望的な気持と、煮えくりかえるような怒りは消え失せていた。

「一人は花田という男です。花田は私の大事な金庫を持ち逃げした。中には金では買えない大切な物が入っているのです」

「大事な物とは？」

「宝物ですよ」

幸恵は善三の表情からそれ以上は教えてもらえないと判断し、花田の特長を聞いた。そしてついさっき窓から飛び出した男が花田であると確信した。花田は善三に追われていたのだ。だから窓から逃げた。しかしどうして善三がここへ現れるのがわかったのか。そしてもう一つ分ったことがある。善三の言う宝物というのはスノーホワイトのことだ。そりゃあ確かに宝物だ。仕事が値段相応というのも領けるし、大手に頼めないのも納得だ。

「もう一人は、女です。名前は分からないが美しい女です」

「もう少し具体的に。美しい女だけじゃあ探しようがないわ。たいして美しくない女ならあなたの目の前にだっているし」

善三はその言葉に笑った。だが冗談がおかしくて笑ったとうよりも、何も理解していない相手をあざ笑うような笑いだった。

「あなたは十分お美しいですよ。自慢してもいいくらいにね」

「私はもう歳よ。本当の歳を聴いたら驚くわ」

善三は眉を持ち上げてそれに応えた。

「そう具体的には、肌は透き通るように白く、目は涼しげで儂い笑顔をする女です。髪は黒くて長い」

メモを取ろうとしていた幸恵の手が止った。この男はふざけているのか？ 確かにそれだけの条件で人を捜すのであれば、困難を極めるだろうし、大手には相手にされない内容だ。幸恵が口を開こうとすると、善三が言葉を継いだ。

「その女は雪女です」

幸恵は関越自動車道に入ると、一路富山を目指した。関越は非常に空いていて快適であったが、段々と暗くなる空模様が幸恵の不安を徐々に大きくしていった。

富山へ出向く理由は二つあった。

一つは花田の行動を追ったところ、すぐに金沢までの高速バス切符を買ったことが分かった。バス会社の事務員は、花田の特長を告げるとすぐに

「ああ、あの獅子みたいな人」

と思い出した。

それに花田はあちこちでアルコールを奪っていたため、足取りは非常に分りやすかった。もう一つの理由は善三の言葉だった。

善三は五十万円の札束を残して帰っていったが、帰り際に「是非、富山県の鶴崎町を調べてくれ」と言い残して帰っていった。富山県に行って一体何を調べればいいのか。雪女なんて見つかるはずがない。あの依頼人はそれも十分に分かっていて依頼をしてきたのだろうか？ だが雪女に関しては手がかりが何もない以上、幸恵は鶴崎に向かうしかなかった。鶴崎に行けば何か情報が得られるだろう。それだけの思いで GT-FOUR を走らせた。幸恵の思いとは裏腹に、GT-FOUR のエンジンはしごく快調だった。加速は物足りなかったが、高速では GT-FOUR はきびきびと走った。幸恵は GT-FOUR を気に入り始めていた。心地よいエンジンサウンドが徐々に幸恵の心の角を削り落としていった。

第二章 雪国

第二章 雪国

一 吹雪の街

黒岩裕吾は吹雪の中慎重に雪上車を走らせた。国設鶴崎スキー場のレストハウス兼ロジとして、ロジスノーフレークをオープンさせて、鶴崎スキー場と共に二十年ここで暮らしてきたが、これ程ひどい猛吹雪は珍しかった。猛烈な風で地面に付いた雪が引きはがされて飛んでくる。剥がされた雪は固まりのまま、銃弾のように雪上車を襲い、耳障りな音を立て続けた。

だがドイツのメルセデス社製のこの雪上車はそんな雪ごときではびくともしない。製造はもう十五年以上前だが、車軸の基本構造をタイガー戦車から引き継いだという MS-A13 型は頑健なのが取り柄だ。キャタピラがすり減って交換した以外には故障らしい故障をしていない。まあヒーターが効かなくなったとかいう些細な問題はあったが。

黒岩はリフト乗り場まで雪上車を走らせると、小屋の中で運転開始前の点検に追われる係員に声を掛けた。

「よう。調子はどうだい」

「ひどいねえ。いい加減新型に取っ替えてくれりゃあいいのに。いつまで老体に鞭打つつもりかね、国は」

「俺には六さんの方がいい加減引退時期に見えるぜ」

「馬鹿言ってるな。まだあちは現役だぜ」

二人は声を合わせて笑った。

六さんは今年七十になる老体だが、リフト運転での腕は衰えてはいない。今年も子供や初心者相手にその腕を振るってくれるはずだ。だが今年オープンがずれ込んでいた。通年ならば十二月の一週にはもうオープンするのだが、今年は一週になってしまった。その理由はこの猛吹雪だった。

雪が降り始めた十一月末には、通年以上の降雪に町の間は小躍りしたが、それもつかの間の話だった。降り始めてすぐに猛吹雪になった。雪がいくら降っても風があまりに強くて、リフトが運転できないのだ。新型のリフトならば多少の風には負けないのだろうが、三十年前の開設当時そのままのシングルリフトではとても風には太刀打ちできなかった。あまり風が強いと、ワイヤーが滑車から外れてしまうのだ。今年に入ってそういう事故がすでに二件あった。何れの時も客がいない試運転の時だったため、大事には至らなかったが、そういう事故があれば町議会としても慎重にならざるを得ず、風の弱まるのを待っていたためにオープンがずれてしまったのだ。

六さんは憎々しげに山を見やると

「山の神様怒らせるようなこたあ、何もしてねえんだがなあ」

と呟いて小屋に戻っていった。

黒岩は雪上車をその場に残したまま、歩いて民宿街に向かった。距離にすれば僅かに百メートル程度なのだが、雪上車に乗ってこなかったことを後悔した。フードを被っていても巻き込んできた風が、容赦なく雪を顔に打ち付けてきた。サングラスにたちまちにして粉雪が貼り付いていく。途中の案内板や電柱には、片方向から吹き付ける雪が、エビのしっぽのように貼り付いていた。黒岩の身体にも、片方向だけ雪がへばりついていて、半身だけ真っ白になっていた。

民宿街にたどり着くと、直接風が吹き付けない分、いくらかましにはなったが、民宿街には人の温もりが無かった。客がほとんど入っていないのだ。

「オープンしたって滑れなきや意味がねえ。滑れなきや、客なんて来るはずもねえ」

黒岩は一人ごちた。人気の無い民宿街は黒岩の気持を暗くさせた。

民宿街に活気がない原因はもう一つあった。スキー場がオープンしてすぐに、吹雪に視界を奪われたスキーヤーが、谷に落ちて死亡する事故が発生した。谷に続く斜面には防護ネットが張ってあったが、大量の雪がそのネットをあっという間に埋めてしまったのだ。自然が牙を剥く時、人間はいつだって無力だ。

通りを一本はいると、人がようやく歩ける程度の小道に面して「酒田」という小料理屋があった。黒岩の行きつけの店だった。客が数組入れは一杯になっていしまう程度の小さな小料理屋で、店主は鶴崎の風景が気に入って東京から越してきた独り者の風変りな男だった。黒岩も頑固で変わり者と称されるクチだったので、二人はよく気があった。黒岩が引き戸に手を掛けると、扉から凍り付いた雪のかけらが剥がれ落ち、風に攫われていった。頭上で酒田の看板が風に煽られてかたかたと揺れていた。

「よう、黒さん。今日は早いじゃないか」

「待ち合わせでね」

カウンターに座るなり、口髭を生やして頭に店の手ぬぐいを巻いた店主が、愛想良く声をかけてきた。

「おっ。隅に置けないね。もし俺に黙って女と飲もうなんて考えているなら、酒は一本もつけてやらんぞ」

店主は黒岩と同じ年の五十三歳だった。この歳で二人とも独り身なので、女の話には妙なこだわりを持っているようで、もし黒岩が女と同席するようなことがあれば、店主は本気で酒を出さないだろうと黒岩は思っていた。

「銀次だよ。バイトの」

店主は一瞬なんだ、という顔つきをしてから

「おお、銀次が来るのか。そりゃあ楽しくなるな」

と言い、お銚子を一本出した。

店主相手に四方山話に花を咲かせていた黒岩だが、話は自然と吹雪の方へと流れていった。どこへ言っても、今話題に上るのは吹雪のことばかりだ。いくら今年は雪が多いと宣伝をしても、こう吹雪続きではたまらない。来た客は温泉もないこの町での滞在を早めに切り上げて帰ってしまう。

「いつになったら止むんだろうね」

「さあな。早く止んで貰わないと、商店街が寂しくていけない」

店主は黒岩の寂しいという言葉を受けて、視線を落とした。何かを喋ろうかどうかまよっているらしかった。黒岩がどうしたと尋ねると店主は

「実は神社の向かいに旅館があったろう」

と切り出した。黒岩は店主の目を見てどこか落ち着かない気分になった。

「あったがどうした」

「失踪したんだ」

黒岩はまたかといった顔をした。

今年に入ってから立て続けに二件の失踪事件が発生していた。何れも手がかりは何もない。警察では家出として処理されているらしかったが、失踪したうちの一人は雪道を歩くのもままならない老人だ。とても家出などとは考えにくい。人々の間ではどこか雪の下に埋まっているとの噂が流れていた。それに失踪した二人の共通点は、どちらも生活していた部屋の窓が開け放たれていて、部屋が雪まみれになっていたということだ。何故窓を開けて出ていく必要があったのか。さらに秋口には季節はずれの大雪での遭難事件も発生している。遭難したうちの一人は未だ行方知れずだ。今年は雪がらみの事件が多すぎる。黒岩はぼんやりとそんなことを考えた。

「物騒な世の中になったもんだよ」

店主はあからさまに何か裏があるといった口調で言った。

「今度は誰がいなくなったんだ」

「全員だよ」

黒岩は啞然とした。

「全員であそこは五人家族だったろう。それが全員いなくなったっていうのか」

店主は黙って頷いた。そのゆっくりとした、明確なうなずきには今までの失踪と関連があるという含みが見て取れた。つまり旅館の内部は雪まみれだったという事だろう。これで警察も動き出さない訳にはいかないが、妙な噂が立つと観光地としての打撃を被ることになる。

「雪か」

黒岩は吐き出すように言った。

黒岩の言葉に反応するかのように奥から耳障りなはしゃいだ笑い声が響いてきた。黒岩が目を向けると、青年団の連中が四人固まって飲んでいて、時折黒岩の方を小馬鹿にしたような目で見ている。いい酒の肴が入ってきたとはしゃいでいるのだろう。

「なにせ黒岩大先生は雪と仲がいい。仲が良すぎて雪女を嫁に貰うらしいからな」

続いて嘲笑。

店主が文句を言いに行こうとしたが、黒岩がそれを止めた。

「相手にするだけ時間の無駄だよ」

「それもそうだが」

店主は一瞬躊躇いの表情を作ったが、思い切って尋ねた。

「いつも訊こうと思っていたんだが、雪を研究してどうするんだ。論文でもかくのか？」

黒岩はここに住み着いてからというもの、ずっと雪の研究をしていた。いつどんな時に

雪が降り、気温や湿度はどれくらいで、その時の結晶はどんな形をしているのか。結晶を写真にとり、データを書き込んで保存していた。その写真の数は千枚や二千枚では済まない数になっていた。だがそのまとめた資料を一度でも発表したことは無かった。先日の機関紙に載せた一枚の結晶写真以外は。黒岩はそのことには触れず、ただ

「雪国に济む人間が雪のことを知らなくてどうする」

と答えた。

「だけどその知識を何かに役立てなければ、研究する意味が無いだろう。ただ闇雲に写真を撮っているだけだから、あんな連中に馬鹿にされるんだ。雪女だなんて。まさか黒さん本気で雪女がいるなんて信じている訳じゃないよな」

黒岩は酒をくいと飲み干すと暫くの間黙っていたが、やがて

「信じているよ」

と呟いた。

店主はもっと何か言いたげだったが、結局何も言わなかった。鍋から煮物を一皿盛ると、黒岩の前に置き、奥へと引っ込んでしまった。

黒岩は誰も信じてくれなかりが気にはしなかった。雪女の伝説など所詮伝説に過ぎないと誰もが思っている。だけど黒岩にしてみれば伝説でも何でもなかった。四十五年前の猛吹雪の日を黒岩は決して忘れはしなかった。今でも昨日のこのように思い出すことができた。猛吹雪の夜。風で軋む宿舎。軒先が発する風切り音に、布団を被って震えていた子どもたち。ガラスの割れる音。吹き込んで渦巻く雪。そして園長先生の死に顔。穏やかな、雪の中に咲く花のような死に顔。

黒岩はコップを握りしめた。

美しかった園長先生。黒岩のことを実の子供のように扱ってくれた園長先生。

黒岩は意識の回廊をそれ以上奥にまで踏み込むべきかどうか迷った。これ以上昔のことに思いを馳せれば、今夜はひどい悪酔いをするかもしれない。かまうものか。黒岩は懐かしい思い出の扉を開き、遠い過去へと、波間を漂うように流されていった。

哀愁にひたる黒岩を現実に戻したのは黒岩をあざ笑う若者たちの笑い声だった。

青年団の若者たちは酒の勢いに任せて、黒岩をあざ笑い、小馬鹿にした。そして誰かが何かを言うたびに耳障りな笑い声を上げた。

「雪女ってほら、絶世の美女だっていうじゃないか。あいつきっと雪女を夜の慰めにしてるんだ」

「ああ、黒ちゃん抱いて」

若者たちが大笑いをした。

黒岩は持っていたグラスを若者たちのテーブルに投げつけた。

「だまれ」

グラスはテーブルの角に辺り碎け散った。

「なんだ、この野郎。やろうっていうのか」

「貴様らみたいなクズどもに何がわかる」

「クズは手前だろう」

若者たちは一斉に立ち上がり、黒岩を取り巻いた。店主が出てきて止めに入ったが、頭に血が上った若者相手では歯が立たなかった。店主が若者の一人に組み付いたが、その

間にも黒岩は何発かの拳を叩きつけられていた。

「いい加減にしな」

よく通る声が一同の動きを止めた。店の入り口に一人の女が立っていた。長い髪を後ろでまとめた、細身で重みのある風格を持ち合わせた色白の美人だった。近所で雑貨屋を営んでいる美智子という女だ。元やくざの情婦であったとか、県会議員の妾だとか様々な噂が流れていたが、実際の所を知るものは少なかった。ただ町の有力者たちが一目置いていることだけは確かであった。

「その辺にしておかないと警察沙汰になるよ」

黒岩の胸ぐらを掴んでいた若者は野獣のような目で美智子を睨みつけたが、美智子が一向に動じないので、仕方なく黒岩を掴んでいた手を放した。急に支えを失った黒岩はそのまま床に崩れた。

「そんなことじゃあ、先がおもいやられるよ」

美智子はリーダー格の弘道という青年に吐くように言った。

弘道は悪態を付きながら店を出ていった。続いて仲間もまた出ていった。

「へえ、みっちゃん強いなあ。俺なんか足下にも及ばないよ」

店主は黒岩を引き起こすと、椅子に座らせた。

「大丈夫か」

「ああ、これしき」

「年甲斐もなく喧嘩なんかするんじゃないよ」

黒岩は美智子の言葉を無視した。店主は二人の間柄に僅かな違和感を感じたものの、何も言わずにカウンター内に戻った。

「熱爛ね。こう寒くちゃ敵わない。少し熱めにしてね」

美智子はいいながら黒岩の横に座った。黒岩は僅かに身じろぎをしたが、結局それ以上は動かなかった。他に客がいなくなったので、店主は熱爛と煮物を持ってくると、美智子の隣に座った。

「今日は俺が奢るよ」

「ありがとう」

美智子は年齢不詳の笑顔で応じた。美智子の本当の年齢は誰も知らない。恐らくもう五十代に手が届く頃だろうとは噂されていたが、その笑顔からは微塵も歳を感じさせなかった。

「それにしても、みっちゃんすごかったね。鶴の一声だもんな。でもなんであんなに簡単に引き下がったんだろう」

美智子は手酌をしながら言った。

「あいつを男にしてやったのはこのあたしなのさ」

店主はなるほどという仕草をして、自分の猪口にも酒を注いだ。

「俺も男にしてもらいたいなあ」

「あら駄目よ。あたしが相手にするのは権力者だけ」

「じゃあ本当に駄目だ」

店主はそう言って笑った。

美智子が二杯目を注いだところで入り口の扉が、静かに、何か警戒でもするかのような

動きで開いた。一同が扉に注目していると、扉の隙間から一つの目が中を窺うようにして覗きこんだ。そしてその目は一通り中を見渡すと、一旦引っ込んだ。扉が勢いよく開いて一人の男が入ってきた。銀次だった。銀次の顔には取り繕ったような笑みが浮かんでいた。その笑みは中の騒ぎを知っているという笑みだった。

スノーフレークまでの道のりを運転したのは銀次だった。長年バイトに入っているのに、雪上車の運転もお手の物だった。

スノーフレークに着くと、黒岩はロビーのソファーになだれ込むようにして横になった。

「殴られた後にあんなに飲むなんて無茶だよ」

「うるせえ。隠れて見てやがったくせして」

「別に隠れていたわけじゃないよ」

「根性なしが」

黒岩は唸りながら上着を脱ぎ、銀次に投げつけた。部屋に置いてこいという意味だった。銀次は黒岩の上着を持って奥の事務所件住居になっている部屋に入った。相変わらず乱雑としていた。部屋中に黒岩の撮影した雪の結晶写真が散らばっていた。銀次は上着をハンガーにかけると、写真を拾い上げてまとめ始めた。普段ならば絶対にそんなことはしなのだが、ここへ来るとどうも黒岩の世話をやりたくなる。黒岩というがさつであるが堅実な男に、理想の父親像を重ねているのかもしれない。そういった気持が黒岩を「親父」と呼ぶことに現れていた。

写真の中の雪の結晶はどれも美しく、繊細な形をしていた。だが一つとして同じ形のものはない。それぞれに個性があった。六本の腕が綺麗に広がっているもの。腕が無く、六角柱になっているもの。二つの結晶が結合してしまったもの。中には奇形の結晶もあり、腕が七本あったりするものもあった。

銀次はしばし写真に見とれたが、すぐに片づけを再開した。写真を片づけていくと、写真の隙間から地域の機関紙が出てきた。機関紙は地域の活性化を目的に、様々なイベント情報や話題の乗せたものだった。黒岩はおおよそ集団行動に縁のない男であった。その黒岩がなぜ地域機関紙などを持っているのかが不思議だった。中身を見て初めてその理由が分かった。黒岩の撮った雪の結晶写真が掲載されていた。だがその写真は決して美しい結晶では無かった。本来六角形であるはずの結晶が歪み、何本もの腕が無造作に突き出ている。しかも形は大小大ききの違う二つの結晶が融合したようなひょうたん型だった。その写真で一番印象的なのは、その結晶がどうみても美しくないということだった。結晶が反射する光りはどこかよどみがあり、嫌悪感を抱かせた。

写真の下には黒岩の書いた文章が載せられていた。その文章によれば、鶴崎においても近年の大気汚染が著しい。その主たる原因は町はずれにできた焼却場の煙であるとのこ

とであった。黒岩は雪の結晶から大気が汚染されていることを訴えていたのだ。

銀次はあの黒岩がと半ば驚きながらも、記事を読んでいたが、すぐに別の記事に目を奪われた。

その記事は町の有力者の葬儀案内であったが、掲載されている写真の顔に見覚えがあったのだ。忘れようとしても決して忘れられない顔。昨夜銀次が刺した男の顔そのものだった。

「美濃部善三。告別式案内」

銀次はそう口に出して読み、ひどく狼狽した。告別式ということは、この顔写真の男は死んだということだ。自分は人を殺してしまったのだ。銀次は血の気が引いて、目の前が白くなった。自分はこれで完全に人殺しだ。もう東京には戻れない。

「何やっている」

黒岩がいつの間にか部屋に入ってきていた。銀次は慌てて機関紙を隠そうとしたが、それより早く黒岩がそれを取り上げた。

「何だ俺の写真か。こんな事したって、誰も何も変えようとはしない。それがどんな結果を生むかも考えようとしな。みんな馬鹿どもだ」

黒岩は銀次の様子がおかしいことに気がついた。銀次は顔面蒼白で宙を見つめていた。

「おい、どうした」

黒岩が肩を揺すって初めて、銀次は「何でもない」と答えたが、どう見ても何でもないはずがなかった。黒岩は銀次に詰め寄った。そしてさっきまで銀次がこの機関紙を見ていたことに気づき、それを銀次に突きつけた。

「これがどうかしたのか」

銀次は暫く押し黙っていたが、ようやく口を開いて自分の罪を告白した。

「俺、人を殺してしまった」

「殺したって、誰を」

「そこに写真が出ている。あんたの記事の脇だ。俺そいつを刺してしまった」

黒岩は善三の写真を見た。そして不審気に銀次を見やった。銀次は下を向いたまま青くなっていた。とても冗談で言っているようには見えなかった。

「詳しく話して見ろ」

銀次がことの次第を話し終えるまで、黒岩は一言も口を挟まなかった。表情だけを見る限りでは、銀次の話を信じたとも信じなかったとも、どちらとも判断できなかった。銀次はこころにのしかかっていたものを吐き出すことで、幾分気持が落ち着いていた。しかし自ら答えを出せるほど澄んだ気持でもなかった。できれば黒岩に答えを出して欲しかった。その黒岩は銀次の話を聞いていた時同様に、じっと宙を見据えたまま微動だにしないかった。

ついに銀次は沈黙にたえられなくなり口を開いた。

「俺どうすればいい。なあ親父。俺どうすればいいんだ」

黒岩は銀次を見ずに手にした機関紙の写真を見やった。そして呟いた。

「お前の言っていることがもし本当ならば、大変なことをしでかしたことになる」

「本当ならばって親父信じないのか？」

「信じたいが、信じられん」

黒岩はそう言って機関紙を銀次に放って渡した。

「よく見ろ」

「間違いない。この男だよ」

「そうじゃない。日付だ。告別式の日付は何日になっている」

銀次はいぶかしげに日付を確認し、啞然とした。

告別式 十一月七日

「十一月七日」

「そうだ。十一月七日だ。一ヶ月以上前の話だ。大勢の人間が葬儀に参列したし、俺もそこにいた。間違いなく美濃部善三は死んでいた」

「ばかな」

銀次は何かを訴えたかったが、言葉が出てこなかった。何をどう説明すればよいのかわからなくなっていた。

「考えられる可能性は三つだ。一つは善三が葬儀を偽装した。何のためにかは分らないが。

だがこれは無理だろう。証人がたくさんいるし証拠もある。

二つ目は銀次が刺した相手が善三ではなかった可能性だ。しかし話を聞く限り、本人に間違いなさそうだ」

「ああ、間違いはない。この顔を絶対に間違うはずがない。それで三つ目は何だい？」

「三つ目は……」

黒岩は何故か言い淀んだ。

「一体何なんだよ」

「……」

黒岩は結局三つ目の可能性について何も言わなかった。

「銀次。気にしないことだ。どっちにしても犯罪が絡んでいるだろう。不可抗力だったんだ。お前のせいじゃない」

黒岩はそう言うと、強い酒を持ってくるといって部屋を出ていった。

三つ目の可能性について、銀次にはまだ考える余裕は無かった。いくら黒岩が気にするなといったからといっても、人を刺してしまったことには変わりはないのだ。目を瞑る度にあの瞬間の映像が蘇った。何の抵抗もなく、ずっと首筋に吸い込まれてしまったナイフの感触と共に。

長い間銀次は葛藤を繰り返した。一体どれくらい悩んでいたのか分らなかったが、黒岩は一向に戻ってくる気配がなかった。きっと銀次を彼なりに気遣ったことだろう。そして銀次はようやく一つの結論に達しようとしていた。時間が何かを導いてくれるだろうという、いつもの逃げだった。結論を出すことすら時間の流れに乗せてしまう。そし

て結論を出すことがばからしくなったところに、一番楽な方法を取る。あるいはそうするしかなくなったら、仕方なく動く。その曖昧な行動こそが自分を鶴崎に来さしめていることに銀次は気づくことはなかった。代わりに銀次が気づいたことは、黒岩の部屋が以前とどこか違うということだった。

黒岩はこのロッジを建ててから、一度として自分の部屋をまともに掃除したことがなかった。部屋の隅には書籍がうづ高く積まれ、手にしないあらゆるものに埃が積もっていた。そんな黒岩が部屋の模様替えなどするはずもなかった。

だが一体どこが変わったのか気がつく前に、銀次の意識は別の方向へ向けられた。

食堂からガラスの割れる音が響いてきた。

続いて怒声。

「くそつたれどもが」

銀次は慌てて立ち上がると、食堂へと走った。

「親父どうした」

銀次が食堂に飛込むと同時に、スキー場に面したガラス窓が数枚、一斉に割れて氷の塊が中に飛んできた。黒岩はすでに食堂にはいなかった。割れた窓から雪が吹き込んできた。

「どうなっているんだ」

銀次の間に答えるように、風と一緒に嘲笑が流れ込んできた。声の主たちは黒岩をことごとく馬鹿にした罵詈雑言をわめき立てていた。どうやら青年団の連中がさっきの仕返しをしに来たらしかった。青年団の連中は次から次へと氷塊をロッジの窓めがけて投げつけてきた。

そこへ怒りに狂った黒岩が飛んできた。手には何やら長い黒光りするものを握りしめていた。猟銃であった。

「親父何をするつもりだ」

「思い知らせてやる」

「止めろ。死人が出たらどうするつもりだ」

そう言いかけて、銀次は口を噤んだ。そんなこと言えた義理ではない。自分こそが人殺しなのだから。それに黒岩はこうなったら言って止る男ではない。一度言い出したことは頑としてやり通す男だ。好きにやらせるしかない。でももし死人がでたら。銀次はそれ以上考えることを止めて成り行きを見守ることにした。

黒岩は外へ飛び出すのが早いか、猟銃を声の方に向けて発射した。爆音が山にこだました。

「相手になってやる。かかってこい」

黒岩はそう叫ぶと、再び銃を発射した。

だが青年団の行動は素早かった。黒岩が表に飛び出した時には、すでにスノーモービルに跨っていた。激昂した黒岩を後目に、悠々と引き上げていった。この時ばかりは吹雪の幕が青年団の味方をしていた。

黒岩は食堂に戻ってくると、力が抜けたように床に座り込んでしまった。

「親父」

「ベニヤで窓を塞いだ食堂を客が見たら何て言うと思う」

「明日一番で硝子屋に連絡しておくよ。すぐに元に戻るさ」

「いいんだ。どうせ客の予約なんてないんだから」

黒岩はそう力無く言うと、突然猟銃を床に叩きつけた。

「くそったれどもが。覚えている」

銀次が窓にボール紙を貼り付け、吹き込んだ雪とガラス片を片づける間、黒岩はずっと床でしょげていた。これほどにしょげている黒岩を、銀次は今まで見たことがなかった。一通り片づいたので、どう声をかけようかと思案していると、黒岩が小声でぼそぼそと何かを語り始めた。

「俺がここにロッジを構えたのは二十五年も前のことだ。二十五年前、このスキー場の周りには何もなかった。物好きなスキーヤーが訪れる以外に、外部から人が来ることも滅多にない辺鄙な所だった。そんな辺鄙な町に腰を据えたのには訳があった。ここでなければならぬ訳があった。俺は腰を落ち着けると同時に、一つの仕事に着手した。雪を調べることだ。調べることは沢山あったが、まずは写真を撮ることから始めた」

ここで初めて、銀次は黒岩の部屋で何が変わったのかに気がついた。黒岩が大切にしていた、雪の結晶を撮影するためのカメラが無くなっていた。毎日毎日黒岩は結晶を撮影し続け、その枚数は一万枚にも達していた。それが黒岩のライフワークでもあった。その大切なカメラが無くなるとは、ただならぬ自体が発生しているということだ。

銀次は身震いした。

急ごしらえの雨戸の隙間から、雪が吹き込み二人の肩に降りかかった。

「写真を撮り始めて何年かして、俺は一つの事実に気がついた。雪が徐々に変化しているんだ。雪の結晶が崩れ始めていた。変化といっても最初は僅かなものだった。だが少しずつ確実に変化していた。そしてここ数年、特に町はずれにゴミ焼却場ができてからの変化は著しかった。明らかに大気に変化が生じている。だが原因は恐らくそれだけじゃないはずだ。だがそれが何だかはわからない。俺はそれを突き止めようとして、いろいろと調査を始めた。だが一人では限界があった。だから機関紙に写真を公表して、広く意見を求めようと考えた。そしてあの事件が起きた」

「事件って何だい」

「十月の半ばに季節はずれの大雪が降った。この大雪で二人が遭難して死んだ。俺は突然の雪の原因を調べるために、雪を採取して結晶の撮影を始めた。初めて数分で俺は妙な変化に気がついた。撮影している結晶がものすごい勢いで成長していたんだ。撮影中に結晶が成長することはよくあることだ。だがそいつは、ある程度の大きさになった途端に、分裂した」

「分裂ってそんなことあるのか」

「ありえないとは言わないが、今まで一度だって見たことはない。そして一度分裂が始まると、信じられない速さで増殖を始めた。結晶はどんどんと増え、カメラ台を覆うほどにまで増殖した。その後俺が見たものは到底信じることのできない光景だった」

「何が起きたんだ」

黒岩は暫く口を閉じていた。そしておもむろに言った。

「雪に顔ができたんだ」

銀次は気が抜ける思いだった。

「親父そんな馬鹿なことがあるわけないだろう」

ところが黒岩は銀次の言葉を無視して続けた。その声はもう叫びに近かった。

「雪がまるで生きているみたいに動いて、一つの場所に集まり始め、そしてそいつは人間の顔を創った。顔だ。あの女の顔を創ったんだ」

黒岩は暫く肩で息をしていたが、やがて猟銃を手にとると食堂を出ていった。出ていき際に黒岩は銀次に一言忠告した。

「恐ろしくてカメラは焼いてしまった。もう写真は撮らない。今年はずっと違う冬になるかもしれない。いたくなければ出ていってもいいぞ」

「親父」

前から黒岩は一つの強迫観念にかられているのは知っていた。時折黒岩は雪の世界に住む連中のことを語ることがあった。そんなもののことを信じない銀次は、いつも適当に聞き流していた。だが今年はそうもいかないかもしれない。だからといって、銀次には他にあてなどあるはずがなかった。銀次にはもう帰るところはないのだ。

銀次は食堂の棚からウイスキーのボトルを取ると、グラスに半分ほど注ぎ、一気に喉に流し込んだ。

遠くで銃声が響いたが、音はすぐに風の音にかき消されてしまった。弘道は忌々しい黒岩という男に、これからどうやって嫌がらせをしてやろうかと策を練っていた。策を練ることに夢中になっていたため、いつの間にかスノーモービルは道を外れて林の中に入り込んでしまっていた。

「弘道、どこへいくつもりなんだ」

後ろで仲間が怒鳴っていた。

大丈夫、どうせ真っ直ぐ進めば県道にぶつかるに違いない。弘道は仲間に付いてこいと合図を送ると、林の中の雪で覆われた小道を進み始めた。

小道は多少の起伏があり、スノーモービルのライトが波打つ小さな雪丘をいくつも浮かび上がらせた。時折そのライトの影になった窪みから、兎のような小動物がさっと逃げていくのが見えた。

弘道は林を進むにつれ、自分たちがすっかり見当違いの方向へ走っていると気づいた。だが、後から付いてくる仲間間違えましたとは言えなかった。ここは何が何でもどこかの道路に出なければしめしが付かない。弘道は誤った方向へと意地で進んでいった。後では不安を感じた仲間が何かを言っていたが、弘道は敢えてそれを無視した。

「弘道。おい待ってくれよ。おいったら」

仲間の執拗な呼びかけでようやく弘道はアクセルを緩めた。

「何だってんだ」

弘道の苛ついた反応に仲間の一人はあからさまに臆していた。

「いや、弘道が分かっているんだったら、それでいいんだが、この道はどこにでるのが一応知っておきたいと思って」

「お前らは黙って付いてくればいいんだ」

「分かったよ」

仲間はまだそれ以上弘道に何か言おうとはしなかった。弘道が仲間に、誰がボスなのかを分からせるために睨みをきかせ、再び前進しようとしたとき、弘道は仲間が一人足りないことに気が付いた。

「おい、悟はどこへいった」

仲間たちはお互いに顔を見合わせ、かぶりをふった。

弘道は頭に血が上っていくのを感じた。悟のやつ俺を裏切りやがった。いいだろう。俺に付いて来られないというならそれはそれでいい。だが俺から離れるということがどうということなのか、後でたっぷりと思い知らせせやろう。そう黒岩の爺を思い知らせた後にでも。弘道は怒りで熱くなると同時に、いたぶる相手が増えたことへの喜びを感じた。

「行くぞ」

一同は進み初めてすぐに完全に視界を遮るようなひどい吹雪に見舞われた。前が全く見えず、一時的にその場に止らざるを得なかった。停止して一時吹雪の収まるのを待つしかない。弘道は素直に引き返さなかったことを改めて後悔した。叩きつけるような雪は、辺り一面に真っ白なカーテンを引いてしまった。スノーモービルのライトが雪に反射し、流れるモザイクを作り出していた。そのライトの遙か先、ようやく光が届く辺りに何か一瞬動く物が見えた気がした。

「おい、今何か見えなかったか？」

弘道が振り向いてみると、仲間は一人しかいなくなっていた。

「おい、秀明はどうした。あいつら俺をコケにしようっていうのか」

弘道に言われて初めて、紀之もその事実気が付いた。

「秀明、秀明」

呼べど叫べど応ずるものはなかった。紀之は少し後方に明のスノーモービルの明かりを見たような気がし、探しに行ってみようと思決心した。このまま弘道を怒らせておくのは得策ではないと判断したのだ。

「俺ちょっと見にいってみるよ」

「待てよ。おい、行くな」

弘道の言葉は風の唸りにかき消された。

紀之はスノーモービルから降りると、今来た道をてくてくと戻り始めた。そして紀之の姿はすぐに吹雪の中へととけ込んでしまった。

弘道は一瞬紀之もまた自分を裏切るのではないかと思ったが、スノーモービルを置いていったということは、戻ってくる気があるのだと気が付き安心した。

だが、その紀之はいつまで待っても帰ってこなかった。

人の呻き声にも、叫び声にも聞こえる不気味な風の音がいつまでも続き、弘道を不安にさせた。

「おうい。紀之。秀明」

叫んでも叫んでも、弘道の言葉は全て風に流されてしまった。紀之のスノーモービルの

明かりが空しく光っていた。

不安が急激に弘道の心を冷やしていった。考えたくもないのに、遭難者のことを考えてしまう。

今年の秋口に山にハイキングに出かけ、季節はずれの猛吹雪に出会って遭難した二人がいた。町はずれの養護施設で生活していた松田節子という施設経営者と、自閉症を患っていた滝口茂という十五歳の少年だった。二人は下山途中で信じられないほどのひどい吹雪に出会い命を落とした。節子の死体はすぐに発見された。雪と同じくらい真っ白な死体だった。茂の死体は未だにみつかっていない。どこかの雪の下に埋もれているはずだ。町では養護施設の窓に茂の影を見たとか、夜中に歩いている姿を見たとか、ぞっとしない噂が飛び交っていた。そしてその噂というのが、必ずひどい吹雪の後に囁かれるのだ。今夜のような吹雪の後に。

弘道は仲間の名前を次々に呼んだ。虚しい風の音が返ってくるばかりだった。そして誰一人弘道の許へ戻ってくる者はいなかった。弘道の目の前にはスノーモービルのライトが照らし出す、僅かな空間が広がるばかりだった。その空間すら横殴りの雪に埋め尽くされていた。弘道は広大な土地の真ん中にいながら、ひどく窮屈で息苦しい感覚を覚えた。もう待つことはできなかった。これ以上ただ一人雪の中に残されるのはごめんだった。弘道は自分のスノーモービルに跨ると、アクセルを捻った。キャタピラが雪を噛み、弘道を前に押し出した。暫く走るとミラーに映っていた紀之のスノーモービルのライトが徐々に見えなくなり、全てが白い闇に覆われた。たった一つのライトが照らし出す世界は、前よりも小さく儂げだった。

弘通は何度もミラーで後ろを見た。本当は見たくなかったのだが、どうしても目がミラーにいつまでも映ってしまっていた。そのミラーに何かが映ったような気がしたのだ。だがミラーを覗いても何も映ってはいなかった。漆黒の闇と、スノーモービルが巻き上げる僅かな雪煙が、テールランプの赤い光に染まり、消えてゆくのが見えるばかりだ。だが弘通には分っていた。先ほどからずっと後で、弘通の後を付けているやつがいた。そいつは紀之でも秀明でもない。そいつはきっと紀之や秀明、そして悟がどうなったかを知っているはずだ。そいつはこれから弘通をどう料理しようか考えながら、これから始まる祝宴に喜び震えているに違いない。そう弘通は本日のメインディッシュなのだ。

弘通は頭を左右に振って、妄想を追い払おうとした。そんな馬鹿なことがあるはずがない。だが、背中に突き刺さる何者かの視線だけは、決して払いのけることができなかった。

ついに弘通はスノーモービルを停止させた。

行き止まりだった。

そこは小さな公園ほどの広さだけ、木々がなく開けていた。しかし先に抜ける道はどこにもなく、袋小路になっていた。ライトが雪の緩やかな凹凸と、木々を映し出していた。木々が密生しているせいか、風は余り無かった。

弘通はミラーを見た。何も映ってはいない。そして背中に感じていた気配は何時しか消えていた。ただの思い過ごしだったのだ。弘通は臆病風に吹かれた自分を笑いながら後を振り返った。

何もいなかった。

「さて、どうするかな。きっとあいつら俺をハメやがったんだ」

弘通はわざわざ声に出してそう言った。そして仲間どもにどう復讐するかを考えた。だが、ボスは時には寛大な心で許してやることも必要だ。そう、ここは一つ許してやることにしよう。帰って今日は一杯食わされた。騙されてやったんだから一杯おごれとでも言おう。きっとみんな笑いながら俺の帰りを待っているはずだ。どうせなら少し遅くなって心配でもさせてやるか。

弘通はポケットから煙草を取り出すと、一本銜えて火を点けた。

新鮮な空気の中で吸う煙草は格別の味がした。

吸い終わって短くなった煙草を雪に投げ捨て、スノーモービルを方向転換しようとした時、弘通は妙な違和感を感じた。一瞬なんだかわからなかったが、何か普段と違うものを見たような気がした。弘通は目を凝らしてもう一度辺りを見回してみた。だが、雪と木々意外には何もなかった。気のせいかと思い、帰ろうとしたが、どうしても違和感がぬぐえなかった。

違和感はやがてさっきまで感じていた視線に変わった。

心の中で恐怖の滴が一滴、ぼちゃりと弾けるのを感じた。

何もなかったと分ったじゃないか。

そう思ってみた。だが一滴の滴はどんどんと増え、やがて一つの流れとなりつつあった。何かが変わる。

正面には数本の木々があるだけだ。その木々に雪が貼り付いていた。だが、この景色の中には何かが隠されていた。そう言ってみれば隠し絵みたいなもの。視点を変えてよくみればそれが何だか分る。弘通は息を吐き出しながら、もう一度目を凝らしてみた。そして発見した。

正面に人形が立っていた。

「脅かすな。くそ」

弘通は近づいてよく見てみた。良くできていた。雪でできているらしく、真っ白だったためになかなか気がつかなかったのだ。しかし弘通にはどうしても、この人形が初めからそこにあったようには思えなかった。さっきも確かにその場所を見たのだ。だがそんなものは存在しなかったはずだ。どうにも納得し難かったが、弘通は見過ごしていたのだと思うことにした。

ところが次の瞬間、弘通は驚きで声を失った。

真っ白なはず人形に色がつき始めたのだ。髪や瞳に少しずつ、生命が吹き込まれていくかのように、色がつき始めた。やがて皮膚の色こそ白かったが、ほとんど人間と変わらない人形ができあがった。

その人形の瞳が動き、弘通を見つめた。刺すような視線だった。

「待っていたよ」

人形は残忍な笑みを浮かべた。

弘通は息を飲んだ。人形と思っていたのは紛れもなく、秋口に遭難した滝口茂に違いなかった。ただ違う点の一つがあった。遭難したときの茂は自閉症を患う者独特の、穏やかな目をしていて、しかし目の前にいる茂は、オオカミのような目をしていて、

茂が何かを放って寄こした。

それはバレーボールほどの大きさで、弘通の腹に当たって雪面に落ちた。

弘通はそれを見え声にならない悲鳴を上げた。

雪の上に紀之の首が落ちていた。首だけになった紀之は、絶叫するがごとく、口を開き苦しげな表情をしていた。

二 罨

幸恵はコーナーを回るたびに大きくスリップする GT-FOUR に舌打ちした。

元々幸恵は雪が好きではなかった。雪国に調査に赴くことがあるなんて思いもしなかった。だから雪道がどんなに滑るものかも全く想像していなかった。タイヤはスノータイヤを履いているはずなのに、アクセルを踏み込むたびにコーナーの外側にむかってずると、車は滑っていった。もっともその主たる原因がアクセルワークにあるなどということ、幸恵は全く認識していなかった。普段からムスタングでロケットみないた加速を味わっていたため、日本車の加速では物足りず、つついアクセルを踏み込みすぎているのだ。たとえスノータイヤを履いていたとしても、雪道での急激なアクセル操作禁物だ。だがアメ車乗りになんかそれを要求することがどだい無理というものだ。

幸恵の心中を計るかのように、雪はひどく風も強くなっていた。視界が悪かった。幸恵はフロントウィンドウの向こうで渦巻く雪を見て大きくため息をついた。これではいつ宿につけるのかわからなかった。

林を抜けた辺りで急に風が強くなった。今までの林が防風林の役割を果たしていたためだ。渦巻いていた雪はすべて横殴りになり、寒冷地仕様ではない GT-FOUR のワイパーは、大儀そうにガラスに貼り付いた雪を掻いた。幸恵もまた今回の調査をひどく大儀に感じた。確かに大金を積まれたせいで引き受けたのだが、あまりにも調査対象は曖昧だ。

「雪女を捜して欲しい」

美濃部という男は確かにそう言った。

そして幸恵にはもう調査を断れない理由があった。貰った前金を家賃として支払ってしまったのだ。調査を断ろうにも貰った金はもうなかった。

横殴りの雪の中を幸恵は慎重に進んだ。運転に集中していたので、景色など全く見ていなかったし、見たところで雪しか見えないのだが、ほんの一瞬風が止んで視界が開けた瞬間があった。幸恵はその瞬間に何かに引きつけられるようにして、左手の緩やかな丘の上を見た。丘の上にはこの田舎には不釣り合いな程の大きな教会があった。石造りで二階建て。礼拝堂には百人もの人が入れそうな大きさだった。ただ何年も人が住んでいないのか、荒廃した雰囲気漂っていた。

その教会はほんの一瞬幸恵の前に姿を現し、あっという間に吹雪の中にかき消えてしまった。吹雪は建物をかき消す程ひどかったのだが、幸恵には自らの姿を一瞬だけ自分

に見せるために、その場に姿を現したかのように思えてならなかった。そしてその荒廃した教会の姿は、幸恵の心に僅かであるが決して消えない染みのようなものを残した。運転に集中しなければならなかった。だが、幸恵の心にできた染みのような違和感が消えることはなかった。

再び曲がりくねった山道に入っただけで、幸恵は車を大きくスリップさせてしまった。車は制御不能の状態のまま、右コーナーの一番深い場所の山肌にぶつかって停止した。深い雪のおかげで事故という程のものではなかったにせよ、タイヤが道路をはずれて溝に嵌ってしまった。ここで慌てずに処置すればまだ脱出の可能性はあった。だが雪の知識のない幸恵は、脱出するためにアクセルを踏みすぎた。溝の深いスノータイヤが雪を次々に掻き、タイヤの下に深い穴を掘り下げていった。アクセルを踏んだだけでは脱出できないのではないかと気がついたときには、すでに完全に脱出不可能な状態であった。幸恵はこのこと雪国まで出かけてきたことを後悔した。まだ宿までは数キロあるはずだ。この吹雪のなかを歩いていくのはかなりの重労働だ。幸恵はタバコに火を点けて一口吸うと、これからどうするかを思案した。

路肩でスタックしてから一時間ほどたったころ、民宿街に向かう一台の車に出くわした。風で髪が顔にかかり鬱陶しかったが、幸恵は車が通らないかとこれこれ三十分以上我慢して雪の中に立ちつくしていた。すっかり凍えてしまったが、それでも車が通りすぎようとする時に、手を振ると同時にスカートの裾を僅かに持ち上げることは忘れなかった。スカートが効いたのかどうかは分からないが、車は数メートル通すぎてからすぐに停止した。ぽんこつだが幸恵の GT-FOUR より遙かに雪道に強そうなセダンに六十前後と思しき男が乗っていた。

「済みません。車がスリップしてしまって。町まで乗せていってもらえませんか」

男は溝に嵌った GT-FOUR と吹雪の中に立ち尽くす幸恵を見比べ、暫く何かを思案しているふうだった。男の中でどのような結論がなされたのかは分からなかったが、幸恵は男の口元の僅かな動きを見逃しはしなかった。この男は何かをたくらんでいる。おおかたの想像はついたが。

「乗りなよ」

男は鬱陶しいほどの話し好きだった。

幸恵が助手席に乗り込むと男は雪道の運転の仕方をとくとくと説明し始めた。その説明はひどく回りくどく、長ったらしかった。さらに男が説明をするとき、必ず幸恵の方をむくのだが、男の目が幸恵の脚を盗み見ているのは明かだった。幸恵は車を止めるのにやったちょっとしたアクションを後悔した。だが町までの辛抱だ。本当ならひっぱたいやる所だが、乗車代金だとおもって諦めた。

男は雪道の怖さを力説しながら、何度も幸恵の方を向いた。その度に脚に注がれていた視線が一瞬上を向いた時に、幸恵の視線とぶつかった。途端に男の目が大きく見開かれ、それきり男は何も喋らなくなってしまった。脚を盗み見していたのがばれて恥じ入っているのかと思ったが、そうではなさそうな雰囲気だった。男は何かに驚愕しているようであったし、怯えている風にも見えた。まあ黙っていてくれるならそれでいい。幸恵はそう考え男を無視して風景に見入った。

道路脇に家が現れ始めるとすぐに、スキー場を中心としたメインの民宿街に入った。男

は幸恵が「高島屋」に宿泊すると言ったときに、高島屋はよく知っているのでもう送ろうと申し出た。だからその点だけは安心していただけだったが、車はあっという間に小さな民宿街を通り越してしまい、スキー場の裏手へ続く細い山道へと入っていった。

道は車一台がようやく通れる程度の広さで、両脇には雪を被った杉林がひろがっていた。見通しは悪く、勾配もきつかった。道の脇には所々民家が点在していたが、あまりこの先に宿泊施設があるようには思えなかった。

不審に思った幸恵は男に尋ねてみた。男は「もうすぐだ」と言うばかりで、それ以上を語らなかった。

かなり山を登り完全な山道になった。どう考えてもおかしかった。

「ねえちょっと。どこへ行くつもりなの？」

幸恵が強い口調で言うと、男はようやく広い場所をみつけて車を停止した。

「高島屋はどこ？」

幸恵の険のある言葉に男は平手打ちで返してきた。男の力は強く、容赦がなかった。痛みが全身を駆け抜けた。

幸恵が口を開くより早く、次の平手が飛んできた。幸恵はそれをかろうじて避けると、車から転げ出た。

「誰か」

叫んだところで助けてくれる人がいるはずもなかった。迂闊だった。長年探偵稼業をしていれば、もっと手前で気が付くはずだ。車の方を向くと、男が車から出てくるのが見えた。その手にはスパナのような工具が握られていた。何だかわからないが、このままでは殺されるかもしれない。幸恵は今来た道を走った。だが走り慣れていない雪道で、幸恵は足を滑らせてしまい、頭から道路脇の雪だまりに突っ込んでしまった。雪は深く、もがいても、もがいても、顔を雪の上に出すことはできなかった。息が苦しかった。慌てたために雪の粉を吸い込んでしまい、咳が止らなかった。気が遠くなりそうになった頃、ものすごい力で襟首を引っ張られた。さっきの男が襟首を掴んでいた。

「なぜお前がここにいる」

男はそう言うと、幸恵を今度は背中から雪だまりに突き倒した。

幸恵はひどく混乱したまま、またしても深く雪の中に埋もれた。男は私を知っている。何故なのか。だがそんなことを考えている余裕はすぐになくなった。崩れた雪が顔の上に覆い被さり、息ができなかった。幸恵は必死で雪を掻いた。掻いても、掻いても、崩れてきたが、それでも掻いた。ようやく顔が空気に触れると、再び雪の中に押し戻された。そんなことを何回か繰り返し、精も根も尽き果ててしまい、自分はここで死ぬのだろうか。何故このような目に遭うのだろうか。と考え始めたころ、ようやく雪に沈められる拷問から解放された。張り裂けそうな肺に新鮮な空気が運び込まれた。涙がとまらなかった。

涙をぬぐい、顔を上げると男はまだそこにいた。男はズボンを脱ぎ捨てていた。恐怖がせり上がってきた。男は自分を許したのではない。抵抗する力を奪うために雪に埋めたのだ。

自分はここでレイプされて殺されるのだろう。

その思いは確信となって幸恵を打ちのめした。もう抵抗する力など残っていないし、そ

の確信を退ける気力もなくなっていた。諦観が幸恵を押し流し、全ての苦痛を取り除いていった。もう面倒な調査を続ける必要もないし、これからのことを心配する必要だっていない。そしてなによりも驚いたのは、こんなにもあっさり負けを認めてしまう自分の弱さを発見したことだった。今まで長い人生を戦いながら生き抜いてきたつもりだった。ところが自分の本性はたったこれだけのことで、戦うことを止めてしまう情けない女だったのだ。

幸恵は笑った。自分をわらった。

笑いながら白い、雪のように白い意識の谷の底へと落ち込んでいった。

幸恵は気を失った。

銀次はスノーモービルのアクセルを全開まで捻った。昨日の不安を忘れたくて、意味もなくスノーモービルを飛ばしていた。黒岩には街まで買い物に出ると言ってあったが、特に何も買いはしなかった。真っ直ぐ帰る気にもなれず、裏手からスキー場の中腹に抜ける山道が無意味に飛ばした。いくつものコーナーをオーバースピードで曲がり、危うく谷に落ちかけもしたが、アクセルを緩めるつもりはなかった。

美濃部善三という男。

銀次は確かに男を刺した。いまでもはっきりとその手応えを思い出すことができた。まるでプリンにスプーンを差し込んだときのように、ナイフの刃はすとと善三の喉に吸い込まれた。もっと手応えがあると思った。そして男が倒れて。

銀次は何度も何度も同じ場面を思い起こした。忘れようとしても忘れられなかった。いっそのまま谷底に落ちてしまえとアクセルを最大限捻ったその時、銀次の目の前を何か横切った。銀次は反射的に急ブレーキをかけた。

その何かは谷底からカモシカのように、雪の中を駆け抜けて山を登っていった。そして杉林に隠れてあつという間に見えなくなってしまった。だがほんの一瞬だったとはいえ、銀次はそれがはっきり人間の姿をしていたのを見ていた。

「なんだありゃ。まるでカモシカだ」

何者かが通った雪面にはほんの僅かに、手でひっかいた程度の深さの跡が残されていた。そしてその跡は約十メートル間隔で林の中へと消えていた。

よく黒岩が酔ったときに言っていた。山には人の力ではどうにもできない領域がある。人間が機械を使って押し寄せても、自然の力で押し返されてしまう領域だ。その領域を太古からずっと守っている連中がいる。お前には信じられないだろうが、それは紛れもなく事実なのだ。人間は何度もその正体を暴こうと試みたが、彼らは自然に守られている。そして自然の力は人間の力などとは比べようもなく強大だ。だけどいつかかならず彼らを白日の許へ引き出す日がやってくるだろうと。

もしかしたらその何者かが今姿の一端を現したのかもしれない。しかし考えれば考えるほどそんなことはあり得ないように思えた。手で搔いたほどの足跡しか残さずに、十メートルもジャンプしながら雪山に登る生物だって？ カモシカだってそんなことは不可能だ。人に話せば失笑を受けかねない。銀次は今日にしたものが神経の疲れによる幻覚なのではないかと思い始めた。

では足跡は何なのか。

風のいたずらさ。人間ほどもある生物が、手で搔いた程度の足跡しか付けずに移動できるはずがないではないか。

銀次は常識という繭にくるまり、何も見なかったという正当な理由を付けていった。そうしてる間にも、雪がその証拠を確実に消し去っていった。

あらかた足跡が消えたので、銀次はスノーモービルに戻りかけた。そして女の悲鳴を聞いた。

「今度は何だ？」

今のは明かに悲鳴だった。幻聴なんてとても言えない。

じゃあ、さっきのも幻覚じゃないっていいのか？

何にしても悲鳴が上がれば誰かが危機に瀕している可能性があるということだ。何もなければそれでいい。

銀次は急いでシートに跨ると、アクセルを捻った。

男は幸恵の足首に手をかけた。

手をかけてその手をまた引いた。そして女の顔を見た。似ていた。五十年近く前に失踪したある女に。似ているというよりもうり二つだった。しかし失踪事件は五十年も昔の話だ。本人であるはずがない。

男がその女の写真を見たのは中学生のころだった。郷土の歴史をまとめるために、図書館で昔の新聞をすみからすみまで読み、郷土がどのように発展を遂げてきたのかを調べていた。暗くて湿気の多い図書館だった。書架の間で新聞を広げていて写真を見つけた。新聞の荒い写真でも、女が色白でこの辺りでは見掛けられないほど美しいということは分かった。女は亭主と子供を残して失踪した。新聞には痴情と書かれていた。そして女が失踪してから約一年後に亭主が死んだ。森の中の木の枝に、まるでモズのはやにえみたいに突き刺さって死んでいた。しかし死因は凍死だった。男が死んだときに、再び女の顔写真が載せられた。記事には男の死との関連性を調査中と書かれていた。それきり捜査の進展はなく、新聞に記事が載ることはなかった。

だが、女の顔写真が頭から離れることは無かった。ことあるたびに男は顔写真を思い出した。女を見ればすぐにあの顔が浮かび上がった。男はいつしかあの顔写真の女に恋を

し、そして女を憎んでいた。

男は再び幸恵の顔を見た。暗い書架の間で見たあの写真とそっくりだった。あの失踪した女であるはずがない。五十年も前の失踪事件だ。きっとこの女は何の関係もないのだろう。だが数十年に渡ってここに思い描いてきた顔の女が目の前にいる。どうすればいいというのか。決着をつけるしかないではないか。今こそ女の顔写真を忘れるときなのだ。

男は幸恵の衣服に手をかけた。

雪が黒いコートに白い斑点を描いていた。時折強く吹く風が雪を舞い上がらせ、そしてまた雪は降り注いだ。全ての音が消え去り、息を詰めたみたいだった。

男は突如後ろに突き飛ばされ、道路の反対側まで転がった。

何が起ったのか理解できなかった。一瞬女が意識を取り戻して、自分を突き飛ばしたのだと思った。だが目の前に立ちふさがった人影が、そうではないことを気づかせた。女は相変わらず雪の上に横たわったままだった。そして目の前には一人の少年が立ちふさがっていた。

少年は女の方をじっと見ている。

「なんだお前」

振り向いた少年の顔を見て男は息を飲んだ。目の前に滝口茂が立っていた。どうなっている。現実にはいない人間が二人も目の前にいる。

「お前、死んだんじゃないのか」

茂は涼しげな目を男に向けた。そして口元に僅かに笑みを作った。その小さな笑みは昔と違い、どこか残忍さを含んでいた。男の知っている茂は自閉症を患っていたが、優しく愛嬌のある笑顔を持っていた。こんな血の気の無い笑い方はしなかった。季節はずれの吹雪で遭難した茂。五十年の歳月を飛び越えて現れた女。男の中で何かが噛み合った。次の瞬間突風が吹き抜けた。視界は一気に失われ、全てがツヤを失った白一色に塗り込められた。雪は地面を叩き、風が杉を揺らした。

風が止んだとき、道路には男の姿はなかった。茂の姿もなくなっていた。

銀次がコーナーを危ういスピードで曲がると、目の前に雪の壁ができあがっていた。

強風で雪が渦巻き視界を完全に遮っていたのである。銀次はそのまま雪の渦に飛込んだ。道は完全に頭に入っていた。もうすぐスキー場への入り口に到着してしまう。さっきの悲鳴は一体どこから聞こえてきたのだろうか。すると一台の車が脇に止まっているのが目に入った。銀次は直感的にここだと思った。さっと辺りを見回したが、吹雪がひどくて何も見えなかった。

そしてまた悲鳴が聞こえた。悲鳴はすぐ脇からで男のものようだった。

「おうい」

声をかけたが返事はなかった。

風が止んだ。全ての視界が戻ってきた。

声の方角には何も無い。ただ白い山肌があるだけだった。

銀次はスノーモービルから降りると辺りを見て回った。雪の中に一人の女が倒れていた。さっきの悲鳴の女に違いなかった。慌てて駆け寄り、女を抱き起こした。顔を見て銀次は息を飲んだ。女は千春だった。

「なぜお前がここにいる。おい、千春しっかりしろ」

幸恵は銀次に揺り起こされて意識を取り戻した。慌てて両手で相手を押しのけたが、さっきの男では無かった。

「誰？ さっきの男は？」

男は困惑した目つきで自分を見つめていた。

「全く驚いたな。本当に千春って名前に聞き覚えはないかい」

銀次はスノーブレークのレストランに幸恵を座らせると、マグカップに熱い珈琲を注いで幸恵の目の前に置いた。何度見ても千春にうり二つだ。確かに髪型や雰囲気は全く違うが、顔立ちは血がつながっているとしか思えない程だった。

「知らないわ。それにあなたの恋人じゃあまだ若いんでしょう。あたし実はそんなに若くはないのよ。高校生の息子だっているわ」

「高校生？ 嘘だろう。どう見たって二十代にしか見えない」

「お世辞？ ありがとうと言っておくわ。そういえば助けて貰ったお礼もまだだったわね。本当にありがとう」

「悲鳴が聞こえたもんでね」

銀次は照れくさそうに笑った。

それにしても本当にひどい目にあった。もし銀次が通りかかってくれなかったら、どうなっていたのかと思うとぞっとした。しかしあの男はなぜ豹変したのだろう。車の中で男と目が合った途端に男の態度が変化したのが気に掛かった。その変化には嫌らしい感情は含まれていないように見えた。それよりも何かに憑かれた男の目だった。それに男は一体どこに消えてしまったのだろう。幸恵は珈琲を啜りながら考えた。考えても分からないことばかりだった。

「疲れているだろうし、今日はここに泊まっていくといい。どうせ客なんて一人もいないし、きっと親父も喜ぶだろう」

「そうね。何から何までありがとう。でも高島屋に電話だけでもいれないと」

「高島屋？」

銀次が不審な目を向けてきた。

「どうかしたの？」

「幸恵さんを拾ったところに乗り捨ててあった車だけど、あれ高島屋の車だよ」

幸恵は背筋が寒くなった。もしこんな事がなければ、今頃はあの男の経営する旅館に泊まっていたはずだ。そうなれば夜中に何をされるか分かったものでない。幸恵は努めて平静を装い「そう」とだけ応えた。

銀次が黒岩に説明をしに行っている間、幸恵はぼうっとマグカップを眺めていた。そし

てふいに今回の調査は止めた方がいいのでは無いかと思った。今回はいつもと何かが違った。いつものペースではないし、背後に何か得体のしれないものがうごめいている気がしてならなかった。その何かは全く分からなかったが、あの善三という男が絡んでいることだけは確かだった。幸恵は暫く考えを巡らせた後、なんとしてでも金を工面して、調査をうち切ろうと決めた。背に腹は代えられないとは言っても、殺されたりしては意味がない。殺されるくらいなら、上野の歓楽街に身を落としてでも生きていたいと思った。そしてふいに笑いがこみ上げてきた。ついさっきもう死んでしまってもいいと考えたばかりだった。それが今となってはどうしてそんな考えに至ったのかさえ理解できない。幸恵は人間とは本当に弱い生き物だと思った。

「本当に大変でしたね」

背後で張りのある声がした。オーナーの黒岩だった。

幸恵は立ち上がると、深々と頭を下げた。

「ご迷惑でなかったら、一泊泊めていただけませんか」

顔を上げると、目の前の男ははにかみながら右手を差し出した。

「ぼろ宿ですが、ぜひ泊まっていてください。できるかぎりのおもてなしはさせていただきます」

誠実そうな男だと幸恵は思った。

ところが幸恵はまたしても不安の激流にぶつかった。

幸恵の顔を見た黒岩の表情が驚愕に歪んだのだ。二人の差し出された手は宙に浮き、決して握り合うことはなかった。

幸恵は泣きたい気持だった。一体なぜ。なぜみんな私を見ると驚くのだろう。幸恵は差し出した手を引き、拳を握った。

「親父どうしたんだ」

銀次の言葉で我に返った黒岩は咳払いともつかない短い一言を発した。差し出した手はもうズボンのポケットにしまわれていた。

「牡丹に案内しろ」

黒岩は不機嫌そうにそれだけ言うとすぐに奥に引っ込んでしまった。

銀次は申し訳なさそうに言った。

「どうしたんでしょうね。普段は確かに無愛想な親父だけど、お客さんに当たるような人じゃないんだけどな」

幸恵は大声を上げそうになるのをかろうじてこらえた。口を開いた途端に飛び出すのは罵りの言葉よりも嗚咽になってしまいそうだったからだ。幸恵は鞆を持つと黙って銀次につづいた。

案内された部屋はいかにも山小屋といった雰囲気のある、木の質感を十分に活かした部屋だった。二重になった窓からは晴ればスキー場が一望できるそうだが、今は吹雪以外には何も見えなかった。ベッドカバーはあの黒岩が選んだとは思えない、花柄の可愛いものだった。銀次曰く全て黒岩が一人で作ったものだそうだ。

幸恵はベッドに腰を下ろすと鞆から手帳を取り出した。善三に仕事のキャンセルをお願いするつもりだった。ありがたいことに携帯電話がつながった。

「もしもし、美濃部さんでしょうか。ローズ探偵社の草加です」

「やあ、どうです。調査は進んでいますか」

善三が明るい声で返してきた。

幸恵は少しためらったが、今切り出さなければ二度と言えないだろうと思い、話を切りだした。

「あの、調査についてなんですけど、今更なんですけど別の探偵社にお願いしてもらうことはできないですか？ お金はなるべく早くにお返ししますから」

「これは驚いた。もう手に負えなくなったということですか。あなたらしくもない。あなたはもっと優秀だと思っていた」

「私はそんなに優秀じゃないです。それに手に負えなくなったというよりも、この調査はそもそも無理だと思うようになったんです。雪女を捜せなんて」

善三の豪快な笑いが幸恵の耳に突き刺さった。

「確かに雪女を捜せなんていうのは普通なら無理でしょう。雪女は伝説の妖怪ですから。でもあなたならそれなりの成果を上げられると思ったから、あなたにお願いしたんです。そんな簡単には諦めないでください。それに私が渡したお金ですが、もう家賃として払ってしまったのでしょうか？ 違うのですか」

幸恵には返す言葉がなかった。

「返すといってもサラ金に行くしか手はないでしょう」

これも事実だ。幸恵はなんとか言い返したくて思いついたことをすぐに口に出してしまった。

「どこからお金を捻出するかをご心配いただくなくても結構です。親の脛でもかじりますわ」

すると電話の向こうからため息が聞こえた。明かに幸恵の嘘を見抜き、軽くあしらったというため息だった。そして善三は声のトーンを下げた。

「私もね、親の顔は知らないのですよ。あなた同様にね」

幸恵は思慮の足りない言葉を発したことを、後悔すると同時に身体が熱くなるのを感じた。なぜ善三は自分が施設の出だということを知っているのか。しかも善三は同様にと言った。それは自分もまた施設の出だということではないか。

「何のことだか」

幸恵はそう言ったが、声は震えていた。

「まあ、いいでしょう。いまさら調査なんてどうでもいいことです。どうせあなたはもう抜け出すことはできないのだから」

善三はそれだけ言うと勝手に電話を切ってしまった。

「もしもし、美濃部さん」

幸恵は何度かかけ直したが、もう二度と善三の電話はつながらなかった。

善三はもう抜け出せないといった。あの男が何らかの罫を仕掛けたことだけは確かだ。そして自分はその罫にすっかり嵌っているようだ。どうすべきだろう。今日のことといい、考えることだらけで気分が悪くなりそうだった。幸恵は善三の言葉をなんども頭のな

かで繰り返した。だからいつの間にか銀次が部屋に入ってきたことに気が付かなかった。

「幸恵さん」

幸恵はびっくりして悲鳴を上げた。

「ちょっと勝手に部屋に入らないで。どういうつもり」

銀次は幸恵の言葉には怯まなかった。それどころか怖い顔をして近づいてきた。

「いま、美濃部といましたか」

「ちょっと、人の電話を盗み聞きしていたの？」

「済みません。盗み聞きするつもりじゃなかったんです。でも美濃部という名が聞こえたもので、つい。美濃部ってまさか美濃部善三のことじゃないですよ」

何で銀次が善三の名を知っているのだろう。

「そのまさかよ。何故あなたがその名を知っているの？」

銀次の顔から見る見る血の気が引いていった。そして銀次は黙って一部の機関紙を幸恵に手渡した。

機関紙を開いてみると、後ろの方に善三の顔写真が載っていた。忘れろといわれても忘れられない顔立ちだ。そして記事を読んで唾然とした。記事には善三が死んだと書いてあった。

「どういうこと」

「分からない」

「私は死人と話しをしていたというの？」

「親父が葬式に出たって言っていた」

幸恵は言葉に詰まった。葬式をしたのなら本当に死んだということだ。偽装の葬式をするのは並大抵のことではない。しかし善三が幸恵の事務所に訪れたことも事実だった。常識的に考えれば幸恵の知っている善三が偽物ということになるが、顔は写真とまったく一緒だった。整形でもしない限りこう同じにはならない。

「ねえ、役所に行けば死亡確認ができるわ。連れて行ってくれない？」

銀次は時計を見た。受付時間はとうに過ぎていた。しかし銀次もまたどうしても事実をしりたかった。

「明日朝一で出かけましょう」

「いいわ」

その夜幸恵はなかなか寝付けまいだろうと思っていた。だが昼間の疲れからか、ベッドに横になるとすぐに眠り込んでしまった。風が窓を揺らす音も全く気にならなかった。だから夜中に扉がそっと開いたことなど気づくはずもなかった。

暗がりの中で扉は僅かに軋み音を発した。そして奥の暗闇から一人の男が室内に滑り込んできた。男は黒岩だった。

黒岩は寝入っている幸恵を黙って見つめた。顔は能面のようなであった。ただ拳だけが力強く握りしめられていた。

黒岩は一時間近くも黙って幸恵を見つめた後、入ってきたのと同じように、闇に溶けるようにして部屋を出ていった。

三 吹雪

高島ふみは布団から抜け出ると、もう一度戸締りを確認した。

強い風がいつも以上にがたがたと雨戸を揺らしては、時折思い立ったように静かになった。と思うと再び猛烈な勢いで吹き付けて雨戸を叩いた。

時計は二時を回っていた。なのに息子の忠則は一向に帰ってくる気配がない。今日は寄り合いもないからすぐに帰ると言っていたのだ。

それにふみにはもう一つ気になることがあった。今日予約を入れていた客が、突然キャンセルを申し入れてきたのだ。突然キャンセルというのは民宿には付き物だが、やはりなんど味わっても寂しいものだ。このところ客足が減っていたので、料理も少し張り込んでいい思い出を作ってもらおうと考えていたのだ。これで一週間一人の客もなしだった。ふみは全ての戸締まりを確認すると、再び奥の部屋へ戻っていった。

古い農家を利用して民宿にした高島屋は、窓のない部屋がいくつもあった。普段窓のある明るい部屋はお客さんに利用してもらうので、ふみや忠則は一番奥の、湿っぽい座敷を使用していた。さすがに客の一人もいない上に、忠則もない夜はあの奥座敷に寝るのは気が滅入った。ふみはいろりのある部屋に布団を移動しようか迷った。

その時裏手の泉の辺りで音がした。大きな魚が跳ねるような音だった。しかし泉にはたいした大きさの魚はいない。誰か人がいるのかも知れない。そう思うと急に心細くなった。こんな時に忠則がいてくれたら。

戸締まりを再確認すると、ようやく気持が落ち着いた。不安な夜は寝てしまうに限る。朝になってしまえば、夜の不安など笑い飛ばせるというものだ。ふみはもうどんな音がしようと、布団から出ずに寝てしまおうと心に決めて床に潜った。布団に潜るといやに静かだった。あれほど荒れ狂っていた吹雪は、いつの間にか止んでいた。

次の瞬間、ふみの誓いは急速にしぼんでいった。裏の泉で再び音がした。しかも今度は一度ではなく、何度も何度も水を叩くような音が続いた。まるで竜が泉の中で暴れているかのような音だった。これにはふみも肝を冷やした。寝ることはおろか、恐ろしくて布団から出て、外を見ることすらできなかった。

しばらく続いた音は唐突に止んだ。暫く静かだった裏手から、今度は植え込みをかき分け枝が折れる音や、雪を踏むとき特有のざくざくという音が聞こえた。その音は高島屋の周りを移動していた。いくつもの足音がまるで入り口を探しているようにも聞こえた。ふみにはその足音がどうしても人間の足音に聞こえなかった。どこが違うのか分からない。リズムというか、何かが人が歩く時のそれと僅かに違うのだ。

ふみは布団の中で恐ろしさに震えた。布団を被っても、明かに足音は聞こえていた。裏手から勝手口。勝手口から廊下沿いに。その間ふみはずっと小声で経を唱えていた。ひょっとすると、先に逝ったじいさんへの供養が足りなかったために、向かえに来たのかもしれない。

「なんまいだ。なんまいだ」

そして雪鳴りはついに玄関へと移動した。

玄関に誰かがいる。

そう思うと心臓が張り裂けそうだった。

唐突に玄関ががたがたと揺さぶられた。

ふみは悲鳴を漏らした。同時に玄関の音が止んだ。中に人がいることを悟られてしまったのかもしれない。いやそうに違いない。ふみは思わず悲鳴を漏らしたことを本気で後悔した。だがもう遅い。外にいる何者かは中にふみがいることに気がついてしまった。もうどうすることもできない。ふみは経を唱えることも忘れ、呆然と襖の向こうの玄関を見つめた。

しばらくの沈黙の後、玄関が再び揺さぶられ始めた。だがすぐに玄関は静かになった。

ふみは僅かにほっとした。何者かは鍵に阻まれふみを探す事をあきらめたのだろう。

ところが安心したのもつかの間。また何物かは玄関を揺さぶり出した。今度はさっきよりも強く、音はどンドンと大きくなっていった。サッシが軋み、壁が揺れた。硝子が振動に耐えきれず、ひびの入る音がした。そして振動が最高潮に達したと同時に、強烈な破壊音が響きわたった。玄関サッシが壊されてしまったにちがいがなかった。襖の隙間から凍えそうな冷たい空気が漏れ入って来た。

冷たい空気は足下からふみの身体にまとわりつき、縛り、決してふみを放そうとはしなかった。玄関からは雪が吹き込んできているのが音で分った。

そしてふみは直感的に、自分の命がもう長くはないことを悟った。

板張りの廊下を誰かがゆっくりと移動していた。古い廊下は誰かが歩くたびに軋んだ音を立てた。音は継ぎの間や、客間を通り越し、真っ直ぐに奥の間に向かって来た。誰かはここにふみがいることを確実に知っていた。

奥の間の襖が開かれた。

奥の間に雪が吹き込んで来た。降りしきる雪の中に立っているのは、他にもない忠則その人であった。

「忠則、忠則」

ふみは何度も呼びかけたが、忠則は何も返事をしなかった。忠則はどこか様子がおかしかった。ズボンも履いていなければ、全身ずぶ濡れの状態で、水が寒さで凍っていた。普通の人間ならば、凍えてしまうはずだ。

ふみはそれでも帰ってきた息子に縋り寄った。そして両手で抱きしめて初めておかしいことに気が付いた。

冷たすぎるのだ。

忠則の身体はまるで氷のように冷たかった。そとで凍えて帰ってきた時の冷たさではなく、まさに氷そのものの冷たさだった。

忠則が初めてふみを見た。目が白く濁っていた。

忠則は口を大きく開くと一気に息を吐き出した。

口からは真っ白な息が、外の吹雪を上回る勢いで吹き出した。

ふみの身体がたちまちにして白くなった。ふみは僅か数秒で完全な氷になった。

「運べ」

人影の一番後ろにいた茂が言った。

数名の人影から一番身体の高い男が前に歩み出た。花田だった。

花田はふみの身体を忠則から引きはがし、軽々と持ち上げ肩に担いだ。

一行は高島屋を跡にした。

大地を揺るがすような猛吹雪が辺り一面を真っ白く染め上げた。数秒間の間、目を開いていることすらできないようなひどい有様だった。風が家々の軒を切って唸り、氷柱を吹き飛ばした。ようやく風が収まった時、高島屋の周りには誰もいなかった。

四 白い牢獄

翌朝、幸恵は銀次につれられて町役場まで出向いた。

町役場は閑散としていた。冬場はスキー場の関係で観光課が活気づくのだが、今年は例年になく客足が伸び悩んでいるせいで、役場全体が氣勢をそがれた風だった。

二階の町民課に出向くと、黒縁眼鏡の細面の職員が対応した。職員はいちいち指を舐めながら書類をめくり、ひどく手間をかけたが、それでも善三の死はすぐに確認できた。

「ただ」

一通りの説明を、北陸なまりを交えながら説明すると、職員は眼鏡をおでこに乗せて言った。

「ちょっと事件があったがやね」

「事件？」

幸恵が身を乗り出すと、職員は探偵さんだから特別に教えましょうと前置きをした。

「葬式はそりゃあ盛大だったですよ。このあたりじゃあ美濃部さんは名士でしたから。市の方からも大勢お偉いさんがやってきて、ああでもねえ、こうでもねえって、美濃部さんの追悼をとりました。ところがね、葬式もあらかた済んで、あとは火葬場に出棺というときに騒ぎが起ったんですよ」

「どんな騒ぎです」

職員は小さなめをくりくりとさせてから幸恵をじっと見た。

「探偵さん、えらいべっぴんさんですな」

「そんなことより騒ぎの内容を教えてください」

職員は眼鏡を外すとハンカチで拭き始めた。

「私はね、この役場でもう三十年も働いているんですわ。それもずっと町民課ですがや。先日孫も生まれましてな。これがまた珠のようにかわいい」

幸恵は仕方なく財布から千円札を数枚だして職員に手渡した。

「はっはっは。孫にもいろいろと手が掛かりまして。私の小遣いも少なくなったものですか」

職員はそういうわけをしてから話を続けた。

「死体が消えたんですわ」

「死体が消えた？」

「そう、消えた。棺桶から煙みたいに」

「誰かが盗んだってということですか」

「さあねえ。その辺は警察が詳しいんじゃないですかね。でも噂じゃあ夜中に自分で歩いて出ていったって話ですよ」

「そんな馬鹿な」

銀次の強い口調に職員は慌てて

「噂ですよ、噂」

と言った。

役場を出ると二人は葬儀屋に向かった。きっと噂の真相は葬儀屋が知っていると推測したのだ。

ところが葬儀屋は一切を否定した。もちろんその理由は怪しい噂が流れれば、営業に差し支えるからに違いなかった。

「次はどうしますか」

「そうね、善三の過去を洗ってみたいわね。その辺に詳しい人が誰かいないかしら」

銀次はそれならば格好の相手がいるとって胸を叩いた。

美智子はタバコに火を点けると値踏みするような目で幸恵を眺めた。

「なるほどこの辺りじゃあお目にかかれなようなタマだ」

「どういう意味かしら」

「あんたのことはもう噂になってるってことさ。高島屋のぼんぼんが絶世の美女を連れて山に向かったってね」

幸恵は身体が熱くなった。なんていう人たちだろうと思った。

「それで何を知りたいって」

幸恵は慎重に言葉を選んだ。この女は気が抜けない相手だ。

「美濃部さんがここでどのような仕事をしていたのか、教えてもらえるかしら」

「あんた、善三の何さ」

「以前に仕事を依頼されたことがある者よ。その時にちょっとした借りを作ったの。その借りを何とか返したいのだけれど、美濃部さん亡くなったそうね。孤児であったということは役場で聞いたわ。ならばせめて仕事の関係社とか友人と会えないかと思ったのよ」美智子は信じたような、信じていないような曖昧な返事をした。そして「待っていな」と言って奥へ引っ込んでしまった。

「どうだい。何か聞き出せるかな」

幸恵はふんと鼻を鳴らすとタバコに火を点けた。

「大した狸よ。ちょっと手こずるかもしれない」

きっかりタバコ一本分で美智子は戻ってきた。もしかしたら奥で同じようにタバコを吹かしていたのかもしれない、と幸恵は思った。

美智子はカウンターに一枚の古びた写真を置いた。

写真は村のゴミ焼却場建設現場で取られたものだった。数名の背広の男たちと、建築現

場の作業員が写っていた。背広の男たちの真ん中に善三がいた。写真からでも善三の勝ち気な様子が窺えた。

「背広が四人写っているだろう。その真ん中は善三だってことぐらいはわかるだろうけど、あとの三人が善三の政界仲間さ」

善三以外の三人はみな結構な歳だった。善三はこういった地元の有力者と接することで、地盤を固めていたらしい。

「誰かと会える？」

「みんな死んだよ」

「えっ？」

この女は一体どういうつもりなのか。幸江には美智子の真意が計りかねた。

「どういうことだか、説明してもらえるかしら」

「そのジジイどもはみんなくたばったって言ったのさ。でもそいつらの息子や孫ならまだしぶとく生きてる。その左のジジイの孫がよく裏手の『酒田』って飲み屋にたむろしてるよ。そいつはあたしが男にしてやったんだ。あたしの言うことなら何でも聞くよ」

幸江は美智子の言葉の終わりを聞かずに礼を言って店を出ようとした。ところが入り口で二人の警官に行く手を阻まれた。

「済みません。通してもらえますか」

「草加幸江さんですね？」

警官の問いに幸江は戸惑った。名前を聞かれるということは、明かに自分に用があるということだ。田舎の警官が一体何の用なのか。すると後ろから美智子の微かな笑い声が聞こえた。どうやら美智子が呼んだ警官らしかった。

「どういうこと？」

幸江の美智子に対する問いに答えたのは、二人の警官の影に隠れた男だった。

「俺が説明しよう」

見ると警官の後ろに佐久間が立っていた。

「昨日の晩、高島屋という民宿が何者かに襲われて、そこの女将とその息子が姿を消した。どうやら数名の無法者が二人を拉致して、旅館を徹底的に破壊したらしい」

「それとあたしと何の関係があるのよ」

幸江はふつふつと怒りがわいてきた。佐久間は自分を追ってここまでやってきたに違いなかった。自分がこの町にやってきたのは、薬物の取引をすると推測したのだろう。

「確かあなたは高島屋に泊まる予定でしたな。それが急に予定を変更した。予定を変更した途端に高島屋は何者かに襲われた。あなたあそこで何があるのかを知ってたんじゃないですか」

「知るわけじゃないじゃない。高島屋が襲われたですって？ それこそたった今あなたの口から初めて聞いたわ」

佐久間は警官に連れて行けという合図をした。

「まあ、何にしても詳しいことは署で聞きましょうか」

「私を拘束する理由はどこにもないわ」

佐久間は幸江の目の前に、銀色のタバコケースのような物を掲げると、わざわざ目の前で開けて中を見せた。ケースの中には白い粉の小袋が数個と、注射器が入っていた。

幸江は目の前が真っ白になった。それは自分の薬ケースだった。旅行の時に密かに常用している薬物を入れておくためのものだ。

「いやね、スノーフレークって言ったっけ。あそこのご主人がなかなか協力的な方でね」
「親父のやつ」

銀次が苦々しげに呟いた。

「ああ、それと。美智子さんって言いましたっけ。ご協力感謝いたします」

佐久間はわざわざらしく敬礼すると、幸恵に勝ち誇ったような視線を向けてから店を出ていった。

鶴崎警察署に着くやいなや、幸恵は留置場に放り込まれた。六畳ほどの広さで、トイレとコンクリートの壁に設置された簡易ベッド以外には何も無い部屋だった。後ろで鉄格子の鍵がかけられると、数年前に薬物取締法違反で逮捕されたときの情景が思い出された。あの時も佐久間に留置場に放り込まれたのだ。ただあのときと違うのは、この留置場がひどく寒いということだ。署内全体に暖房は入っていたが、留置場は別世界のようには寒かった。幸恵は簡易ベッドに腰掛けた。簡易ベッドもひどく冷たかったが、なにより冷たいのは床だった。足下からいよいよの寒さが這い登ってきた。幸恵は足を持ち上げ、膝を抱いた。

「ちょっと、弁護士を呼ぶから電話を掛けさせてよ」

幸恵は大声で怒鳴ってみたが、警官はもう引き上げてしまい、留置場付近には誰もいなかった。別の房で保護されたい酔っぱらいがぶつぶつと何かを呟いていた。天井近くの窓にはすっかり雪が貼り付き、外からの光りを遮っていた。その光景が寒さを倍増させていた。

幸恵はこれからどうするかを必死で考えた。あの薬のパケを見つけられたのは手痛かった。あれではいい訳のしようがない。実刑判決は免れないだろう。あとはどうやって刑を軽くするかだ。それには弁護士の協力が必要だ。

「ちょっと、弁護士を呼べて言っているのが分からないの」

声の限りに叫んだ。酔っぱらいが「うるせえ」と呂律の回らない口で返してきた。警官は誰も来なかった。

暫く時間がたち、気持ちが落ち着いてくると、今度は讓のことが気になりだした。また逮捕されたと聞いたら讓はどう思うだろうか。もう私を母だとは思ってくれなくなるかもしれない。そう思うと幸恵は泣きた気持ちになった。

何度目かの調書を取られた後、幸恵は房に戻された。寒くて仕方なかったが、疲れ切ってしまい一刻も早く眠りにつきたかった。簡易ベッドになだれ込むと、看守が鍵をかける音を遠くに聞きながら眠りに落ちた。

五 リンク

必ずどこかに繋がりがあはずだ。佐久間は雪道をすべりそうになりながら考えた。

幸恵を留置場に入れ、鍵を閉めた時の弾んだ

気持はいつしか消え、全ての点がつながらないもどかしさだけが残った。

幸恵をうまい具合に確保することはできたが、幸恵自身は相変わらずスノーとの関わりを否認していた。だが考えてもみろ。昨日の高島屋の荒れ具合を。家中がどこもかしこも真っ白だった。隙間という隙間にすべて雪が吹き込んでしまっていて、中の荷物はどれとして使い物にならないだろう。それに破壊の跡も著しい。その様子はまるで都内の某所で起ったスノーにまつわる死亡事件の証言に似ていないだろうか。たしかディスコで少年が倒れるところを見ていた若者は、口から吹雪みたいに白い粉を吹きだしたと言っていなかったか。そして鑑識はどうだ。湿度が高い。雪でも降ったみたいだと。

それがどうしたというんだ。

佐久間は自分の頭をこづいた。そんな非現実的なことがあるはずがない。ディスコの件は集団幻覚に違いないし、今回は賊が窓を破壊したせいで吹雪が吹き込んだに過ぎない。佐久間は自分の目で見た物しか信じないし、説明のつかない推論に手を出すほどおちぶれてもいないと自負していた。物事には必ず原因があり、その結果が事件として形をなすのだ。それぞれの事件にはそれぞれの動機があり、その動機が偶然似たような結果を招いたに過ぎない。だが佐久間は心のどこかにひっかかりのようなものを感じた。二つの事件に共通するなにかが存在するのでは無いか、という疑念をどうしても捨てきれなかった。

佐久間は何度も足を滑らせながら先を急いだ。幸恵とスノーとの関係はまだ割れていない。幸恵が持っていたのはスノーではなかった。だが幸恵が鶴崎にいるということは、必ず鶴崎にルートがあるということだ。

大通りを外れ、商店街の裏通りに出ると佐久間は古びた雑居ビルに足を踏み入れた。入り口には「スナック・ルシファー」と書かれていた。ばかげた名前だ。そしてやってる商売はもっとばかげている。表向きはただのスナックだが、裏では情報屋をやっている。そしてさらに多少の薬物販売も手がけているマルチビジネス・カンパニーだ。地方では手がける人間が少ないせいか、どうしてもそういったビジネスは一カ所に集まりがちだ。狭い階段を登り、黒塗りのドアを開けると、締め切った店舗特有の甘ったるいにおいが漏れ出てきた。店内には窓がなく、てかてかの紫のカーペットに真っ赤な壁紙がグロテスクだ。テーブルは四つ。店員もいるのだから、客は十人も入れれば一杯だ。出入り口は一つしかなく、消防設備はない。点数稼ぎをしたい警官が喜びそうな物件だ。

佐久間がカウンターを拳で叩くと、奥から野太い声がした。

「まだ営業時間じゃないわよ」

半分化粧をした顔の長い女が出てきた。歳は五十を過ぎているのだろう。まるで妖怪だ。

佐久間は警察手帳を取り出すと、女主人につきつけながら様子を窺った。案の定女目が泳いだ。後ろめたいことをしている証拠だ。

「べつにあんたの裏商売をとがめに来た訳じゃないよ」

「裏ってなによ。水商売はまっとうじゃないって言うの」

女はカウンタースツールに腰掛けると、足を組みタバコを銜えた。この手の女はどうしていつも同じ動きをするのだろう。骨張った足から血管が浮き出していた。

「べつに水商売がまっとうじゃないなんて言っていないよ」

佐久間は喋りながら店内を物色した。ソファの裏を覗いたり、観葉植物の鉢を覗いたり。その都度女の顔色に目を光らせた。度胸がいいのか管理ができていいのか女は顔色を変えなかった。佐久間は厨房に足を向けた。

「ただ、ちょっとした情報が欲しいだけなんだ」

佐久間が厨房に足を向けた途端に女の細い眉が動いた。どうやら商品は厨房のどこかに隠されてるらしい。女が自然を装って佐久間の進路に立ちふさがった。

「そろそろ開店の準備しなきゃいけないのよ。帰ってくんない？」

「ちょっと厨房を覗いたら帰るよ」

「令状あるの」

「何ならコンビニで買ってこようか？」

女が「ちっ」と口をならした。どうやらどっちの立場が強いかを理解したようだ。薬物専門の警官というのは、逆に売人にもすぐにそれとわかるものなのだ。

「あたしのメリットは？」

「明日も店を開けられる」

女は苛立たし気にタバコをもみ消した。

「何が知りたいの」

「今一番荒稼ぎしてるやつを知りたい」

女は鼻で笑った。

「稼いでるって？ この町見てみなよ。どこに稼いでいるやつがいるのよ」

「新しい薬が出回っているだろう。スノーって呼ばれている」

「知らないわ」

女の顔に血管が浮き始めた。感情が高まっているようだ。ますます妖怪じみている。佐久間は妖怪はいるという説に今だけは賛成だと思った。そしてそんな気持はおくびにも出さず、写真を撮りだした。佐久間の作成したモニタージュ写真だ。写真には髯の濃い中年男が写っていた。

「この男を知っているか」

女は写真をひったくるとまじまじと眺め、それから視線を佐久間に移して大笑いを始めた。

「何がおかしい」

「何がおかしいって？ 笑っちゃうわ。この男美濃部善三でしょう。あんたら税金つかって死人さがし？」

佐久間は店の階段を下りるときに手摺りを使わなければならないほど動揺していた。女は何と言った。死人さがし？ 女の説明では善三は二ヶ月近く前に死亡しているし、警察

だってそのことは知ってるはず。さらに善三の死体が盗まれたことも周知の事実なのだ
そう。佐久間は己の愚かさを呪った。とんだ恥さらしだ。

しかしそれならば佐久間が追ったあの男は一体何者なのか？ ビルの屋上から飛び降り
て、下敷きになった車を破壊して、それでも逃げたあの男は一体何者なのか。

佐久間は署に戻ると、幸恵の独房に赴いた。そして幸恵に写真を突きつけた。

「おい、この男は一体何者なんだ」

幸恵は簡易ベッドから降りもせず、そして顔を向けることもなかった。

「おい、答えろ」

「知らないって言ったでしょう。何度同じことを言わせれば気が済むのよ」

あまりのしつこさに幸恵は仕方なく起きて鉄格子まで近づいた。格子の向こうに苛つい
た佐久間がたっていた。

「答えろ」

「前にも言ったわ。その男に私は依頼を受けた。受けた内容は雪女を捜せ。それでこの町
にやってきた。そしたらあんたに捕まった。それだけよ。それ以上の何も知らないわよ」

「この男は二ヶ月前に死んでいるんだ」

「だったら他人のそら似か双子か何かでしょう」

「善三に兄弟はいない」

幸恵は心が冷え切っていくのをどうしようもなかった。何て忌々しい男だろう。佐久間
が何を求めているかを幸恵は知っていた。佐久間はスノーという薬の密売元を知りたい
のだ。そして自分を売人にして一斉検挙の手柄を得たいのだ。冗談じゃない。そんな危
険な薬と自分は無関係だ。いい加減にして欲しかった。

「だったらゾンビかなにかでしょう。事情聴取ならさっきも受けたわ。もういい加減に
して」

幸恵は力無くそれだけ言うと再びベッドに潜り込んだ。もう精も根も尽き果ててしまっ
た。独房というのは人間から気力を奪う場所だ。何もする気にならない。幸恵は「私が
犯人です。すべて私がやりました」と言って楽になる誘惑をいつまで押さえられるだろ
うかと思った。

佐久間は射ても盾もいられなくなり、署を飛び出した。だが出たところでどこへ行けば
よいのかわからなかった。ただ手がかりが欲しいだけなのだ。あの男への手がかりが。さ
ほど大きな町ではない。善三のような男が逃げ込めばすぐにでも居場所がつかめてもよ
いはずだ。これだけ探し回っていないのであれば、幸恵と善三の線は初めからつながっ
ていなかったのかもしれないと考えざるを得なかった。

その日一日佐久間は足を棒にして聞き込みを行ったが、善三に関する噂は毛ほども仕入
れることが出来なかった。代わりに耳にしたのは町はずれの廃墟となった教会に幽霊が
でるといふ噂だった。なんでも死んだはずの自閉症を患った少年の、幽霊が時折二階の
窓に現れるのだそう。佐久間はその幽霊には鬚が無かったかとしつこく尋ねたが、噂
の話をしてくれた相手は困惑するばかりだった。

夕方、佐久間は藁にでも縋る思いで噂の教会に行ってみることにした。

教会に着いたとき、辺りはすっかり暗くなり通例のように吹雪になった。いい加減この
町の暴力的な吹雪にはうんざりだった。一旦吹き出すと、止むまで街を歩くことは困難

になる。

教会は背後に林を配した、ちょっとした丘の上に建っていた。緑が豊かな時期ならば美しい風景と取れたかも知れないが、暗くわびしい雪の中に建つ洋風の廃墟は、荒廃を通り越して邪悪な雰囲気すら漂っていた。規模はかなり大きく尖塔は見上げる高さだったが、暗くて見えなかった。そしてガスは濃く、佐久間には何者かが見られたくないものを隠蔽しようとしているように思えた。入り口には鋳鉄の巨大な門扉があったようだが、誰かが破壊したらしくて取り払われていた。雪は深く、膝まで達した。門から礼拝堂に着くまでにすっかり凍えてしまった。佐久間は何度か転びながら礼拝堂に続く数段の階段を登り、冷たく石のような感触の扉に触れたとき、何の根拠もなく強い不安感を感じた。教会が佐久間の存在そのものを否定しているように感じたのだ。もうここは神の住む場所ではなく、悪霊の館への入り口のようなのだ。

佐久間は躊躇しつつ扉を引いた。思いの外簡単に扉は開いた。もっと気味の悪い音がするか、開かないのではないかと思っていただけに、拍子抜けした感じだった。そして佐久間はいかに自分が疑心に固まっていたかを知った。ここはただの廃墟だ。幽霊のすみかでもなければ、地獄への入り口でもない。単に人がいない建物にすぎない。ところがそんな平常心も懐中電灯を付けるまでだった。

佐久間がライトを付けると、その光が真っ先に映し出したのは、真二つに引き裂かれたキリスト像だった。そのキリスト像は右耳の辺りから、木目にそって左脇腹あたりまで引き裂かれていた。裂け目がちょうど口を通過しているせいで、キリストが苦悶と呪いの表情をしているように見えた。佐久間は悲鳴を上げそうになったが、なんとかそれを飲み込んだ。

気持を落ち着かせてそっと礼拝堂に踏み込んだ。中は信じられないほど寒かった。外の方が暖かいのでは無いかと思えるほどだった。そして歩くたびに靴音が堂内に響き渡り、佐久間の耳を刺激した。あちこちにゴミが散乱し、ベンチは壊れるか倒されるかしていた。そして割れた窓からは雪が吹き込むため、堂内にはうっすらと雪が積もっていた。積もった雪はライトを浴びて、微かに輝いた。いやな風切り音がどこかで鳴っていた。

佐久間は礼拝堂の中で、外では感じなかった奇妙な感覚を覚えた。誰かに見つめられているような感覚だった。だがざっとライトを回してみても、人が隠れられそうな所はなかった。それでも見られているという感覚はどうしても消えなかった。佐久間は奥を調べてみることにした。

礼拝堂の奥に扉が一つあった。その扉の向こうは事務所や住居があるのだろう。佐久間は扉に近づくと、用心しながらそれを開けた。その先は長い廊下になっていた。

廊下の窓はすべて割れていた。床にはかなりの雪が積もっていた。窓の向かいの壁にはいくつかの扉が並んでいて、作業をするための部屋があるようだった。佐久間は一つ一つその扉を開けて中を確認していった。扉を開けると、かびくさい空気が流れ出てきた。壁一面に黒い黴と落書きがあり、床には壊れた椅子などが散乱していた。それ以外にあるものと言えば、雪くらいなものだった。それに建物の中に関していえば、足跡らしきものはまだひとつも目にしていなかった。

廊下の一番奥まで行くと、上に登る階段があった。階段は途中まで雪に埋もれていたが、二階は窓が割れていないらしく、途中からは雪がなくなり歩きやすかった。だが空気が

冷たいのは変わらず、吐く息がライトの中で氷り、きらきらと輝いた。

真っ暗な廊下の一番端に立ち、ライトを奥に向けたとき、佐久間は一番奥にある扉に目が釘付けになった。手前にも二三部屋はあったが、なぜだか一番奥の突き当たりの部屋に何かがあるような確信があった。そう、さっき礼拝堂で感じた視線。その視線の主があつた突き当たりの部屋にいるのではないか。その主とは美濃部善三であり、綺麗に装飾された部屋でブランデーグラスを片手に、自分を待っているのでは無いだろうか。そんな気がした。佐久間はそんなおかしな想像に多少気を和らげながら、それでいて緊張しながら一番奥の部屋へと向かった。

扉の前に立ったとき、気持はなぜだか落ち着いていた。善三は必ずこの中にいる。きっとそう確信していたからだろう。

金色のメッキのはげたノブを回すと、扉はこともなげに開いた。佐久間はライトと銃を掲げて中に踏み込んだ。

まずライトが照らし出したのは、正面の小窓だった。小窓の内側には板が張られているが、指一本分くらいの小さな穴があり、礼拝堂が見えるようになっていた。そして今さっきまでそこから下を覗いていたかのように、小窓が開きっぱなしになっていた。

佐久間は次に部屋の中の異変に気が付いた部屋の右手にある窓は割れていないにも拘わらず、部屋の中は雪で一杯だった。廊下の雪のない状態とはあまりに違った。そして綺麗な装飾はなく善三はいなかった。ライトをぐるりと回してみたが、誰もいないし、足跡もなかった。

佐久間は気抜けしてため息をついた。結局何の手がかりも得られなかった訳だ。

「くそ」

佐久間は声を出して言った。それにしてもさっきの視線は何だったのか。小窓が開いていたって足跡が無いのでは幽霊以外にあそこを覗けるやつはいないじゃないか。

ばかばかしくなって帰ろうとしたとき、佐久間の視界にあるものが飛んできた。窓辺に置かれた天秤秤だ。一グラムとか二グラムとかの少量を計るのに丁度いい大きさで、薬を計るときによく使われるものだ。その秤がどうして廃墟となった教会にあるのか。間違いない。ここで誰かが薬を計っていたということだ。それに秤には雪がついていないのも気になった。

佐久間が窓辺に歩いていき、秤を丹念に観察していると、突然どこからか風が吹き込み、部屋の中を吹雪が吹き荒れた。一瞬のことだった。直後に背後から声をかけられた。

「やあ刑事さん」

慌てて銃とライトを向けた。

「善三」

だがライトの光に映し出されたのは一人の少年だった。そうこの教会には少年の幽霊が出るという噂がある。佐久間の背筋が僅かに震えた。だが一つの疑問が佐久間を現実に戻した。少年は「刑事さん」と言った。

「誰だ貴様」

「滝口茂」

「滝口？ その滝口君がここで何をしているんだ。何で俺が刑事だって知っている」

茂は涼しげな笑みを浮かべた。そして何も答えなかった。代わりに佐久間の右手にいつ

の間にか現れた人物がそれに答えた。

「私とあなたの仲じゃないですか。そうでしょう佐久間さん」

驚いて見るとそこには善三が立っていた。

「善三」

佐久間が銃を向けるより早く、善三の大きな拳が佐久間を襲った。

佐久間は数発の重たい拳を受けて気を失い、その場に崩れ落ちた。

善三は佐久間の胸ぐらを掴み、そしてとどめを刺すべく拳を握り直した。

「善三。そいつは後からでいいよ。それよりも今日の仕事が先だよ」

善三は頷くと佐久間を放り出した。

「冷凍車を用意してあります」

「よし、行って来い」

またしても部屋の中を吹雪が吹き荒れた。

そして一瞬後、二人はどこへともなく消えうせた。部屋には気を失った佐久間だけが残された。

六 誘拐

雪が降っていた。

雪は降っていたが、空は明るかった。

幸恵は小さな子供に戻っていた。

辺りは一面の銀世界だ。遠くに見える山も全て雪に覆い尽くされていた。

息を吐くと白い吐息がどこまでも延びていった。そして息の中の水分が凍り、きらきらと煌めきながら空気の中にとけ込んでいった。

幸恵は雪原の中ひとりで遊んでいた。雪を蹴り、まっさらな雪面に足跡を残し、その足跡を逆に辿った。ほんの小さな足跡が緩やかなカーブを描く大地に残されていた。上手に足跡を辿って戻ってきたので、足跡は雪原の途中で唐突にとぎれているように見えた。幸恵は誰かが見て驚くに違いないと考え楽しくなった。

ゆっくりと空から舞い落ちてくる雪の量が増え、にわかには空が暗くなった。風が吹き始め、冬の僅かな光と温度を奪っていった。やがて風は強くなり、雪を巻き上げうねり、全てを吹雪が飲み込んでいった。幸恵の付けた足跡はもう見えなかった。

それでも幸恵は楽しくて仕方なかった。これから起ることを考えると、喜びで身体が震えた。雪が打ち付けるにも拘わらず、幸恵の顔は歓喜で溢れていた。

風が暴力的なまでに強まった時、うねる吹雪の合間に人影が見えた。

幸恵は両手を前に突きだした。

その人影もまた手伸ばし、大きく広げた。

幸恵がその人影に向かって走り始めた途端、人影が崩れ始めた。ぼろぼろと小さな破片となり、崩壊し始めた。崩れ落ちた破片はことごとく風に攫われていった。

幸恵は呆然とその場に立ちつくした。そして見ている目の前で、人影は完全に崩壊し、僅かな痕跡すら残さずに消え去った。

「いやあ」

幸恵は叫んだ。

幸恵は自らの叫び声で目を覚ました。吹雪は吹いていなかった。暗い房の中で、幸恵は今自分がどこにいるのかをしばらく把握できないでいた。ようやく頭に血が巡り始め、自分が鶴崎警察署内の留置場にいるのだと思い出した。

留置場付近は消灯され、非常灯だけが暗闇に光っていた。リノリウムの床にその光が反射し、うねる光の曲線を描いていた。鉄格子もまた光を受け、冷たく光っていた。

幸恵はため息をついた。タバコが吸いたかったが、手荷物はすべて没収されていてなにもない。仕方なく再びベッドに横になった。ひどく寒かったので毛布を頭まで被った。だが一度目覚めてしまった幸恵はもう眠気を感じなかった。暗がりの中洗面台に向かうと、決して割ることができないステンレス製の鏡に真っ白な顔が映った。皺ひとつなく、雪のように白い肌を持った女の顔。幸恵は鏡に映った自分の顔を見て、先日の不思議な体験を思い出した。

その日幸恵は何気なくデパートへと足を向けた。警察の度重なる事情聴取のお陰でろくに仕事もできず、暇をもてあましていた。特に買うものがあつたわけではなかった。強いて言えば、最近テレビCMで宣伝している流行の口紅を見てみたかった。幸恵は昔から肌が白い割りに手入れをしなくても荒れることがなかった。今でもたいした手入れはしていないのだが、それでも実際より二十歳以上若く見られることがよくあつた。だから化粧はあまりしない。その分口紅だけは様々な色をそろえていた。

化粧品コーナーを一回り見回ったころ、陳列棚のカウンター越しに一人の女性と目があつた。その女性は自分とうり二つの顔をしていた。目と目が合った瞬間に、体中に電気が流れた。驚きで息を継ぐことすらできなかった。驚いたのは向こうも同様であつたらしく、その女性も暫くの間啞然と立ちつくしていた。目の前の相手について、何も考えることが出来なかった。互いにただ漠然と立ち尽していた。そうした状態が十分も続いたのだろうか、その女性はおもむろに会釈をし、足早に立ち去った。もし彼女が立ち去らなければ、幸恵は一日だってその場に立ちつくしていたかも知れなかった。

彼女は何者なのだろう。もう一度会つてみたかった。いやきっと会えるに違いない。幸恵の気持は漠然としたものから、確信めいたものへと変わつていった。きっといつか、また彼女に会えるだろう。

あれから数週間が過ぎた。彼女とはまだ再会していない。そして私は留置場にいる。ひょっとしたら、もう会うことは無いかも知れないと思った。

ふと一陣の風が吹き込んできた。始めはなんとも思わなかった。だがすぐに風が吹くということはどこかの扉が開かれたのだと気が付いた。同時に油の切れた金属扉の音が廊下に響き渡つた。今頃誰かしら。まさか自分に用ではないだろうが。一瞬、うり二つの彼女が尋ねてきたのではないかという、あまりにも馬鹿げた考えに取り付かれた。そんなことがあろうはずがない。

扉の音がしてから後、しばらく音は何もしなかった。もし新しい住人が拘留されるのであれば、もっと騒がしいはずである。

不審に思った幸恵は毛布から頭を出して廊下の様子を窺った。何もない。さっきと同じ歪んだ光が床を照らしているだけだ。いや同じではなかった。何かが宙を舞っていた。蛍のような動きだが、光ってはいない。

以前どこかで同じような光景を見た気がした。どこだったろうと考えて、それが本郷寺の洞窟の中だったことに気が付いた。あのときは同じような何かが舞った直後に、何者かが寺の住職を襲ったのだった。幸恵の中で微かな不安が生じた。

その小さなものはたちまちにして数を増やし、廊下の間を踊るがごとくかろやかに舞い、床に落ちた。そしてその白いものは音もなく溶けて消えた。雪だった。

幸恵の心に原因不明の恐怖がわき上がってきた。何故雪があるのか。留置場は地下一階でここへ来るまではいくつも廊下の角を曲がり、階段を下りなければならない。その間に親切なことに窓は無かった。どこかフロアの窓を開けたくらいではここまで雪は吹き込まないはずだ。

また風が吹いた。風に運ばれて雪が大量に吹き込んできた。幸恵のベッドの上にも雪が降りかかった。幸恵はその雪を汚いもののように払いのけた。何者かの靴音が廊下に響いた。幸恵は再び毛布を頭まで被り、息を殺した。何故だか確信はなかったが、そうしなければならない気がした。

靴音はゆっくりと近づいてきた。重く力強い靴音だ。音から身体の大きく、たくましい男だろうと推測できた。幸恵はその靴音の主が誰であるか想像できた。幸恵の耳にあの言葉が蘇ってきた。

「どうせもう抜け出せやしないのだから」

間違いない。あの靴音は善三だ。善三が私を殺しにやって来た。

靴音が房の前で止った。そして房の中を窺っている気配がした。逃げ出す道はない。殺される。死の恐怖が幸恵を徐々に狂気という穴蔵へ追い立てていった。自分と善三を挟む間にあるのは鉄格子ただ一つ。ガラスがあるわけでも何があるわけでもない。手を内側に差し込むことだって出来る。だがいくら善三でもあの鉄格子を越えてこちらに来ることはできない。簡単には手を下すことはできないはずだ。その僅かな望みだけが幸恵を正気の縁にとどめていた。

ところがある考えが幸恵をさらなる恐怖に駆り立てた。何故善三がゆうゆうと自分の房の前に立っているのかということだ。警察官が過去に死んだはずの男を、自分と面会させるためにすんなり通すはずがない。一体上にいる警官はどうしたのか。靴音は一人分だった。なぜ警官は一緒にこないのか。答はひとつしかない。上にいる当直の警官はみんな死んだのだ。喉を掻ききられて？ 銃弾を浴びて？ そんなことはどうだっていい。ただ一つの事実は、もう誰も自分を守ってくれないということだ。

その考えを裏付けるような音が房に響き渡った。房の鉄格子を掴む音がした。見たくなかった。でも手が勝手に動いて毛布を剥いだ。音のした場所で大きく逞しい体躯の男が、房の鉄柱を鷲掴みにして立っていた。幸恵の房の前に立っているのは善三ではなく花田だった。

助かった。

幸恵は思わずそう思った。善三でさえなければいいのだ。もしあの場に立っているのが善三だったとしたら、幸恵は絶望感で気を失ったかもしれない。だがそうではなかったというその事実で、幸恵は天にも昇りそうな気分だった。助かった。これで殺されなくても済む。生き延びたのだ。

だが幸恵の幸せな気分は一瞬にして吹き飛んでしまった。

幸恵は一瞬花田に声をかけようとした。私よ、わかる？ だが声が出なかった。恐ろしさで身体が硬直してしまったのだ。

花田は霜で真っ白だった。たった今大型冷凍庫から引き出されたマグロみたいだった。遠目にも凍り付いていると分かった。顔も手もすべてが白く濁り、目は全く光を反射していなかった。とても生きているとは思えなかった。

その花田の哀れな姿をみて、幸恵が考えたことは、ああ花田は善三から逃げ切れなかったのだな。という実に見状からかけ離れたことだった。幸恵はふと花田が事務所を訪れた時のことを思い出した。

花田は怯えたような仕草をしながらも、幸恵のバーボンを奪い取り、飲み干してしまった。飲み干した後の花田はまるで別人だった。そう、花田はアルコール依存症にちがいがなかった。幸恵はその時の細々としたことをしきりに思い出していた。心が必至に現実逃避しているのだ。

やがて幸恵の心は過去へ過去へと遡っていった。そして幸恵の脳裏にひとつの光景が思い出された。

首都高速での事故。壊れたトラックの荷台から転げ出た冷凍死体。霜で真っ白になっていた死体。トラックの天井のフックで、つり下げられていた。

その死体の姿が花田と一致し、幸恵は現実に戻された。徐々に頭が回転し始め、過去のパズルが音を立てて組み上がっていく。

死体と全く同じ姿で、トラックを運転していた花田が幸恵の目の前にいる。これは決して偶然ではないだろう。花田は薬を預けたいと言った。そしてその直後に善三が現れた。つまり死体と薬と二人は結びついているということだ。さらにその関係にいつの間にか自分も含まれてしまったということではないか。

幸恵は壁際まで後退った。それ以上下がれなくなっても、まだ下がろうと藻掻いた。

鉄格子の前に佇む花田の後ろを、やはり白く凍った者たちが通り過ぎていった。次の瞬間に悲鳴が上がった。隣にいる酔っばらだった。

酔っばらは声の続く限りの絶叫を上げ、恐ろしさに泣き喚いた。その絶叫は廊下中にこだまし幸恵を更に震え上がらせた。だがその絶叫はすぐに止んだ。花田の後ろをさっき通った連中が、何かを引きづりながら戻っていった。

次は私の番だ。

花田は通常の間人では到底考えられないようなことを始めた。花田は両手で格子を掴んだまま、がたがたと震え始めた。そして全体的にどこかぼんやりとし始めたかと思うと、なんと花田は分解し始めたのだ。花田という個体は少しずつ分解を始め、細かな雪の粒子と変貌していった。雪は花田からこぼれ落ち、床に白い山とたまっていった。そしてどこからともなく強い風が吹き、その山は吹き流されて独房に入ってきた。入ってきた雪は房内を渦巻いた。渦巻きやがて一カ所へと集まりだした。やがて幸恵の目の前でひ

と塊りになり、今度は上に向かって成長を始めた。ついに雪の山はさっきの花田と同じ大きさまで成長すると流体のようになごめきながら、花田の形を作り出していった。

花田が右手を伸ばしてきた。

「いや。誰か」

その時廊下を誰かが通った。それが誰だかすぐに分かった。譲だった。譲がなぜここにいるのかを考える余裕は無かった。一つの事実が幸恵を打ちのめした。譲もまた、霜で真っ白になっていた。

「ゆずるー」

幸恵は絶叫した。

その喉を花田の右手が掴み、絞め始めた。氷のように冷たい手だった。

次に花田の白い顔が近づいてきた。白く濁った目がおぞましかった。口が渴いた音を立てて大きく開いた。そして口から耳障りな音と共に白い粉が吐き出され始めた。粉は猛烈な勢いで幸恵の口に流れ込んだ。命まで凍りそうな冷たさだった。

幸恵の声は途切れ、目の前が真っ白になった。幸恵は残った意識の最後の最後まで譲の名を叫び続けていた。

数分後、警察署の前に一台の大型冷凍トラックが横付けされた。運転手は運の悪いことにたまたま鶴崎の外れで善三を乗せた男だった。助手席では善三が誰かと携帯電話で連絡を取り合っていた。

花田たちはトラックの荷台の扉を開くと、冷凍庫に完全に凍り付いた幸恵たちを放り込んだ。幸恵の身体は荷台にぶつかって硬い音を発した。幸恵の他にはさっきの酔っぱらいや警官も含まれていた。幸恵が放り込まれる時、譲の顔には何の表情も表れなかった。積み込みが終了すると、トラックは何の気兼ねもなくパトカーを数台はじき飛ばし、警察署の門の一部を荷台で崩しながら道路に躍り出た。そしてあっという間に夜の町にとけ込んでいった。

七 孤立

銀次は酒田のカウンター席で必死に黒岩を説得していた。だが黒岩は全く銀次の話に耳を貸そうとはしなかった。

「親父がそんなに薄情だとはおもわなかったよ」

銀次はビールを一気に煽った。

「お前は俺を薄情だというが、じゃあお前は一体何故あの女にそんなにこだわるのだ」

銀次は黒岩から視線を外し押し黙った。

銀次は幸恵が佐久間に捕らえられてからずっと彼女の救出について頭を巡らせていた。しまいには脱獄させる手まで考えが及んだのだが、それは現実的ではなかった。そもそ

も幸恵が逮捕されるきっかけを作ったのが黒岩なのだ。黒岩が佐久間に協力をしなければ、幸恵はあの目玉親父みたいな刑事に捕まることもなかったのだ。銀次がなぜ協力などしたのかを尋ねれば、黒岩は「義務」という言葉を返すだけだった。それにしたって府に落ちない。しかし黒岩からすれば、銀次が幸恵にこだわる方がよほど解せないのだ。銀次と幸恵は先日初めて顔を会わせたばかりだった。ほんの一言二言言葉を交わしただけで、薬物依存の女の肩をもつ理由が分からなかった。「答えろ。何であの女の肩を持つ」銀次は暫くカウンターを見つめた後、答えた。

「俺の女にうり二つなんだ」

「うり二つ」

「そう。双子なんじゃないかというくらい似てる。だからどうしても放っておけない気がして」

銀次の恋人が東京のカラオケ屋の女主人だということは黒岩も聞き知っていた。そしてその女がどうやら銀次よりもかなり年上らしいということも。ただ実際の年齢は銀次も知らないらしいが。黒岩は幸恵と銀次の恋人がうり二つだということが気に掛かった。まして幸恵は黒岩の知るある人物にも似ていた。それこそうり二つだ。黒岩は何かただごとならぬ気配を感じていた。酒田の主人が酒を持ってきた。

「なに二人して暗い顔をしているんだ」

そういう酒田の顔も暗く沈んでいた。その理由は客入りだ。ここ数日猛吹雪が続いていた。酒田のような奥まった店には常連客しか足を運ばない。売り上げが伸びなくて悩んでいるのだ。役所の話では吹雪は暫く続くらしかった。雪国だからただの雪ならどうということはない。しかし連日家を揺るような吹雪に吹かれてはたまらない。三人はそろって暗く沈んだ。

風の音に紛れて、何かの放送が聞こえてきた。

「おい、役所の放送じゃないのか」耳を澄ますと、町役場からの気象案内放送だった。このところ毎日吹雪に対する注意の放送が流れている。酒田が苦々しい顔をした。

「気象庁の発表によると」放送は山彦と重ならないように、間をあけた間延びした感じで流された。聞き慣れないとなんともんびりした放送だと思いに違いない。

「現在富山県地方山間部に」

「暴風雪警報が発令されています」「今後、更に雪と風が」

「強くなることが予想されます」

「町民のみなさんは」

「十分に暴風雪に備えてください」

「以上町役場からでした」酒田の顔がこれ以上無いと言うくらいにひどく歪んだ。同時に強い風が建物を揺らした。「この家は古いんだよ。屋根が飛んだらどうしよう」「全壊したら俺が丸太で直してやるよ」黒岩の冗談に酒田は無言で応えた。また店が揺れた。黒岩の顔も引き締まった。それから小一時間で風は台風なみに強くなった。酒田の看板はほぼずっと真横に浮き上がっていた。軒を切る風の音が大きくて、最早会話をするにも骨が折れた。窓の外は濃厚な霧が出た時のように、僅かな先も見通すことは出来なかった。酒田の店は小刻みに揺れ続け、時折思い出したように大きく揺れて軋んだ音を発した。三人は大きく揺れる度に天井を見上げた。「今日はもう看板にするよ。いたければい

つまでいてもいいけど」黒岩が何かを応えようとしたときに、酒田の電話が鳴った。酒田は黒岩にちょっと手を挙げると電話に出た。暫く電話口で何か頷いていたが、風の音で何の話をしているのかは二人には分からなかった。そして酒田は受話器を置くと、深刻な顔つきで戻ってきた。

「避難命令が出た」

「避難命令だって?」

酒田が黙って頷いた。「放送を入れたようなのだが、スピーカーが風で飛ばされてしまったらしい。だから職員が個別に電話で連絡をしている。これから今夜にかけて強い低気圧が通り抜けるから、風はもっとひどくなるそうだ。極力荷物を少量にして、役場の体育館に非難して欲しいとのことだよ」「親父どうするんだよ」スノーフレイクにはどうせ客はいない。このまま避難しても問題はない。

黒岩は黙って勘定をカウンターに置くと、

「帰るぞ」

と言った。「帰るって避難命令なんだろう」「あの体育館の屋根に何トンの雪が乗っているんだ。あんな場所に行くくらいなら、俺の小屋の方がよっぽど丈夫だ」

そして振り返って酒田に、

「お前も俺の所に来るか?」「いや、俺は役場に行くよ。何かあったらすぐにここに戻れるように」

「そうか」外はひどいものだった。真っ直ぐ歩くことはおろか、何かに捕まりながら進まない風が飛ばされてしまいそうだった。そして顔に当たる雪はまるで弾丸のように固かった。銀次にはどうしてこんな状況で、黒岩が家に帰ろうと考えるのかが分らなかった。銀次ならば早々に家を放棄して役場の傘の下に転がり込む所だ。何よりそれが一番楽だから。だが黒岩は颯々なら颯々と言わんばかりに、風に向かって歩を進めた。時折役場に避難する人とすれ違ったが、互いに顔を見ている余裕は無かった。荒れ狂う吹雪が容赦なく二人を打ち据えた。固定されていない看板はみな吹き飛ばされて白い闇に飲まれていった。電線が風に揺さぶられて耳障りな音を立てていた。どこかで屋根の剥がれる音がした。空を見上げると、空全体が白い濁流となっていてすごい速さで流れていた。雪上車の置いてあるスキー場までの僅か百メートルがひどく遠く感じた。苦勞して扉を開き、中に乗り込むとようやく一息ついた。酒で暖まったはずの身体はとうに冷え切っていた。「本当にこんな視界の悪い中を帰るつもりかよ」「ロッジまでは目を瞑ってたって帰れる。嫌ならお前だけ避難しろ」銀次は舌打ちすると、深くシートに凭れた。雪上車は冷え切ってしまい、なかなかエンジンが掛からなかった。何度もセルを回していると、リフト係の六さんがやってきて窓を叩いた。「黒さんどこ行くつもりだい。まさかロッジに戻ろうっていうんじゃないだろう」「そのまさかさ。ロッジの方が安心だ」「今電話で聞いたんだが、橋が凍結してて車が通れなくなってしまったらしい」橋というのは下の町をつなぐ一本道の途中の橋のことだ。山道のちょうど山がくぼんで谷状になった場所を、カーブしながら渡るようになっている。この橋はちょうど風の通り道になっている谷に架かっているため、凍結しやすい。カーブしているせいで、谷川に僅かに傾いているので凍ると面倒なのだが、だからといって通れなくなるようなことは無いはずだ。「凍結たって毎度のことだろう」「それがさ、除雪が間に合わなかった。欄干の上まで積

もった雪が完全に凍り付いちまった。まるで岩みたいに固くてロータルの除雪車じゃ歯が立たねえ。欄干のない凍った橋を渡るのは無茶ってもんだ。これじゃあ陸の孤島だよ」黒岩の心に強い不安感が広がった。何かがおかしい。何かが始まろうとしている。その黒岩の不安を裏付けるように轟音が響き渡った。総毛立つような耳障りな金属音だった。六さんが慌てて走っていった。六さんの先には強い風でへし折れたりリフトの支柱があった。「危ない。戻ってこい」山頂まで十五本あるリフトの支柱は、まるで鉛細工か何かのように、つぎつぎと折れ曲がっていった。六さんが力を失ってへたり込むのが雪の合間から見えた。六さんを役場まで送ると、辺りは薄暗くなり始めていた。さすがにこの猛吹雪では黒岩も余裕とはいかない。視界が全くないに等しいのだ。その上夜になってしまっただけは、ロッジにたどり着くことすらおぼつかない可能性がある。黒岩の心にも焦りが生じ始めていた。ライトを点けてみても、見えるのは雪ばかりだ。黒岩は可能な限り帰りを急いだ。辺りは幕を引いたように暗くなっていった。そして人の力の及ばぬ夜がやってきた。雪上車のライトは僅かな空間を白く染めているだけだ。車内も暗く、隣にいるはずの銀次の顔も見えない。黒岩は段々と自分がどこにいるのかが分からなくなってきた。本当ならば雪上車を運転して、自分のロッジに向かっているはずなのだが、何も無い暗がり一人佇んでいるかのような錯覚を覚えた。徐々にその感覚は強まり、風の音も何も聞こえなくなっていった。黒岩は暗闇にいた。そして布団を被っていた。周りには数人の仲間がいるのがわかる。そして彼らはみな眠れずに震えていた。風の音が恐ろしくて眠れないのだ。風が軒を切り、悲鳴のような音を上げた。建物は小刻みに揺れ時折思い出したように大きく揺れた。黒岩はこのとき僅か八歳だった。遠くでガラスの割れるような音がし、怒声が響き渡った。同時に暗闇に雪が吹き込んできて、辺りは一気に激寒の世界へと変貌した。黒岩は恐ろしくて、寒くてどうしようも無かった。それでも黒岩は勇気を振り絞り、布団から飛び出した。行かなければならなかった。なぜならば、怒声の主は他ならぬ園長先生だったからである。大好きな園長先生が怒っている。そしてその怒声には園長先生の命にすら関わる、重みのような響きが含まれていた。黒岩は寢室を出ると廊下を走った。狭い廊下の向こうから、雪が体中に吹き付けた。そして廊下を抜けて教室に入ると、園長先生が宙に浮いていた。首が不自然な方向に傾いたまま。「園長先生」黒岩の声に反応したのは園長先生ではなかった。園長先生を片手で持ち上げている女だった。白装束の女。凍り付きそうな微笑をたたえている。女は白装束をはためかせ、すべてが凍り付きそうな吹雪の中に立っていた。黒岩は一瞬そのあまりの美しさに唾然とした。その美しさは雪原の真ん中に、満開の桜が突如現れたかのようなようだった。世界で一番大好きな園長先生の美しさすら霞んでしまいそうだった。そして黒岩にはそれが誰だかすぐに分った。雪女だ。雪女の表情がナイフのような鋭い表情に突如変わった。雪女は片手で園長先生を持ち上げたまま、その美しい顔に白い息を吹きかけた。たちまちにして園長先生は白い蠟人形のような、冷たく固い表情へと変貌していった。雪女は園長先生を放り出すと、再び黒岩の方を向き笑った。残忍で容赦のない笑顔。冷たくすべての生命から体温を奪う笑顔。その笑顔は幸恵の顔そのものだった。幸恵は黒岩にとって敵以外の何者でもなかった。四十五年の隔たりがあろうとなかろうと、そんなことは関係ない。このところの異常気象と奇形の雪。次々に起る失踪事件。そして現れた幸恵。繋がりが無いはずがなかった。黒岩は必ず復讐を遂げるつもりだった。幸恵を

この世から抹殺するのだ。そうすれば園長先生だって報われるはずだ。そのためにはどうしてもロッジに置いてある猟銃が必要だった。黒岩の夢想は四十五年前の吹雪の晩から、幸恵を撃ち殺すそれへとめまぐるしく変化していった。黒岩を現実に戻したのは銀次だった。銀次はしきりに黒岩の肩を揺すっていた。「親父。どうしたんだよ。あれが見えないのか」ようやく現実に戻った黒岩が目にしたのは、吹雪の中煌々と辺りを照らし出している不思議な光だった。それはすべてを飲み込む死の吹雪の中であって、暖かみと命の力強さを持つような光だった。

「何の光だ」「何かおかしいよ。どうなっているんだよ」

その時雪上車が大きく上下に揺れた。スキー場を横切っている道路をまたいだのだ。そこだけ平らになっているので、段差のようになっている。この段差を越えるとロッジまですぐだった。黒岩はこの揺れで光の正体が何であるかを悟った。光の正体はロッジだ。ロッジが燃えているのに違いなかった。

「ちくしょう。ロッジだ」

「ロッジが何で光るんだよ」

「火事だ」すぐに吹雪の中に真っ赤な炎が見えた。ロッジ全体が巨大な火の玉となって燃えていた。火は全体に及び、もう手の付けようがなかった。そして強い風が炎を一層煽った。真っ赤な炎は悪魔の掌のように完全にロッジを包んでいた。

「ちくしょう。銃が燃えちゃった」

「親父。何を言っているんだよ」黒岩は銀次の襟首を鷲掴みにして、鼻先に人差し指を突きつけた。「いいか。よく聞け。俺は必ずあの女を殺してやる。誰が助けるもんか。必ず殺してやるんだ」「放せ」

銀次は必死に抵抗し、黒岩の拘束から逃れた。

「何の話だ。一体どうしたんだよ」

黒岩はがっくりとシートに凭れた。「ちくしょう。銃が燃えてしまった。どうすりゃいいんだ。四十五年も待ったんだぞ」完全に気力を失ってしまった黒岩に、銀次はどう声をかけていいのかわからなかった。こんなに落ち込んだ黒岩を見るのは初めてだった。ロッジが轟音を立てて崩れた。真っ赤な火の粉が風に攫われ、炎が悪魔の舌のようにたなびいた。黒岩は死んだようにうなだれたまま動かなかった。銀次はいつまでも炎を見つめていた。何時間そうしていたのかわからない。あるいはほんの数分だったのかもしれない。銀次はふと何かの気配を窓の外に感じた。目を凝らしてみたが、吹雪のせいで何も見えない。だが確かに何かがあるような気がした。銀次の心に冷たいものが流れ込んできた。こんな猛吹雪の夜にスキー場に何がいるというのか。一瞬風で炎が強まり、辺りが照らし出された。と同時に風がゆるみ、雪のカーテンが一瞬だけ途切れ視界が開けた。燃えさかるロッジの炎が照らし出したのは、窓の外に佇む何人もの人影だった。その人影は雪上車を中心にして、周りをぐるりと取り囲むようにして並んでいた。もし火事を見て来た人々ならば、自分たちに声をかけるはずだ。ところがその何者かはまったく身動き一つせずに黙々と立っていた。遂にその人影が動き始めたと同時に、吹雪のカーテンが引かれ、すべての視界は奪い去られてしまった。

第三章 復讐

第三章 復讐

一 兄弟

千春はぼんやりとカウンターの隅に置いたテレビを見ていた。暮れも押し迫り、明日はクリスマスだった。張り出した寒冷前線が勢いを増し、数年ぶりにホワイトクリスマスが期待されていた。その期待に応えるように、白い物が冷たい空气中を舞い始めたかと思うと、たちまちにして雪は本降りになった。近年まれに見る大雪だそうだ。天気予報では非常に強い寒気が東京の上空を覆っているので、雪は明日の朝まで降り続くだろう。大雪に注意してくださいとしきりに訴えていた。

「クリスマスイブか」

千春は呟いた。それがなんだというのだ。サンタクロースは決して自分には微笑まないだろうな。千春は悲しい思いでテレビを見つめた。今の自分の状況を好転させる幸運が訪れるなどという、幻想を抱く余裕すら千春にはもうなかった。天気予報が終わると、有名なコメディアンバラエティー番組が始まった。時折テレビから流れ出る笑い声が、人気の無い店内に響いた。今日も客は一組もいなかった。銀次が出て行ってからすぐによくざがやってきた。やくざたちは来るなり金銭を要求した。詳しいことは銀次に聞けと言っていたが、銀次はあれから一度も顔を見せない。おおかたスキー場にでも逃げたのだろう。

やくざたちは銀次がいなくなったと知ると、ピンクチラシを持ってやってきた。もし所場代が払えないようならば、いい働き口を紹介するというのだ。千春はもちろん突っぱねたが、断り続ければどうなるかは見えていた。彼らは公然と千春の裏ビジネスを暴くだろう。そうなればまたあの鼻のきく刑事がやって来る。もう一度あの刑事がやってくれば、隠し通すことは難しい。やくざたちは様々な手をつかって千春の仕事を邪魔するはずだ。この渋谷の真ん中で、今の今までやくざとは無縁にドラッグを扱えたのが奇跡だったのかもしれない。千春はそろそろ潮時なのかもしれないと考え初めていた。

チンという音がして、エレベーターがこのフロアに停止したことを告げた。いつもならば来客を知らせる音なのだが、最近はおそらく彼らを取り立てに来たことを示す音になっていた。エレベーターの扉が開くと、たばこの煙と同時に三名の柄の悪い男たちがフロアに降り立った。いつもの取り立て屋だ。兄貴分の男は藤原といい、五分狩りにした頭に大きな傷痕があった。藤原は暇になるとすぐに傷痕の自慢話をした。その傷を作ったとき、三人の男を刺し殺したというのだ。嘘か本当かわからなかったが、その話を聞く度に、千春の脳裏に血なまぐさい情景が映し出されるのだった。

「おお寒い、寒い。こんな日にまで営業に来るなんざ、俺たちも律儀なもんだよな」
彼らは店内に入ってくると、いつものようにタバコを火が点いたまた床に投げ捨て、辺り構わず唾を吐いた。そして必ずポケットからナイフを取り出して刃の切れ具合をソファーやカーテンで試すのだった。おかげでソファーもカーテンも、店内の布製品はすべて切り裂かれてしまっていた。

そんな舎弟を置いて藤原が千春に近づいてきた。

「なあ、ネエちゃん。そろそろあんたも答が出た頃だろう」

藤原はカウンターにいつものピンクチラシを置いた。チラシにはソープランド椿と大きく書かれていた。チラシの真ん中では裸の女性が媚態を見せけている。

「お金はありませんし、そんな所で働く気もありません。帰ってください」

「帰れか。ならその足で警察でも行くかな。警察は弱いものの味方だからな」

藤原が嫌みったく笑った。

千春には二の句が継げなかった。彼らは千春の商売の、仕入れ先から扱う商品からすべてを掌握していた。警察が信用すればすぐに裏は取れるだろう。千春が顔を背けると、藤原がぐっと身体を乗り出し、千春の顎を掴んで無理矢理自分の方へ顔を向けさせた。

「俺もな。あんまり舐められている訳にはいかんのだよ」

藤原はそう言って千春の頬を力任せに張った。

千春は床に倒れた。頭がくらくらした。藤原の後ろで舎弟が、「兄貴女を泣かせちゃあいけない」と言って笑った。

藤原はカウンターを乗り越え、床に伏せていた千春の腰の辺りに馬乗りになった。千春の上で藤原が身体の値踏みをしているのがわかった。千春はこんなことになるなら、もっと早くこの店を引き払って、田舎にでも帰っていれば良かったと思った。だが今とはってはもう手遅れだ。それに鶴崎に帰ったところで、親戚など一人もいない。千春は施設の出なのだ。

「どうせソープに売り渡すんだ。ちょっと味見させてもらうぜ」

藤原の言葉に頭の中が白くなった。この汚らわしい男と寝るのだけは嫌だった。

しかしここ数日客がないせいで、男を味わっていない。藤原に触られれば、すぐに身体は反応してしまうだろう。抵抗するどころか犬のように従ってしまうだろう。千春はもっとも忌み嫌うような男の、奴隷に成り下がろうとしている自分を罵りたかった。藤原が千春のブラウスを力任せに引き裂いた。

チンという音がして、こんどは何も知らない客が来たことを知らせた。

前にも藤原たちが来ている時にやって来た客がいた。その客はさんざん藤原たちにいびられて追い返された。そんなことが度重なり、今は待っても客は来なくなった。いびる相手がいないせいで、舎弟どもは退屈していた。きっと今日の客はいつも以上にいびられることになるだろう。千春はこんな状況で客を哀れんだ。エレベーターの扉が開くと、舎弟どもが喜び勇んで迎えに出た。

「いらっしやいませー」

始まった。これからが彼らの真骨頂だ。まずはエレベーターから客を引き出し、空のエレベーターだけを一階に下ろしてしまう。客の逃げ道を塞ぐわけだ。そして一人は非常階段を塞ぐように、もう一人はエレベーターのボタンの前に立ちほだかり、脱出口を一

切絶ってしまう。こうすれば好きなだけ客をいびれるという訳だ。すぐに客の服装や髪型や、様々な事柄についての聞くに堪えない罵詈雑言が聞こえてくるだろう。そして相手が反撃をしようと試みようものならずぐに手入れの行き届いたナイフを取り出し、自分たちがどういった人種かをわかりやすく解説する。千春は藤原になすがままになりながら、いびりが始まるのを待った。

ところがいつもと様子が違った。いつまでたってもいびりが始まらないのだ。彼らよりも強そうな相手なのだろうか。藤原もそのことが気になったのか、千春の身体をまさぐっていた手を休め、カウンタの上からエレベーターホールを覗いた。

「なんだ手前」藤原は言うなり千春を放り出しカウンターを飛び越えた。

千春は黙って天井を見つめていた。身体が火照り始めていた。どうして自分はこんなのだろうと思った。いつか銀次が言っていた。私はラブジャンキーだと。そうだその通りだ。私はラブジャンキーなのだ。男がいないと気が狂ってしまうくらい好きなのだ。止めることができない。あんな畜生のような藤原でも、今となってはこの火照りを鎮めてもらいたい。そうしてもらわないと気が狂ってしまう。情けなく、悲しくもあったが、今はこの火照りをどうにかしてほしかった。その身体に白くて小さな何かが舞い降りた。それは開いた千春の胸元に落ちると、ずっと溶けて消えた。千春はあまりの冷たさに驚いて飛び起きた。火照りが鎮まっていた。見るとフロアの所々に、白いものが舞っていた。雪だった。確か今日あたり雪なるかも知れないと天気予報で言っていた。そうなれば明日はホワイトクリスマスだ。でもなんでフロアに雪が舞っているのだろう。外に面した窓は全て塞いである。哀れな客と一緒に、エレベーターに乗ってやって来たのだろうか。千春は不思議な面もちで、蛍のように宙を舞う雪の粒を見つめた。千春の幻想的な気分は怒声と悲鳴の混じり合った音で破られた。

立ち上がって見ると、エレベーターホールでやくざたちがもみ合っていた。

「野郎ふざけやがって。くたばりぞこないが。俺に復讐でもしに来たのか。前と同じようにはらわた切り裂いてやる」

藤原は腰の辺りから短刀を引き抜き、舎弟二人を左右の手で押さえつけている男に突きつけた。藤原の言葉が千春にある一場面を連想させた。花田という不思議な男がやってきた日のことを。花田はやくざに刺されて倒れていた。そして千春を押しつけながら駆抜けていったやくざがいた。よく考えると、そのやくざの顔と藤原の顔は似ているような気がした。今やどうでも良いことだと思っていたことが、徐々に鮮明になり、記憶がはっきりとしてきた。そういえばあの時のやくざも五分狩りだった。短刀を持った藤原の姿が、あのときのやくざの姿と一致した。花田を刺したやくざは藤原に違いなかった。

「お客さん逃げて」

千春は唖然とした。まさにその花田がエレベーターホールに立っていた。花田は藤原の短刀にまったく目を向けなかった。先ず右手の男の顎を鷲掴みにすると、力を込めて口を開かせた。大きな手の中で、華奢な顎がぎしぎしと軋んだ。

「野郎そいつを放せて言っているのがわかんねえのか。なら分らせてやる」

藤原は花田の腕を斬りつけた。固いもの同士がぶつかる音がした。花田の腕は切れていなかった。

「どうなってんだ」

藤原は何度も花田の腕を斬りつけたが、何度やっても同じだった。手応えがまるで石像でも斬っているかのようだった。訳が分らなかった。何か鎖帷子のような物でも身につけているのかもしれない。ならば顔ならどうだとばかりに、今度は顔を斬りつけた。だが結果はやはり一緒だった。どこにも切れ目はできなかつたし、石でも叩いたみたいな手応えだ。「そんな馬鹿な」

花田は舎弟の一人の口を限界まで開くと、自分も大きく口を開けた。そして舎弟の口めがけて大きく息を吐き出した。口からは真っ白な、濁流のような息が吐き出され相手の口に吸い込まれていった。舎弟の身体は電気ショックでも受けているかのように小刻みに震えた。やがて白目をむいて口の脇から泡を吹きだし、その泡はたちまち凍り付いていった。それを見ていたもう一人の舎弟が恐怖の絶叫を上げた。「兄貴、助けてくれ。はやく」

続けて行われた光景に、舎弟の顔色はみるみる白くなっていった。花田はほぼ完全に凍り付いた右手の舎弟の口から、今度は何か白とも金色とも見える光の粒子を吸い出し始めた。その光は始め神々しく、魂そのものを連想させた。そして花田がそれを吸えば吸うほど、舎弟の顔から若さが消失していった。やがて光は神々しい輝きから、肉体そのものを削っているような、血の色へと変化していった。すると舎弟の目は落ちくぼみ、肌には皺がより、肉がそげ落ちていった。急激に変化していく状況に、耐えられなくなった凍り付いた肌が、時々音を立ててひび割れた。そして舎弟の身体は掃除機で空気を吸い取られたみたいに、たちまちぼんでミイラのようになってしまった。藤原はその光景に身体を振るわせていたが、舎弟の声で咄嗟に短刀を腰溜めに構えて花田に突進した。肉体がぶつかる音がしてフロアに血が飛び散った。だが顔を苦痛にゆがめたのは藤原の方だった。短刀は花田の固い体にはじき返され、その勢いで藤原は自らの手を深々と切り裂いていた。辺りに血の金臭い臭いが広がった。

花田は藤原のことなど意に介さず、絞るかすのようになった舎弟をフロアに投げ捨て、もう一人の舎弟の口を大きく開いた。舎弟が激しく抵抗したため、花田が力を込めたらしく、生木が折れるような大きな音が響いた。花田の手の中で顎を中心に舎弟の顔がいびつに歪んでいた。花田はその舎弟の口からも何かを吸い出すと、舎弟を放り出した。そうしている間に藤原は切れた右手を押さえて千春の許へと戻ってきた。千春を盾にするつもりだった。藤原が血にぬれた手を伸ばしてきたので千春は両手を闇雲に振り回した。すると傷口に触れたらしく、藤原が身をかがめうめいた。そこへ花田がやってきて、藤原の首を押さえつけた。「畜生。放せ」

花田は力任せに藤原の向きを変えた。首の骨が外れる音がして、藤原が白目を剥いた。口からは泡を吹き、手からは血を吹いていた。なんだか出来損ないの操り人形みたいだった。花田は藤原の口に白い息を流し込んだ。藤原の身体が数回大きく痙攣して動かなくなった。死んだのだろう。そして今度はその口から白っぽい光の粒子が吸い出されていく。藤原の命そのものが吸い出されていく。千春はこのやくざの最後に哀れみを感じた。そして何かを吸い取っている花田を見て、千春は最初抱いていた花田に対する慕情のような気持を一気に失っていった。今日の前にいる花田は以前何かを感じた花田ではなかった。全ての人間性を失ってしまい、冷酷さだけが残った知性なき野獣に見えた。そしてその野獣は平然と三人の人間を殺し、何か人間にとってかけがえのないものを吸い

取っている。その光景はとて悪だ。野獣が生きていくために獲物を狩るといった必死の姿勢ではない。そこには明かな悪意が存在した。必要以上に彼らを苦しめようという悪意が。花田は藤原を放り出すと、天井に向かって力の限り吠えた。有り余るエネルギーを天井にぶつけているかのようだ。花田の口からほとぼしる雄叫びは、あらゆる物質を、その根元の原子から揺さぶり振動させた。それは耳を塞いでも体中を震わせ、逃げ出したいという意志の力を奪った。硝子が割れ、カウンターはびりびりと振動し、そして千春は恐怖に涙した。

花田はようやく絶叫を止めると、武者震いの用に自らの身体を震わせた。花田の足下に転がる藤原の身体からはもう、あの暴力的な生命力は感じられなかった。ねじれた形で横たわる藤原の遺体を見ると、本当にこの男が存在していたのかを疑いたくなった。

花田が白く濁った目を千春に向けた。生命力がなく悪意のある目だった。

「いや。来ないで」

無表情だった花田の顔に、何か笑みのようなものが浮んだ。だがそれは明かに人間のそれではなかった。機械の顔に無理矢理笑みをつけたようだ。そして花田はその不自然な顔のまま大きく息を吸い込むと、一気に吐き出した。すると口から、さっきやくざたちの口に流し込まれたような、白い息が大量に吐き出された。吐き出された息は白い濁流となり、店内を渦巻いた。そしてようやく千春はそれが雪であることが分った。さっきの雪はどこかからやってきたのではなく、花田が吐き出したものだったのだ。

千春は冷たい風と雪に晒されて再び身体が火照り始めた。男を欲したときの火照りと同じ火照りが、店内を渦巻く吹雪のように千春の体内を駆けめぐった。そして千春はその火照りがいつも感じる火照りを通り越し、それより遙かに強烈なものになりつつあることを悟った。それはいつもより冷ややかで情熱的だ。いつも感じる後ろめたさも全く感じなかった。何の迷いもなく、千春は濁流に身を任せた。そうこの火照りこそ本物ののだ。いつも感じる火照りなど代用に過ぎなかったのだ。千春の中で満たされない何かを鎮めるための代用品だったのだ。千春はやっと本当の感覚を理解し、そして自分が何者であるかを感じ取りながら、白い激流に飲まれていった。

だが千春はたった今得た喜びを誰かに伝えることも出来ないまま、完全に冷凍されてしまった。

花田は凍り付いた千春を軽々と肩に担ぎ上げた。辺りは花田が吐き出した雪が膝まで埋まるほど積もっていた。花田は雪を踏みしめながら、千春を大事そうに抱えて店を出ていった。店の外では風が吹き始め、吹雪の様相を見せはじめていた。空を見上げて歓喜の声を上げていた若者たちも、コートの襟を立ててバーやレストランへと消えていった。雪はたちまちにして辺りを白一色へと塗りつぶしていった。テレビではアナウンサーが街の様子をバックに、交通がマヒするだろうと訴えていた。

二 襲撃

吹雪が一瞬弱まった瞬間に、黒岩たちを取り囲んでいた人影が目の前まで近づいているのが見えた。正面にいる男はヘッドライトの光を受けてその正体の全てを晒していた。男は全身真っ白で、顔には全く表情というものがなかった。パーソナリティを形作る顔自体が、風紋のように次々と移り変わり、一体どの顔が本当の顔なのかがわからなかった。男の顔は次から次へと見たことのある表情を形作っては消えていった。恐らく彼らは下端で、一つの形態を個人が保つことが出来ず、複数の集合体として一つの身体を形作っているのだろう。ただ一つだけ共通していることは、目が凍り付いて白く濁っていることだ。それでもほとんど瞳の無い目からは獲物を決して逃がさないという意志が読みとれた。その移りゆく顔には明かな敵意が読みとれた。彼らは間違いなく自分たちを殺そうとしている。そのような敵意に溢れた、ゆがんだ白い顔がいくつも周りに並んでいた。

「逃げろ」

銀次が叫ぶが早いか、何かが雪上車にぶつかってきた。どすんという音がして雪上車が大きく揺れた。黒岩はギアを入れて一気に走り出した。動き出した雪上車が正面にいた男にぶつかった。男はただの白い雪塊となって砕け散った。飛び散る雪塊は正にただの雪の塊だった。それが遂今し方まで自分たちに襲いかかろうとしていたとは、考えられなかった。銀次は一瞬夢でも見ていたのではないかと思った。しかし次々に襲いかかってくる男たちが、それを現実だと言っていた。醜く開かれた口が、自分たちを受け入れろと叫んでいるようだった。「こいつら何なんだ」「スノーマンだ。人間じゃない」「人間じゃないって。そんな馬鹿なことが」

「見ただろう。砕け散る様を。やつらはただの雪の塊だ」

銀次は信じられないというふうに首を振った。実際に信じたくもなかった。ところが正面で砕け散ったはずの男の一部が、フロントガラスにへばり付いていて、徐々にその姿を再形成し始めた。始めはただ風によって動いているだけのように見えた雪片が、次第に一カ所に集まりだした。集まった雪はさらに勢いを強め、あらゆる方向から雪を吸収し始めた。そしてフロントガラスの中央に歪んだ男の顔が現れた。男は更に雪を吸収し、首を生やし、肩を形作り、両腕を生やした。生え始めの腕はまるで力がなく、風に煽られてひらひらと揺れていたが、フロントガラスの他の雪と融合すると、急に太くなり力強く硝子に貼り付いた。そして男は真っ白に凍り付いた血の気のない顔でにやりと笑った。後ろでも数人のスノーマンが車体に飛び移る音がした。「銀次シートベルトを付けろ」

銀次は慌ててシートの周りをまさぐった。今までシートベルトなど付けたことは一度もない。この雪上車にシートベルトがあることを今初めて知った。「どうするつもりなんだ」黒岩はその間には応えずに急激に雪上車の向きを変えた。キャタピラが雪を蹴散らし、真っ白な雪煙を巻き上げた。雪煙のお陰で一瞬視界が全く奪われた。急激に向きを変え

られた雪上車は、勢い余って雪斜面を十メートルも横滑りした。視界の効かないまま、谷に向かって滑り落ちる雪上車の中で、銀次は生きた心地がしなかった。

それでも雪上車にへばりついているスノーマンたちを振り落とすことはできなかった。黒岩はギアを一気に上げると、何度か急激に向きを変えて見たが、スノーマンを振り落とすことは出来なかった。それどころか、無理な力をかけられたギアが壊れそうな音を発していた。これではだめだと悟った黒岩は、スキー場を斜めに突っ切るように雪上車を走らせ、勢いをまったく緩めずに森の中に突っ込んだ。雪上車は整地していない斜面を大きくバウンドしながら、下へ下へと走った。時々バウンドが大きすぎて、雪上車の屋根が木の枝をこすったり折ったりした。何度か屋根を枝でこする内に、後部の音がしなくなった。残るは正面の気味の悪い男だけだ。ところが正面の男は簡単には離れてくれそうになかった。両手が完全に正面ガラスから車体を覆う雪と融合していた。すでに雪上車のスピードは限界に達していた。これ以上スピードを上げれば、制御することはできなくなる。それを知ってか知らでか、男は後に大きくのけ反ると、頭を勢いよくフロントガラスに叩きつけた。ガラスに蜘蛛の巣のようなひびが入った。

「まずい。このままだと中に入られてしまう」

「親父危ない。止めてくれ」「無理だ。もうコントロールできない」

同時にエンジンの中で何か金属が折れるような音がして、雪上車のスピードが一気に上がった。雪上車は細い木を何本もへし折り、麓まで森の斜面を高速で駆け降りた。大木に激突しなかったのは幸運としか言いようがなかった。しかし降りたことは降りたが、エンジンと同時にブレーキも壊れてしまっていた。雪上車は麓の道の数メートルの段差を猛スピードでダイブし、道路を飛び越し畑に着地した。ものすごい衝撃と破壊音が響き、雪煙に混じり何かの部品が後方へ飛んでいくのが見えた。雪上車はそれでも停止せず、雪煙を巻き上げながら前進を続け、スキー場下の商店街の一番手前の家に激突してようやく停止した。正面の男は柱に激突して砕け散った。

同じ頃、商店街の人々は体育館に避難していた。風は強まる一方だし、雪でほんの手前の視界すら利かない。そして強すぎる風はすでにいくつかの古い建物を倒壊させていた。その中には飲み屋の酒田も含まれていた。人々は冷たい体育館の床に腰を下ろし、囁きあうようにして自分たちの不運を嘆いた。あまりにひどい吹雪で客は寄りつかず、リフトは風で倒れた。スキー場として再生するための資金など町にある筈も無い。どうすることもできない。体育館の各所でため息が漏れ出た。体育館は完全に絶望に支配されていた。それでも何人かの人々は絶望をうち破ろうと努力を続けた。役場の倉庫からガスコンロが持ち込まれ、炊き出しが行われた。石油ストーブもあるだけ点火された。しかし広い体育館を暖めるには力不足だった。夜が深まり、気温はぐんぐんと下がった。風が体育館の鉄扉をがたがたと揺らし、窓ガラスは白い雪で凍り付いていった。いくつかのガラスについた雪の模様は、まるで人の顔のようにも見えた。窓の外では風に煽られた雪が、あざ笑うように渦巻いていた。人々はストーブの周りに群がるようにして座った。風で体育館に送電する電柱が折れてしまい、蛍光灯は点かず、非常灯とストーブの炎だけが僅かに館内を照らしていた。赤い炎は人々の顔を照らしたが、炎の熱は最早人々の凍り付き始めた心を溶かすことはできなかった。どの顔にも疲労が深く刻まれていた。

悲鳴のような風は、いつまでも吹き荒れていた。そのうち風がますます強くなったのか、扉の音が大きく鳴り始めた。突然非常灯が消え、辺りは一層暗くなった。人々の間に不安と緊張が走った。ストーブの炎だけが僅かな光を提供していた。鉄扉の音は更に大きくなった。誰かがライトを点けに行っただが、ごそごそ音がするだけで一向に電灯は点かなかった。赤く燃えるストーブの炎が、右に左にうごめく顔を照らした。そして鉄扉の音は風が揺らす音から、明かに誰かが叩く音へと変化していた。沢山の手が、ここを開けると言わんばかりに扉を叩いていた。

「誰かね。ここは風が強くて開けれんから、正面に廻ってくれ」

どんどんどんどん。「名前を言ってくれんかね」どんどんどんどん。後ろで誰かが、開けてやったらどうだと言った。

「だけど、誰がおらん。みんなここにいるじゃろ。じゃあ外に居るのは誰だ」

人々に再び緊張が走った。

「済まんが、名前を言ってくれんかね」

どんどんどんどん。

「そう言えば黒岩さんがおらん。バイトの若いのも」

「青年団はどうした？」

人々の顔にほっとした表情が広がった。

「黒岩さんじゃろ。そうじゃろ」

どん。答の代わりにうち下ろされた拳で、暑さ三ミリはある鉄扉が凹んだ。続いていくつもの拳が、まるで鉄扉が紙か何かで出来ているかのように、いくつもの凹みを作っていった。赤いストーブの炎の中で、人々の顔が凍り付いていった。鉄扉は一斉射撃でも受けたかのように、たちまちにして変形していった。鉄板はいくつもの拳を受け、完全にゆがみ、今にも壊れそうだ。できた隙間から雪が吹き込んできた。「何かで塞げ」

そう誰かが言った時には遅かった。異常な形にまで歪んだ鉄扉は、猛烈な風のひと吹きで体育館の中央まで飛ばされた。黒い闇に開かれた大きな口からは、白く残酷なまでに冷たい雪が吹き込み、我が物顔で体育館の中を荒らし回った。ストーブの炎が提供していたほんの僅かな暖気さえその風は吹き飛ばし、人々を冷気の中へと引きずり込んだ。吹雪が一通り体育館の中を舐めると、黒い入り口に数人の人影が現れた。数人の先頭にいるのは一人の少年だった。そしてその顔に誰かが気が付いた。

「茂。茂じゃないか」「茂ってあの遭難したはずの、滝口茂か」「なんで茂がここにいるんだ」

そして茂に続いてぞろぞろ体育館に踏み込んできた連中を見て、町の人々は啞然とした。そこには美濃部善三がいた。高島屋の親子もいた。その他にも突然姿を消したといわれた人々がみんないた。だが、だれも彼らに安否を尋ねたりしなかった。石油ストーブの真っ赤な炎が、彼らがこの世の者ではないことを明確に映し出していた。彼らは茂と善三を除いて一様に真っ白に凍り付いていた。茂は一步前に踏み出すと、「全員始末しろ」と命じた。茂の後に控えていた連中が一斉に人々に襲いかかった。館内には悲鳴や怒声が渦巻いたが、風がすぐにそれを攫っていった。

「これだけ集まると、スノーホワイトの精製にも楽ですな。一人一人回収するのは結構大変ですからな」善三は満足気に言った。

「だから僕が言っただろう。家畜は一同に集めて育てるものだって。この人数で何キロ精製できる」

「そうですねあ。年寄りが多いと量も減る。年寄りは魂が薄いですから。この人数じゃあせいぜい二十キロといった所でしょう」

「今までの分と合わせて、二十キロもあれば十分だ。東京の奴らはすぐに薬に飛びつく馬鹿どもばかりだ。明日、東京中にばらまいてやる」「楽しみですな」善三がにやりと笑った。体育館の中は騒然としていた。闇の中で人々は逃げまどった。茂たちが入ってきた入り口に挑む者もあれば、他の出口を探す者もいた。何れの場合も強く吹き付ける吹雪が邪魔をして、人々の行く手を阻んだ。体育館の中を吹き荒れる吹雪は生き物のように自在に動き回り、人々の目を覆わせ、足をすくった。倒れた者は次々にスノーマンに襲われた。そして魂を吸い出された。口からは白っぽく光る粒子が次々に流れ出し、暗闇のなかできらきらときらめきながら、スノーマンの口へと吸い取られていった。端から見れば、あちこちで光り輝く光景はこの上なく美しい光景であるが、その光は人々の最後の灯火であった。腹一杯に魂を吸いふらついているスノーマンの一人を、善三は捕まえ頭を鷲掴みにした。スノーマンは精気のない顔で怯えながら、何とかその手から逃れようとしていた。善三はもがくスノーマンの首を押さえつけると、力任せにねじった。生木を裂くような音がして、スノーマンの首が胴体からもぎ取られた。善三は胴体を放り出し、手に持った頭を床に置くと、頭頂部にカー杯ハンマーを振り下ろした。乾いた音がしてハンマーの打撃部が頭蓋にめり込んだ。何度かハンマーを振り下ろすと、両手が差し込める程度の穴が開いた。善三は穴に両手を差し込み、力任せに頭蓋を左右に引き裂いた。そして白く凍った脳みそを取り出した。取り出された脳みそは、人々の魂を吸ってきらきらと輝いていた。この脳みそをすりつぶし、精製して粉にしたものが悪魔の粉スノーホワイトだった。

「善三。僕は先に東京へ行く。お前はここに残ってスノーマンをトラックで運ぶ指示をしろ」

「はい」

茂の前を一人の子供が駆抜けた。茂の前を抜ければ出口まではすぐだった。だが茂は吹雪を操作し、その子供をあっという間に捕まえた。

「助けて。お願い」茂は善三を見ながら言った。

「容赦はするな。これは復讐だ。俺たちを追いつめた人間どもへの復讐なんだ」

茂が少年の目をのぞき込むと、茂の目から稲妻のような光が少年の目に走り、たちまちにして少年はミイラのようにひからびてしまった。茂はひからびた少年の身体を放り出すと、大きく息を吸った。そして息を溜めた状態で身体中に力を充満させた。すると茂の身体が一瞬にして粉雪に分解した。雪となった茂は、風に乗って入ってきた入り口から外へ流れ出し、闇夜に消えた。

「大丈夫か」

黒岩に揺すられて銀次は正気に返った。気を失っていたらしかった。銀次は慌てて辺りを見回した。そして誰もいないと分ると、ようやく緊張から解放されたようにシートに凭れた。

「ああ、大丈夫だ。それよりあいつら一体何者なんだ」

雪上車は見事に民家に突っ込んでいた。黒岩は椅子にぐったりと凭れた。

「いつかこういう日が来ると思っていた。あいつらはスノーマンといって魂を抜かれた人間の成れの果てだ。身体全体が雪で出来ていて、操られて動いている。殺したところで元々身体が雪で出来ているから、雪のある所ならいくらでも再生ができる」

「魂を抜かれたとか、操るとか。親父まさか」

「そのまさかだよ。あれは雪女の仕業だ。雪女は雪を操れるし、人を殺して操ることもできる。これが俺が以前言った第三の可能性だ。人間は元々自然に対する能力を備えた生き物だった。それが近代化するに従って、その力を失ってしまった。」

「信じられない。第一魂を抜かれたところで、雪になるのはおかしいじゃないか」

「連中は魂を抜き取ると同時に、身体の中に自分の身体の構成細胞のような物質を流し込むんだ。するとその物質が体内で増殖し、やがて体全体を雪に非常に似た物質に変えてしまう。以前雪を観察していて妙な体験をした話をしただろう」

「あの雪が増殖したっていう話かい」

「そうだ。あれは本当は雪では無かったんだ。今から思えば、あれこそが連中の本当の姿だ。雪女は雪に非常に似た性質をもった生物が、人間の形をしているだけなんだ」

銀次は顔を覆って呻いた。渋谷でやくぎを恐れて雪国に逃げ込めば、こんどは雪女と来た。それも現実に奇妙な連中がいて自分たちを襲ってくる。もうどこへ逃げればいいのか分らなかった。「どこへ逃げればいい」「逃げ場所なんかない」「ないって」途方に暮れる銀次に黒岩の言葉が追い打ちをかけた。

「東京に帰ろうとか考えているんだろう。今夜あたり東京も雪だぞ。連中は雪と同じだ。雪のあるところならばどこへだって移動できる。そして俺たちには雪と奴らの違いが分からない」

「じゃあどうすればいいんだ」

「だが奴らだって生物には違いない。何か弱点があるはずだ。雪と同じ性質を持っているならば、熱には弱いに違いない。なあ、そうは思わないか?」

銀次の目が大きく見開かれた。向い合う黒岩の目は狂気に輝いている。

「親父何考えているんだよ。まさか戦おうとか考えているんじゃないだろうな」

黒岩の目にある強い意志が全ての答だった。家を焼かれても、銃と雪上車を無くしても、黒岩はまだ何か戦う手段を考えていた。もしこの男に付いてゆくのなら、黒岩は自分にも同じ強さを求めるだろう。銀次はもうこれ以上この男に付いていくことはできないと感じた。

「俺は行くよ。こんなところで死にたくない」「好きにしろ。これは俺の復讐だ」

黒岩は雪上車のドアを蹴り開けると、吹雪の闇の中へと姿を消した。暗がりの廃墟に銀次一人が残された。黒岩がこんなに簡単に自分を見捨てるとは思ってもみなかった。せめてもう少し手助けをしてくれると思った。いつどこからあの気味の悪いスノーマンがやって来るかも分らない。銀次は恐怖で身動きが出来なくなっていた。

風が吹く度に倒壊した建物の、まだ崩れきっていない部分が軋み音を上げた。このままでは残りがくずれて、いつ雪上車が潰されるか分らない。ここからはすぐに抜出せねばならない。しかし最初の一步がどうしても踏み出せなかった。目の前にある雪がスノーマンじゃないという保障は何もない。踏み出した途端に足を驚掴みにされるのはごめん

だった。

事態は急を要し始めた。軋み音は大きくなり、家が崩れるのは時間の問題だった。銀次は覚悟を決め、奇声を発しながら雪の中に転げ出た。

銀次が転げ出るの同時に家は崩れ落ちた。吹き付ける雪の中を進みながら、心にあるのはいつ襲われるだろうかという恐怖心だけだった。風の向きが変われば辺りを見回し、固い粒が頬を打てば物陰に隠れた。ひょっとしたら、車に乗り込もうと背を向けた瞬間に襲われるかもしれない。銀次は神経の張りつめた状態で頭がくらくらした。車に乗り込むまでは何も起らなかった。手が震えて鍵穴にキーを差し込むのに難儀した。その間に後ろから襲われるのではと何度も振り返ったが、あたりには何もいなかった。銀次にはどこかで絶対に監視しているという確信があった。雪上車が家に突っ込んだ後からずっと、刺さるような視線を感じ続けているのだ。だがそれももう終わりだ。車にさえ辿り着けばお前らなどには用はない。銀次はエンジンをかけると、普段なら十分にする暖気も省略してギアを一速に入れた。視界は悪かったが、避難命令が出ているので、うろついている人間は居ないはずだ。銀次は辺りを確認もせずいきなり発進した。発進するさいに、近くの車にかなりひどくぶつかったが、気にも留めなかった。銀次は街を一気に抜け、下の街に続く山道へと駆け込んだ。

数分後、銀次は茫然自失の体で止らざるを得なかった。町へとつながる一本道の橋の所で、ようやく六さんの言葉を思い出した。橋は欄干の上まで積もった雪が、完全に凍り付いていた。表面は風で鏡のように磨かれていた。スケートリンクでさえ、ここまで綺麗に磨かれていないだろうと言うほどだった。橋は右にカーブを描いているため、右側に僅かに傾いている。だがこの僅かな傾きがこの橋の機能を完全に奪っていた。ここまで磨かれた氷ならば、僅かこれだけの傾きでも渡る者を谷底に滑り落とすには十分だ。そして強い風が、すべての物を橋から押しだそうと頑張っていた。重たいトラックでさえ、この橋を無事に渡ることは無理だと思われた。「どうすりゃいいんだ」凍ってきらきらと光る橋の中央付近で何かが動いた。それは次第にせり上がり、辺りの雪を吸収して人の形になった。雪上車にへばり付いていたあの男だった。男は橋を渡れない銀次に意地の悪い笑みを向けた。銀次は慌てて車をUターンさせた。「くそっ。くそっ」

銀次は何度も悪態をついた。自分の不幸を呪った。何故俺はこんなに運が悪いのだと。そしてその荒れる気持をぶつける相手がないことへの不満が、より一層銀次を荒れさせた。冷静な判断を失った銀次の車は、たちまちにして雪道を飛び出し、道路脇の雪溜まりに正面から突っ込んだ。車は衝撃と共に停止した。銀次はハンドルに伏してむせび泣いた。

黒岩は仲間を募るつもりで役場の体育館へと足を向けた。もしかしたら何人かは黒岩の言うことを信じてくれるかも知れない。あるいは酒田だけは信じなくとも手伝ってくれるかもしれない。そんな僅かな期待をもって体育館へ向かったが、体育館の扉が一つ開け放たれているのを見て、嫌な予感があった。用心しながら中へ踏み込み愕然とした。商店街の全ての人々が避難しているはずなのに、そこには誰もいなかった。辺りには衣服や手荷物散乱し、雪まみれになっていた。誰かがいたらしいという証拠に、暗闇のなかで石油ストーブだけが煌々と燃え続けていた。黒岩は体育館のあちこちを歩き回ってみた。そして酒田が店を出ていく時に着ていたのと同じコートが残されたままになって

いるのを見つけた。

「酒田」

かっと身体が熱くなった。全身が怒りではち切れそうだった。黒岩は力一杯ストーブを蹴りつけた。ストーブは大きな音を立てて転がった。自動消火装置が働き、煤と石油の臭いが広がった。その臭いが黒岩に一つのヒントを与えた。黒岩はコートを握りしめると、今はもう生きていないであろう友人に誓った。「見ていろ。必ず思い知らせてやる」黒岩は一カ所にストーブを集めると、酒田のコートやカーテンに石油を浸し火を点けた。火は見る見る布を燃やし石油ストーブのタンクに引火した。黒岩はその炎に体育館にあるあらゆる布製品、木製品を投げ、巨大な篝火に仕立て上げた。赤々と燃える炎が黒岩を照らした。黒岩は皮膚を焼くような熱に、復讐の熱を重ねた。体中が怒りのエネルギーではち切れそうだった。燃えさかる炎の向こうには、大きく開け放たれた入り口が見えた。入り口の外は、群青をまとった雪の世界だ。その厳寒の世界を俺の熱で焼き尽くしてやる。黒岩は炎にそう誓い、猛吹雪の世界へと踏み出した。その後黒岩はガソリンスタンドに向かった。ガラスを割って中に押し込み、事務所を物色するとすぐにガソリンの配給車の鍵が見つかった。配給車を物陰に移動すると、給油ポンプの電源を入れレバーを引いたまま布で結わえた。流れ出たガソリンはすぐに雪にしみこんでいった。そのままでは引火しないので、ガソリンを事務所に蒔いた。給油ホースをなるべく事務所の近くに転がし、布や雑誌をばらまいてガソリンの道をつくってやった。そして事務所の一角に火を放つと黒岩はすぐに配給車に乗車し、離れた所から見守った。暫くは事務所の中で揺らめく明かりが見えただけだった。もしかして失敗だろうかと思い始めた時、轟音を立ててガソリン給油ポンプが空高く跳ね上がった。ポンプの下からは真っ赤な炎が尾を引いていた。「やった」ポンプはそのまま隣の家に落ち、辺り一帯に火の手を放った。黒岩は多少後ろめたくて辺りを窺ったが、もう文句を言う人間はここには残されて居ないだろうと思った。車を発進してすぐに後で大きな爆発が二回立て続けに起った。地下のタンクに引火したのだろう。あとは風が全てを解決してくれる。この辺りの家々は古い木造だ。たちまちにして火の手は商店街全体に及ぶだろう。もしそうならず火が消えてしまうようなことになれば、全てはご破算となる。黒岩は死に、やつらは目的を達することだろう。黒岩はそんなことさせてたまるかと思った。やつらを絶対に許さない。最愛の園長先生を奪い、今度は友人まで奪っていったやつらに思い知らせてやる。

佐久間は暗闇で目を覚ました。頭がずきずきと疼き、熱があるようだった。ひどい風邪をひいたらしい。それにしても寒いと思った。電気を点けようと手を伸ばして雪に触れた。初めて自分がどこにいるのかを思い出した。教会だ。佐久間は教会に何かスノーホワイトの手がかりがあると確信して、調査をしにやってきた。そして憎き善三に出会ったのだ。その後は覚えていない。

佐久間は苦勞して身体を起こした。冷たい雪の上に転がされていたので、体中がひどくこわばっていた。本当は忘れたのではない。忘れたかったのだ。佐久間は自分の目を見たこと以外を信じる人間ではなかった。論理を重んじ、俗説や迷信には惑わされなかった。説明のつく証拠こそが犯人に結びつく。この信念に従ってきたからこそ、今の自分がある。そう信じて疑わなかった。ところがそんな自分の目の前で、二度も善三は信じがたい芸当をやったのけた。決して人間では出来ない。マジシャンだろうが何だろうが、

絶対に無理な芸当をやった。それを自分は信じたくなかった。あり得ないことだからだ。だが、現実を見て見ろ。どうだ。未だに自分はこうやって雪の上に転がされ、暗い部屋に閉じこめられている。これが現実だ。佐久間は苦労してポケットからライターを取り出した。指が完全にかじかんでしまって、火を点けるのに難儀したが、どうにか火を点けられた。小さな炎が荒れ果てた部屋を照らし出した。壊れた家具以外には何もない。佐久間は壊れた椅子の布地に火を点けた。炎が見る見る広がり、その熱が凍えた佐久間の身体にしみていった。いくつかの家具に炎が引火したころには身体もだいぶ楽になっていた。兎に角ここから抜出さなければならない。部屋には窓はなく、入り口の扉が一つだけ。そして扉を見て佐久間は愕然とした。扉は完全に分厚い氷でふさがっていた。胸ポケットには拳銃がまだ入っていたが、小さな拳銃でどうかなる厚さでは無かった。

「爆弾があるなこりゃ」佐久間は固い氷を蹴りつけた。暖を取るための僅かばかりの家具は、もう全て燃えてしまった。到底氷を溶かすことは出来そうになかった。絶望的な状況だ。もし誰もここを発見してくれなかったら、一体自分はどうになってしまうのだろう。佐久間はポケットというポケットを全て漁った。何か氷を破壊する手だてが無い。そして家具の炎が消える寸前に、携帯電話に手が触れた。佐久間は携帯電話を取り出して見たが、思った通り圏外だった。とてもアンテナが立っているような場所ではない。気を落としながらふと見た電話の裏面には、娘と撮ったプリクラの写真が貼ってあった。お花畑の枠の中に、二人の笑顔が並んでいた。「絵里香」炎が消え、完全な闇が再び戻ってきた。

だが佐久間の心にはもう闇は無かった。必ずここから抜出すんだという信念の炎が燃えていた。手はある。必ず手はある。

吹雪の中でさえ教会は驚異的な存在感を示していた。まるで雪が教会をさけて通るかのごとく、白み始めた空を背景にそこだけ浮かび上がって見えるのだ。それは挑戦的でした。黒岩は一旦坂道の上で配給車を停止させた。そしてもう一度頭から作戦を思い描いてみる。兎に角重要なのは炎だ。黒岩はポケットのライターと、車に備え付けられていた発煙筒を確認した。完璧だ。後は目を瞑らないだけの勇気さえあればいい。黒岩はシートベルトをしっかりと固定すると、唾を飲み込み一気にアクセルを踏み込んだ。スタッドレスタイヤを履いた配給車が右に左にスリップしたが、気にも留めなかった。目はただ一点。教会の礼拝堂入り口を見据えていた。スピードがぐんぐん上がり、小さかった教会が大きく、思い描いていたよりもさらに大きく見えてきた。教会は信じられないくらいふくれて覆い被さる巨大な黒い影となった。それでも黒岩は瞬きすらせず、教会に突進した。観音開きの大きな木製扉が、いくつもの彫刻を彫り込んだ年代物の、高価そうな扉が迫り再び衝撃が襲った。扉は思ったよりも簡単に開いた。礼拝堂に突っ込んだ配給車は中央の通路を、長いすを左右に蹴散らしながら進んだ。そして、耳の辺りから斜めに裂けたキリスト像の真下に激突した。建物全体を揺さぶるような衝撃だった。ボンネットは完全に壁にめり込み、白い煙を吐いていた。激突の衝撃で黒岩は少しの間息が出来なかった。体中が痛い。でも上出来だ。ここまでくれば止められる者はいないだろう。外に出ようかとドアに力を掛けたが開かなかった。ドアのすぐ脇に裂けたキリストの顔があり、黒岩を冷たい目で見据えていた。激突の衝撃で落ちたらしかった。その像がドアをしっかりと押さえていた。

「くそ。俺は背信者だ。どけ」だが、痛む身体で押しのけることは難しかった。黒岩は仕方なく反対の扉から降りることにした。そしてそちらを振り向いて、怒りに顔を歪ませている善三の姿を発見した。「まだ生きていたのか。くたばりぞこないが」

善三は窓をたたき割ると、腕を伸ばして黒岩の胸ぐらを掴んだ。そして一気に車から引きずり出した。「くたばりぞこないはどっちだ。貴様こそもう死んだはずだ」「減らず口をたたくな」善三は黒岩を壁に投げつけた。黒岩は壁にぶつかり床に落ちた。息が出来ない。それでもポケットから発煙筒を引っ張り出した。終わりにしてやる。配給車に目をやる。ガソリンはどこからも漏れ出ていなかった。くそう。レバーを引かなければ。善三に目をやると、善三はもう目の前まで来ていた。そして腹に強烈な蹴りを食らった。「何だその発煙筒は。それでガソリンに火でも点けるつもりか。放火は第一級の犯罪だぞ」

善三は黒岩の右手を蹴り上げた。発煙筒が手から放れて飛んでいった。善三は再び黒岩の胸ぐらを掴むと、なぎ倒された椅子の間に黒岩を放り投げた。呻く黒岩を再び持ち上げ壁に叩きつけた。

「どうした。火は点けないのか」

善三は不敵な笑みを浮かべた。黒岩はもう痛みで腕を上げることもできなかった。ポケットにライターが入っていたが、取り出すこともできない。そして配給車のポンプのレバーはロックされたままだ。あれを外さない限り、火を点けることはできない。ここまでか。

「ふん。人間の分際で俺たちに刃向かうことができると本気で信じていたのか。お前らみたいな破壊することしか知らない、下等な生き物が」善三は空いた手で黒岩の頬を張った。「すぐに楽にしてやる」善三が顔を寄せてきた。そして大きく口を開いた。

手持ちの銃弾は十発だった。氷にだって結晶の方向がある。特に澄んだ水で作られた氷はクラスターと呼ばれる分子構造体を形成するから、きっと割れやすい方向があるはずだ。効率よく銃弾を撃ち込めばきっと割れる。佐久間はそう信じてすでに九発の銃弾を氷に撃ち込んでいた。十センチ以上ある分厚い氷は思ったように割れていないかも知れない。それでも何もしないよりましだ。佐久間は携帯電話の明かりで位置を確認すると、扉に向かって銃を構えた。すると何かの破壊音が聞こえ、壁から振動が伝わってきた。地震だろうか。そしてすぐにもう一度、今度は建物全体が揺れる程の衝撃が加わり、部屋全体が大きく揺れた。何か建物にぶつかったに違いなかった。一体何が起ったのだろうか。佐久間は何が起きたのかを確認するために、耳を澄ませて神経を集中した。礼拝堂の方から木片が落ちる音がした。その音に混じって何か硬いものにひびの入る音がした。もしやと思った。すると扉を覆い尽くしていた氷が大きな音を立てて崩れ落ちた。さっきの大きな揺れのお陰で、氷にひびが入ったのだ。もちろん砕けたのは九発の銃弾が撃ち込まれていたからでもあった。佐久間は氷の欠片をどかすとノブを握った。鍵が掛かっていたが、氷の牢獄に比べれば大した障害ではなかった。佐久間は最後の銃弾を鍵に向けて撃ち込んだ。

黒岩は初めて気が付いた。今の今まで全く気が付かなかった。もちろんそれは顎全体の鬚に覆われていたせいでもあるだろうが。善三の顔を黒岩は見たことがあった。あの忌まわしい過去において。

「お前を知っている」善三の動きが止った。「何だって」「お前を昔見たことがあるぞ」善三は突然大きな声で笑い始めた。

「見ただって?笑わせる。今頃思い出したのか。全く人間てやつは」
善三は笑いをこらえることが出来ずに、黒岩を取り落とした。そしてそれでも笑っていた。

「四十五年前、お前は施設にいた。そして吹雪の荒れ狂う晩にあいつを呼びだした」
「そうだ。四十五年前。俺はお前と同じ施設にいた。酒浸りの親父がくたばったんで、あの施設に引き取られたんだ。そしてある儀式を行った」「雪女を呼びだしたんだ」

「そうだ。雪女だ。俺たちの母親だ。この冬の世界を支配する偉大なるお方だ。俺はその息子だ。俺は偉大な血を引いている。お前ら人間に倒せるわけがない」

佐久間は物陰から礼拝堂を覗いて、やっとさっきの揺れの原因を理解した。壁にガソリン配給車が突っ込んでいた。そしてまたしても信じられない事実を突きつけられている。雪女だって?

冗談じゃない。しかも善三がその息子だという。なんてばかげた話だ。だがその話を疑ってみたところでどうしようもない。自分の成すべきことはスノーホワイトの犠牲者をこれ以上増やさないことだ。銃にもう弾はない。そして善三に銃は通用しない。佐久間は配給車を見てぴんときた。もし、信じたくない事実だが、善三が本当に雪女の息子であるならば、捕まえた所でなんになるだろう。佐久間は辺りを見回した。すぐ目と鼻の先に発煙筒が落ちているのが目に入った。佐久間は躊躇することなく、物陰から飛び出し、発煙筒を手にとると、配給車に走った。突然の闖入者に善三の気が緩んだ。その隙に黒岩は善三の包囲から逃れた。佐久間は配給車にたどり着き、給油ポンプのレバーを引くと、ガソリンを辺りにぶちまけた。そして発煙筒をしっかりと握りしめて善三に突き付けた。

「動くな。警察だ。お前を逮捕する」「火を点けろ。格好を付けている暇はない」
「お前らには俺は倒せないと言っただろう。それで勝ったつもりか」

そう、このまま善三が屈服するのを期待しているのならば、それはただの格好に過ぎない。だが、善三にはありあまる貸しがある。ここらで決着をつけさせてもらおう。これで終わりだ。佐久間は発煙筒の着火材を強くこすりつけた。だが発煙筒からは炎は出なかった。古すぎて火が点かなかったのだ。「まるで茶番だ」

佐久間がポケットからライターを取り出すのを見て、善三は出口に向かって駆け出した。だが、椅子が散乱しているせいで、なかなか辿り着けない。

「逃がすな。火を点けるんだ」
佐久間はガソリンに火を点けた。

「逃げろ」二人は壊れた窓から吹雪の外へと飛び出した。飛び出すのが早いか、礼拝堂で轟音が轟いた。ガソリンの炎は壁を砕き、屋根を砕いた。いくつもの破片が上空に飛び散った。

「やった」「やつは死んだのか」「ああ、死んださ」
「犯罪者を取り逃がした。手錠に繋がなきゃ俺の仕事は終わりにならない」

だが二人を落胆させる出来事が目の前で起った。吹き付けていた雪が渦を巻き、集まり一つの形を作り始めたのだ。雪の渦はあっという間に人間の形になり、色がついて善三が姿を現した。善三は爆発の直前に吹雪となって外に逃げ出していたのだ。多少炎を浴

びたのか、全体的に煤けた感じはあったものの、間違いなく善三だった。

「だから人間は嫌いだ。人間の最大の欠点は何だと思う。ふん。分るはずがないよな。なにせ人間の最大の欠点は、愚かなことなのだから。お前らには俺は倒せないと言っただろう」

善三の顔からは不敵さが完全に消え、怒りに震えていた。善三は大きな、煤で汚れた手で二人の頸を押さえつけた。

「我々の本当の力を見せてやる」

そう言うと、善三は二人を高々と持ち上げた。

爆破音で銀次は我に返った。音と同時に車全体がびりびりと細かに振動した。何故爆発が起ったのか。その理由は一つしか考えられなかった。黒岩だ。黒岩が何かを仕掛けたのだろう。あの爆発だ。多分黒岩はもう生きてはいないだろう。銀次はぼんやりとそう考えた。爆発音で空気が揺さぶられ、木々の枝から雪が落ちた。そして目の前の、車が頭から突っ込んでいた小山も一部雪が崩れ落ちた。中から出てきたのは以外にも、真っ赤な車のリアフェンダーだった。銀次は一瞬赤いボディーに気を取られた。そういえば幸恵が真っ赤なセリカを乗り回していたっけ。頭にぱっと幸恵の顔が思い浮かんだ。千春そっくりな幸恵の顔。銀次は唐突に千春に会いたくなかった。会いたくて会いたくてたまらなくなった。どうしようもない女だと思う。悲しい女だとも思う。それでも千春に会いたかった。だが今のままでは会えないと思った。あまりにも情けなすぎる。彼女の許から逃げ出し、そして身を寄せた黒岩の許からも逃げだした。ついには行くところがなくなってしまった。もし千春の許に帰るつもりならば、越えなければならない橋があると思った。ついさっき背にしてきた橋のように、冷たく凍り付いた橋を渡らなければならない。それができなければ、自分はまた千春の許を逃げ出すことになるだろう。そうなれば、今度こそ本当に行き場を失う。銀次はギアをバックに入れた。シフトレバーを握る手がひどく震え、唾を飲み込もうとしたが唾はでなかった。

「橋を渡るんだ」

銀次はわざと声に出してそう言った。

善三は二人を高々と掲げると、大きく息を吸い込んだ。その先に何が待っているのかを黒岩は知っていた。真っ白な息を吹きかけられておしまい。あとは意志のないスノーマンになって操られるだけだ。黒岩は目を瞑った。これまでだ。腕はもう疲れ切って上がりもしないし、抵抗などできやしない。隣では佐久間が何とか逃れる手は無いかと頭をフル回転させていた。だが頸を絞めつける手の力は信じられないくらいに強く、何度か蹴りを入れた善三の胸板は岩のように固かった。だが何か手があるはずだ。何か手が。しかし頸を絞められて、徐々に意識が遠のいてきた。血液の流れが止ってしまっているのだ。このままではやられてしまう。何とか手を打たねば。そう思いながら佐久間は失神した。善三は大きく息を吸い込むと、一旦空気を腹に溜めてから一気に吐き出した。口からは全ての物を白く凍り付かせてしまう白い悪魔の息が吹き出されるはずだった。ところが善三の口から吐き出されたのは白い息ではなく、黒みがかかった煙のようなものだった。善三はそのまま大きく咳き込んだ。そしてあまりに咳がひどく、二人を取り落としてしまった。

「くそう。なんなんだ。どうなっている」

善三はよろめきながら、二人から離れて半壊し黒煙を上げる教会の壁に凭れた。そして空を見上げて愕然とした。空が黒かった。空一杯に煙が充満していた。猛吹雪が教会の煙など吹き払っている筈なのに。煙の発生源は教会ではなく森だった。黒岩が火を放った後、強く吹き付ける風が一気に火の手を広げ、今や商店街は火の海と化していた。商店街から伸びた赤い悪魔の舌は今や森をも焼き始めていたのだ。

「思った通りだ」黒岩が頸を押さえながら言った。「どういうことだ」「お前はさっき復讐だといったな」

「そうだ。これは俺たちの人間に対する復讐なのだ。お前たち人間が俺たちにしたことを考えれば、当然の報いだ」

「復讐というのは、お前の母親のことだろう。お前の母親は雪女だ。そしてその雪女が姿を見せなくなって何十年と経つ。最後の記録は四十五年前だ」

四十五年前と言うとき、黒岩は拳を握りしめた。その拳を善三に叩きつけてやりたかったが、もう身体が動かなかった。

「俺はこの町にやって来てから、二十年以上に渡って雪の研究をしてきた。そしてある事実に気が付いた。雪が汚染されているという事実だ。雪は大気中の塵を核にして成長するが、その塵が多すぎると、雪の成長自体に狂いが生じる。雪女が何十年も姿を現さない理由は、大気の汚染だ。雪が汚れてしまって、姿を現せなくなった。そうだろう？ 違うか」

善三は黒岩を呪い殺さんばかりの目で睨みつけた。

「そうさ。その通りだ。お前たち人間があちこちに工場を造り、繁栄だとはざいて環境を汚染していったお陰で、俺の母は自然の力を失った。そして最後の力が失われる前に、俺たち一族に最後の力と言葉を伝えた。今年の秋に季節はずれの大雪が降り、自閉症の少年が遭難した。貴様も知っている滝口茂だ。茂は俺たち一族でもっとも力がある一人だ。だが一方では人間でもある。くそったれな親父の血を引いているからな。俺たち半妖半人は妖怪の世界でも、人間の世界でも中途半端だ。たとえ人間界で特殊な能力に恵まれていたとしても、逆にそれが仇になる。それ故に人間社会に適応出来ずに病気になったり、酒や薬に溺れてしまったりする。茂は自閉症を患った。母はそれを知っていた。だから茂に言葉と力を伝えた。茂は遭難したのではなく、母に召還されたんだ。そして俺が茂に召還され、俺たちの復讐が始まった。お前たち人間が自分の分をわきまえていれば、こんなことにはならなかった」

善三は大きな咳をし、黒い息を吐き出した。それでも目だけはぎらぎらと輝いている。正に手追いの獣だ。話をしながらも攻撃の機会を窺っているようだった。そして最後の力を振り絞り、再び雪に分解しようと試みた。だが、ほんの一瞬分解しただけで、また元の姿へと戻ってしまった。それどころか、顔色が益々ひどくなり、全身から精気が失われたようだ。あれほど巨大に見えた、逞しい身体も今は小さく見えた。それでもなお、善三の目は二人を交互に睨みつけていた。善三は一旦膝をついたが、力を振り絞って立ち上がり、ゆっくりとだが確実に歩を黒岩の方へと進めていった。

黒岩は最早一歩も動けなかった。佐久間は倒れたまま動かなかった。鬼の形相の善三が黒岩の目の前まで迫ってきた。その目は復讐心に燃えさかっていた。善三が固い拳を作り、大きく振り上げた。「その腐った頭を潰してやる」

その時だった。門からエンジン音を轟かせて猛然と四輪駆動車が飛込んできた。銀次だった。銀次は煙る教会の正面での状況を目の当たりにし、ためらわずにアクセルを踏み込んだ。エンジンが咆哮を上げ、みるみる善三の姿が迫ってきた。ボンネットに強い衝撃が加わり、車体が大きく揺れた。金属がひしゃげる音がした。ボンネットの先には驚愕の顔をした善三がいた。

「くたばれ」

銀次の運転する車は、善三をボンネットに貼り付けたまま、一直線に教会の壁にむかって轟進した。灰色の石造りの壁が迫ったと思った瞬間、ものすごい衝撃が銀次を襲った。銀次はしたたか頭をハンドルに打ち付けたが、なんとか車から這いずりだした。そして数メートル離れたところで、車が爆発した。舞い上がるガソリンの炎の中に、白く歪んだ顔が見え隠れした。

「これだけは忘れるな。俺たちが力を失うとき、それはおまえたちの最後でもあるのだ」やがてその顔はくずれ、ついには溶けて消えていった。

銀次は本当に善三が死んだのかどうかを確かめたかったが、荒れ狂う炎が強すぎて確認できなかった。だがあの炎の中で生きていられる生物がいるとも思えなかった。

「親父だいじょうぶか」

銀次が駆け寄ると、黒岩は肩を寄せた。横たわったまま動けないことが恥ずかしいらしかった。

「助かったよ。お前のお陰で俺はなんとか生きている」

「俺のお陰か。じゃあ貸しにしとくよ」「貸しか。あの弱虫銀次はどこへいった」

銀次は恥ずかしげに鼻を搔いた。怪我は無いかと聞きかけて、それが無意味な質問だと思った。今ここにいて怪我をしていない人間などいないだろう。誰もが身体を、そしてところを傷つけられているはずなのだ。そんなくだらない事実を確認するよりも、銀次は黙って黒岩の手を握った。

「これからどうすればいい」「善三のやつ、東京に行くつもりだったみたいだ」「東京だっ
て？」銀次の中で何か熱い物がはじけた。戻らなければならない。東京に。銀次は今初めて、千春を本気で愛していると感じていた。戻らなければならない。千春のために。「俺、東京に帰るよ」「どうやって」

車は見事に黒こげになっていた。動くはずがない。銀次は辺りを見回した。黒岩の乗ってきた車も既に鉄くずと化していた。そして銀次はここへ駆けつける直前に目にした光景を思い出した。真っ赤なセリカ。幸恵の車。銀次は立ち上がると、一目さんに元来た道を走り出した。

三 白い恐怖

ぼんやりとした視界がようやく戻ってきた。何が何だかわからない。それでも幸恵は自分が生きているということを認識した。

最初に感じたのは堅さだった。硬い床に寝かされていた。その時はまだ目が開かなかった。ただ、感覚として硬い床に寝ているんだということが分った。

次に感じたのは振動だった。地の底から伝わってくるような振動。まるで巨大な猛獣のいびきのような振動。身体ががたがたと小刻みに震えた。だがその震えは振動からくるものではなく、寒さで身体が震えているのだということにようやく気がついた。ひどく寒い場所にいる。ここは一体どこなのだろうか。そして倦怠感。布団を拔出すときの、あの努力を要する倦怠とは比べものにならない。

それでも幸恵は気力を振り絞って、今にも落ち込んでしまいそうな、白く霞んだ意識の奈落からはい上がった。目を開けなければならない。それがきっと自分の今後を左右するだろうから。

ぼんやりした視界に最初に映し出されたのは、灰色の床だった。冷たいコンクリートの床。そしておびただしい数のパイプ。長い間使い込まれ、表面の塗料がはげ落ちたパイプ。所々には流れるなにかを制御するであろう回転式のハンドルが付いており、ハンドル脇の丸いメーターの針が振動で小刻みに揺れていた。

周りをもっと見ようと首を持ち上げたが、うまく身体が動かなかった。長時間床に転がされていたせいか、筋肉がこわばっていた。無理をして首を上げると、肩から背中にかけて痛みが走った。

仕方なく、幸恵は身体をほぐすようにしながら、少しずつ少しずつ首を回していった。壁も天井もコンクリートの打ちっ放しで、これといった装飾はなかった。蛍光灯のカバーすらない。だが部屋の広さはかなりのものであった。幸恵が最初に目にしたと同じ、パイプをたくさん引き込んだ機械が、いくつもいくつも横に並んでいた。そしてそれらの機械がみな、一様に低い唸りを上げて稼働していた。見た目ではまったく稼働部分は無かったが、幸恵にはそれらの機械が非常に強力な力で動かされている、ということを感じ取ることが出来た。それは以前どこかで見たダムの底の機械室みたいに見えた。幸恵の感が当たっていれば、目の前に並ぶ機械はみな、水を運んでいることになる。もしダムの底であるならば、脱出するのはかなりの困難を極めることになるだろう。

時間を掛けて首は徐々に自由に動くようになった。見どころが手も足も全く動かなかった。手首と足首ロープで縛られていた。しばらくロープと格闘した幸恵だったが、異変に気がつき動きを止めた。異変が何かはすぐに分かった。気温が下がり始めていた。少し遠くに一枚の金属扉があるのだが、その扉の隙間から、冷気が少しずつであるが侵入してきていた。それが何を意味するのか、幸恵には十分に理解できた。やつらが近くにいるということだ。幸恵がやつらの手に落ちたあの晩と同じである。やつらは冷気と共にやって来る。

やがて苦痛にもちかい冷気が充満すると、コンクリートの表面が白く凍り始めた。そして次に大気中の水分が凍り、僅かな光を受けてきらきらと輝きながら、大気中を舞い始めた。ダイヤモンドダスト現象だ。つまり現在の気温はマイナス三十度に達しているということだ。このままここに転がされていたら、さすがに凍死するのに時間は掛からないだろう。幸恵は脱出のための最後の抵抗を試みた。だが手足を縛るロープはきつく、どうにもならなそうだった。幸恵は絶望感に満たされた。

金属扉の開く音がした。やがて扉はゆっくりとしまり、その際の音が部屋全体にこだました。いくつもの足音がコンクリートの壁に反響し、何人もの兵隊が歩いているように聞こえた。そしてその足音は確実に幸恵に向かってきた。幸恵は血の気が引いていくのを感じた。目など覚まさなければよかった。これから起るであろうことは、決して楽しいことではないだろう。

いよいよ足音が迫り扉の前で止まった。何者かが扉の向こうにいる。決して会いたくない誰か。扉がゆっくりと開き人が一人部屋に入ってきた。その人物を見て幸恵は愕然とした。目の前に自分が立っていた。

しかしすぐにそれ勘違いであると気がついた。自分と瓜二つではあるが、自分ではない。髪型や雰囲気はどこか違った。だがそれこそが再び幸恵を驚かせた。目の前に立つ自分と瓜二つの女は、間違いなく以前デパートで偶然出会った女性だった。その時幸恵は心が爆発したかのごとき衝撃を受けた。そして何れどこかで再会するであろう確信を抱いた。そしてこうして再会した。ただ一つ幸恵が考えもしなかったのは、その女性が自分とは正反対の立場にいるらしいことだ。自分はこうして縛られているが、その女性は縛られた自分を、冷たい視線で眺めていた。

「また、会ったわね」

幸恵の口が自然と開いた。たとえ立場が違ったとしても、幸恵はどこかこの再会を喜ばずにはいられなかったのだ。

「必ずまた会えると思っていた」

幸恵は真っ直ぐ女の目を見つめた。そして一つの事実を悟った。女には心がなかった。その女の目は自分を迎えに来た時の花田と同じ目だった。幸恵の全身に鳥肌が立った。つまりそれは、花田が近くにいるということであり、そしてまた善三もいるということだ。

「お願い助けて」

女は表情ひとつ変えなかった。

変わりに応えたのは女の脇から静かに現れた少年だった。少年の目もまた、凍り付いて白く濁っていた。

「お前は下がっている。久しぶりだね。幸恵」

幸恵はそれが誰だかすぐには分らなかった。一体誰なのかを問いただそうとしたとき、幸恵の奥深い記憶のどこかで、この少年を知っているという応えがあった。どこかで会ったはずだ。でも一体どこで。どこで会ったというの。幸恵は必死に記憶の回廊を駆け回った。どこにもその答はない。しかし心の奥から再び声をした。知らぬはずがない。答はないのではない。探してないだけなのだ。まだ一つだけ、長い間頑なに存在を無視し続けた扉があるはずだ。お前はまだその扉の中を見てはいないではないかと。

幸恵は知っていた。自分の心に一つの暗闇があることを。普段は意識することのない、決してスポットの当たらぬ場所に追いやられた記憶があった。しかしその存在を意識してしまった今となつては、最早無視をすることは叶わなかった。幸恵の意志とは裏腹に閉ざされた記憶の扉が開かれていった。

そして完全に扉が開ききったとき、幸恵は一つの事実を思い出した。そして茂の顔を見て、あっと声を上げた。

「お兄さん」

幸恵の口から自然に言葉が漏れた。そして幸恵はその言葉の持つ意味に戦慄した。

この凍り付いた不気味な連中を指揮しているこの少年は、姿形こそ人間のそれだが、決して人間ではないだろう。そうであるはずがなかった。凍り付いたまま動ける人間などこの世にはいない。そして自分と茂が兄妹ということは、自分もまた人間ではないということではないか。幸恵は愕然とした。そんな筈はないと拒絶してみても、心の奥底でその事実を受け入れている自分がいた。封印していた全ての記憶が鮮明に蘇った。

四十五年前。吹雪の晩。五人で手を取り合って雪女を呼びだした。そう自分の母親である雪女を。幸恵たちは雪女と人間との間にできた子供だった。

幸恵たち五人はろくでもない父親に育てられていた。父親は酒ばかり飲み、まったく仕事をしなかった。そしてある日突然蒸発した。後に死体が発見されたと聞いたが、何の感情もわかなかった。

施設に移ってから、皆寂しくて仕方がなかった。母に会いたかった。優しい母に。そして自分たちは母親が何者であるかを何となく知っていた。だから雪の日に全員の気持を一つにすれば、きっと母に会えると思っていた。事実その通りになったのだが、それだけでは済まされなかった。何人もの人間が死んだ。園長先生も死んだ。子どもたちもたくさん死んだ。幸恵はその恐ろしい事実から目を背けるために、全ての記憶を封印していたのだ。全てを忘れ、自分自身をも忘れ、一人の平凡な人間として生きていく道を選んだのだ。

「やっと帰ってきたな。兄を思い出したか」

幸恵は怒りに全身を振るわせた。その怒りのせいなのか。何のせいなのか分らなかったが、手首を結わえた縄が極限まで凍り付き、そして崩れるように切れた。幸恵はまだそれが自分の力であることを理解していなかった。

「誰が思い出させてくれなんて言ったの。私は人間として生きていくつもりだった」

「何故だ。人間なんて弱くて愚かなだけだ」

「冷酷なよりはいいわ」

「お前は母がどうなったか知らないから、そんなことを言うのだ。母はその人間に殺されたんだぞ」

幸恵はショックを受けた。あの母が殺された。そんなはずはない。母は雪女なのだから死ぬはずがない。半人半妖の自分たちが死ぬことはあっても、母が死ぬはずがない。母は今だって鶴崎の雪の中にいるはずだ。

「そんな馬鹿な顔をしているな。でも事実だ。人間どもが雪を汚しすぎた。だから母は生きてはいけなくなった。母は純粋な雪女だ。自然の中で生きていくことはできても、汚染にまみれて生きていくことはできない。母の死に際は惨めだったよ。雪女は年を取

らない。なのに母は醜い老婆になっていた。まるでホームレスみたいな惨めな老婆にね」
「だから人間社会に復讐をするつもりなのね」
「そうだ。俺も四十五年前のあの日以来、自分の殻に閉じこもって生きていた。沢山の人間が死んだ。それに耐えられなかった。だが今年の秋に母に出会って全てが変わった。母は俺の目の前に現れてこう言った。次はお前たちの時代だって。母は自分の死期が迫っているのを分っていた。だから俺を目覚めさせた。一番母の血を多く受け継いでいる俺に全てをうち明けたんだ」
「ならあんた一人でやればいいじゃない。私たちを巻き込まないで」
「そうはいかない。俺たちは半端だ。人間の血が半分混じっているからな。一人じゃあ雪を自在に操れない。だが全員で力を合わせれば」
「断るわ。冗談じゃない」
茂の目が怒りに燃えた。
「なぜ断る。母を奪われたのが悔しくないのか。下等な人間に復讐してやろうと思わないのか。やつらは下等だ。雪を操る術も知らないし、自然と共存する方法も知らない。そして何より弱い。雪の中で生きていくことなんかできない。そのくせ自分たちは地上で一番優れた生き物だと考えている。勘違いも甚だしい」
「人間は下等で愚かかもしれない。でも冷酷な獣ではないわ。私は獣にはならない。たとえ半分獣の血を引いていても」
「俺たちは獣ではない。それにお前のいう人間に、お前自身追いつめられているんじゃないのか？」
幸恵は息を飲んだ。事実その通りだ。ドラッグに溺れ、善三の金がなければ、明日にでも事務所を引き払わなければならなかったのだ。だから何だ。
茂は幸恵から千春へ視線を移した。
「千春もまた、人間であるが故に哀れな生活を強いられた。だが今ではもうその心配もない。
花田はどうだ。アルコール依存の人間に何ができる？
善三はどうだ。あいつはまるで金の亡者だ。
俺は？ 自閉症だった。ひたすら殻に閉じこもっていた。
だがよく考えて見ろ。どれもこれも、みんな人間だから故だ。雪の世界に依存症も中毒症もない。あるのはただ生きていくことだけだ。生きることが目的であって、生きる目的を見いだす必要もない。それは何故か。俺たちは自然そのものだからだ」
喚きに近い茂の声がコンクリートに反響した。その茂の言葉に幸恵は静かに応えた。
「だから何？ それはどうしたって言うのよ。確かに苦しみは沢山あるわ。でも喜びもある。生きるだけが目的ならば、どこに喜びがあるの？」
「存在だ」
「私だって存在している」
「人間は破壊するために存在している。それは自然の摂理ではないし、喜びでもない」
「全ては移り変わっていく。破壊だって自然の摂理よ。ならば人間自身も自然じゃない」
「詭弁だ。本当にそう思うならば己自身を破壊してしまえ。俺がお前の言う摂理に手を貸してやる」

茂は大きく息を吸い込むと、幸恵に向けて吐き出した。口からは真っ白な雪が、嵐のようすさまじさで吹き出し、幸恵を凍えさせた。

たちまちにして幸恵は体温を奪われ、身体が氷のように冷たくなってしまった。

このまま気を失って死ぬのだろうか。

自由の利かない幸恵は、そんなことを考えた。ただ心残りなのは譲のことだった。あの子は私が死んだら悲しんでくれるだろうか。

ふと目にした光景が、幸恵の遠くなり始めていた意識を現実へと引き戻した。茂の後に譲が立っていた。

四 冷凍庫

「一体あいつは何者なんだ」

佐久間が誰にともなく尋ねた。

雪で閉鎖された高速道路を全開スピードで飛ばす銀次には、その問いに答える余裕はなかった。もし車が幸恵のセリカGT-FOURでなかったら、とてもこんなスピードは出せないし、今頃凍り付いた橋から滑り落ちて車の残骸の一部になっていただろう。

銀次は東京に残してきた千春のことを考えた途端に、自分の進むべき道が見えた。帰らなければならない。兎に角今は帰ることが先決だ。爆音を聞いた時に目の前に幸恵のセリカが、雪に埋まっているのを発見したことを思い出した。雪から掘り出してしまえば、鍵を開けるのはお手の物だ。そして男が二人もいれば脱出も可能だった。

橋を渡るのは怖かった。だが渡れると信じてアクセルを一度も緩めなかった。勢いさえ乗ってしまえば、凍り付いていようと何だろうと橋を渡ることは不可能ではなかった。もう少し橋が長かったら、渡りきれなかったかも知れないが、なんとか渡りきった。

だがその後銀次を愕然とさせたのは、高速道路が全て雪で封鎖されてしまったことだ。富山から東京まで全線が封鎖されていた。封鎖を打開したのは佐久間だった。警察の権力を施行したのだ。佐久間もまた東京に帰らなければと考えていた。なぜならばラジオの天気予報で今日は全国的に記録的な雪が降るだろうと言っていたからだった。強烈な寒気が大陸から張り出していた。それがやつらの仕業なのかどうかはわからない。東京ではホワイトクリスマスだと人々が喜んでいるだろうが、喜んでいるのは一般の人々だけではないはずだ。やつらこそこの雪を待ち望んでいたはずなのだ。

「雪女の伝説は知っているだろう」

応えたのは疲れ切った顔の黒岩だった。

「一応はな」

佐久間はうんざりしたような返事をした。一応は知っている。誰だって一応は知っている。でも信じる人間なんかいないと昨日までは思っていた。それがどうだ。この目で見

たもの以外は信じないのを信念としてきた、この俺が雪女を信じようとしている。どうかしている。

「雪女は山小屋に泊まった箕吉と茂吉を殺そうとした。だが箕吉が美男子だったので、彼だけを助けた」

「立ち去る際にこの話を誰にも喋るなど言い残して去っていくんだろう」

「そうだ。その後箕吉は美しい嫁を娶り、子をなす。そしてある雪の晩に思わず雪女の話に嫁にきかせてしまう。嫁は、本当は雪女で裏切った箕吉を殺そうとするが、子供が可愛そうなので生かしたまま姿を消してしまう。箕吉と子どもたちだけが残されてな」

「善三は男だぞ」

「鶴崎じゃあ雪女の伝説は本当の話として信じられている。何十年も昔の話だが、こんな事件があった。五人の子供を抱え、女房に逃げられた男がいた。男は女房に逃げられてからというもの、酒ばかりをのむようになり仕事を全くしなくなった。子どもたちは毎日ひもじい思いをしていた。ところがある晩を境に男がいなくなってしまった。村人はどこかに女でも作って出ていったのだろうと囁き会った。子どもたちは施設に預けられた」

「男はどうなったんだ」

「死んだよ。何キロも離れた山の中で凍死していた。山に入ったマタギが偶然発見した。男は木の枝に突き刺さって死んでいた。まるでモズのはやにえみたいにな」

一瞬二人が黙ったので車内には奇妙な沈黙が漂った。ただスノータイヤが雪を踏む音と、車のエンジン音だけがシンクロして不思議な不協和音を作り上げていた。

「黒岩さん。まさかあんたが知りたいのは」

「そのまさかさ。男は雪女に殺されたんだよ。伝説じゃあ雪女が去るところで話が終わるが、実際はそうはいかない。俺は四十五年前に鶴崎の小さな養護施設にいた。そこへある日五人の子供が入所してきた。男が三人、女が二人だ」

「おい、ちょっとまってくれ」

以外にも口を挟んだのは銀次だった。

「その男の一人が美濃部善三ということか」

「そうだ」

「そういえば秋口に遭難した自閉症の子供がいたって言っていたな」

「滝口茂。やつもそのうちの一人だ」

「残りの三人は？」

再び沈黙が流れた。

「分っているのはもう一人だけだ。恐らく間違いはないだろう」

「誰だ」

「草加幸恵だよ」

なんということだ。幸恵が雪女の娘だなんて。そして銀次ははっとした。幸恵と千春はうり二つではないか。それに千春はいつも言っていた。自分は銀次が考える以上に年寄りなのだ。雪女は歳を取らない。

銀次は首を激しく振った。

そんなはずがない。雪女というのは雪があるところにいるものだ。千春は雪のかけらもない東京のど真ん中に住んでいる。

「どうした銀次」

銀次は迷った。だが今気が付いた事実を言わないわけにはいかなかった。

「俺の女は幸恵にうり二つだ。双子と見間違えるほどよく似てる。それに彼女はいつも、自分は見た目以上に年寄りなのだというんだ」

「双子だと。おそらくその女も一味だろう」

「違う。千春はそんな女じゃない」

「帰ってみればわかるさ」

銀次の中で様々な思いが錯綜した。ほんの少し前に銀次は、千春を守るために立ち上がった。東京を雪で埋めてしまおうと考えている連中から千春を守るために。だがその千春自身が一味だとしたら一体自分はどうすればいいのだ。

黒岩がいつになく優しい口調で言った。

「五人の兄妹はみな、人間と雪女との間の子だ。身体も心も半分ずつだろう。もし長い間人間の世界で暮らしていたのなら、こちらに引き戻せる可能性は強い。だがそれができるのはお前だけだ。彼女はお前以外の人間の言葉には耳をかきないだろう」

銀次は震えながら頷いた。もし自分が千春の説得に失敗したらどうなるのだろう。

夕闇が迫り始めていた。全ての景色が白から青へと変化しつつあった。夜がやってきて、やがて朝がやって来る。それは雪女たちが暗躍しようとしまいと、関係なくやってくる。明日の朝を人々は何のような気持で迎えるのだろうか。朝日を見ても何も感じない者へと変貌してしまっているかもしれない。だが自然にはそんなことは無関係だ。自然は冷酷なまでに正確だし、冷徹なことこそ摂理だ。人間はその自然の摂理に逆らうようにして生き、繁栄してきた。その自然の摂理が人間に牙を剥いたとしたら、その摂理に沿うようにして生きてきた者たちがいたとしたら、人間には明日はないのかもしれない。ハンドルを握る銀次の手に力がこもった。

ガソリンが減ってきたので、銀次はサービスエリアに立ち寄ることにした。ついでに濃いコーヒーを一杯飲みたかった。これから何が起るのか想像もつかなかったが、無性に喉が渴いた。サービスエリアへの分岐で、銀次はついウインカーを出し、そんなものが無意味だと気がついて一人苦笑した。

ガソリンスタンドに乗り入れると、突然の大雪で身動きが取れなくなったガソリントレーラーが横付けされていた。三人は外へ出ると、こった身体をほぐした。

「いらっしゃい。入り口は全部閉鎖されたって聞いたけど、あんたらどこから入ったんだい」

店員が給油しながら訊いた。

「これも仕事でね」

佐久間が手帳を見せながら言った。

「あのトレーラーは立ち往生かい」

黒岩が訊いた。

「ああ、走れないことはないんだが、上からの命令でね」

「そうか。大変だなあんたらも。でも俺にとっては好都合だ」

「えっ」

突然黒岩は佐久間の腹に拳を叩きつけた。佐久間がうめき声と共に崩れ落ちた。

「親父なにやってる」

銀次が動くより早く、黒岩は佐久間の背広の内側から、拳銃を引き抜いて店員に向けた。

「動くな」

「親父」

「お前も動くな」

「どうしたって言うんだ」

「これは俺の戦いだ。悪いな。刑事の手錠を取り出して自分の手にかけろ」

銀次は訳が分らぬまま、従った。

「次は刑事を起こして、事務所に連れて行け。おい、お前も手伝え」

事態を飲み込めない店員は泡を食いながらも佐久間を引き起こした。

事務所に入ると黒岩は銀次に、手錠をテーブルの足の間を通して佐久間の手にかけるように指示した。そして佐久間のポケットから鍵を抜いた。つぎにトレーラーの運転手から鍵を奪い取ると、店員と一緒にトイレに閉じこめ、モップで出られないようにかんぬきをかけた。

「親父一体どうしたって言うんだ。俺たちが足手まといなのかよ」

「そうじゃないさ。何も全員が死ななくたっていいってことだ。さっきもいっただろう。これは俺の戦いなんだ。俺はこれにケリをつけなきゃならない。そのためにはお前の恋人を殺さなきゃならないかもしれない。その時お前は黙って見ていられるのか」

「そんなことしなくたって、なんとかなるかもしれないじゃないか」

「なんともならないかもしれない。もし全員が死んだら、誰がやつらをとめられるっていうんだ。もし、俺に何かあったら、あとは頼んだぞ」

「親父」

銀次は言葉を継ぐことができなかった。そんなのありかよ。汚いぜ。自分ひとりいい格好しようなんて、虫がよすぎる。銀次はいつしか本当にあの男を父親として認めていたのかもしれない。だからもし黒岩がやつらに戦いを挑むのであれば、そこには自分がいるのが当然だと思っていた。なのに黒岩はひとりで行こうとしていた。銀次は力一杯テーブルを蹴飛ばした。だが、床に埋め込まれた金属製のテーブルはびくともしなかった。ようやく銀次が手錠の鍵を開けるためのピンを見つけた時、黒岩がトレーラーを発車させてから一時間は経っていた。ピンは思わぬ所にあった。携帯電話のストラップに好都合のリングがついていたのだ。銀次はリングを伸ばして、ものの数秒で手錠を外した。そして次に佐久間にコップの水をかけた。佐久間は呻きながら目をさました。

「大変だ。親父があんたの銃で、ガソリンを満載したトレーラーを盗んだ」

佐久間は胸を探って啞然とした。拳銃は無くなっていた。

「あの馬鹿。あの銃にはもう弾が入っていないんだ」

「早く追いかけてよう」

二人は慌てて GT-FOUR に乗り込んだ。トイレで誰かが喚いている声はまったく耳に入らなかった。

東京はひどい有様だった。道路には三十センチ近くの雪が積もっていた。あらゆる道路が雪で分断され、ひどい渋滞を呈していた。首都高速だけは閉鎖されていたせいもあり、黒岩は都内まですんわりはいることができた。

どこへ行けばいいのかは分っていた。善三の経営していた冷凍倉庫だ。そこ以外にスノーマンを隠しておける場所はないはずだ。倉庫は上野の外れにある。上野のランプから一般道に降りると、立ち往生した車が路上に乗り捨てられていた。多少こすってしまったが気にもしなかった。

言問橋から墨田川沿いに少し進んだところに倉庫があった。美濃部冷凍倉庫と大きな看板が立てられていたが、人の気配は全くなかった。灰色の倉庫と黒く沈んだ隅田川と、そして真っ白な雪がいかにもアンマッチだった。東京でこんな雪を見るときは思いも寄らなかったが、こころのどこかでこうなることは想像出来ていたのだと思う。

作戦は簡単そのものだ。トレーラーを尻から倉庫に突っ込んで、発煙筒を投げるだけ。あとは爆発するが早いか、逃げ出すが早いか。体力勝負になるはずだ。膝ががくがくと震えていた。善三に殴られた脇腹が痛んだ。とても走れるとは思えなかった。まあそれもいい。やつらといっしょに地獄を見るのもいいだろう。これで最後だ。今夜以降決して四十五年前のあの晩の悪夢にうなされることもない。

黒岩は運転席から降りると、正面ゲートを見て舌打ちした。ゲートは頑丈な鎖でしっかりととめられていた。これでは中に入れない。むろんトレーラーで体当たりをすれば開くであろうが、それでは大きな音がしてしまう。敵に襲撃を知らせるようなものだ。構内でUターンをしている間に逃げられてしまうかもしれない。かといってバックでゲートにぶつかれば、その時点で爆発しかねない。それでは犬死にだ。鎖を断ち切る道具がないかとトレーラー内を調べてみたが、役に立ちそうな物はなにもなかった。

黒岩は唾を飲み込んだ。頭から突っ込むしかない。今まで可能性として考えていた死というものが、現実的に迫ってきた気がした。

「特攻隊か」

黒岩はひとこと呟いた。

黒岩はいつでも点火できるように、しっかりと発煙筒を握ると、アクセルを踏み込んだ。べつに国のためでも、誰のためでもない。自分の過去と折り合いをつけるため。ただそれだけのためにアクセルを踏んだ。もう吹雪の音を聞いて怯えるのは嫌だった。

トレーラーはゲートを簡単にはねとぼし、ひた走った。冷凍倉庫の扉が目前に迫っていた。硬そうな金属扉だ。果たしてトレーラーで突き破れるものなのか。しかしもう考えている余裕はなかった。次の瞬間で全てが決まる。黒岩はアクセルを床まで踏んだ。

大きな破壊音が響き、扉が奥に吹き飛んだ。トレーラーは破壊された壁にタンクをこすりながら、冷凍食品が積み上げられた倉庫に突っ込んだ。そしてタンクを半分ほど外に残したところで停止した。中は真っ暗だった。

侵入は思ったより簡単だった。次はバルブを開いて点火をしなければならぬ。ドアを開こうとして、慄然とした。冷凍食品の段ボールの山が邪魔をして、ドアが開かなかった。

「くそっ。まただ。今度は冷凍食品か」

黒岩は何度かドアを蹴飛ばしてみたが、びくともしなかった。

どこかで重たそうなものが落ちる音がした。ライトは目の前の段ボールの山を照らすばかりで、他には何も見えなかった。

黒岩は慌てて反対のドアに向かった。そしてドアレバーに手をかけたところで凍り付いた。硝子を隔てた目の前に、真っ白に凍り付いた人の顔があった。見渡せばいつの間に

か、周りをスノーマンどもに取り囲まれていた。

黒岩は運転席に戻ると、ギアをバックに入れた。そして思い切りアクセルを踏んだ。同時に右の硝子が弾けるように割れ、冷たい手が黒岩の喉を掴んだ。

「放せ」

続いて左のドアからスノーマンが乗り込んできて、黒岩を押さえつけた。火傷しそうな冷たさだった。更に次の手が胸を掴み、その次の手が顔を押しさえつけ、遂に黒岩は窓から引きずり出されてしまった。

スノーマンたちは黒岩を凍った床にねじ伏せると、大きな口を開き、声にならない呻きを上げて威嚇した。真っ白で瞳の無い目が、怒りを込めて黒岩を睨みつけた。

もうお仕舞いだと思った。あれだけ強烈な体当たりを食らわせたのに、ガソリンは一滴も漏れだしていなかった。後は銀次に全てを任せるしかない。もしスノーマンにされたとして、銀次を襲うようなことになるなら、せめてこの場で殺してほしかった。銀次が自分を親父と呼ぶように、黒岩もいつしか銀次を息子のように考えていた。

突然目の前の恨みを込めた顔がすっと引き、視界が開けた。目の前に一人の男が立っていた。男は大きな逞しい身体と獅子のような顔を持っていた。恐らくこのボスなのであろう。そしてこの男がスノーマンを作るのだらう。ついに自分という人間がいなくなる時がきたのだと思った。

五 スノーホワイト

信じられないことだ。何故ここに譲がいるのだろうか。幸恵は我が目を疑った。ありえないことだ。

「譲」

突然茂が大きな声で笑い始めた。

「そうだ。紹介し忘れたよ、幸恵。お前の息子だ」

「譲に何をしたの。息子に手をだしたら絶対に許さない」

茂は再びこらえられないといった様子で笑った。

「手をだしたら許さないか。でも手を下したのは俺たちじゃない。彼が勝手にやったことだ。俺を許してくれるよな」

「勝手にやったってどういうこと」

茂はポケットから小さなビニールの袋を出して掲げて見せた。袋の中で真っ白な粉が、虹色にきらきらと輝いていた。その袋には見覚えがあった。花田が持ってきた物と同じ。スノーホワイトだ。

まさか譲がこの死の薬を服用したというのか。幸恵は茂に詰め寄ろうと藻掻いた。

「おっと、俺は手を下してないって。彼は自分でこいつを手に入れ、仲間と楽しくやっただって訳だ。仲間は運悪く意志を持たないスノーマンになっちゃったが、譲君は多少適正があったようだな。さすが幸恵の息子だ。俺たちの血を引いているんだらう」

幸恵の内部で何かが爆発した。それは憎悪を通り越した青く冷たい炎の炸裂だった。そしてその青い炎は不思議な力を体中に満たしていった。

「息子に手をだしたら許さないって言ったはずよ」

「俺じゃないさ」

「いい訳はさせない」

茂はおどけて両手を開いて見せた。

幸恵は体中を巡り始めた不思議な力を、両手首の辺りに集中した。手首が熱いような冷たいような不思議な感覚に満たされた。と同時に手を縛っていた縄が真っ白に凍り付き、そして硝子のように粉々に砕け散った。同じように足首の縄もまた砕けた。

茂が目を見張ってその光景を眺めていた。

「幸恵すごいぞ。やっぱりお前は本物だ。その力を俺に預けろ」

「八つ裂きにしてやる」

茂は冷ややかに笑った。女はどうしてこうなんだといった顔だ。

「いくらお前がすごくても、俺には勝てないよ。まだお前は自分の持つ力が何なのかも分っていないだろう。どうだ、俺に任せれば力のコントロールの仕方を全て教えてやる。それとも力を暴走させて、この女のようにになりたいのか？」

茂は千春を小突いた。

千春は茂のなすがままで、まったく反応を示さない。それどころが、表情ひとつ変えようとはしなかった。千春の表情から、意志というものは全く感じられなかった。千春はもうこの世には存在しないのだ。

幸恵の心に新たなる炎が燃え上がった。

一体何故そんなことができるのか。どうしてこんなに簡単に人を踏みつけにできるのか。幸恵にはどうしても理解できなかった。

「こいつは愚かなやつだ。自分に人間以上の力があると分った途端、より一層人間的なことをしようとした。あらゆるものを支配しようとしたのだ。その結果がこれさ。俺たちは自然を支配しようとはしていない。自然の力の一部を借りているだけだ。それを理解しないまま力を使おうとすれば、痛いしっぺ返しを食らうことになる」

茂は、今度はもっと強い力で千春を突いた。その勢いで千春はパイプに強くぶつかったが、顔色一つ変えなかった。

「こいつは最早スノーマンと同じだ。破壊することしかできない愚かな操り人形だ。まるで人間みたいだな」

続いて幸恵に向きなおった。

「お前は今体内を駆けめぐる力を感じていることだろう。その力を使えば縄を切ることもくらい簡単だ。だがその力を感情にまかせて使えば」

茂の人差し指がパイプにもたれかかる千春に向けられた。

「愚かで哀れな姉妹にはなりたくないだろう」

幸恵は千春を本当に哀れだと思った。自分の意志を持つこともなく、それでいて死ぬことすら許されない。主人が廃棄を決めるその日まで、ひたすら操られ続けるだけなのだ。だが、それがどうしたというのだ。幸恵の心にあるのはただ一つ。目の前にいる男を許さないということだけだ。息子に手を出したことを必ず後悔させてやる。徐々に幸恵の

視界から千春は追いやられていき、不敵に笑う茂の顔以外何も見えなくなった。茂はまだ延々と何かを喋っていたが、もうその言葉すら聞こえなかった。思い知らせてやる。幸恵は両手に力を集中した。そして猛然と茂に飛びかかった。茂の顔が驚きで満たされるのを見ながら、両手を首にかけた。そして力を込めた。

「砕け散ってしまえ」

茂の顔から血の気が引いていくのが分った。虚を突かれて狼狽しているのだ。この隙を逃してはならない。さっきの縄の感じを思い出しながら、身体を流れる力を集中していく。茂の顔が醜く歪んだ。

茂がはじけ飛んだ。

一瞬勝ったと思った。だが、はじけ飛ぶ寸前、茂の顔に不敵な笑みが現れたのを幸恵は見逃さなかった。茂は幸恵に吹き飛ばされたのではなく、自ら分解して手を逃れたのだ。空中を吹雪が渦巻いていた。渦巻く吹雪から馬鹿にしたような笑い声が響いた。

「幸恵。ここまでは褒めてやろう。だがここまでだ。どうしても邪魔するというのなら、お前も千春と同じ運命を辿らせてやる。千春も仲間が増えてうれしいだろう」

宙を渦巻いていた吹雪の輪が段々と速度を上げてゆき、めまぐるしく室内を駆けめぐった。ポンプが風を切り、人々の叫び声のような風切り音が反響した。

唐突に吹雪の輪が幸恵に突進した。幸恵は除ける間もなく、風に攫われ壁に激突した。そこへ大粒の雪が次々と吹きつけ、幸恵はたちまちにして礫にされてしまった。

「どうした幸恵。力を使わないのか」

幸恵は力を両手に集中した。ところがどうしたことか、底が抜けたように力は全て雪にとけ込んでしまうのだった。風切り音が幸恵をあざ笑うように響いた。

次に吹雪は千春を攫い、幸恵と同じ場所に叩きつけた。

千春は糸の切れた操り人形のような無様な格好で壁に押さえつけられ、そのまま雪に塗り込められてしまった。

「どうだ分ったか。自然に逆らうものの力などその程度なのだ。俺たちは何にも逆らわない。何も支配しない。ただ存在するのみだ。存在こそが本質だ」

茂は再び二人の前に姿を現した。

「お前たちはこれから同じ道を歩むのだ。せいぜい仲良くするがいい」

茂は背を二人に背を向け、再び息を大きく吸った。

幸恵は時間を稼がなければと思った。その時間で何ができるのかは分らない。それでもこのまま操り人形にされてしまうわけにはいかない。何か手を打たなければならない。だがどうすればいいのか。幸恵は思いついた言葉を投げつけてみた。

「スノーホワイト」

茂の動きが止った。しめた。これは突破口につながるキーワードかもしれない。幸恵は思いつくまま続けた。

「一体あの薬で何をするつもり」

茂はしばらく天井に目を向けていた。そしてがっくりとうなだれた。

「復讐だよ」

一体何を訊いていたのだといった口調だった。

「俺たちにはその権利がある。母の弔いをしなければならない」

「だから薬を売って歩いているっていうの」

茂は小馬鹿にしたように笑った。

「お前が見た薬なんぞ、ほんの一部だよ。俺の手にはいま百キロのスノーホワイトがある。十グラムあれば人間一人をスノーマンに変えられる。百キロで一万人だ。一万人のスノーマンからは五百キロのスノーホワイトが抽出出来る」

「一万人に薬を飲ませるのは容易じゃないわ」

「何のために浄水場を選んだと思う。人間が毎日欠かさず口にする物は何だ。水じゃないか。一万人に薬を飲ませるのなんて簡単だ。水道に薬を混ぜてあとは人間が水を飲むのを待っているだけでいい」

「そんなに簡単にいくかしら」

「スノーホワイトには強い依存性がある。一度口に含めば、すぐに次が欲しくなる。ここから送水される水を、一口でも飲んだ人間は、自己の破壊に向かって水を飲み続けるのさ」

更に時間稼ぎをしようとする幸恵を茂が遮った。

「時間だ。妹と仲良くやれ」

「待って。もう一度譲に会わせて」

幸恵の言葉が終わる前に、茂の口から真っ白な息が、猛烈な勢いで吐き出された。

幸恵はたちまちにして、全ての感覚を奪い取られていった。何とか藻掻いてみたが、身体を覆う雪は、完全に凍り付き一切の動きを封じていた。そして幸恵は頭まですっぽりと雪に覆われてしまった。

「哀れなやつらめ」

茂はそう呟くと、再び雪に分解した。しばらく部屋の中を吹雪の状態で飛び回り、そしてドアの隙間から外へと出ていった。部屋は完全な静寂につつまれていた。

六 合流

ほとんど利かない視界の中に、ようやく冷凍倉庫の輪郭がおぼろげながら見えてきた。荒れ狂う吹雪の中、冷凍倉庫はどこか威圧的な雰囲気を持っていた。やがて倉庫の一部に奇妙な出っ張りがあるのが見えた。銀次の胸を不安がよぎった。

冷凍倉庫に来る前に、M I Z Uに寄った。M I Z Uは破壊の限りを尽された上に、雪に埋もれていた。何があったかは考えなくても分った。千春はやつらに連れ去られてしまったのだ。銀次はしばらく雪に埋め尽くされたM I Z Uのフロアから動くことができなかった。

千春を助けるために帰ってきた。しかし千春はもういない。銀次は何をどう考えればいいのかすらわからなくなっていた。

冷凍倉庫に行ってみようと言ったのは佐久間であった。もしかしたらそこに千春もいるかもしれないからだ。

しかし銀次には分っていた。千春はもうどこにもいないのだ。

銀次の心は千春のことで、今にも均衡を失いそうであった。そんな状態の中、冷凍倉庫の光景が銀次に揺さぶりをかけ始めた。

次の瞬間、二人は驚愕で目を見張った。

黒岩の奪ったガソリントレーラーが頭から倉庫に突っ込んでいた。

黒岩は全てを焼き尽くすために、ガソリントレーラーを奪ったのだ。しかしどこにも火の手は見えなかった。動くものは何もなかった。

銀次は車から転げるように飛び出すと、トレーラーに駆け寄った。

「親父」

何とか隙間を見つけて倉庫に潜り込み、辺りを窺ったが、どこにも人の気配は無かった。開け放たれた運転席の扉が、むなしく銀次を出迎えた。

「親父。どこだ親父。いるんだろう」

いくら呼びかけても、帰ってくるのは自分の声の反響だけだった。

「親父。返事をしろよ。ちくしょう」

千春もいなくなった。そして親父もいなくなった。冷凍倉庫の冷氣よりも冷たい感情が、心を満たしていった。だが銀次はその感情をどうしても受け入れられなかった。今まで本当の親父のように思ってきた。がさつで頑固な男だった。銀次の呼びかけに答えないということは、最早どのような形にせよ、銀次の知っている黒岩はこの世にはいないということなのだ。そのことを頭で理解することはできても、感情として受け入れることは容易ではない。なんだか大がかりな芝居でも見ているみたいな気分だった。

「おい。黒岩はいたのか」

いつの間にか佐久間が倉庫に入ってきていた。

銀次は気持をどう整理してよいのか分らず、力一杯バンパーを蹴飛ばした。乾いた音が倉庫に反響した。

「ちくしょう。俺はこれからどうすりゃあいいんだ」

佐久間が運転席に乗り込んで何かしていた。中を検分しているのだろうか。やがて佐久間は自分の銃と、何か赤いものを持って降りてきた。

「黒岩はこいつで全てを精算するつもりだったんだろう」

佐久間はそれを銀次に押しつけた。押しつけてそれ以上何も言わなかった。佐久間も黒岩の運命を瞬時に理解し、そして銀次の気持を痛いほど理解していた。

銀次は受け取ったものを見つめた。発煙筒だった。

その発煙筒が全ての答えだった。銀次は黒岩の遺志を継ぐべきだと思った。

「復讐」

黒岩はそう言った。これは俺の戦いだ。だが今やこの戦いは銀次のものになっていた。

銀次は発煙筒を強く握りしめた。

「これからどうする」

「かならず見つけだすさ」

「やつらがどこにいるのか分っているのか」

分らなかった。東京のどこかにはいるのだろう。そして黒岩を連れ去った連中は半径一時間以内の場所に必ずいるはずだ。だが一体それはどこなのか。銀次は頭をフル回転させた。そしてふと神谷の婆の姿が思い浮かんだ。

神谷の婆は銀次が時々利用していた薬の売人だ。時々利用したといっても、あまり深く関わり合いになりたい連中ではなかったので、どうしても薬が揃わないときだけ、取引をしていた。あの連中ならばあるいは知っているかも知れない。

「ちょっと当たってみたい連中がいる」

「どうする。俺も行った方がいいか」

「いや、携帯に連絡するよ。もしかしたらここからの方が近いかも知れない。あんたこいつを」

銀次はトレーラーを強く叩いた。

「運転できるかい」

佐久間はちょっと肩をすくめた。

「やったことはないが、なんとかなるだろう」

「必ず連絡する」

銀次はそれだけ言うと、GT-FORU に向かって走った。

神谷の婆は上野の裏路地の、更に地下で占い館をやっていた。双子の姉妹なので、双子占いという変わった占いをやっていた。二つの水晶玉で交互に占っていくのだ。しかし占いは表向きの商売だった。裏稼業は薬の売人だった。やくざともかなり深いところでつながっており、かなり悪どいこともやっていた。

双子の婆は怪しげな趣味を持っていた。若い女にいたずらをするのだ。

占いに来た若い女にうまいことを言ってハッシッシを吸わせ、意識がもうろうとしている間にいたずらをして、それをビデオに撮影していた。そのビデオテープをネタに女を強請り、二度三度といたずらを繰り返すのだ。悪どいことに、その度に薬を摂取させ、薬の味を覚えさせてしまう。しまいにはどっぴりと婆の罠に嵌り、どうにも抜けられなくなるのである。そして最後に行き着く先はやくざの経営する風俗店に売られることになる。あまりにもやり口が汚いので、銀次は二人を毛嫌いしていた。しかしこの婆でなければどうしても手に入らない薬もあるのだった。

上野の商店街裏路地はすっかり雪に埋もれ、いつもとは全く様子が違っていった。いつもならば人が行き交うこの時間に、店は全てシャッターを下ろしてしまい、ゴーストタウンのようであった。強い風が時折シャッターをがたがたと揺らし、耳障りな音を立てた。銀次は適当な路地の前で車を乗り捨てた。

路地に足を踏み込むと、風が行く手を阻んだ。銀次はポケットの発煙筒をぎゅっと握りしめ、雪の中を駆け出した。

いくつかの角を曲がり、一人がようやく通れる程度の細い階段を地下に下り、人気のない地下通路に入ってやっと雪から逃れた。しかし真っ白な世界から地下通路に降り立つと、通路はいかにも薄汚れていた。積み上げられたビールのケース。美観を損なうビラにポスター。けばけばしい風俗店の看板。その一番奥の行き止まりのところに「双子占い」と書かれた安っぽい看板が見て取れた。神谷の婆の店だった。

店に入るとほんの三畳程度の店は空だった。正面の占い机には二つの水晶玉が載ってい

たが、その主はどこにも見あたらなかった。店内にあるものといえば、他には壁に貼られた煤けた曼陀羅くらいなものだった。しかしどこからかハッシッシの臭いが漏れていた。銀次は机を乗り越え、奥の曼陀羅を調べた。臭いはそちらから漏れていた。薄汚れた曼陀羅をめくってみると、その下に一枚の小さな隠し扉があった。そっと耳を扉に当てると、中で婆の耳障りな声と、獣の呻きのような声が微かに聞き取れた。中に婆がいることは間違いがなかった。銀次は力の限り隠し扉を蹴飛ばした。

大きな音がして木の扉の鍵の部分が砕けた。ぱっくりと口を開けた穴の奥に、目を見開いた老婆が二人と、その間に横たわる全裸女性が一人いた。

神谷の婆二人は何が起きたのかを、未だ理解しあぐねているらしく、ただしわくちゃの口を開いたり閉じたりしていた。

間の女性はすでにハッシッシで完全にトリップしていた。後で思い出そうとしても、銀次のことなど微塵も覚えていないだろう。

このままでは何時までも事態が進行しそうにないので、銀次が口火を切った。

「おい、聞きたいことがある。お前らたしかスノーホワイトを扱ったことがあるよな。どこで仕入れた」

ようやく事態を理解した婆の姉の顔が、怒りでどす黒くなった。

「小僧こんな真似してただで済むとおもってるのか」

どうやら婆姉はまだ、自分たちの方が上の立場だと思っているらしい。銀次は苦笑した。俺はお願いに来たのでも、呼ばれて来たわけでも何でもない。親父の遺志を継ぐためなら、何だってやってやるさ。銀次は一旦戸口から外へ出ると、二つの水晶玉を握って戻ってきた。

「答える気があるかどうかだけ聞かせろ」

そう言って婆の答えを待たずに、水晶玉をそれぞれの後の壁に投げつけた。

水晶玉は派手な音を立てて砕け散り、破片が辺りに飛び散った。婆姉の頬からは血が滴り、さっきまでの怒りが恐怖へと入れ替わっていた。

「何なら今すぐ地獄行きの特急に乗せてやってもいいんだぜ」

再び婆の口がぱくぱくと動いた。声が出ないのだ。そんな中、全身に破片を浴びた女が不自然なへらへら笑いを続けていた。

「どうなんだ。スノーホワイトをどこで仕入れた」

銀次がすごむと、婆妹の口から、空気が漏れるみたいな音がした。よく聞くと「寺」と言っているらしかった。寺とは一体なんのことなのか。更に追求するとどうやら上野の本郷寺という寺の住職から受け取ったらしかった。なんとも奇怪な話だ。寺の住職ともあろう者が、死を招く薬物を売っているのだから。

銀次は二人からおよその場所を聞き出すと、婆妹が手にしていたカメラを取り上げ、二人の写真を交互に撮った。

「おい、もし俺に復讐しようなんて考えて見ろ。この写真を警察に渡してやるからな。俺には薬に鼻のきく刑事の知り合いがいるんだ」

言ってから銀次は自分の言葉に笑いそうになった。つい最近まで、その刑事に追求を受ける側だったのだから。銀次は笑いをこらえられなくなる前に店を飛び出した。裏路地に出た時には笑いが止まらなくなっていた。

およその状況を鼻の利く刑事である佐久間に連絡すると、銀次はとりあえず本郷寺に向かってみると言った。本郷寺は寛永寺の裏手にある小さな寺であった。商店街からなら車で数分の距離だ。

上野周辺は一步路地に踏み込むと、道が非常に狭かった。そこへきてこの吹雪だ。視界などあってないようなものだった。幸いにして出歩いている人間は少なかったが、いつ何時人を引いてしまっても不思議ではなかった。

銀次は悪態をつきながらも何とか本郷寺を突き止め、境内に車を乗り入れようとした時、猛烈な勢いで一台のコンテナトラックが寺から飛び出してきた。

「あぶない」

トラックは銀次の車の鼻先に激突しながらも、全く速度を緩めようとしなかった。それどころか、銀次の車を邪魔だと言わんばかりに、ぐいぐいと押してきた。

銀次は慌ててブレーキを踏んだが、それが災いし、タイヤが完全にグリップを失ってしまった。雪の上でグリップを失ったタイヤなど、橇と一緒に滑った。

「おい、止れ。止れたら、目が見えねえのか」

悪態を付く銀次の顔が驚愕で歪んだ。

トラックの運転席には黒岩が座っていた。

「親父」

状況を忘れ、銀次の胸に一瞬暖かいものがこみ上げた。しかし黒岩の顔を凝視して、その温もりは一瞬にして凍り付いてしまった。黒岩の顔からは完全に表情が消えていた。そして肌は真っ白に変色していた。黒岩はスノーマンにされてしまったのだ。

ガラス越しに向かい合う二人の間を冷たい雪が吹き抜けていった。その寒風は銀次の心の希望を全て攫っていった。銀次は全てを悟り、そして二度と引き返すことは出来ないことを知った。親父はもうこの世にはいないのだ。銀次は目の前のトラックまでの距離が、ひどく遠いように感じた。

感傷に浸っている暇はなかった。再びトラックが銀次の車を押し、ガードレールに押しつけた。ガードレールといっても、随分と古いもので、ひどく浸食されていた。その上その向こうは十メートルほどの段差になっていた。落ちたらただではすまない。

後でガードレールが軋んだ。トラックの押しでわずかずつだがガードレールが壊れていくのが分かった。黒岩の顔には何の変化もなかった。

殺されると思った。

ガードレールが折れる音が響き渡った。

続いて後輪が路肩から外れ、車が大きく後に傾いた。床下で金属とコンクリートがこすれる耳障りな音が響いた。

黒岩は手を緩めるようなことはしなかった。ゆっくりと、だが確実に車を道路から押し出していた。また車が傾いた。もう一押しされれば、車は、十メートルはあるであろう段の下に落下してしまう。車は大きく傾いているため、最早銀次から黒岩の姿は見えなかった。目の前は鶴崎と同じ、ただ真っ白な空が広がっていた。

金属がこすれる音がして、車が後方に滑り出した。銀次は咄嗟にドアを開けて外に飛び出した。飛び出した先に地面があるかどうかなど考えなかった。足先を落下してゆく車の扉がこすった。

銀次は偶然にも路肩に向かって飛び出していた。銀次がガードレールの支柱にしがみついた直後、背後で金属がひしゃげる音が響いた。間一髪だった。頭上でトラックが走り去る音が聞こえた。

寺の本堂で雪を避けながら、佐久間に連絡をした後、銀次はスノーホワイトがなぜ本郷寺から流通していたのかを考えた。寺の住職と小僧たちは少し前から失踪してしまった話は婆どもから聞いていた。本堂と言わず、寺の隅に至るまで物音は何一つしなかった。誰もいない寺というのは昼間でも不気味なものだった。

銀次は寺のあちこちを歩き回った。しかしスノーホワイトに結びつきそうなものは見あたらな。一体何故なのか。その理由が分らなければ、黒岩がどこへ消えたのかも分らない。

ふと渡り廊下から外を眺めたとき、裏の林に小さなお堂があるのが見えた。銀次はお堂の方に向かってみた。

お堂は林の中のちょっとした窪地にあった。ほんの小さなもので、人一人やっと入れるかどうかというものだ。お堂の周りには何か瓶やペットボトルが散乱していた。そしてそのお堂の扉が開いていて、いくつもの足跡が、何者かがお堂を出入りしたことを告げていた。きっとそれは黒岩の足跡に違いなかった。

銀次は警戒しながらお堂に足を踏み入れた。長い階段が地下へと続いていた。ライターで辺りを照らしながら、降り付いた先には小さな泉があった。水面がライターの小さな光を反射して、ゆらゆらと揺らめいていた。

「分った。水だ。やつらは澄んだ水が必要なんだ」

見たではないか。煙に汚された善三の最後を。やつらは濁りのない水がなければ、この東京では活動ができないのだ。ここ本郷寺は別名清水寺とも呼ばれる、名水の寺だ。だからやつらはここを活動拠点にしていたにちがいがなかった。

ではその拠点を離れて一体どこへ行ったのか。最早拠点は必要なくなったということなのではないか。つまり行動の時が来たということだ。何かが確実に起るとする予感が、銀次の背筋を寒くさせた。善三は東京中にスノーホワイトをばらまくと言っていた。どうやって？

銀次の目の前では東京では珍しい、澄んだ水がこんこんと湧き出していた。その水が銀次の靴先を濡らしていた。その冷たさが銀次にひとつのヒントを与えた。

水だ。

水を使えば訳ない。人間だって水がなければ生きてはゆけないのだから。水道にスノーホワイトを混ぜれば、それを飲んだ人間からみんなスノーマンへと変貌してゆくに違いない。

銀次は慌てて階段を駆け上がった。そしてお堂を飛び出そうという矢先に、お堂の扉が外から閉められた。

「誰だ。開けろ」

扉には既に鍵がかけられていた。

そして扉の前に姿を現したのは、やくぎの工藤だった。

工藤は上野一帯を仕切っている常盤会の幹部で、銀次も本来なら上納金を納めなければならぬはずだった。ただ工藤の手下が銀次の前に現れた日に、銀次は東京と千春を捨

てて鶴崎に逃げたのだ。それがまさかこんなところで工藤に捕まるとは思ってもみなかった。

「頼む。出してくれ。どうしても行かなければならないところがあるんだ」

「おやおや。あんた立場を分ってねえな」

「金ならなんとかする」

工藤がサングラスを外した。鋭い眼光が銀次を威嚇した。

「もう金だけの話じゃねえよ。神谷の婆にここだって聞いてな。何を言いたいかはわかるだろう」

神谷の婆が工藤に連絡したのだ。生意気なガキをなんとかしてくれと。

「今大変なことがおこっている。それを止めなきゃならない」

「俺の尻にも火がついてる。人のことなんざかまっていられない。お前が落とし前つけてくれりゃあ、少なくとも俺の尻の火は消える。お前も尻に火がついたみたいだし、相談といこうや。二人で倒れるのと、少なくとも俺だけは助かるのと、人道的見地からどっちがいいと思う。俺だけでも助けてくんねえかな」

銀次は膝を落とした。説得できる相手ではなかった。今おこりつつある危機を、どうやってやくざに説明しろというのだ。しかも相手は自分を追いつめようとしている。すべてが終わりだ。きっと東京はやつらに乗っ取られるだろう。そしてそれはやつらを止められない自分のせいでもある。そんな自虐的な思いが、銀次の頬を引きつらせた。

銀次の引きつった頬を工藤は小馬鹿にした笑いと見た。檻に入った小僧が自分を笑ってやがる。近頃何をやっても裏目にでる。何もかもがうまくいかない。そんな自分を小僧があざ笑っていやがる。工藤は頭に血が昇り感情を制御できなくなった。自分で閉めたお堂の扉を満身の力で蹴り破った。そして喚いた。

「何がおかしい。そんなに俺を笑いたいか。何をやってもうまくいかない。ヤクの市場は素人に荒らされるわ、西代のジジイからは金は取れないわ。そのことで親父にはさんざん怒鳴られ、仲間には侮蔑され、舎弟はミイラみたいにひからびて死んだ。そして今度はお前だ。みんなで俺をコケにしやがって。そんなにおかしいか」

工藤は銀次を引きずり出すと、胸元をつかんで喚き続けた。

「どうなんだ。おかしいか。えっ？ どうした笑えよ。笑え」

「あんたどうかしてるぞ」

「うるせえ」

工藤は銀次を雪面に叩きつけた。そして何やらわけの分らないことを喚き散らしたあと、突如腰のあたりから拳銃を取り出すと、銀次に向けた。

「殺してやる。もう頭に来た。全員ぶっ殺してやる」

工藤は鬼気迫る顔で、拳銃を真っ直ぐに向け迫ってきた。その顔にはもう一部の余裕も見られなかった。以前銀次が会った工藤は、やくざが持つあの独特の不遜さと、どこか繊細で理知的な顔を持っていた。工藤の顔は上に立つ者にある余裕が見られ、藤原の野性的な粗暴さとは明かに違った。しかし今の工藤にその気配は全くなかった。パニックに陥った人間そのものだ。いつその引き金を引いても不思議ではなかった。

だが銀次はその拳銃を見てはいなかった。さっき工藤が言った言葉が気になっていたからだ。

「さっきあんた。舎弟がミイラみたいに干涸びて死んだと言ったな」

舎弟というのは間違いなくMIZUに金を取り立てに来たあのやくざ藤原のことだった。ミイラのようにひからびて死んだ藤原。恐らく善三かその仲間の仕業だろう。それ以外には考えられなかった。銀次は脱出の糸口を見つけた気がした。

「それがどうした。舎弟はミイラになって死んだが、お前は頭をぶっ飛ばされて死ぬんだ」

「俺はあんたの藤原を殺した犯人を知ってる」

「お前がやったんだ」

「違う。そいつは俺がこれから会いに行く相手だ」

工藤の顔から一瞬狂気が消えた。言われた意味を理解しかねているのだ。うまいぞ。銀次は続けた。

「あんたには信じられないかもしれない。でも事実だ。俺はこの数日間、スノーホワイトをばらまいた連中を追ってきた。藤原を殺した犯人はスノーホワイトの元締めだ」

工藤がスノーホワイトという言葉に反応した。

「そして、スノーホワイトをばらまいていたのは神谷の婆で、ここ本郷寺が中継地点だ。寺から葉が出回っているとは誰も思わないだろう」

「神谷の婆も噛んでいやがったのか」

工藤にはわかには信じがたいという顔をしていた。しかし拳銃は下ろさなかったものの、顔からは狂気の色が完全に消え去っていた。もう一押しで工藤は落ちる。

「犯人に復讐したいんだろう。今俺を殺したら、犯人には会えないし、またどこからかスノーホワイトが流通し始めるぞ」

工藤は食いついてきた。とどめの一言を浴びせれば完璧だ。

「犯人の名は美濃部善三だ」

工藤の顔が驚愕で歪んだ。

「美濃部善三？ そいつは誰だ？」

言ってから、工藤はしばし記憶の倉庫を駆け巡り、一つの顔を思い浮かべた。

「もしかして、そいつには髭がなかったか？」

「ああ、濃い髭と不遜な目をしている」

工藤が合点したように小さく頷いた。

「居場所も知っているって訳か」

「たぶんな」

美濃部善三。忘れもしないあの不遜な面構え。俺のシマを荒らし、舎弟を目の前で殺した。もしこいつがあああの男の居場所を知っているなら、利用しない手はない。今度こそ片をつけてやる。

しばらく二人は睨みあっていた。

きつとうまくいった。そう思い銀次が立ち上がろうとした瞬間、工藤は撃鉄を起こした。

「いいか、俺はお前を信用したわけじゃない。ただこの泥沼から抜け出したいだけなんだ。もし妙な真似してみろ」

工藤は銃口を銀次の頬に押しつけてから、拳銃をしまった。

銀次の肩から一気に力が抜けた。

「これからどうしようって言うんだ」

「仲間に連絡してから、金町浄水場に行く」

「仲間だ？ 誰だ。そんなことは許さない」

「たった二人でどうするつもりだ」

工藤が拳銃を示した。

「そんなもの役にたたない」

工藤の背中を悪寒が駆け上った。手に持つ拳銃がやけに安っぽく見えた。ナイフを突き刺されて笑っていたアキラ。舎弟から命を吸い取った善三。自分はそいつらに、本当にこんな物が通用すると思っていたのだろうか。

「ならどうするつもりなんだ」

銀次はにやりと笑った。

「浄水場を丸ごと焼き払う」

銀次は佐久間に連絡を入れた後、二人で並んで工藤の車に向かった。追う者と追われる者が肩を並べて歩くというのは、実に奇妙な気分だった。向こうもそう思っているのか、足下ばかり気にして歩く工藤は、どこかやくざ特有の緊迫感にかけていた。

境内に乗り捨てられた車が工藤のものとすぐに分った。それが完全に緊迫感を失わせた。真っ白な境内にぼつりと真っ赤なスバル360が停まっていた。

「なんだありゃ」

「文句あるのか」

「いや。でもやくざの車ってのはベンツって決まっているのかと思っていた」

「俺の世界は厳しいんだ。乗るのか、乗らねえのか」

「乗るさ」

大の大人二人が乗り込むと不平に似た軋み音がして、スバルのサスペンションは大きく沈みこんだ。そしてスバルは軽快な音を立てて境内から滑るように出ていった。

七 セントエルモの火

人は激情によって動く。

ここにいる二人もそれぞれの激情によって突き動かされ、ここ金町浄水場にやって来た。一人は故人の遺志を継ぎ、それをまっとうするために。もう一人は己の耐え難い境遇から脱出するために。思いは違っても、それぞれが二人を同じ目的へと駆り立てている。しかし二人が目にして光景はおおよそ激情とか、感情とかいったものからはかけはなれていた。そこにあるのは、何の感情も思想も持たないただの操り人形の群れだった。ある者は荷物を担ぎ、運んでいた。またある者はトラックの荷台から何かを下ろしていた。

その誰にも共通するのが、機械的という言葉だった。誰一人個性と感情を持ち合わせずに、ただ黙々と働く。きっとそれは動かなくなるまで一部の乱れも見せずに続くのであろう。

「何だありゃ」

先に声を出したのは工藤だった。

「スノーマンだ」

工藤は見ているものがどうにも信じられないらしく、何度も口を開きかけては閉じた。

「スノーマンはスノーホワイトを摂取しすぎた結果だ。スノーホワイトは奴らの思いどおりになる操り人形を作る薬さ。やつらはただ命令に従って動くだけで、痛みも感じないし、何度でも再生する。あんたの拳銃が役に立たないといった意味が分つただろ」

工藤はしばらく拳銃を見つめていた。

「何だっていいさ。でもな。俺は藤原が好きだったんだ。馬鹿で殴ることしか出来ないやつだった。でもあいつはかわいいやつだった」

そして何かを決意した顔で腰に拳銃を戻した。

「どうするつもりだ。焼き払うって言ったな」

「ああ、そろそろガソリンが到着するはずだ。そいつを待とう」

「あいつら何をしてるんだ」

「恐らく、水道水にスノーホワイトを混ぜるんだろう。飲んだやつはいちころだ」

「えげつない連中だぜ」

工藤のやくざとは思えない感想に、銀次は思わず吹き出してしまった。

ガソリントレーラーを待つ間、銀次は不思議な光景を目にした。水道局のアンテナのてっぺんが青紫色に怪しく光っていた。

「何だあの光は」

「さあな。セントエルモの火みたいだな。でもそんな筈ないよな。この吹雪の中で」

「何だそのセント何とかって」

工藤は蔑むような目を向けた。

「よく船のマストのてっぺんなんかに現れる、電光現象だ。雷雲の影響で地上の電子が放電発光する。セントエルモは船乗りの守護聖人の名だ。雷雲という言葉で分るとおり、雷雲が発生する時期じゃないと起らない。まして吹雪の最中に発生するなんて聞いたこともない」

「きっとやつらの仕業だ。理由はわからないが」

浄水場の浄水槽付近では相変わらずスノーマンの作業が続いていた。茂は給水路マップを睨み、どの浄水槽が一番有効に都内を攻撃できるかを検討していた。茂の傍らでは花田が黙って指示を待っていた。

「もうすぐだ。もうすぐ復讐が成し遂げられる。幸恵が俺の意志に従わなかったのは残念だ。しかし俺にはまだ沢山の仲間がいる。そしてこれから東京をスノーホワイトで溢れさせれば、きっと俺の腹心になる者が現れるに違いない」

茂が一番有効と思われる五つの浄水槽を決定し、そのそれぞれに二十キロずつのスノーホワイトを流し込むように花田に指示をした。

花田がスノーマンに指示を伝えると、スノーマンたちは緩慢な動作で、機械的に動き始

めた。その中には黒岩の姿もあった。

地上で作業が開始されたころ、地下になっているポンプ室では異変が起きていた。壁にできた巨大な繭のような、雪の小山の一部がぼろぼろと崩れはじめていた。そしてついに崩れた一部から幸恵の顔が現れた。

幸恵は精神をひたすら集中し続けていた。さっきは自分の力に驚き、操ることもままならなかった。ところが意外にも茂の言葉が幸恵にヒントを与えた。彼らは自然にはさからわれない。それこそが力を制御する鍵だった。自分でどう操るのかではなく、力がどう流れるのかを自分が見極めるだけでいい。ほんとうに些細なことだ。こつさえ掴めば、誰にだってできること。それを今までやってみようとも思わなかった。自然にはこれほど溢れんばかりのエネルギーがあるというのに、自分はもがき苦しみながら、自分の力だけでなんとか生きていこうとしていた。人間は自然の力をほんの少しだけ借りるだけで、豊かな暮らしが手に入れられる。その代わりに自然を守ってやればいい。たったそれだけのことなのだ。愚かだったのだ。だが人間というのはそういうものかもしれない。そして人間は自然からの恵みを得る力を失い、最早戻れぬ迷路に踏み込んでしまったのだ。幸恵は再び力の流れに集中した。集中すると指先や、耳たぶが痺れるような感覚があった。それが何を意味するのかはまだ分らなかった。

力の流れをしっかりと掴んだら、こんどはそれを制御する。これも実に簡単だった。力にほんの僅か方向性をつけてやるだけでいい。それで意外なほど簡単に力を制御できた。だからといってまだこの程度で茂にたちうちできるとは思えない。まずはここから脱出することが先決だ。幸恵は精神を統一し、より多くの力の流れを感じようと務めた。腹の中心から胸を通り、頭へ昇る。頭からまた降りて肩を通り指先へ。指先から力は反転して肩へ戻り、足先まで流れる。そして足先から腹へと帰ってくる。これが外から流れ込んだエネルギーの、体内での一連の流れだ。この流れは今まで気が付かなかったが、昔からずっとあったような気がする。そして強弱の差こそあれ、誰にでもあるものなのだろう。ただそれをしっかりと感じる事が出来るかどうかが大切だ。

やがて流れが小川から中流、急流へと変化していくのを感じた。同時に胸元から腹までの雪の壁が崩れ落ちた。そしてついに両手両足を含む全ての雪の壁が崩れ、幸恵と千春は床に崩れ落ちた。

幸恵は人形のような目で天井を見つめ続ける妹を哀れに思った。しかし最早彼女を救う手だてはないだろう。妹を置き去りにしてゆくのは胸が張り裂けそうだが、仕方がなかった。兎に角脱出しなければならない。

視線を移したとき、誰かが目の前に立っていたのに気がついた。茂が帰ってきたのか。幸恵は小さな悲鳴を漏らした。

目の前に立ちだかるのは茂ではなかった。見知らぬ老婆が一人じっと幸恵を見つめていた。成りのあまり綺麗ではない老婆だった。だがその目にはどこか見覚えがあるような気がした。以前どこかで会った気がする。

思い出した。

老婆に出会ったのは、本郷寺の泉の前だ。あのときの恐怖が蘇った。住職に危うく手込めにされるところで、危機一髪何者かに救われた。それを老婆は隅でじっと見つめていたのだ。そして知らぬ間にいなくなっていた。

「あなた誰。前にも会ったわよね。私が襲われているのを、あなたは黙って見ていた。そして今日も。あなたは私が災難にあっているのを黙ってみている。あなた誰。なぜここにいるの。茂の仲間なの」

幸恵の問いに老婆は何も答えなかった。代りに無表情に見つめていた目を一回閉じ、再び開いた。すると開いた目に感情が籠もった。その目は悲しみを帯びていた。一体何に対する悲しみなのか判断はできない。ただただ深い悲しみが宿っていた。子供を奪われた母親の悲しみ。肉親と死に別れた家族の悲しみ。もう二度と元にはもどらない、美しいものを奪われてしまった悲しみ。ありとあらゆる悲しみが、一つの光に集約されてその目から訴えかけてきた。

幸恵にはその目に応える言葉がなかった。何故そのような悲しい目をするのか。私に何をしたいのか。この老婆が何者かは分らない。ただ深い悲しみに絶望していることだけは確信できた。

やがて老婆はゆっくりと横に首を振った。しかられるのを待つ子供に対してそうするように、悲しみをたたえたまま、首を横に振った。

突如強い風が巻き起こった。風は二人を包み、雪を舞い上げた。

すると、老婆の身体はたちまちにして風にとけ込み、目の前から消えた。風は部屋の中を一旦渦巻くと、ドアを突き破って出ていった。

幸恵には老婆が何者だったのか、今理解できた。老婆は母だ。茂が死んだと言っていた母だ。あの悲しみをたたえた目は茂の行いに対する母の思いだ。そしてそれを止められるだけの力を失ってしまった母自身の悲しみに違いない。

幸恵は両足でしっかりと立ち上がった。そして母の開いた扉を抜けて地上への階段に足をかけた。

「おい、止められないのか」

工藤が苛ついた声で言った。白い粉が次々と浄水槽に流し込まれていた。あとは水路に続く弁を開くだけで、あのスノーホワイト入りの水が各家庭に流されることになる。

「どうやって止めるんだ。奴らをその拳銃で撃ったところで、何にもならない」

「何か考えろと言ってるんだ。畜生、見ちゃいけない」

工藤は銀次の言葉を見殺しにしてスバルを発進させた。工藤に考えがあったわけではなかった。ただ、工藤の中の熱いものがアクセルを踏ませたとしか言えない。

「何をやるつもりなんだ」

「知るもんか」

工藤はアクセルを床まで踏み込んだ。

突然の闖入者の登場にスノーマンたちの動きが止った。

工藤はスノーマンたちの脇をすり抜け、闇雲に浄水槽の通路を走り回った。そのせいで場は混乱を呈した。しかしその混乱も一時的なものだった。

突然フロントガラスの前が吹雪で真っ白になり、何も見えなくなった。

「何も見えない」

「危ない。停まれ」

言うが早いか、スバルは進路を見失った。急ブレーキを踏んだが遅く、スバルは完全に雪に足を取られ、回転しながら事務所の壁に激突した。

スバルからもがき出た工藤の前に凍り付いた黒岩が立ちはだかった。

工藤は咄嗟に拳銃をぶっぱなした。腹に大きな穴が開いた。しかし黒岩は微動だにしないかった。そして無骨な手を工藤の首に伸ばした。

黒岩は工藤をしっかりと押さえ込むと、工藤の口を大きく開かせた。そして自らの口も大きく開いた。喉の奥でがらがらと嫌な音がしていた。

危うく白い息が吹き出されるというところで、銀次は偶然手近にあったスコップを握りしめ、黒岩に躍りかかった。スコップが宙を舞い、そして黒岩の頭部を強打した。強い手応えと同時に、黒岩の首が折れて転がった。頭部の無くなった首から、白い息がもうもうと吹き出した。

「早くこいつを引き離してくれ」

銀次は何度もスコップを叩きつけて、ようやく工藤から黒岩を引き離した。

「早く逃げよう。すぐに再生する」

「なんてやつらだ」

しかし二人の退路はすでにスノーマンたちに塞がれていた。右にも、左にも。そして正面にも無表情なスノーマンが立ちはだかっていた。そのなかには鶴崎の酒田の主人もいれば、雑貨屋の美智子もいた。

「事務所に逃げ込め」

ところが事務所の入口には茂が立ちはだかっていた。

「ふん。人間にしちゃあよくやった。善三を殺すとはたいしたものだと褒めてやろう。だがもうお仕舞いだ。お前たちに逃げ道はない。お前の大事な千春も、幸恵もみんな俺の手に落ちた。もう仲間はいない」

茂が首を振って合図をした。

いつの間にか再生した黒岩が二人の背後に立ちはだかっていた。

工藤が茂に残りの弾丸を撃ち込んだが、何一つ変化は起きなかった。

茂はかぶりを振って笑いはじめた。

その隙をついて銀次はポケットから発煙筒を取り出し、火を点けた。そして赤い炎を吐き出す発煙筒を茂の目に突き刺した。

「ぎゃあああああ」

茂は絶叫した。だが、倒れもしなければ、後退りもしなかった。周りのスノーマンたちにも変化はなかった。茂は目から発煙筒を引き抜き、憎々しげに見つめると、遠くに投げ捨てた。発煙筒の光はたちまちにして吹雪に飲み込まれてしまった。茂の右目のあった場所には黒い穴が開いていた。

「殺せ。なるべく苦しめて殺せ」

「死ぬのはあんたよ」

茂の背後から声がした。後に幸恵が立っていた。

「幸恵。どうやって抜け出た」

「さあ。調べてみたら」

茂は鼻を鳴らした。

「どうでもいいさ。何度でも相手になってやろう。どうやったってお前は俺には勝てないんだから」

茂が幸恵に向きなおった。

「あの女は誰だ」

工藤が銀次に聞いた。

「雪女さ」

そう雪女。全ての発端はそこにあったのだ。銀次は千春もまた雪女だと言われた瞬間を思い出した。

幸恵と茂が対峙する様子を見る限り、茂の言葉には嘘があったということだ。幸恵は茂の手に落ちた訳ではなさそうだ。ならば、どこかに打開の手はあるはずだ。銀次は幸恵の出方を見るつもりだった。

啖呵を切ったものの、幸恵にも方策は無かった。どうすべきなのか。自分は死んでもかまわない。ただ、譲をこの場から救い出したい。そして、外にいる二人を新たな犠牲者とはしたくない。そのために何かをしなければならぬ。幸恵は体内の流れに意識を集中した。指先がちりちりと痺れた。しかし何も起きない。

不安が頭をもたげた。同時に指先の痺れが、潮が引くように引いていき、体内の流れが弱まっていくのが分った。疑問を持ってはいけぬ。今は何が起ろうとそれに賭けるしかない。

幸恵は大きく息を吸い、再び意識を集中し始めた。指先がまた痺れ、やがてそれが痛みになった。そして痛みはかなりの苦痛にまで発展したが、幸恵は集中を止めなかった。すると、外で渦を巻いていた吹雪が徐々に弱まりはじめた。同時に辺りに金臭い臭いが充満し始めた。

そのころ佐久間はトレーラーの運転に四苦八苦していた。金町のあちこちの標識をなぎ倒し、雪に埋もれた駐車車両に激突しながら何とか進んでいた。しかし金町に入ったものの、いったいどこに浄水場があるのかなど知りもしなかった。さすがに盗んだガソリントレーラーを運転している手前、警官に先導させるわけにもいかなかった。それにほとんど視界の利かない吹雪にも閉口していた。

「一体どこなんだ」

すると不思議なことに今まで荒れ狂っていた吹雪が嘘のように鎮まった。

佐久間は一旦トレーラーを止めると、辺りを見渡した。そして妙な光を発見した。少し先のアンテナのてっぺんに青紫色の光が瞬いていた。その光は灯台が船乗りを導くように、なぜか自分を導いているような気がした。佐久間は確信した。あの光の下に何かがありそうだ。自分はあそこに行くべきだと。

佐久間は交差点を折れ、ガードレールを踏み潰しながら光に向かって激走した。

銀次は雪に変化が生じ始めているのに気が付いた。雪が重くなっていた。遂さっきまでは雪は鶴崎のそれのように、さらさらとして軽かった。ところが幸恵が姿を現して茂と対峙してから、東京に降る湿り気のある重たい雪へと変化した。さらに金臭い臭いが充満している。何か起ろうとしているのが分った。

突然銀次は左手首に痛みを感じた。目をやると腕時計から時々青白い火花が飛んでいた。そして火花が飛ぶたびに銀次の手首が痛んだ。

「何が起るんだ」

「どうやらセントエルモの火が発生するだけの理由はあるようだな」

「どういうことだ」

「わからないか。この臭いだ。辺りにイオンが充満している」

なるほど、手首を痛める理由は放電現象か。幸恵が何かしているのかもしれない。そしてもしそうならば、自分たちに何か勝算があるかも知れないと思った。銀次は茂の表情を盗み見た。先ほどまでの不遜さが消えていた。

「幸恵。やるじゃないか。ほんの僅かな間に力の制御を覚えたらしいな。でもそれだけじゃ俺には勝てないぞ」

茂はそう言うと、大きく息を吸い込み、白い息を幸恵に向かって吐き出しはじめた。幸恵の身体に白い雪がまとわりつきはじめた。

銀次が逃げるチャンスを窺っていると、工藤が脇をつついた。

「来たぞ」

その言葉が何を意味しているかはすぐに理解できた。

次の瞬間破壊音が響き渡り、フェンスを突き破って佐久間の運転するトレーラーが中庭に乗り入れてきた。トレーラーは庭園灯をなぎ倒し、植木を踏みつけながら、事務所に向かってまっしぐらに爆走していた。

事態に驚いた茂の動きが鈍った。

銀次はスコップを振り上げると、茂の頭めがけて振り下ろした。茂の頭は黒岩のように折れなかったが、茂は床に膝をついた。

銀次は脇をすり抜け、幸恵の手を取ると外に駆け出した。

トレーラーは目の前まで迫っていた。

数人のスノーマンがボーリングのピンのようにはねとばされた。茂はまだ蹲っていた。司令塔を失ったスノーマンは右往左往していた。その隙を三人はすり抜けた。横目に佐久間がトレーラーから飛び降りるのが見えた。

地面に伏せると同時にトレーラーが事務所に突っ込んだ。

大きな破壊音と共に、事務所が半壊した。トレーラーのタンクが破損してガソリンが大量に漏れ出た。しかしそこまでだった。火はつかなかった。

「火がつかない」

銀次はポケットを探したが、もう発煙筒もライターも無かった。工藤も火を点けるものを探していた。しかし茂が半壊した事務所の隙間から、雪に分解した状態で飛び出し、銀次たちの目の前に降り立つ方が早かった。

茂の顔は怒りに歪んでいた。

「八つ裂きにしてやる。なんなら意志のあるまま、スノーマンに変えてやろうか。貴様ら絶対に許さないぞ」

茂が息を吸い込みはじめた。しかしその時幸恵もまた力の制御に集中していた。

はじめは何が変化したのか気が付かなかった。しかし一番最初に変化に反応したのは茂だった。茂の顔が驚きの表情に変わり、空を見上げた。

空からは雪ではなく、雨が降り注いでいた。

「雨だ」

誰ともなく言った。

確かに雨だった。幸恵だけが目を瞑り、未だに神経を集中していた。

「幸恵。雪を雨に変えたくらいで、何も変わりはないぞ」

「それはどうかしら」

茂が精神を集中すると、一旦雨になった雪が、再び冷たい雪へと変化した。

幸恵も負けじと自然を操る。

天候はめまぐるしく変化した。

それとは別に、確実に変化しているものもあった。空の色が変わり始めていた。

空は徐々に暗くなり、分厚い重苦しい雲が充満し始めた。雪の合間を縫って降る雨はどんどんと強くなり、足下の雪を溶かしていった。水たまりの上で、漏れだしたガソリンがてらてらと光っていた。

「何が起ろうとしているんだ」

佐久間の言葉に反応したのは、アンテナの光を見つめていた工藤だった。

「やばい。みんなどこかに隠れるんだ」

「どこかってどこだ」

「俺の車に飛び込め」

工藤は佐久間と銀次を無理矢理狭いスバルに押し込み、自分も二人の上に覆い被さるように飛込むと、ドアを閉めた。

「南無三」

直後、まっくろな雲から閃光が走り暗い空を切り裂いた。稲妻だった。

茂も事態を理解下らしく、その不遜だった表情に初めて恐怖の色が表れた。

「やめろ」

茂が幸恵に手を伸ばしたのと、次の落雷が青白く光るアンテナを直撃するのと同時だった。

アンテナを直撃した落雷から、瞬時に青い棘があちこちに伸び、水溜まりの上を駆抜けた。それぞれの棘はスノーマンを溶かし、そしてトレーラーを青白い電気の槍で突き刺した。

直後トレーラーは轟音を上げて爆発した。

爆風が茂と幸恵を吹き飛ばした。二人は爆風で浄水槽に落ちた。

スバルも吹き飛ばされ、浄水槽に落ちた。

浄水槽の上を真っ赤な炎が覆い尽くした。

落雷を逃れた者で、浄水槽に落ちなかった者は全てその炎に焼き尽くされた。黒岩が燃えた。美智子も酒田も燃えた。

銀次は慌ててスバルから抜出すと、爆発の炎が収まるのを待たずに、浄水槽から飛び出した。銀次たちが落ちた浄水槽は、茂がスノーホワイトを混ぜた場所だった。

「みんな早く出ろ。その中にはスノーホワイトが混じっている」

茂が高笑いをはじめた。

「そうだ。大量に混じっている。お前たちは自分の手で自分の首を絞めたんだ」

続いて幸恵が大笑いをはじめた。気がふれたような笑い方だった。誰もがスノーホワイトのせいだと思った。

「あんた馬鹿よ。この水を使って薬をばらまこうとしたの。だとしたらよっぽどの馬鹿よ」

「何がおかしい」

「自分の手を見てご覧なさい」

茂は言われたとおりに手を見た。泥や得体の知れない汚れで、その手は薄汚れていた。

「この水はねえ。浄水する前の水よ。だから泥や化学物質で汚染されている。たった今、ガソリンとオイルも混ぜられたわ。

スノーホワイトはこの様々な化学物質の入り交じった水に投入されたのよ。いまごろすっかり化学変化を起こして違う物質になってるわ。あなたは水の綺麗な鶴崎で育ったから知らないでしょうけど、東京の水は命がけで飲む水なのよ」

茂の顔が驚愕と絶望に満たされ、やがて怒りで歪んだ。片目が黒く焦げている分、凄みのある顔だった。茂は浄水槽から上がると、大きく息を吸い、精神を集中し始めた。渾身の力を込めて白い息を全員に吹きかけてやるつもりだった。今は失敗してもいい。また一からやり直せばいいのだ。だがその前に、ここにいる全員に償いをさせてやる。

ところが急に肺が重くなり、息を吸い込めなくなった。茂は思わず咳き込んだ。一体どうしたというのだ。後ろから水から上がった幸恵の笑い声が聞こえた。

「言った筈よ。東京の水を飲むのは命がけだって。あんたはもう汚染されたのよ。鶴崎の澄んだ水から作り上げた身体じゃなくなった。私たちはいつもこんな水を飲んでるから平気だけど、汚れ知らずのあなたにはさぞかし辛いでしょうね」

茂は再び手を見た。手の色が黒ずんでいた。正しく手の中に汚れが侵入していた。泥や、砂や、得体の知れない汚染物質が身体に浸透していた。

「やめろ。やめるんだ。俺の身体に入ってくるな」

茂は分解しようとしてみた。だが、身体は分解してもすぐに元に戻ってしまった。汚染物質が本来自然から受け取っている力を妨げているのだ。

茂はよろよろとよろめきながら、後退り始めた。

「母さん。母さん。俺は一体」

「あなたは東京での暮らしに向かないみたいね。すぐに自然に帰してあげるわ」

幸恵はそう言うと精神集中をはじめた。

佐久間はポケットをまさぐると、あるものを探り当てた。これこそ茂を自然に帰すにはうってつけだ。

「おい、小僧。受け取れ。お前の連れが持っていたもんだ」

佐久間はそう言って善三のロレックスを茂に投げて渡した。

茂が高々と手を伸ばしロレックスを受け取ると同時に、落雷が茂を直撃した。茂は一個の巨大な松明となって辺りを照らした。やがて松明はどろどろと溶けて崩れ、そして巨大な水たまりへと変わった。水たまりの中心に溶けてしまったロレックスの残骸が僅かに残っていた。

お互いがお互いの顔を見合わせた。

「大丈夫かな。本当にスノーマンにならないだろうな」

聞いたのは工藤だった。

「さあ。分らないわ。でも茂のあの様子を見る限り、私の言ったことは当たっていたみたいね」

「こんな汚染物質の中で生きられる俺たちって何なんだろうな」

「哀れな、人間よ」

人間という言葉が発する時、幸恵は力を込めた。私も人間なのだという意志を込めて。銀次は残骸をどけると事務所から地下のポンプ室に降りた。ポンプ室にも炎は廻ったらしく、壁と言わず、どこもかしこも煤だらけだった。

「ここに千春がいたのか」

「彼女と私は兄妹だったのよ」

銀次は足下に何かが落ちているのを見つけた。以前銀次がおふざけで買ってあげた指輪だった。銀次はそれを拾うと、ポケットに大事にしまった。涙が止らなかつた。

「結局救えなかつた」

「そうね」

幸恵はそれ以上何も言わなかつた。言うこともできなかつた。幸恵もまた譲を失った。

「おい、そろそろ警察が来るぞ。お前らがいると面倒だ。どこかに姿をくらませ」

佐久間が上から怒鳴った。

「てめえもサツだろうが」

工藤が呟いた。

「聞こえたぞ」

「だったらどうした。俺がいなきやみんな黒こげだったんだ」

しばらく佐久間と工藤は睨みあっていた。当然だ。やくざと警官なのだから。

ところが次の瞬間あっけにとられるようなことが起った。工藤と佐久間は肩をたたき合って笑いはじめたのだ。

「今回のことは借りにしておいてやる。だが明日からはいつも通りだ」

「当たり前だ。俺はサツが大嫌いなんだ」

そう言って二人は大笑いした。その笑いにつられ、銀次も幸恵も少し微笑むことができた。

エピローグ

エピローグ

エピローグ

幸恵は事務所を畳もうと思っていた。先日の一件で、譲に掛かっていた生命保険が下りた。浄水場の爆発跡から譲のものである、焼けこげた靴と衣服の一部、そして髪の毛が見つかった。その金の半分を元夫は手切れ金だと言って渡しに来た。さすがにあの男も憔悴しきっていた。幸恵も黙ってその金を受け取った。だが、未だにその金は手つかずのまま机の上の引き出しに放り込まれていた。机の上にはぼつりと譲の写真が飾られていた。幸恵自身どうして良いのか、全く分らなかった。少なくとも譲がいなくなった今、とても仕事をする気は起きなかった。忙しければまた気が紛れるのかも知れない。しかし悲しみを忙殺できる仕事ではなかった。

鶴崎の事件は新聞やテレビでも随分と取り上げられた。スキー場近辺の人間がごっそりと、失踪してしまったのだから無理もない。だが真相を突き止めた人間は一人もいない。あたりまえだ。真相は全てあの深い雪の中にあるのだから。春になれば雪は溶けて全てが忘れ去られてしまうだろう。それが一番いいのだ。

警察はその後何も言っはこなかった。佐久間がうまく取りはからってくれたらしいが、その後佐久間とは会っていない。探偵仲間の情報から、佐久間が警察を辞めたという噂だけが流れてきた。あの、事件を追うことだけが生き甲斐のような刑事に、警察を辞めてできる仕事があるとは思えなかった。だが家族はいないようなので、男ひとりなら何をやってでも生きていけるだろう。

工藤というやくざの情報は入ってこない。やくざとして今回の事件関係者と睨まれるのは、なんとも都合が悪いのだろう。すっかり地下に潜ってしまったようだ。だが銀次の話では工藤は元インテリらしい。インテリのやくざなら食うには困らないだろう。その内ひょっこりとやって来るかもしれない。その時はバーボンの一杯でも出してやろう。そして銀次は鶴崎に黒岩の墓を建ててに行った。あの焼けてしまったロッジがあった場所の、外れに小さな墓石を建てると言っていた。だが墓に納める遺骨はない。何を納めにいったのだろうか。実質的な骨はなくとも、墓に埋めてしまいたいものは沢山あるのかもしれない。様々な思い出など。

幸恵はグラスにバーボンを注ぎ一口飲んだ。グラスの中で氷がことりと音を立てた。部屋を暗くしてあったので、鬱陶しいネオンが室内を照らしていた。幸恵はブラインドを閉じてネオンの光を遮った。ブラインドを閉じる際に、硝子に貼り付けた探偵社の社名が目に入った。この社名も近い内に剥がさなければと思った。

振り返ると入口の扉が開いていた。そして男が立っていた。

「久しぶりだな。あれからどうしていた」

銀次だった。

「どうもしないわ。生き甲斐を失って毎日酒浸りよ」

「薬浸りじゃないだけ偉い」

「薬はもううんざり」

銀次は勝手に事務所の蛍光灯を点けると、ソファーに座った。

「何の用？」

銀次はその問いに答えず、しばらく考え込んでいた。そしておもむろに尋ねた。

「扉の文字が少し削り取られていた。まさか事務所を畳むつもりじゃないだろうな」

「そのまさかよ。事務所を畳むことにしたの」

「そうか。ちょうどよかった。新しい社名を張るのに、あの少女趣味な社名をはがさなきゃとおもっていたんだ」

「少女趣味とは失礼ね。それに新しい社名って何よ」

銀次は戸棚から勝手にグラスをだすと、幸恵のバーボンを注いだ。幸恵は銀次の身勝手な行動にあきれて何も言えなかった。

「俺、決めたんだ。そろそろちゃんと就職しようって」

銀次はグラスを掲げて一口啜った。

「で、ここに就職することにした。よろしくな、社長。せっかく俺が入って再スタートを切るんだ。社名も思い切って白銀探偵社に変えようと思うだが、どう思う」

就職するって？ この若者は一体何を考えているのだろう。勝手にやって来て、勝手に就職するとほざいている。好きに言っていればいい。何を言ったところで、明日からここは空き家になるのだから。

「そう。それはおめでとう。せいぜい頑張ってね」

銀次はその言葉を聞くと、うれしそうに入口に向かい、誰かを手招きした。銀次に呼ばれて二人の男がぞろぞろと部屋に入ってきた。

「紹介するよ。俺の同僚の佐久間の旦那と、工藤さんだ」

「ちょっと、あんたたち」

銀次が幸恵の言葉を遮った。

「方や元警視庁の敏腕刑事。方や裏の世界に精通した生え抜きのやくざ。頼りになるぜ」

「おい、ちょっと待て。俺は手伝うとは言ったが、就職するなんて聞いていないぜ」

工藤が口を挟んだ。

「別に嫌なら無理にとは言わないぜ。元の鞘になかなか収まれないだろうと思って、せっかく俺が口を用意したのに」

佐久間が割って入った。

「どこの世界に元警官と元やくざが働いている探偵社があるんだよ。じょうだんじゃないぜ。なんでこいつと組まなきゃいけないんだ」

「なんだこの野郎。黙って聞いてりゃいい気になりやがって。誰のお陰で警官焼きにならなかったと思うんだ」

「なんだと警官焼きとはなんだ」

「おい、喧嘩するなよ。せっかく雇ってやろうって言ってるんだ」
幸恵は机を叩いた。
「ちょっと、いい加減にして。あんたたち勝手にやってきて、雇えだなんて勝手すぎるわよ。誰が雇うなんて言ったのよ」
「さっきおめでどうって言葉をきいたけどな」
幸恵はしまったと思った。
「それは。この探偵社は今日で畳もうと思ったからよ」
「それじゃあ、俺に嘘をついたのかい。ひどいなあ」
銀次はわざと大きなため息をついた。
「それに、もう仕事をする気力もないの」
工藤が胸を叩いた。
「仕事なら俺たちにまかしてくれ。社長はそこでふんぞりかえってればいいさ」
「四人も食べていけるわけじゃない」
「実はもう仕事を一件見つけてきたんだ」
そう言って佐久間が封筒を机に置いた。
封筒には一枚の依頼メモが入っていた。メモには次のような内容が書かれていた。

依頼人：高橋 うめ 六十八歳 女
依頼内容：リサの浮気調査
調査費用：十万円 必要経費別
備考：リサ 三歳 雌 ペルシャ猫

この依頼内容は、以前佐久間が幸恵に嫌味で持ってきたものだった。幸恵は佐久間に指を突き付けた。そして一瞬きつい目で睨んでから吹き出した。
「このおばあさん、本当に調査させる気なのかしら」
「いたって真面目だったけど」
「じゃあ、担当は佐久間さんね」
「しまった」
その後四人は再会を祝してパーボンを酌み交わした。それぞれの近況などを肴にしていたが、やがて話はどうしても事件のことへと流れていった。事件のことを考えるのは幸恵にはまだ辛かったので、口数が少なくなっていった。
そんな幸恵の気持を察したのか、工藤がまた連絡すると言って出ていった。
それを追う用にして佐久間が席を立った。
銀次の話によると、二人は時々酒を酌み交わしたりしているらしかった。元刑事と元やくざが友人になるというのもおかしい話だ。
そして銀次は

「もし本当に雇ってもらえるなら、明日からでも来るよ」

と言って連絡先を残して帰っていった。

心地よいが、どこかもの悲しい雰囲気だけが残った。事務所の蛍光灯がじりじりと鳴っていた。幸恵は最後のバーボンを飲み干すと、帰り支度をはじめた。事務所を閉めるかどうかは、明日決めようと思った。

佐久間が持ってきたふざけた依頼を、封筒と一緒にゴミ箱に入れようとし、つい封筒を床に落としてしまった。すると落ちたときの勢いで、封筒から何かが飛び出した。それは一枚の写真だった。

何だろうと思い、拾ってみて幸恵は愕然とした。ピントのあまり会っていない、雑踏を写したモノクロ写真であった。そしてその写真のほぼ中央に、見覚えのある顔が移っていた。忘れることの出来ない顔と顎髭。美濃部善三に間違いなかった。佐久間はふざけた依頼にかこつけて、この写真を渡したかったに違いなかった。ここで働くというもの、あながち冗談ではないのかもしれない。もし善三が本当に生きているとすれば、皆が協力する必要がある。彼らはそれを言いたくてここへ集ったのではなかったのか。

だが幸恵にはもうそれだけの気力は残っていなかった。申し訳ないが、自分は手をひかせてもらおう。たとえ善三が生きていたとしても、自分には善三と対峙することはできそうになかった。

「ごめんなさい」

幸恵はそうひとりごちた。

そして写真を机の引き出しにしまおうとして、再度写真に目をやり、幸恵は凍り付いた。かれらは知っていたのだろうか。いやそんな筈はない。彼らは誰一人譲の顔を知らないはずだ。善三のすぐ脇に、譲が写っていた。横を向いているためにはっきりとは分らないが、幸恵の直感がこれは譲だと訴えていた。それは喜ばしくもあり、背筋が凍るほど恐ろしい事実でもあった。

「そう。このゲームからは降りられないってことね」

完全に萎えてしまったと思っていた闘争心が頭をもたげてきた。胸の奥で消えかかっていた青い炎が燃え上がった。そして何年掛かろうとも、譲を必ず自分の世界に連れ戻そうという思いが、幸恵の気持をさらに強固なものにした。探偵を続けよう。そして彼らを捜し続けよう。それには必要なものがある。探偵の必需品だ。幸恵は受話器を取ると、知り合いに電話をした。

「私よ。夜分ごめんなさい。大至急探して欲しいものがあるの」

知り合いは受話器の向こうでばやきつつも、メモの用意をしたと言った。

「一体なにを探している」

「決まっているじゃない。ムスタングよ」

幸恵は引き出しの奥から新しいバーボンの瓶を取り出し、封を切った。

「女探偵は黄色いマツハ1に乗るって決まっているのよ」

了

あとがき

あとがき

最後まで本作品にお付き合いいただきありがとうございました。

僕がこの作品を書いたのは、かれこれ十年ちかくも前になります。中々出版できずにずっと眠っていたものを、少し手直しして、ようやく日の目を見ることができました。ちょっと設定が古い箇所がありますが、どうぞご勘弁ください。

この作品は雪女の話の話を題材にして、自然と人間との関わり合いをちょっとだけ織り込んだ物語です。

雪女を題材に選んだ理由は、前々から僕は妖怪を現代に蘇らせたいという考えがあったからです。高度に発展した現代社会で、人間はおごりという袋小路にはまり込んでるように思えます。何かに畏れを抱く事は人間らしさにとって重要な要因なのではないでしょうか。

僕はスキーが大好きで、よく様々なスキー場に出かけて滑ります。朝日に輝く雪山や、風の造形による雪の彫刻など、いつも自然の美しさに魅了されてしまいます。表紙の写真は福島の箕輪スキー場で、美しさのあまりについ撮影したものです。

しかし僕はゲレンデという温室から出る事はできません。一步大自然の中に踏み込んでしまえば、その圧倒的な力に屈服せざるを得ないからです。美しく恐ろしい自然と接するには、謙虚になるしかありません。

雪女もまた美しく恐ろしい存在です。そんな雪女が現代に現れたらどうなるだろうか。はたまた、雪女の物語に登場した子供達はいったいどうなってしまったのだろうか。そんな発想から物語が生まれました。物語の中に、美しさと恐ろしさが表現できているかわかりませんが、作者の意図を読み取って頂ければ幸いです。

今年も雪がたくさん降りました。何回かはスキーに出かける事が出来そうです。きっと今年の冬は、吹雪に見舞われる度に、山のどこかで雪女が冷たい笑みを浮かべていると、想像してしまうことでしょう。

2014年1月 自宅にて 喜多隆斗

奥付

奥付

シロキユキアリテ

<https://puboo.jp/book/64239>

著者 : kitaryuto775 著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/kitaryuto775/profile>

感想はこちらのコメントへ <https://puboo.jp/book/64239>

ブックログ本棚へ入れる <http://booklog.jp/item/3/64239>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<https://puboo.jp/>) 運営会社 : 株式会社ブックログ

シロキユキアリテ

版番号の予定

{{
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
